

千葉県八千代市
上 谷 遺 跡

(仮称) 八千代カルチャータウン開発事業関連埋蔵文化財調査報告書Ⅱ

— 第2分冊 —



2003

大成建設株式会社

八千代市遺跡調査会

序 文

八千代市は下総台地の北西部に位置し、東京への通勤圏内として昭和32年の八千代台団地の入居以来、おもに住宅都市として発展してまいりました。特に、昭和40年代半ばからは次々と団地の建設が行われ、それに伴う人口の増加は目ざましいものがあり、八千代市の姿は近郊農業地帯から住宅都市へとその趣を変えております。しかし八千代市はかつての印旛沼と新川等の豊かな水を背景とした多くの自然も残され、新川を中心とする水辺は市民の憩いの場ともなっており、今後も、自然と調和した住宅都市として発展していくことと思われます。

一方、この住宅都市としての発展に伴う宅地造成等によって失われる遺跡を保護するために、発掘調査等を行いつの保護に努めてまいりました。そしてこの緑豊かな大地には、およそ三万年前の昔である旧石器時代から多くの人々が暮らしを営んできていたことが、近年の調査によって分かってまいりました。また、新川流域の奈良・平安時代のムラの跡からは、数多くの墨書き土器が出土し、八千代市は全國でも墨書き土器の出土では有数の地となっております。

このようななかで、昭和40年代に八千代市域の北東部の保品、神野、米本にわたる地区に『(仮称) 八千代カルチャータウン』の開発が計画されました。この開発予定区域内には多くの遺跡の所在が知られており、ここに所在する埋蔵文化財の保護について関係諸機関による慎重な協議が重ねられてまいりました。その結果、遺跡の一部を現状保存し、保存のできない地区についてはやむをえず発掘調査を行い記録保存の措置を講ずることとなりました。

発掘調査は八千代市遺跡調査会の手により昭和63年3月から開始され、平成11年3月に終了致しましたが、この期間に調査を行った遺跡は9遺跡34地点に及び、旧石器時代から近世に至る貴重な調査成果を得ることができました。そして平成12年4月より順次、整理作業を進めておるところです。

本報告書はこの9遺跡のうち、上谷遺跡の調査の成果の一部をまとめたものです。上谷遺跡では縄文時代や弥生時代、奈良・平安時代のムラの跡が検出されており、それに伴う遺物も数多く出土しております。その成果をいくつかの地区に分け、5分冊によって報告することとなっており、今回ここに報告いたしますⅡ地区では400点を超える墨書き土器が出土し、奈良・平安時代の人々の暮らしの一端をあきらかにすることができます。そして本書が学術資料としてはもとより、広く教育機関や地域の歴史に关心をもたれる方々、また、文化財の保護のために広く活用されることを願ってやみません。

最後に、発掘調査から本書の刊行に至るまでの長期間にわたってご協力いただきました大成建設株式会社をはじめといたしまして、ご指導・ご助言をいただいた千葉県教育委員会等の諸機関、関係諸氏に厚くお礼申し上げるとともに、発掘調査および整理作業に従事された方々にも深く感謝いたします。

平成15年7月

八千代市遺跡調査会
会長 萩原 康正

例　　言

1. 本書は、『千葉県八千代市上谷遺跡（仮称）八千代カルチャータウン開発事業関連埋蔵文化財調査報告書Ⅱ』である。
2. 上谷遺跡を5つの地区に分割し、各地区ごとに報告する予定である。報告書は、上谷遺跡で5分冊となる予定である。
3. 本書は、上谷遺跡全5分冊のうちの第2分冊である。本書で報告する地区は、上谷遺跡のⅡ地区である。
4. 上谷遺跡は、千葉県八千代市保品字上谷1786外に所在する。
5. 上谷遺跡の発掘調査及び整理作業は、大成建設株式会社の委託により、千葉県教育委員会・八千代市教育委員会の指導のもと、八千代市遺跡調査会が実施した。
6. 発掘調査の実施期間、調査面積等については、第1章に記載した。
7. 整理作業及び報告書刊行作業は、期間の前半を藤茂美・武藤健一が、後半を朝比奈竹男・宮澤久史が担当し、平成13年10月1日～平成14年10月31日までの期間実施した。
8. 本書の執筆・編集は朝比奈竹男が行った。
9. 本書の図版作成及び編集・レイアウト作業は、一部を除き、DTP(Desktop Publishing=コンピュータによる版下作成)システムによるデジタル化を図り、伊勢田めぐみ（株式会社東京航業研究所）が担当した。
10. 発掘調査における航空写真及び遺構図・全測図・地形図の作成は、要航業株式会社・株式会社東京航業研究所が行った。
11. 整理作業及び報告書刊行作業におけるDTPシステムによるデジタル化作業全般において、株式会社東京航業研究所の協力を得た。
12. 遺物の実測図及びトレース図の作成については、一部を除き株式会社東京航業研究所に委託した。
13. 上谷遺跡の内容については本書をもって正式報告とし、年報その他において公表された内容と相違する点については、本書の記述により訂正させていただくものとする。
14. 発掘調査に伴う出土品及び図面・写真等の記録類は、八千代市教育委員会が保管している。
15. 出土文字資料の判読・解説については、国立歴史民俗博物館平川南教授にご指導をいただいた。
16. 発掘調査から本書の刊行に至るまで下記の機関及び諸氏をはじめとする多くの方々からご指導、ご協力を賜りました。記して感謝の意を表します。（五十音順・敬称略）
千葉県教育庁文化財課・（財）千葉県文化財センター・（財）印旛郡市文化財センター
八千代市教育委員会・八千代市立郷土博物館
安藤広道・大沢孝・小川和博・菊池健一・黒沢浩・佐藤順一・田形孝一・平川南・深谷昇
藤岡孝司・村松篤・山岸良二

凡 例

1. 遺構番号は発掘調査時には、遺構種別ではなく調査地区ごとの通し番号を付与した。遺物の注記、図面・写真への記録はこれによった。しかし、本書では遺構別に通し番号を新たに付与し直したこの遺構番号については、第1章に新旧番号の対照表を掲載したので参照していただきたい。

2. 本書の挿図において使用した地図は以下の通りである。いずれも一部改変・合成して使用している。

図1 國土地理院発行 1/25,000地形図 「小林」「佐倉」「白井」「習志野」(平成12年発行)

図2 大成建設株式会社発行 1/40,000 Y, K, プロジェクト 空中写真測量図 (昭和63年発行)

3. 本書の挿図において、方位の表示のないものについては、公共座標に基づく座標北を上としている。

4. 本書の遺構実測図における用例は以下のとおりである。

(1) 図中及び本文における方位は、公共座標に基づく座標北を示している。

(2) 縮尺率は原則として以下のとおりとするが、これ以外のものについては、図中に示したスケールを参照されたい。

住居跡 1/80 挖立柱建物 1/80 方形周溝墓 1/100 土坑 1/50 溝 1/50 炉穴 1/50

(3) 住居跡平面図に使用した一点鎖線は、床の硬化範囲を示している。

(4) 遺構実測図で使用した破線は、推定復元線を示している。

(5) 遺構実測中のスクリーントーンの表示は原則として以下のとおりであるが、個々については実測図

火床



竈



焼土



粘土



柱痕



貝



脇に表示した凡例を参照されたい。

(6) 竈のある住居跡にあっては、長軸と短軸の距離及び方位は、各コーナーから対角線に線を引いた上で住居の中心を出し、その中心の壁間での計測値を出した。また、主軸は煙道にて計測した。

5. 本書の遺物実測図における用例は以下のとおりである。

(1) 縮尺率は原則として以下のとおりであるが、個々については図脇に示したスケールを参照されたい。

土器実測図 1/4 土器拓影図 1/3 土製品 1/3 石器・石製品 1/2 1/3 1/4

鉄器・鉄製品 1/4 銅製品 1/2 支脚 1/4

須恵器



釉薬



磨耗痕



赤彩



黒色処理・煤・繊維土器



(2) 遺物実測図中のスクリーントーンの表示は以下のとおりである。

(3) 墨書・朱書は以下のスクリーントーンで表現した。墨書・朱書は不明瞭な部分が多いため、明瞭な部分はベタ塗りで、不明瞭な部分は20%のトーンをかけて処理した。さらに文字の輪郭がはっきりしている部分は縁取りを行った。なお、推定復元部分は破線で示した。

墨書



墨書(不明瞭部分)



朱書



朱書(不明瞭部分)



6. 本書の遺物写真における用例は以下のとおりである。

- (1) 写真図版中における遺物番号は、本文中における遺物番号と一致している。
 - (2) 写真図版中の遺物写真縮尺は、墨書き土器等を除き、概ね遺物実測図と同じとした。
7. 墨書き土器の判別にあたっては、赤外線投射カメラによってモニター観察を行った。また、報告書の写真作成については、文字判読を優先したため一部コンピュータによって画像処理を行った。
8. 本書では土器に刻まれた文字のうち、土器の焼成前に刻まれたものを「範（ヘラ）書」、土器の焼成後に刻まれたもの「線刻」として区分している。
9. 鉄器及び銅製品は、株式会社東京航業研究所が、X線による撮影後、写真から実測を行った。

目 次

序 文

例 言

凡 例

目 次

挿図目次

表目次

写真図版目次

第1章 上谷遺跡II地区の概要	1
第1節 上谷遺跡II地区の調査の経緯	1
第2節 上谷遺跡II地区の調査の概要	5
第2章 遺構と遺物	8
第1節 繩文時代	8
第1項 壺穴住居跡	8
第2項 炉穴	12
第3項 土坑	73
第2節 弥生時代	87
第1項 弥生時代の遺構	87
第3節 奈良・平安時代	93
第1項 壺穴住居跡	93
第2項 捜立柱建物跡	217
第3項 土坑	263
第4節 中世以降	271

第3章 小 結 ······ 274

 第1節 繩文時代 ······ 274

 第1項 炉穴 ······ 274

 第2項 貝ブロックについて ······ 274

 第2節 弥生時代 ······ 274

 第3節 奈良・平安時代 ······ 275

 第1項 壺穴住居跡の人為的な
 埋戻しについて ······ 275

 第2項 捜立柱建物跡について ······ 276

 第3項 墨書き土器について ······ 278

 (1) 単字資料について ······ 278

 (2) 長文の墨書き土器について ······ 279

写真図版

報告書抄録

挿 図 目 次

図 1 上谷遺跡位置図 ······	1	図 37 F056 ······	25
図 2 (仮称) 八千代カルチャータウン開発事業 関連遺跡地形図 ······	2	図 38 F057 ······	25
図 3 上谷遺跡本調査地区割図 ······	2	図 39 F058 ······	25
図 4 上谷遺跡 II 地区遺構検出状況図 ······	3	図 40 F059 ······	25
図 5 上谷遺跡 II 地区の基本土層図 ······	5	図 41 F056, F059 ······	26
図 6 繩文時代遺構配置図 ······	9	図 42 F060 ······	27
図 7 A089 ······	10	図 43 F061 ······	27
図 8 A089 (2) ······	11	図 44 F062 ······	27
図 9 F033 ······	13	図 45 F063 ······	27
図 10 F034 ······	15	図 46 F064 ······	27
図 11 F035 ······	15	図 47 F065 ······	27
図 12 F036 ······	15	図 48 F061, F064 ······	28
図 13 F037 ······	15	図 49 F066 ······	29
図 14 F034, F035, F036, F037 ······	16	図 50 F067 ······	29
図 15 F038 ······	18	図 51 F068 ······	29
図 16 F039 ······	18	図 52 F069 ······	29
図 17 F040 ······	18	図 53 F070 ······	29
図 18 F041 ······	18	図 54 F071 ······	29
図 19 F042a ······	18	図 55 F072 ······	30
図 20 F042b ······	18	図 56 F073 ······	31
図 21 F039, F041, F042a ······	19	図 57 F074 ······	32
図 22 F043 ······	21	図 58 F075 ······	32
図 23 F044 ······	21	図 59 F076 ······	32
図 24 F045 ······	21	図 60 F077 ······	32
図 25 F046 ······	21	図 61 F078 ······	34
図 26 F047 ······	21	図 62 F079 ······	35
図 27 F048 ······	21	図 63 F080 ······	36
図 28 F043, F047, F048 ······	22	図 64 F081 ······	36
図 29 F049 ······	23	図 65 F082 ······	37
図 30 F050 ······	23	図 66 F083 ······	37
図 31 F051 ······	23	図 67 F084 ······	38
図 32 F052 ······	23	図 68 F085 ······	38
図 33 F053 ······	23	図 69 F086 ······	39
図 34 F054 ······	23	図 70 F087 ······	39
図 35 F050 ······	24	図 71 F088 ······	40
図 36 F055 ······	25	図 72 F090 ······	40
		図 73 F089 ······	40

図 74 F091, F092	41	図114 F125	72
図 75 F093	42	図115 F126	72
図 76 F093 (2)	43	図116 D044	73
図 77 F094	44	図117 D048	74
図 78 F095	44	図118 D050	74
図 79 F096	46	図119 D051	74
図 80 F096 (2)	47	図120 D056	75
図 81 F097	48	図121 D057a,b	75
図 82 F098	48	図122 D058	75
図 83 F099	48	図123 D059	75
図 84 F100	49	図124 D064	75
図 85 F100 (2)	50	図125 D065	75
図 86 F101	51	図126 D066	78
図 87 F102	52	図127 D068	79
図 88 F103	52	図128 D070	79
図 89 F104	52	図129 D071	79
図 90 F105	53	図130 D072	79
図 91 F106	55	図131 D073	79
図 92 F107	56	図132 D076	81
図 93 F108	56	図133 D077	81
図 94 F109	57	図134 D079	81
図 95 F110	58	図135 D082	82
図 96 F110 (2)	59	図136 D084	83
図 97 F111	60	図137 D085	83
図 98 F112	60	図138 D087	83
図 99 F112 (2)	61	図139 D089	83
図100 F113	62	図140 D091	85
図101 F114	62	図141 D097	86
図102 F115	63	図142 D098	86
図103 F116	63	図143 D099	86
図104 F117	64	図144 D100	86
図105 F118	64	図145 弥生時代遺構配置図	88
図106 F118 (2)	65	図146 A081	89
図107 F119	66	図147 A081 (2)	90
図108 F120	67	図148 A079	91
図109 F121	67	図149 D060	92
図110 F122,F123	68	図150 奈良・平安時代遺構配置図	94
図111 F122	69	図151 A073	95
図112 F123	70	図152 A074	97
図113 F124	71	図153 A074 (2)	98

图154 A075	100
图155 A075 (2)	101
图156 A076	102
图157 A077a.b	104
图158 A077a.b (2)	105
图159 A078	107
图160 A078 (2)	108
图161 A078 (3)	109
图162 A078 (4)	110
图163 A080	114
图164 A080 (2)	115
图165 A082	116
图166 A082 (2)	117
图167 A082 (3)	118
图168 A083	121
图169 A084	122
图170 A085	124
图171 A086	126
图172 A087	127
图173 A088	129
图174 A088 (2)	130
图175 A090	132
图176 A091	133
图177 A092	135
图178 A093	136
图179 A094	138
图180 A094 (2)	139
图181 A095	142
图182 A096	144
图183 A097	146
图184 A098	148
图185 A099	150
图186 A099 (2)	151
图187 A099 (3)	152
图188 A100	153
图189 A100 (2)	154
图190 A101	157
图191 A102a.b	159
图192 A102a.b出土遗物分布图	160
图193 A102a.b (2)	161
图194 A102a.b (3)	162
图195 A102a.b (4)	163
图196 A103	169
图197 A103 (2)	170
图198 A104	171
图199 A105	173
图200 A106	174
图201 A106 (2)	175
图202 A107	176
图203 A108	177
图204 A108 (2)	178
图205 A109	180
图206 A109 (2)	181
图207 A110	183
图208 A111	184
图209 A112	186
图210 A112 (2)	187
图211 A113	189
图212 A114	190
图213 A114 (2)	191
图214 A115	193
图215 A115 (2)	194
图216 A116	197
图217 A116 (2)	198
图218 A117	200
图219 A118	201
图220 A118 (2)	202
图221 A119	204
图222 A119 (2)	205
图223 A120	207
图224 A121	208
图225 A121 (2)	209
图226 A122	211
图227 A122 (2)	212
图228 A123	213
图229 A124a.b	214
图230 A124a	215
图231 A124b	217
图232 B006	218
图233 B007	218

図234	B008	219
図235	B009	220
図236	B010	221
図237	B011	222
図238	B012	223
図239	B013	224
図240	B014a,b	225
図241	B015a,b,c	226
図242	B016a,b,z	228
図243	B017a,b,z	229
図244	B018a,b	230
図245	B019a,b,z	232
図246	B020	233
図247	B021	233
図248	B022	234
図249	B023	235
図250	B024	236
図251	B025	237
図252	B026	238
図253	B027	239
図254	B028	240
図255	B029	240
図256	B030	241
図257	B031	242
図258	B032	242
図259	B033a,b,z	243
図260	B035a,b	244
図261	B036a,b,z	246
図262	B037a,b	247
図263	B037c	248
図264	B037a,b,c	249
図265	B038	250
図266	B039a,b	251
図267	B040	251
図268	B041	252
図269	B042	253
図270	B043	253
図271	B044	254
図272	B045	255
図273	D043	263
図274	D045	263
図275	D046	264
図276	D047	264
図277	D055	264
図278	D061	264
図279	D062	264
図280	D063	264
図281	D067	264
図282	D081	266
図283	D092	266
図284	D096	266
図285	D101	267
図286	D102	267
図287	中世以降の遺構配置図	268
図288	B046	269
図289	D049	269
図290	D052	270
図291	D053	270
図292	D074	270
図293	D075	271
図294	D078	272
図295	D088	272
図296	D090	273
図297	D094	273
図298	D095	273
図299	人為的埋め戻しと掘り返しの 竪穴住居跡の分布	277
図300	上谷遺跡Ⅱ地区出土文字「得」を 出土する遺構	280
図301	上谷遺跡Ⅱ地区出土文字「万」を 出土する遺構	281
図302	上谷遺跡Ⅱ地区出土文字「×」を 出土する遺構	282

表 目 次

表 1 上谷遺跡新旧遺構番号对照表 ······	6	表34 A107遺物観察表 ······	177
表 2 F096遺物観察表 ······	45	表35 A108遺物観察表 ······	178
表 3 D082貝ブロック出土貝種構成表 ······	82	表36 A109遺物観察表 ······	182
表 4 A081遺物観察表 ······	89	表37 A110遺物観察表 ······	183
表 5 A073遺物観察表 ······	96	表38 A111遺物観察表 ······	185
表 6 A074遺物観察表 ······	98	表39 A112遺物観察表 ······	188
表 7 A075遺物観察表 ······	101	表40 A113遺物観察表 ······	190
表 8 A076遺物観察表 ······	103	表41 A114遺物観察表 ······	192
表 9 A077遺物観察表 ······	105	表42 A115遺物観察表 ······	194
表10 A078遺物観察表 ······	109	表43 A116遺物観察表 ······	199
表11 A080遺物観察表 ······	115	表44 A117遺物観察表 ······	201
表12 A082遺物観察表 ······	118	表45 A118遺物観察表 ······	203
表13 A083遺物観察表 ······	121	表46 A119遺物観察表 ······	205
表14 A084遺物観察表 ······	123	表47 A120遺物観察表 ······	208
表15 A085遺物観察表 ······	125	表48 A121遺物観察表 ······	209
表16 A086遺物観察表 ······	126	表49 A122遺物観察表 ······	212
表17 A087遺物観察表 ······	128	表50 A123遺物観察表 ······	213
表18 A088出土貝種構成表 ······	130	表51 A124 a 遺物観察表 ······	215
表18b A088遺物観察表 ······	131	表52 A124 b 遺物観察表 ······	217
表19 A090遺物観察表 ······	133	表53 B008遺物観察表 ······	219
表20 A091遺物観察表 ······	134	表54 B010遺物観察表 ······	221
表21 A092遺物観察表 ······	135	表55 B011遺物観察表 ······	222
表21b A093遺物観察表 ······	137	表56 B012遺物観察表 ······	223
表22 A094遺物観察表 ······	139	表57 B014遺物観察表 ······	226
表23 A095遺物観察表 ······	143	表58 B015遺物観察表 ······	227
表24 A096遺物観察表 ······	144	表58b B016遺物観察表 ······	228
表25 A097遺物観察表 ······	147	表59 B017遺物観察表 ······	229
表25b A098遺物観察表 ······	148	表60 B018遺物観察表 ······	231
表26 A099遺物観察表 ······	152	表61 B019遺物観察表 ······	232
表27 A100遺物観察表 ······	155	表62 B022遺物観察表 ······	234
表28 A101遺物観察表 ······	158	表63 B023遺物観察表 ······	235
表29 A102遺物観察表 ······	163	表64 B024遺物観察表 ······	236
表30 A103遺物観察表 ······	170	表65 B025遺物観察表 ······	237
表31 A104遺物観察表 ······	172	表66 B026遺物観察表 ······	238
表32 A105遺物観察表 ······	174	表67 B027遺物観察表 ······	239
表33 A106遺物観察表 ······	175	表68 B030遺物観察表 ······	241

表69	B032遺物観察表	242
表70	B033遺物観察表	243
表71	B035遺物観察表	245
表72	B036遺物観察表	246
表73	B037遺物観察表	249
表74	B038遺物観察表	250
表75	B040遺物観察表	252
表76	B043遺物観察表	254
表77	B045遺物観察表	255
表78	掘立柱建物跡一覧表	256
表79	D067遺物観察表	265
表80	D096遺物観察表	267
表81	B046遺構計測表	269
表82	D075遺物観察表	272
表83	出土点数の多い文字と出土遺構	283
表84	長文の墨書き器	283
表85	出土文字資料一覧	284

写 真 図 版 目 次

図版 1	上谷遺跡全景（南西方向から） 上谷遺跡Ⅱ地区全景	図版20	A095,A096,A097,A098,A099,A100,A101 A102a.b
図版 2	A089,F033,F034,F035,F036,F037,F038 F039	図版21	A103,A104,A105a.b,A106,A107,A108 A109,A110
図版 3	F040,F041,F042a.b,F043,F045,F046,F047 F048	図版22	A111,A112,A113,A114,A115,A116,A117 A118
図版 4	F049,F050,F051,F052,F053,F054,F055 F056	図版23	A119,A120,A121,A122,A123,A124a.b B006,B007
図版 5	F057,F058,F059a.b,F060,F061,F062a.b F063,F064	図版24	B008,B009,B010a.b.c,B011,B012a.b,B013 B014a.b,B015a.b.c
図版 6	F065a.b,F066,F067a.b,F068,F069 F070,F071,F072	図版25	B016a.b,B017,B018,B019,B020,B021 B022a.b,B023
図版 7	F073,F074,F075,F076,F077,F078,F079 F080	図版26	B024,B025a.b,B026a,B027,B028,B029 B030,B031
図版 8	F081,F082,F083,F084,F085,F086,F087 F088	図版27	B032,B033a.b,B035a.b,B036a.b,B037a.b.c B038,B039,B040
図版 9	F089a.b,F090,F091,F092,F093,F094,F095 F096	図版28	B041,B042,B043,B044,B045,D043,D045 D046
図版10	F097,F098a.b,F099,F100,F101,F102,F103 F104	図版29	D047,D055,D061,D062,D063,D067,D081 D092
図版11	F105,F106,F107,F108,F109,F111,F112a.b F113	図版30	D096,D101,D102,B046,D049,D052,D053 D074
図版12	F114,F115,F116,F117a.b,F118a.b,F119a.b F120,F121	図版31	D075,D078,D088,D090,D094,D095,D103
図版13	F122a.b,F123,F124a.b,F125a.b,F26a.b D044,D048,D050	図版32	遺物 A089,F033,F034,F035,F036
図版14	D051,D056,D057a.b,D058,D059,D064 D065,D066	図版33	遺物 F041,F042,F043,F047,F048,F059 F061,F064
図版15	D068,D070,D071,D072,D073,D076,D077 D079	図版34	遺物 F067a,F072,F073
図版16	D082,D084,D085,D087,D089,D091,D097 D098	図版35	遺物 F075,F079,F080,F081,F087,F093 F096
図版17	D099,D100,A079,A081,D060,A073,A074 A075	図版36	遺物 F096,F099,F100,F101
図版18	A076,A077a.b,A078,A080,A082,A083 A084,A085	図版37	遺物 F105,F106,F109
図版19	A086,A087,A088,A090,A091,A092,A093 A094	図版38	遺物 F110,F112,F118,F122
		図版39	遺物 A081,A073,A074,A075,A076
		図版40	遺物 A077,A078
		図版41	遺物 A078(2),A080
		図版42	遺物 A082
		図版43	遺物 A083,A085,A086
		図版44	遺物 A091,A093

- 图版45 遗物 A094,A095
- 图版46 遗物 A096,A097,A098,A099
- 图版47 遗物 A099(2),A100
- 图版48 遗物 A100(2),A101
- 图版49 遗物 A102,A103,A104
- 图版50 遗物 A105,A106,A107,A108
- 图版51 遗物 A109,A110,A111
- 图版52 遗物 A112,A113,A114
- 图版53 遗物 A115,A116
- 图版54 遗物 A117,A118,A119
- 图版55 遗物 A120,A121,A122
- 图版56 遗物 A122(2),A124a,A124b,B014,B015
B016,B017
- 图版57 遗物 B018,B019B020,B030,B033,B037
B038,B043,D062,D067,D075,D096
- 图版58 墨书土器·线刻土器·篦书土器(1)
- 图版59 墨书土器·线刻土器·篦书土器(2)
- 图版60 墨书土器·线刻土器·篦书土器(3)
- 图版61 墨书土器·线刻土器·篦书土器(4)
- 图版62 墨书土器·线刻土器·篦书土器(5)
- 图版63 墨书土器·线刻土器·篦书土器(6)

第1章 上谷遺跡II地区の概要

第1節 上谷遺跡II地区の調査の経緯

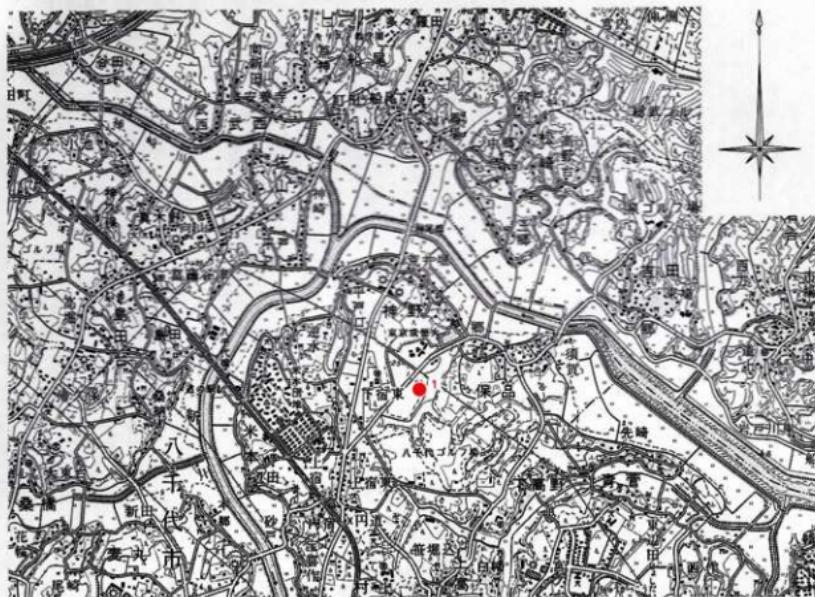


図1 上谷遺跡位置図 (1/50,000)

上谷遺跡の発掘調査は（仮称）八千代カルチャータウン開発事業関連区域内における埋蔵文化財発掘調査の一環として、平成4年4月より開始された。例言に記したとおり本報告書は「（仮称）八千代カルチャータウン開発事業関連埋蔵文化財発掘調査報告書」の4冊目にあたる。事業全体にわたる経緯の詳細などについては、既刊の「栗谷遺跡-第1分冊」を参照していただくこととして、ここでは上谷遺跡II地区の調査経緯について触れておきたい。

上谷遺跡II地区的発掘調査は、平成7年7月より平成8年2月にかけて第2・3次確認調査を行い、その確認調査の成果を得て本調査を実施した。そして当該地区的本調査は、第3次本調査（平成9年4月から平成10年3月）、第4次本調査（平成10年4月より平成11年3月）として実施した。このそれぞれの本調査の一部が該当している。調査面積の合計は約50,312m²であった。

調査区は公共座標系に沿ってグリッドを設定した。100m方眼で大グリッドとし、その中を10m方眼の中グリッド、そして中グリッドを5m方眼に区画し、小グリッドとして設定し発掘調査を行った。調査は表土層を重機による除去を行い、ソフトローム上面を遺構確認面とした。写真撮影などの記録を取りながら、遺構覆土の除去と遺構の精査を行った。撮影にはプローニー判モノクロフィルムを基本としながら、35mmモノクロフィルムおよび35mmカラーリバーサルフィルムを使用した。測量方法は、遺物については光波測距儀による測量を、遺構については航空測量を基本に行い、それぞれが補完することとした。

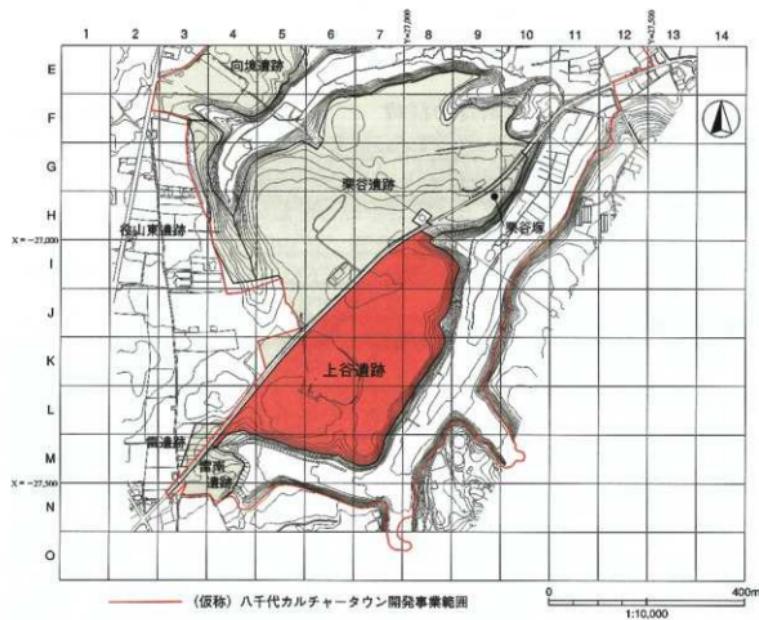


図2 (仮称) 八千代カルチャータウン開発事業関連遺跡地形図

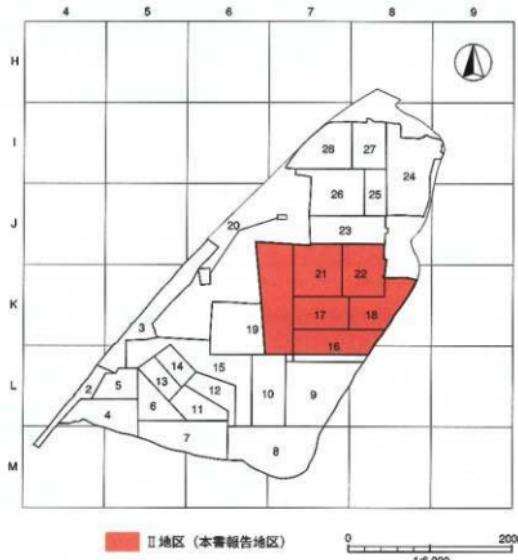
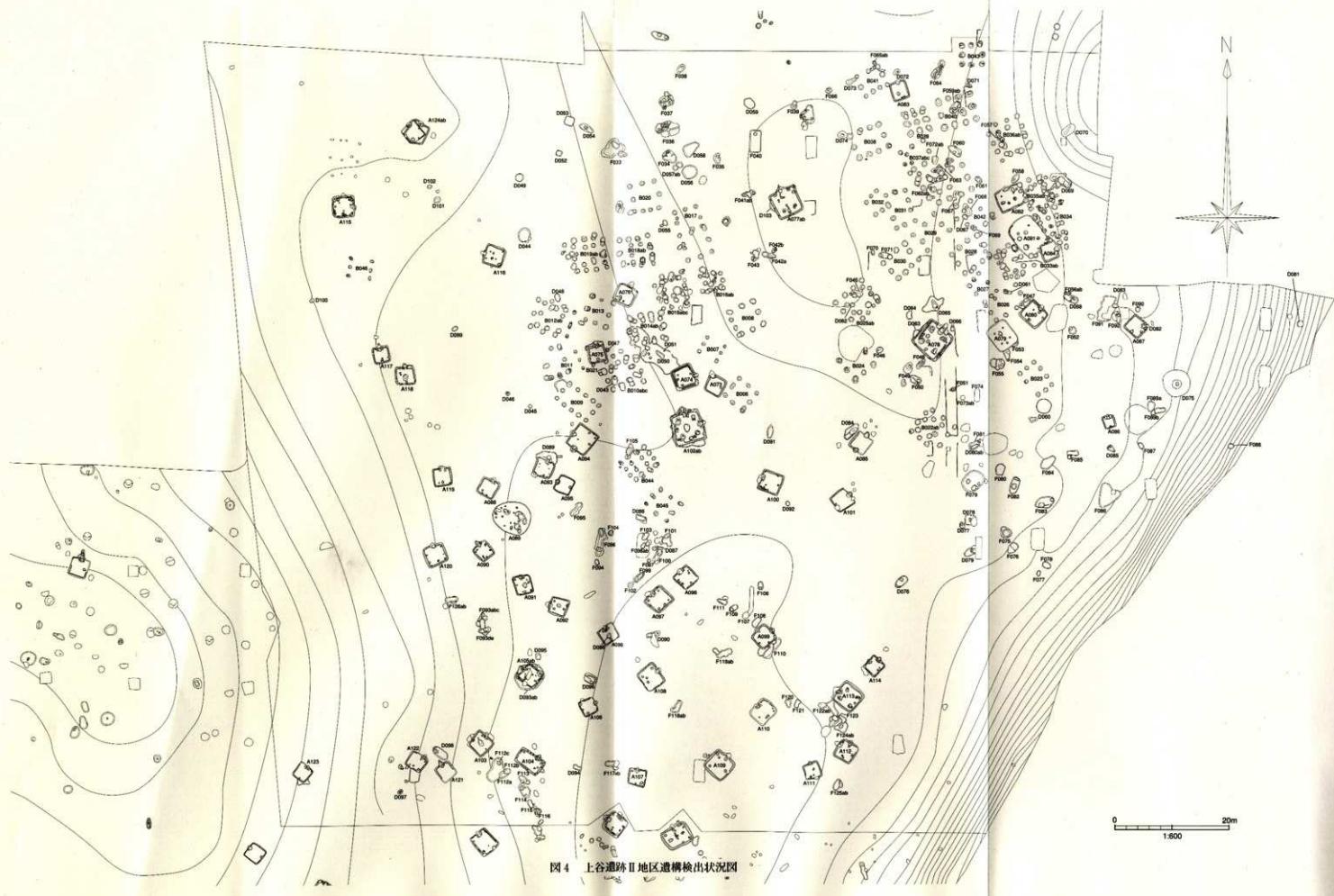


図3 上谷遺跡本調査地区割図



第2節 上谷遺跡Ⅱ地区の調査の概要

上谷遺跡は千葉県八千代市保品に所在する。地理的には下総台地の北西部に位置し、かつての印旛沼南岸に立地する。下総台地の地形は樹枝状に開析された谷津によって、台地と谷津が複雑に入り組み、その谷津に面して多くの遺跡が形成されているが、八千代市もその例外ではなく、このような台地上に数多くの遺跡が残されている。そして、特に八千代市の場合、谷津に対して台地は南側が急傾斜となつており、北側が緩斜面となる傾向が指摘できる。

上谷遺跡もそうした台地に残された遺跡の一つであり、標高24~26mの大きな台地上の南側から東側にかけて残された遺跡である。水田面との比高差は5~6mとなっている。また、台地のほぼ中央に、東側から入り込む小支谷及びその谷頭によって、栗谷遺跡と区分されてきた。

上谷遺跡Ⅱ地区において検出した遺構は、縄文時代の堅穴住居跡1軒、炉穴106基、土坑25基、弥生時代から古墳時代にかけては堅穴住居跡2軒、土坑1基である。Ⅱ地区の主体となる奈良・平安時代は堅穴住居跡51軒、掘立柱建物跡56棟、土坑14基であった。また、中世・近世・近代の遺構は土坑10基を主体としているが、掘立柱建物跡1棟、井戸状遺構1基が検出されている。

各遺構の覆土から、縄文時代の撚糸文系の土器片が、ややまとまって出土していた。本調査において当該時期の遺構を検出することはできなかったが、遺構の存在を想定させるような出土量である。縄文時代の炉穴や奈良・平安時代の堅穴住居跡、掘立柱建物跡等の遺構が多く、古い段階で壊されているかもしれない。また、平安時代の掘立柱建物跡群は、大きく2群に分かれて検出されている。遺物のうち土師器を中心として、墨書き土器（線刻、範書を含む）が数多く出土しており、本地区の特徴となっている。

なお、本地区の基本土層は、第Ⅰ層表土層（褐色土）、第Ⅱ層黒色土層、第Ⅲ層暗褐色土層、第Ⅳ層ソフトローム漸移層（暗褐色土）、第Ⅴ層ソフトローム層、第Ⅵ層ハードローム層である。遺構検出にあたって、遺構の確認面を第Ⅳ層下面あるいはV層上面にて行った。

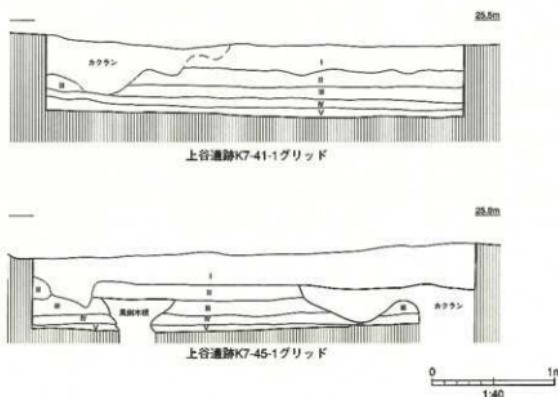


図5 上谷遺跡Ⅱ地区の基本土層図

表1 上谷遺跡新旧遺構番号対照表

新番号	旧番号	新番号	旧番号	新番号	旧番号	新番号	旧番号
A 塗穴住居跡							
A073	21-001	A108	16-008	B018a	21-018A	D043	21-010D
A074	21-002	A109	16-011	B018b	21-018B	D044	21-021
A075	21-003	A110	16-013	B019a	21-019A	D045	21-024
A076	21-004	A111	16-014	B019b	21-019B	D046	21-025
A077a	21-005A	A112	16-015	B020	21-020	D047	21-026
A077b	21-005B	A113	16-016	B021	21-023	D048	21-027
A078	22-002	A114	16-017	B022a	22-005A	D049	21-028
A079	22-003	A115	19-001	B022b	22-005B	D050	21-029
A080	22-004	A116	19-002	B023	22-006	D051	21-030
A081	22-016	A117	19-003	B024	22-007	D052	21-031
A082	22-017	A118	19-004	B025a	22-008A	D053	21-032
A083	22-018	A119	19-005	B025b	22-008B	D054	21-034
A084	22-028	A120	19-006	B026a	22-009A	D055	21-035
A085	18-001	A121	19-007	B027	22-010	D056	21-036
A086	18-003	A122	19-008	B028	22-011	D057a	21-037A
A087	18-005	A123	19-009	B029	22-012	D057b	21-037B
A088	17-001	A124a	19-014A	B030	22-013	D058	21-039
A089	17-002	A124b	19-014B	B031	22-014	D059	21-045
A090	17-003	B 挿立柱建物跡		B032	22-015	D103	21-053
A091	17-004	B006	21-006	B033a	22-019A	D060	22-001
A092	17-005	B007	21-007	B033b	22-019B	D061	22-009B
A093	17-006	B008	21-008	B035a	22-021A	D062	22-030
A094	17-007	B009	21-009	B035b	22-021B	D063	22-031
A095	17-008	B010a	21-010A	B036a	22-022A	D064	22-034
A096	17-009A	B010b	21-010B	B036b	22-022B	D065	22-035
A097	17-010	B010c	21-010C	B037a	22-023A	D066	22-036
A098	17-011	B011	21-011	B037b	22-023B	D067	22-048
A099	17-012	B012a	21-012A	B037c	22-023C	D068	22-051
A100	17-013	B012b	21-012B	B038	22-024	D069	22-053
A101	17-014	B013	21-013	B039a	22-025	D070	22-054
A102a	17-015A	B014a	21-014A	B039b		D071	22-060
A102b	17-015B	B014b	21-014B	B040	22-026	D072	22-066
A103	16-002	B015a	21-015A	B041	22-027	D073	22-068
A104	16-003	B015b	21-015B	B042	22-029	D074	22-070
A105a	16-004A	B015c	21-015C	B043	22-043	D075	18-004
A105b	16-004B	B016a	21-016A	B044	17-016	D076	18-007
A106	16-005	B016b	21-016B	B045	17-017	D077	18-008
A107	16-007	B017a	21-017A	B046	19-016	D078	18-009
		B017b	21-017B	D 坑		D079	18-010

新番号	旧番号
D080a	18-017A
D080b	18-017B
D081	18-026
D082	18-027
D083	18-030B
D084	18-031
D085	18-034
D086	17-009B
D087	17-024
D088	17-028
D089	17-035
D090	17-036
D091	17-038
D092	17-039
D093a	16-004C
D093b	16-004D
D094	16-020
D095	16-021
D096	16-022
D097	19-046
D098	19-048
D099	19-049
D100	19-050
D101	19-051
D102	19-052
F 穴	
F033	21-033
F034	21-038
F035	21-040
F036	21-041
F037	21-042
F038	21-043
F039	21-046
F040	21-048
F041a	21-049A
F041b	21-049B
F042a	21-051A
F042b	21-051B
F043	21-052
F044	21-053
F045	22-032
F046	22-033
F047	22-037
F048	22-038
F049	22-039
F050	22-041
F051	22-042
F052	22-044
F053	22-045
F054	22-046
F055	22-047
F056	22-052
F057	22-057
F058	22-058
F059a	22-059A
F059b	22-059B
F060	22-061
F061	22-062
F062a	22-063A
F062b	22-063B
F063	22-064
F064	22-065
F065a	22-067A
F065b	22-067B
F066	22-069
F067a	22-071A
F067b	22-071B
F068	22-072
F069	22-073
F070	22-074
F071	22-075
F072a	22-076A
F072b	22-076B
F073a	22-077A
F073b	22-077B
F074	22-078
F075	18-011
F076	18-012
F077	18-013
F078	18-014
F079	18-015
F080	18-016
F081	18-017B
F082	18-018
F083	18-019
F084	18-020
F085	18-021
F086	18-022
F087	18-023
F088	18-024
F089a	18-025A
F089b	18-025B
F090	18-028
F091	18-030A
F092	18-032
F093a	17-018A
F093b	17-018B
F093c	17-018C
F093d	17-019A
F093e	17-019B
F094	17-020
F095	17-021
F096	17-022
F097	17-023
F098a	17-025A
F098b	17-025B
F099	17-026
F100	17-027
F101	17-029
F102	17-031
F103	17-032
F104	17-033
F105	17-034
F106	17-040
F107	17-041
F108	17-042
F109	17-043

*遺構記号は、A；堅穴住居跡、B；獨立柱建物跡、C；方形埴溝墓、D；土坑、E；溝、F；炉穴
G；塚、H；土手、I；その他、J；旧石器時代ブロック、としている。

第2章 遺構と遺物

ここに報告する上谷遺跡Ⅱ地区は、調査区番号21地区・22地区・18地区・17地区・16地区の北側、19地区的東側を対象としている。そして本地區においては先述したように、縄文時代・弥生時代～古墳時代・奈良・平安時代・中世・近世・近代に至る複合した遺構群を調査した。

本地区での遺構の主体となるものは縄文時代の炉穴群であり、奈良・平安時代の竪穴住居跡と掘立柱建物跡であり、出土遺物は縄文式土器（燃糸文系・貝殻条痕文系・五領ヶ台式）や弥生式土器（弥生時代後期）、古墳時代前期と奈良・平安時代の土師器片等である。遺物の出土量の多寡は遺構の検出状況に伴い生じるものであり、縄文時代早期末葉の貝殻条痕文系土器と奈良・平安時代の土師器がその主体を占めている。このため本書に報告する遺構・遺物は、その時代と時期が報告の中心となっている。

遺構の検出状況は、全体的には標高24～25mに位置しており、全ての時代を通じて、17地区南東部から16地区東部にかけて遺構の希薄な地区があった。また、炉穴群は占地としては大きく2群に分かれるようである。一方、平安時代の竪穴住居跡と掘立柱建物跡の重複も少なく、掘立柱建物跡は東西2群の単位として捉えられる傾向が窺える。そして奈良・平安時代の遺構調査においては、墨書き土器の出土量も破片を含め400点を超える出土があり、I地区に比しその出土量は極めて増大している。

第1節 縄文時代

上谷遺跡Ⅱ地区において検出された縄文時代の遺構は、竪穴住居跡が1軒・炉穴が106基・土坑25基であったが、その主体は早期末葉の貝殻状痕文期の炉穴であり、早期を中心とした土坑である。また、積極的に住居跡とする明確な根拠がないため、土坑として扱っているものもある。

本地区的炉穴の立地は、台地中央部より平坦部の縁辺にかけて所在しているが、台地縁辺部に集中するという傾向はみられない。また、調査地区番号21～22地区、16～17地区にかけて所在する傾向が窺われる。炉穴もいくつかのグループに分けられるようであるが、上谷遺跡全体から見れば21～22地区はⅠ地区との、16～17地区的炉穴はⅢ地区で報告する16地区南側との広がりとして捉えられるようである。また、竪穴住居跡や土坑は遺構数も少なく、その時期の主体は出土遺物や覆土などから早期に属するものと考えられるが、しかし分布傾向を示唆する程ではなかった。

炉穴や他の時代の遺構の覆土からは、燃糸文系の土器群が比較的多く出土しており、早い段階において該期の遺構などは損壊されたと考えられる。なお、貝殻条痕文期の土坑2基よりそれぞれハイガイを含む貝ブロックを検出しており、印旛沼水系への係わりを示している資料として注意されよう。また、中期の五領ヶ台期の土坑（竪穴状遺構）が検出され、本遺跡における縄文時代の新たな知見が加わっている。

第1項 竪穴住居跡

Ⅱ地区における竪穴住居跡の検出は1軒のみであった。住居跡は台地平坦面に所在するが、上谷遺跡が主として係わったであろう台地東側の谷津よりも、西側から入り込んだ谷頭にやや近い平坦面に位置している。

I地区でも早期条痕文期の不整方形の竪穴住居跡が検出されているが、両者は近接しているわけではなく、それが単独の竪穴住居跡となってしまっている。集落として捉えられるには住居の数が少なく、遺構が検出しづらいものであった。

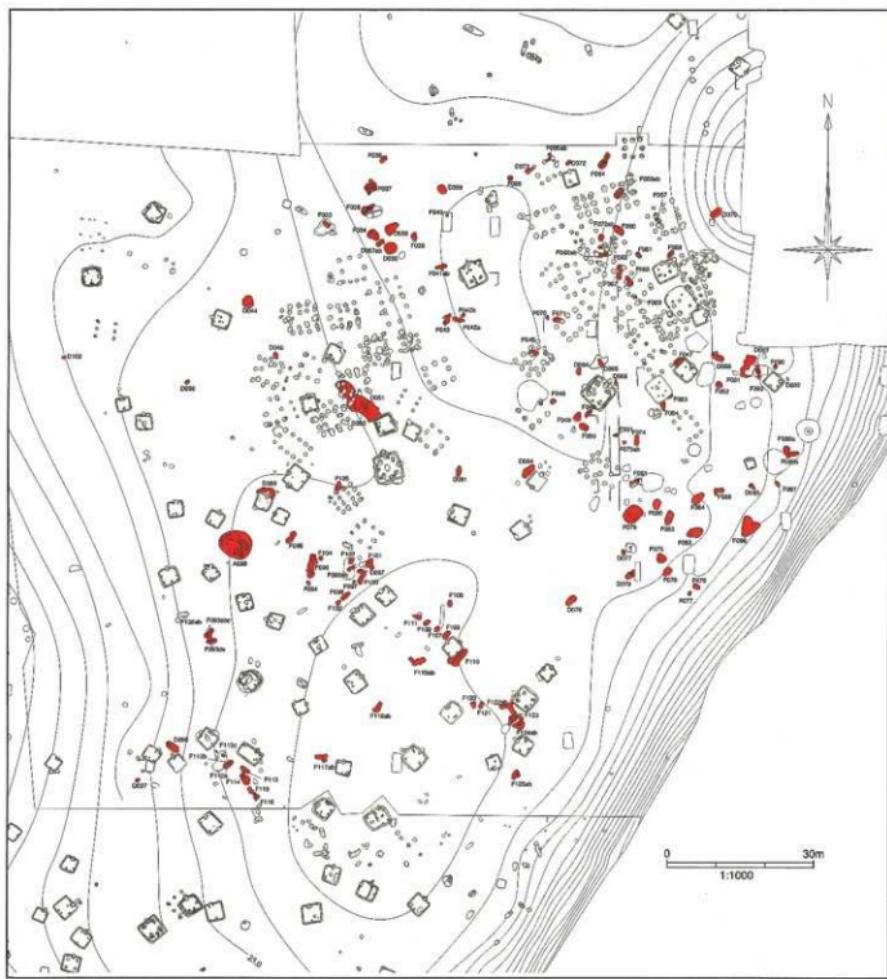


図6 繩文時代遺構配置図

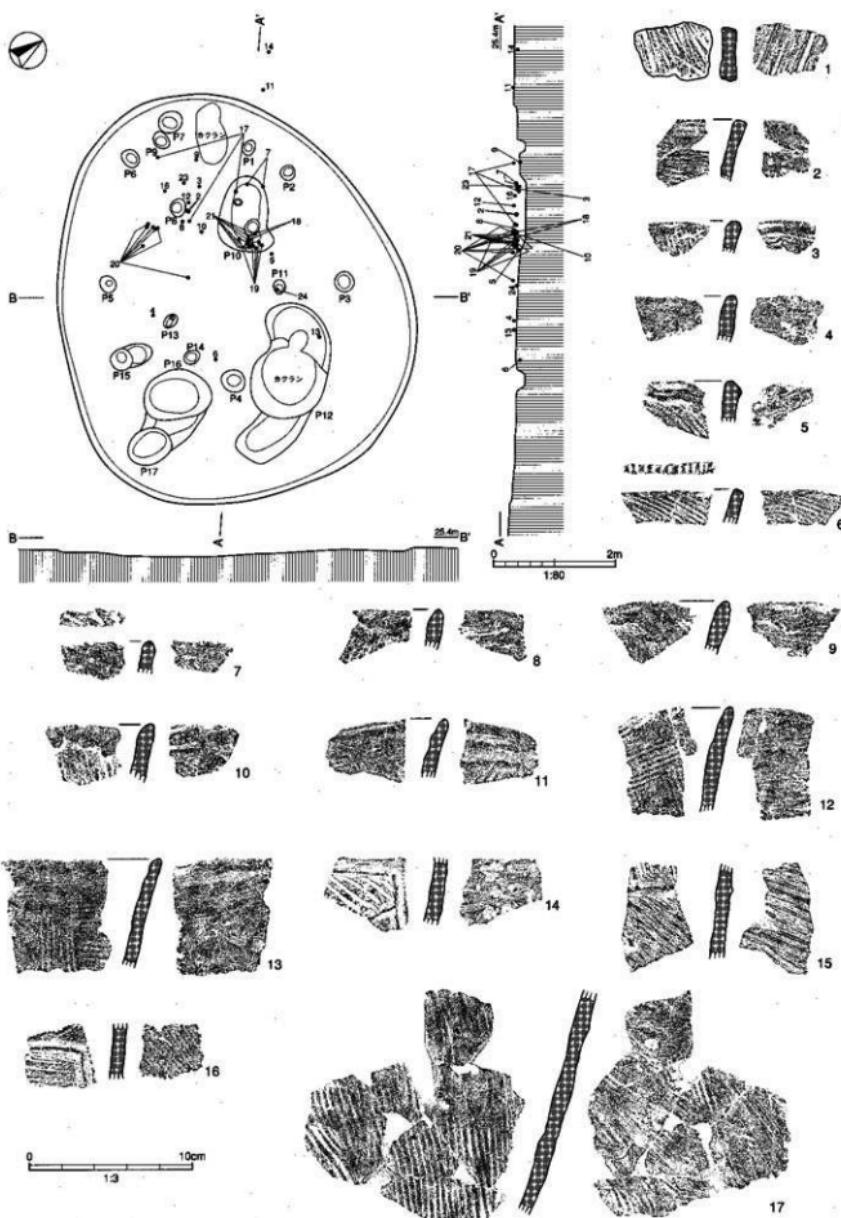


図7 A089

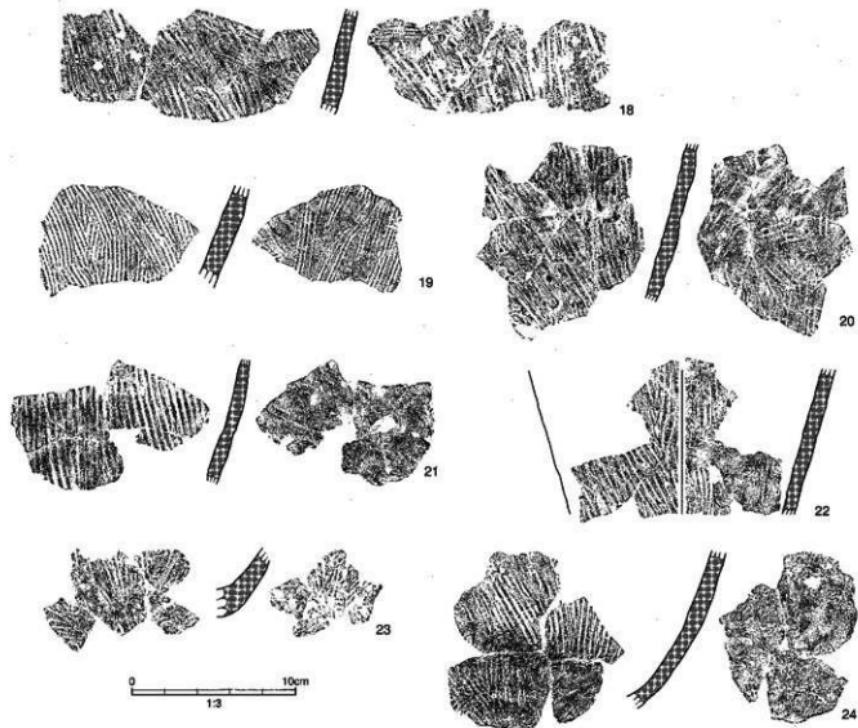


図8 A089 (2)

A089

検出地区 本遺構は調査区の中央部である台地の平坦地に位置し、K7-36-2・3・4gにわたって検出された。

遺構 長軸6.71m×短軸5.63m×深さ0.14m、主軸方位はN-74°-Wを示す。卵形の平面形を有する堅穴住居跡である。確認面はソフトローム上面であり、遺構確認では2軒の重複かと思われる複雑な形状であった。掘り込みも浅く堅穴というより凹み状の遺構である。なお、平面形については本遺構は搅乱が著しく意識的に捉えているところもある。

遺構の壁、床ともに不明瞭であるが、床直上層から直下にかけて急激にローム層に変化するので、これを床と捉え堅穴住居跡と判断した。床は均一に平坦ではなく、壁から住居跡中央に向けてやや凹んでいる。炉や周溝は検出されず、主柱穴と想定したピットは五角形乃至台形状に展開している。P7は床より0.53m掘り込まれいかにも柱穴らしいピットである。その他のピットは0.20~0.30m程掘り込まれている。P12は搅乱がはいるためか坑底の凹凸が激しい。覆土は、遺構の掘り込みが浅く搅乱も多いため明瞭に捉えることができなかつたが、暗褐色土から褐色土の自然堆積であった。

遺物 本遺構からは253点の土器片等の出土があったが、貝殻条痕土器が主体を占めている。また、深鉢形土器の胴部片を利用した土器片錐が1点出土している。

1は長径4.7cm×短径3.6cm×重量17.9gの土器片錐で、短径方向に1対の切り込みが施され、周縁が一

部摩耗している。2～13は口縁部片であり、6と7は口唇上に刻み目が施される。5は口唇直下に僅かな隆帯を巡らせ、4は無文。2～6は口唇を平坦に、7～13はやや尖らせたものとなっている。14～22は胴部片である。14と15は微隆起線によって枠状に区画したもので、枠内は集合沈線を施している。16～22は胴部中位～下位の破片斜位及び縦位の貝殻条痕文を施す。23と24はやや丸底気味の尖底部である。

所見 遺存状態はかなり悪い竪穴住居跡である。どちらかというと掘り込みも浅く、竪穴住居跡というより凹み状の遺構である。しかし土器片の出土量や柱穴の配置、床の状況等を勘案して竪穴住居跡としたが、平面形態は柱穴配置などから不整方形に変わるものもある。遺構の所属時期は出土土器から、縄文時代の早期末葉、貝殻条痕文期に属するものである。

第2項 炉穴

上谷遺跡Ⅱ地区において、縄文時代の主体を占める遺構は炉穴であった。調査時において遺構番号を付した炉穴の総数は106基であり、確認した火床の総数は181カ所である。炉穴として掘られた土坑を最大に捉えると118基を数える。これらの炉穴は重複して営まれたものが圧倒的に多く、このため平面形は不整形が中心となり、形状を意識的に捉えている。また、重複の複雑化に伴い新旧関係を捉えることが難しかった。火床は主に壁寄りに残されていたものが多く、その上層及び付近には明瞭な焼土層は認められなかったが、焼土が混入した暗赤褐色土が堆積している。また、重複のためか火床が認められなかった炉穴もあった。

遺物の出土は一部の炉穴を除き全体的に少なく、また、多くの炉穴で撲糸文土器片の出土も認められた。上谷遺跡Ⅱ地区では撲糸文期の遺構は検出されなかったが、当該期に遺構の存在を推定させるものである。

以下、炉穴について報告することとするが、重複した炉穴については火床が壊されているものや、長軸が不明なものが多く、現状の長軸は最大値をとり、それを方位とすることとした。

F033

遺構 J7-59-4g、J7-60-1・3gにわたって検出された。長軸4.44m×短軸3.13m×深さ0.18m、方位はN-83°-Wを示す。平面形は重複のため不整形となっている。主たる土坑の坑底はソフトロームであり、平坦であった。また、壁は緩く傾斜して立ち上がる。火床は3カ所検出されたが、火の使用に係わる新旧関係は捉えることができなかった。坑内には坑底から0.30m掘り下げたピットが検出された。ピット上には火床cが一部覆っている。

覆土は褐色土と暗褐色土を主体としているが、自然堆積と考えられる。2層が掘り込まれ、3～4層は人為的な堆積のようにみられた。

遺物 本地区の炉穴としては、やや多い遺物の出土である。いずれも破片であり、多くは接合もできず器形を窺うことができなかった。2は口縁と底部を欠く胴部中位である。現存19.3cmであり、やや細身で、口縁にむかって大きく開く土器である。粗い貝殻条痕文を胴部上位は縦に、下半は斜位に施している。内面の一部に、胴部中位より縦位に施す。胴下半から底部にかけてあるが尖底部が欠損するものである。1は胴部上半から底部にかけての土器で、尖底部を欠損しているが、21.5cm現存する。主として縦位の貝殻条痕文が施されているが、内面は不明瞭であった。

所見 火床から、最低3基の炉穴の存在が想定され、坑底の平面の彎曲がそれぞれの火床に伴う土坑と考えられるものである。

坑底のピットを火床bに伴うものとすると、火床aの覆土の2層を掘り込んでいることや、火床cがピットの上に存在すること等から、新旧関係は古いほうからa～b～cと想定できよう。

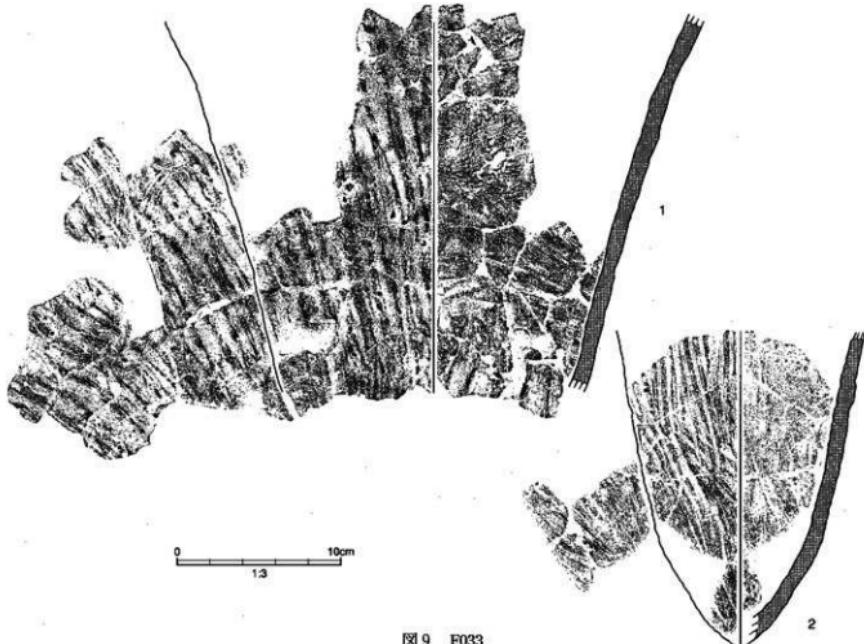
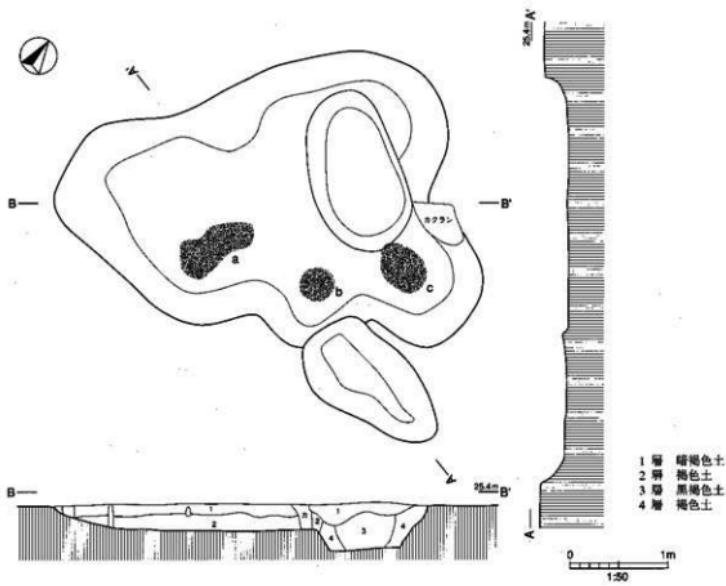


図9 F033

F034

遺構 J7-70-3gにて検出された。長軸4.44m×短軸2.07m×深さ0.18m、方位はN-43°-Wである。平面形は丸味を帯びる三角形状である。火床は1カ所のみ検出された。坑底はソフトロームであり、北東に比し南側がやや低くなる。北西壁側はテラス状となっている。覆土は坑底にうすい焼土があるが、暗褐色土を主体として、重複のためやや複雑に自然堆積している。

遺物 貝殻条痕文が、ややまとまって出土している。1は推定口径34.4cm、遺存高27.7cm、平縁の口縁で、口縁部は横位の、以下は縦及び斜位の不定方向の貝殻条痕文が、内外面ともに施文される。

所見 火床は1カ所だが、覆土から数回にわたって使用されたと想定される。平面形の上場は比較的整然とするが、坑底の下場はやや複雑な形状となっている。覆土やこの坑底ラインから推定すると、最低3基あったと思われるが、火床の痕跡も確認できなかった。

F035

遺構 J7-80-1gにて検出された。長軸1.78m×短軸1.18m×深さ0.17m、方位はN-13°-Wである。平面形は丸味を帯びた三角形状である。火床は1カ所検出された。坑底はソフトローム。坑底直上は褐色土、上層は暗褐色土の自然堆積である。

遺物 出土遺物は土器片だが、小片が多いことが本遺構の特徴となろう。1は土器片錐で、長径は欠損のため不明であるが、短径4.1cm、重量20.6g、長径方向に刻み目に入る土錐である。2は波状の口縁片で内外面ともに斜位の文様が施されている。

所見 平面形は上場、下場とも整然としており、覆土堆積の状況から判断しても、本地区としては珍しい単独の炉穴である。

F036

遺構 J7-69-2gにて検出された。長軸3.14m×短軸1.49m×深さ0.29m、方位はN-60°-Wである。平面形は不整形である。火床は3カ所検出された。また、それぞれに伴うと考えられるピットを3基検出した。覆土は火床付近に焼土が僅かに混入した暗赤褐色土が堆積するが、主体はそれぞれの炉穴とともに暗褐色土であった。

遺物 土器片の出土は多かったが、接合できるまでには至らなかった。1～3は内外面ともに斜位の貝殻条痕文を主として施文されるが、一部に縦位にも施されている。1はややくびれる胴部片である。

所見 火床は3カ所検出したが、覆土の状況等から最低4回にわたって形成されたと想定が可能である。火床の新旧関係は、火床が認められなかつたが2層に伴うものが新しく、3層の火床cは火床bのピットへと火床範囲が広がっていることから、古い炉穴から火床b、火床c、(失われた火床d)となろう。火床aの新旧関係は明らかにできなかった。

F037

遺構 J7-69-1gにて検出された。長軸2.67m×短軸2.55m×深さ0.30m、方位はN-25°-Wである。平面形は炉穴の重複が多いことから、隅丸方形に対角線上に造り出しを設けた様な形状となっている。火床は6カ所検出された。それに伴うピットも大きく捉えると3基確認されている。覆土は暗褐色土を主体としている。

遺物 1は口縁と底部を欠損した胴部の大型片で、胴部下半に位置する。遺存高26.2cmである。外面は不定方向の貝殻条痕文を施している。内面は上半に斜位の貝殻条痕文が見られるものの、縦位の施文を中心としている。

所見 火床 a・b・c をとおるセクションラインしか残せなかつたため、6ヶ所の火床の新旧関係は捉えることができなかつたが、火床 b(1～3層)がもっとも新しく、それに対して火床 a(4～6層)、火床 c(7～9層)が古いものであるが、b・c の火床の新旧は捉えられなかつた。また、坑底の下場ラインが彎曲しているが、この丸味が各火床の基本的な土坑として捉えることが可能であると考えた。

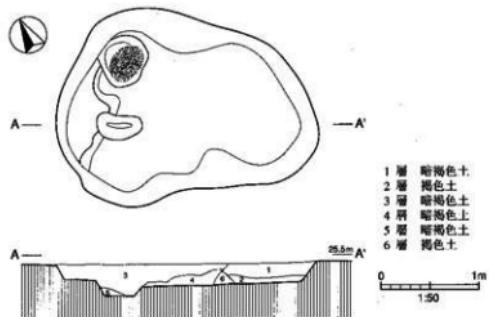


図10 F034

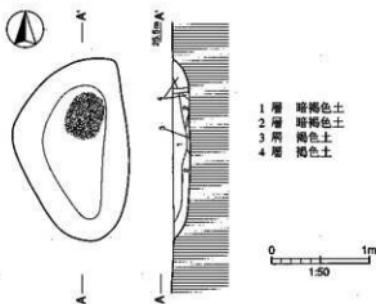


図11 F035

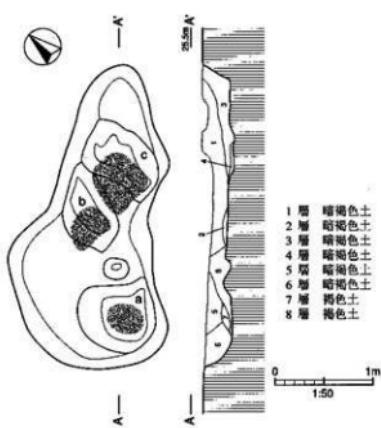


図12 F036

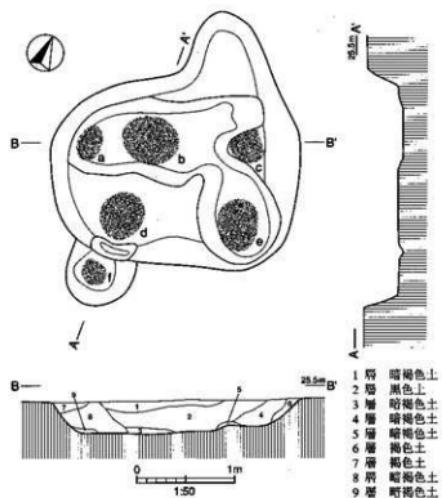


図13 F037

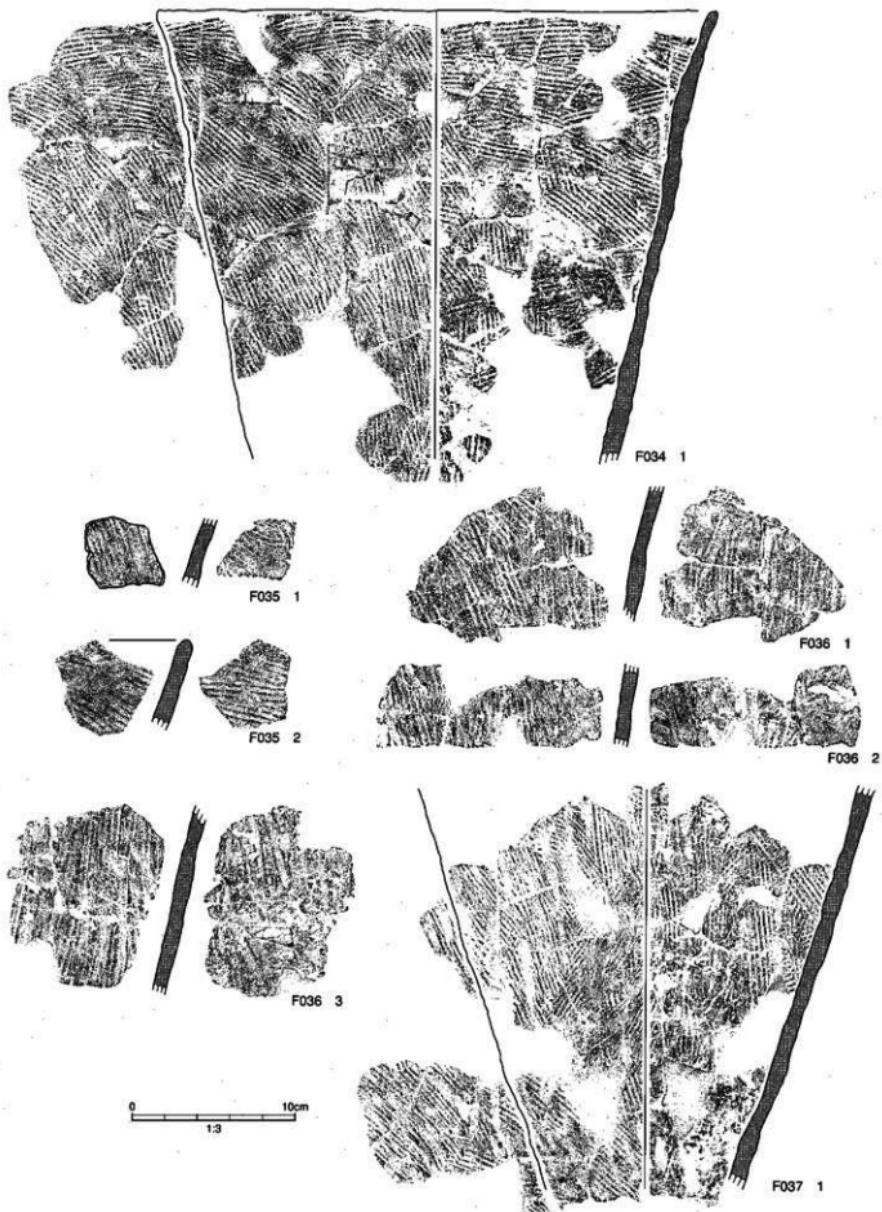


図14 F034・F035・F036・F037

F038

遺構 J7-68-4gにて検出された。長軸1.78m×短軸1.05m×深さ0.30m、方位はN-44°-Eである。平面形は長楕円形である。火床は1カ所検出された。火床はハードロームが火熱を被り良好な火床となっている。坑底は、南西から北東にかけて緩やかに傾斜している。覆土は壁際がやや複雑な堆積状であるが、暗褐色土を主体とする。遺物は出土しなかった。

所見 平面形は上場、坑底とも整然としているため、当初は単独の炉穴と捉えた。しかし土層堆積から最低2基の重複と捉えることとした。3~6層の堆積に関わる炉穴が想定され、埋没後に1~2層に関わる炉穴が営まれ自然堆積したと考えたい。

F039

遺構 J7-89-3gにて検出された。長軸1.56m×短軸1.05m×深さ0.34m、方位はN-15°-Eを示し、平面は達磨状である。火床は1カ所、覆土は暗褐色土の自然堆積である。

遺物 遺物は少ない。1は口唇がやや尖り、口縁部内外とも横位の貝殻条痕文である。2は外面は斜位、内面は不定方向の貝殻条痕文を施す。

所見 平面形及び覆土等から単独の炉穴である。

F040

遺構 J7-89-2gにて検出された。長軸・短軸共に0.59m、深さ0.07mの、平面は円形となる浅く小さな炉穴である。1層にて焼土を混入する。遺物はほとんど出土しなかった。

所見 小さな火床が2カ所検出されているが、他の炉穴に比べて極めて極めて小規模な火床である。新旧関係は不明であるが、規模などから時間的な前後はないのではないかと想定されるものである。

F041

遺構 J7-80-4g、J7-90-2gにて検出された。火床2カ所であり、それに伴う土坑をそれぞれ有している。火床aの炉穴は長軸1.16m×短軸1.10m×深さ0.26m、方位はN-46°-Eを示しており、平面は楕円形である。火床bの炉穴は長軸・短軸共に1.02m、深さ0.34mの歪んだ円形であった。それぞれの炉穴の覆土は、褐色土を主体とした自然堆積である。覆土の堆積状況は、火床aが自然堆積した後に、火床bにより掘り返されていることを示している。

遺物 出土土器片はやや多く、しかも類似片が多かった。1は外面は斜位の不定方向、内面は斜位の貝殻条痕文である。2~5は同一個体かもしれない類似片で、外面に擦痕があり、内面は無文となっている。1は口唇に刻み目、2はやはり口唇に山形状の刻み目が施されている。

所見 本炉穴は覆土堆積より、b炉穴の埋没後にa炉穴が営まれていることが捉えられる。しかし炉穴間の平坦面が覆土ではb炉穴に属するが、平面形や方位からどちらにも属さないことが窺われる。火床が炉穴a・bによって失われた可能性とともに、もう1基つくられていたかもしれないことを指摘しておきたい。なお、本炉穴a・bについては中場等で分離が可能であったので、別個に計測している。

F042a

遺構 K7-81-2g、K7-82-1gにて検出された。長軸2.46m×短軸0.94m×深さ0.10m、方位はN-78°-Wを示し、平面は不整形の炉穴である。火床は2カ所検出し、それぞれに伴う土坑が確認されている。覆土はそれぞれ褐色土を主体とする。

遺物 20片程出土し、土師器片の混入も若干認める。1は擦痕のついた土器である。

所見 覆土から火床bの埋没後(3層)、火床a(1層)が営まれている。

F042b

遺構 K7-81-2gにて検出された。長軸1.10m×短軸0.72m×深さ0.14m、方位はN-35°-Eを示し、平面は歪んだ楕円形。火床は1カ所。覆土は暗褐色土と褐色土の自然堆積である。出土遺物はなかった。

所見 形状・火床・覆土等から単独の炉穴である。

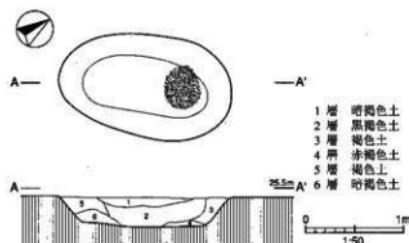


図15 F038

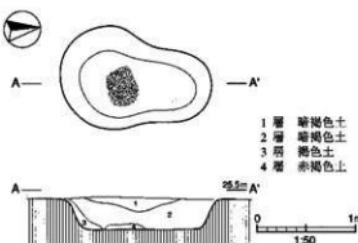


図16 F039

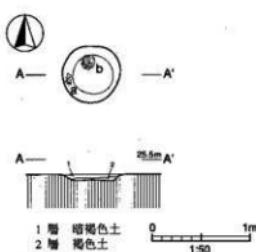


図17 F040

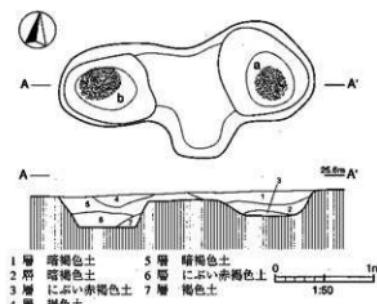


図18 F041

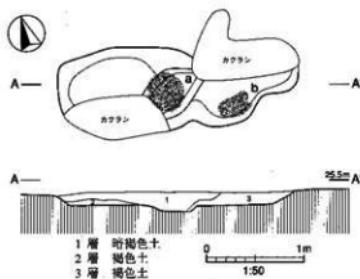


図19 F042a

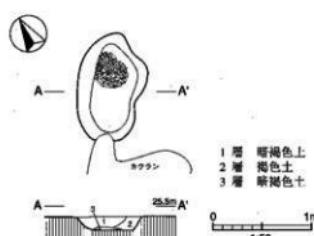
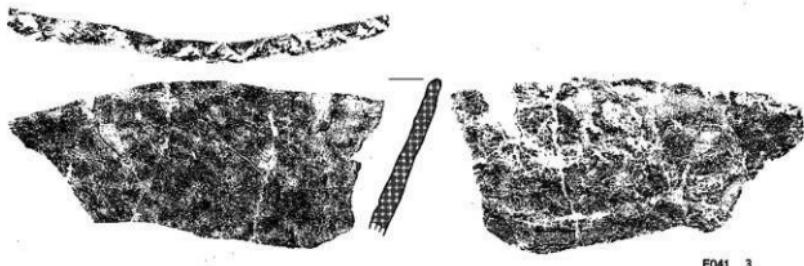
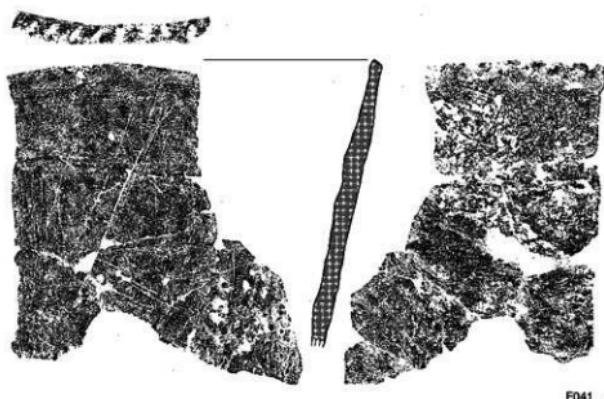


図20 F042b



0 10cm
1:3

图21 F039·F041·F042a

F043

遺構 K7-81-2g、K7-82-1gで検出し、長軸1.59m×短軸1.38m×深さ0.16m、方位はN-36°-Wを示す。平面形は長方形が直角に交わるような不整形である。火床は1カ所検出され、覆土は褐色土を人為的に投入したような堆積であった。

遺物 小片が多い。1は内外面共に斜位の貝殻条痕文を施文する、底部付近の土器片である。

所見 火床らしきものが覆土中に確認されており、平面形からも2基の重複が想定される。

F044

K7-81-1gで検出。長軸1.08m×短軸不明×深さ0.28m、方位はN-28°-Wを示す。平面形は橢円と想定される。覆土は褐色土を主体とし、坑底は北東側に傾斜する。遺物は極めて少ない。

F045

K8-43-3gで検出。長軸2.06m×短軸1.07m×深さ0.38m、方位はN-80°-Wを示す。平面形は隅丸長方形である。火床は1カ所検出し、覆土は暗褐色土を主体とする。遺物は極めて少ない。

F046

K8-3-2gにて検出された。長軸1.20m×短軸1.00m×深さ0.08m、方位はN-70°-Eを示す。平面形は卵形である。火床は1カ所検出された。出土遺物はなかった。極めて浅い掘り込みであり、火床の状態から使用時間は短いと想定する。

F047

遺構 K8-22-4gにて検出し、長軸(2.80)m×短軸(1.42)m×深さ0.09m、方位はN-70°-Eを示す。平面形は長楕円形である。火床は2カ所検出し、火床a脇にテラス状の段差がある。

遺物 火床aに集中し、2・3は波状口縁で、内外面とも横位、縦位の貝殻条痕文が施文される。

所見 新旧関係は覆土等から火床aが古く火床bが新しいが、もう1基炉穴の存在が推定できる。

F048

遺構 K8-13-2g、K8-14-1gで検出。長軸2.14m×短軸0.80m×深さ0.22m、方位はN-41°-Eを示す。平面形は不整形である。火床は2カ所検出した。覆土は暗褐色土を主体とする。

遺物 遺物は少ない。1は波状口縁で口唇部に棒状工具による刻み目を施す。貝殻条痕文は内外面とも縦から斜位を基本としている。

所見 覆土は、重複のためか複雑な堆積である。火床の新旧関係は、火床bが古く、火床aが新しいと捉えられた。

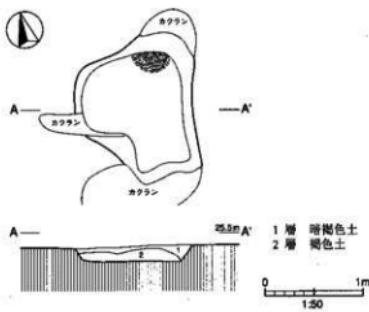


図22 F043

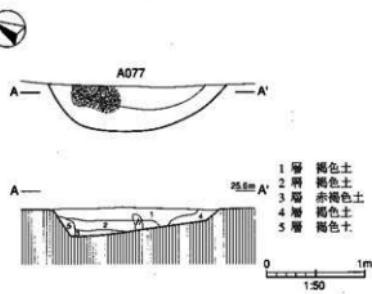


図23 F044

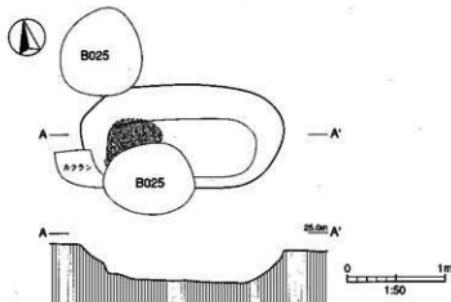


図24 F045

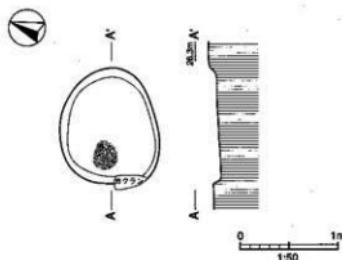


図25 F046

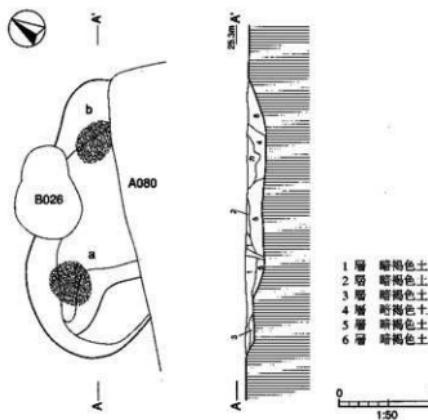


図26 F047

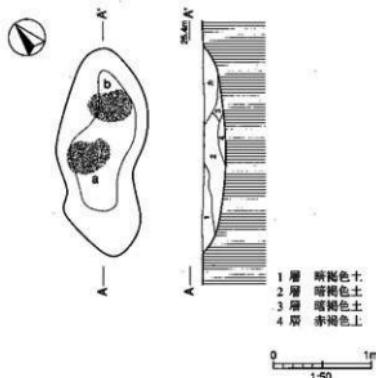


図27 F048

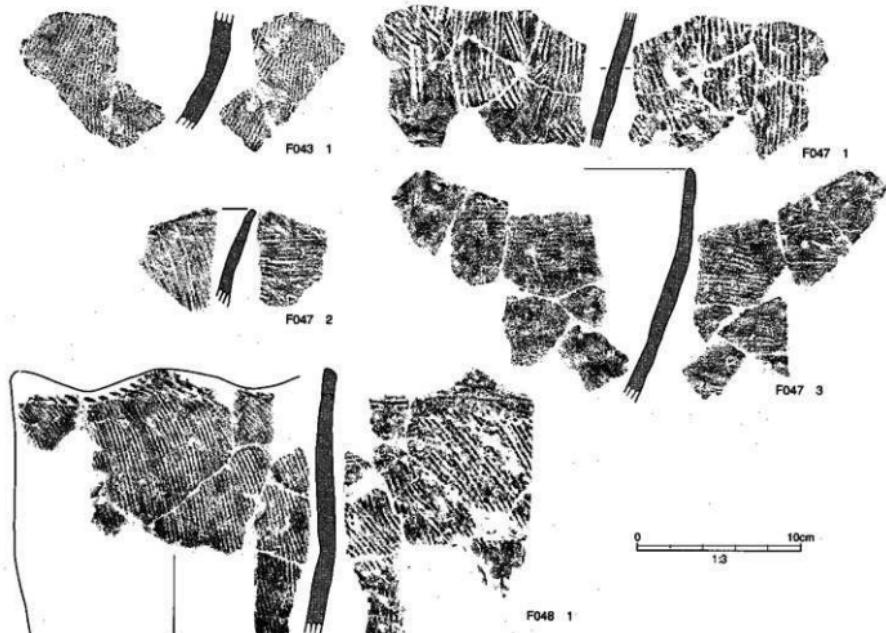


図28 F043・F047・F048

F049

K8-3-4gで検出。長軸2.06m×短軸1.50m×深さ0.25m、方位はN-26°-Eを示す。平面形は卵形である。火床を2カ所検出した。極めて良好な火床である。遺物は極めて少ない。

F050

遺構 K8-4-3g, K8-14-1gにて検出し、長軸2.07m×短軸1.36m×深さ0.29m、方位はN-63°-Wを示す。平面形は隅丸長方形である。坑底は火床にむけ、緩く傾斜する。覆土は暗褐色土を主体としている。

遺物 遺物は少量であった。1は口縁を指頭によるナデ、口縁部以下は斜位の貝殻条痕文、内面は横の貝殻条痕文を施文する。2は内外面とも口縁部は指頭によるナデであり、無文部が多いが、浅い貝殻条痕文が下位に施文されるものである。

所見 炉穴より後に浅い土坑が設けられていたが、火床は1カ所認められた。

F051

K8-14-3gにて検出し、長軸1.20m×短軸0.67m×深さ0.11m、方位はN-77°-Eを示し、平面形は不整形となっている。遺物は極めて少ない。全体的に凹み状となっている炉穴である。

F052

K8-33-3gにて検出し、長軸1.52m×短軸1.38m×深さ0.17m、方位はN-57°-Eを示し、平面形は隅丸方形である。覆土は暗褐色土を主体とし、遺物は極めて少ない。火床はやや赤色化していた。

F053

K8-23-4gにて検出し、長軸1.51m×短軸不明×深さ0.12m、方位はN-50°-Eを示し、平面形は隅丸方形と思われる。火床は1カ所検出された。遺物は極めて少ない。

F054

K8-23-4gで検出。長軸(1.96)m×短軸1.16m×深さ0.14m、方位はN-16°-Wを示す。平面形は不整形である。火床は2ヶ所検出された。遺物は極めて少ない。2基の炉穴の重複である。

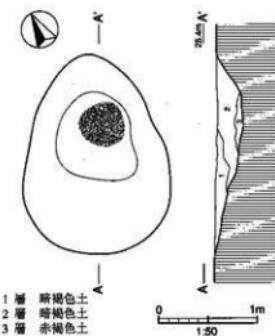


図29 F049

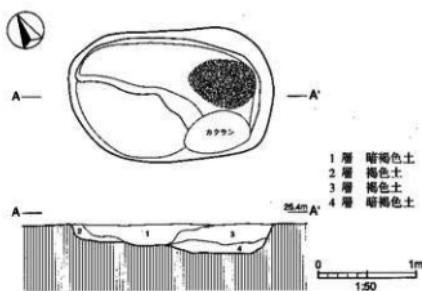


図30 F050

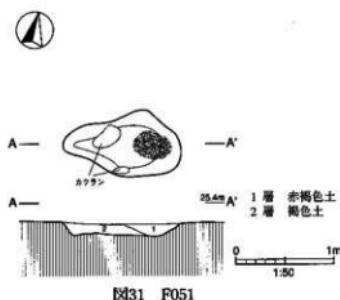


図31 F051

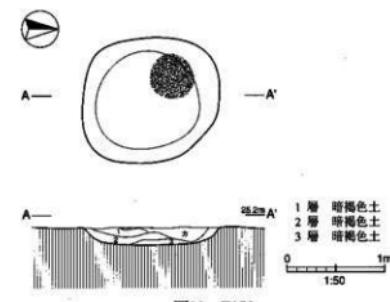


図32 F052

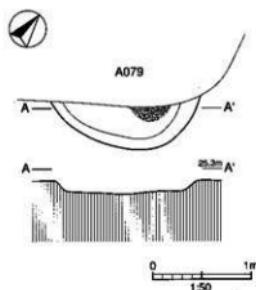


図33 F053

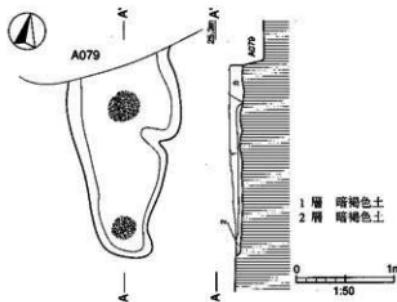


図34 F054

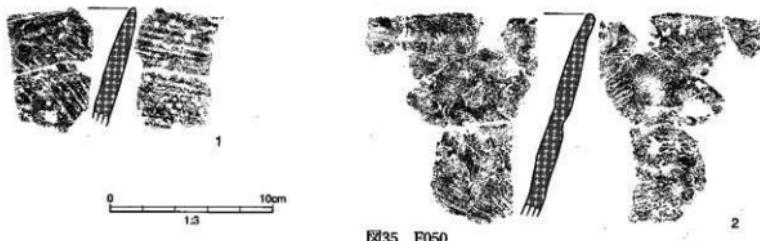


図35 F050

F055

遺構 K8-23-2g、K8-24-1gにて検出。長軸(1.94)m×短軸1.80m×深さ0.09m、方位はN-68°-Eを示す。平面形は歪んだ隅丸方形である。火床は3ヶ所検出された。覆土は褐色土と暗褐色土であるが、いくども掘り返されており、複雑な堆積となっている。遺物は極めて少ない。

所見 火床の新旧関係は、火床aが古く、火床bが新しいが、火床cの新旧関係は不明である。

F056

遺構 K8-32-4gにて検出。長軸1.30m×短軸(0.60)m×深さ0.16m、方位はN-88°-Eを示す。平面形は歪んだ長楕円形である。火床は2ヶ所検出された。覆土は褐色土を主体としている。

遺物 極めて少ない。1は口唇はナデ、以下は斜位の貝殻条痕文を施し、内面は全体として無文となっている。

所見 2基の炉穴の重複である。火床aが古く、火床bが新しいものである。

F057

J8-28-2g、J8-30-1gにて検出。他遺構との重複のため長軸は計測できず、短軸0.82m、深さ0.13mである。方位は不明である。火床は1ヶ所検出されている。覆土はにぶい赤褐色土と赤褐色土の堆積である。遺物は極めて少ない。

F058

J8-30-4gにて検出。長軸1.93m×短軸1.03m×深さ0.28m、方位はN-33°-Eを示す。平面形は長楕円形である。火床は1ヶ所検出された。覆土には、縁際から坑底にかけて褐色土が堆積する。遺物は極めて少ない。掘り込みのしっかりした炉穴である。

F059a

遺構 J8-19-3gにて検出。長軸1.73m×短軸1.03m×深さ0.26m、方位はN-41°-Eを示す。平面形は長方形である。火床は1ヶ所検出された。覆土は褐色土と暗褐色土の混合層を主体としているが、坑底層には褐色土が堆積しており、自然堆積に近い状態である。

遺物 極めて少ない。1は口唇をやや尖らせた口縁部片で、外面は斜位の、内面は横位の貝殻条痕文を施す。内面は粗く施文している。2~3は胴部片であり、2は外面斜位、内面はやや斜めに傾く綱の、3は内外面とも綱の粗い貝殻条痕文である。

所見 本火床は焼土ブロック状であった。なお、本来はF059aとF059bはそれぞれ単独の炉穴と考えられ、擾乱によって重複しているように見えたものである。

F059b

遺構 J8-19-3gにて検出。長軸1.60m×短軸1.06m×深さ0.20m、方位はN-50°-Wを示す。平面形は長楕円である。火床は1ヶ所検出されている。覆土はF059bと同様であった。

遺物 極めて少ない。

所見 火床はソフトロームが焼けたような状態であった。

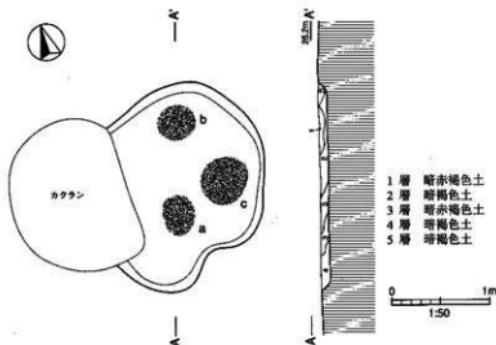


図36 F055

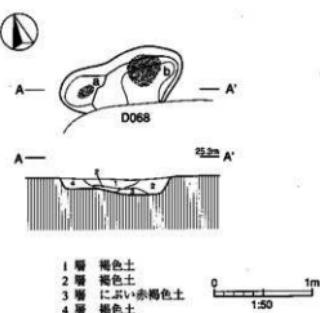


図37 F056

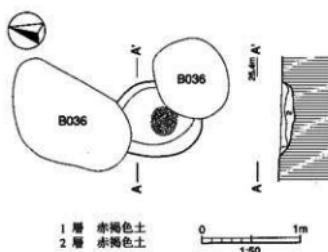


図38 F057

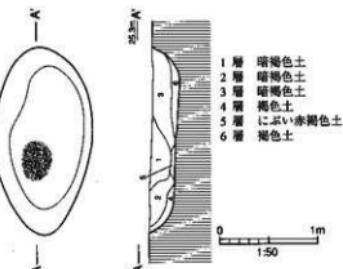


図39 F058

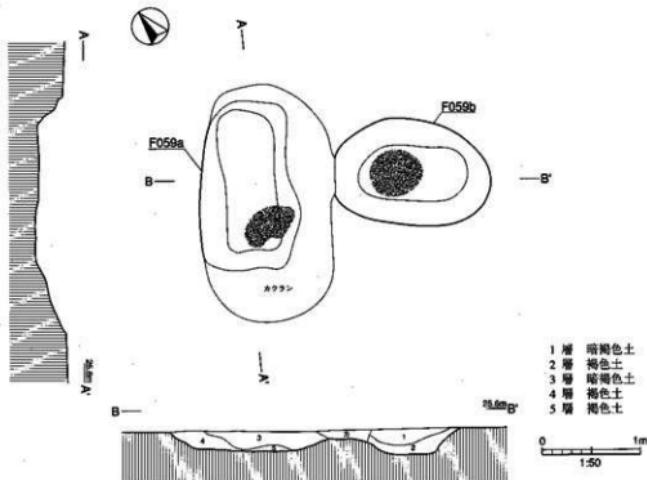


図40 F059

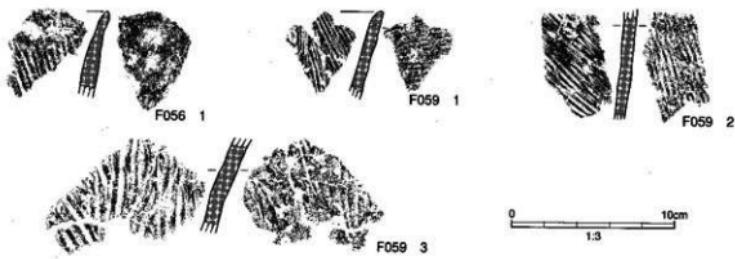


図41 F056・F059

F060

J8-20-3gにて検出。長軸2.63m×短軸1.34m×深さ0.16m、方位はN-53°-Wを示している。平面形はやや歪な長椭円形である。明瞭な火床が1カ所検出された。覆土中に火床らしき焼土が2カ所認められ、最低2基の炉穴の重複と考えられる。遺物は少なかった。

F061

遺構 J8-30-2gにて検出。長軸1.45m×短軸0.87m×深さ0.12m、方位はN-44°-Wを示している。平面形は椭円形である。火床は2カ所検出したが、赤化がうすく不明瞭である。

遺物 遺物は少ない。1は2本1組の微隆帯を交差して区画するもの。区画内に沈線を施す。内面は斜位の貝殻条痕文である。

所見 火床の新旧関係は火床bが古く、火床aが新しいと捉えた。

F062

J8-20-2gにて検出。他の遺構との重複と攪乱のため、長軸・短軸・方位は計測できず、深さは約0.20mであった。平面形も不整形とした。遺物は少ない。本来は、それぞれ火床を有した2基の炉穴の重複であるが、攪乱のため新旧関係を捉えることはできなかった。

F063

J8-20-2gにて検出。長軸(1.10)m×短軸0.73m×深さ0.19m、方位はN-86°-Eを示す。平面形は椭円形である。火床は1カ所検出された。覆土は重複のためやや複雑に堆積している。最低2基の重複であり、1～2層は別個の炉穴の覆土である。遺物は少ない。

F064

遺構 J8-18-2gにて検出。長軸3.73m×短軸1.56m×深さ0.32m、方位はN-19°-Eを示す。平面形は重複のため不整形となる。火床は3カ所検出された。覆土は褐色土を主体とする。

遺物 出土量は多くはない。1は沈線により口縁部と胴部文様帯が区画されるものである。

所見 最低3基の炉穴の重複である。新旧関係は火床cが最も古いとしか捉えられなかつた。

F065

J8-8-2gにて検出。それぞれ長椭円形である。aは長軸(1.07)m×短軸0.57m×深さ0.09m、方位はN-59°-Eを示し、bは長軸(1.18)m×短軸0.67m×深さ0.19m、方位はN-42°-Wを示している。

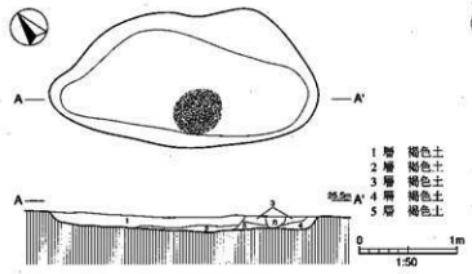


図42 F060

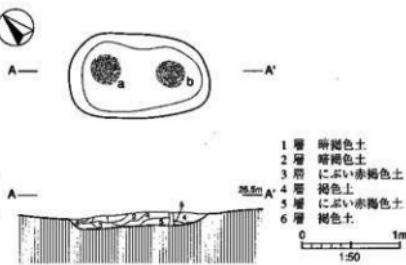


図43 F061

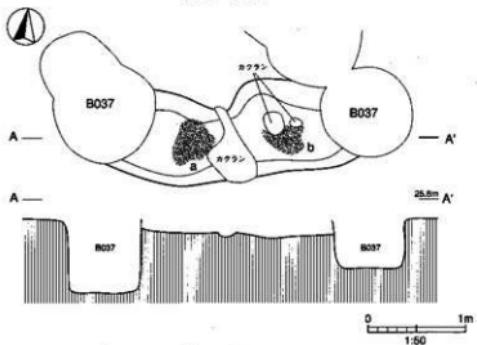


図44 F062

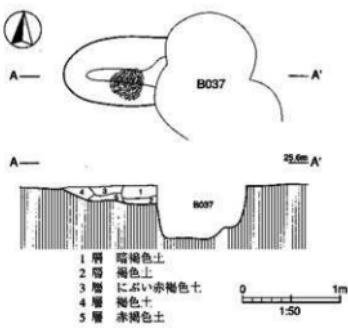


図45 F063

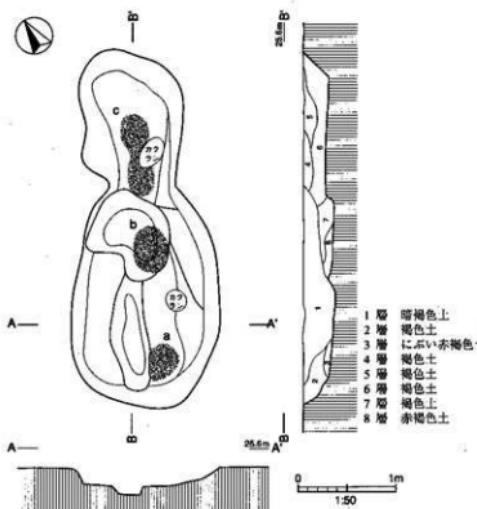


図46 F064

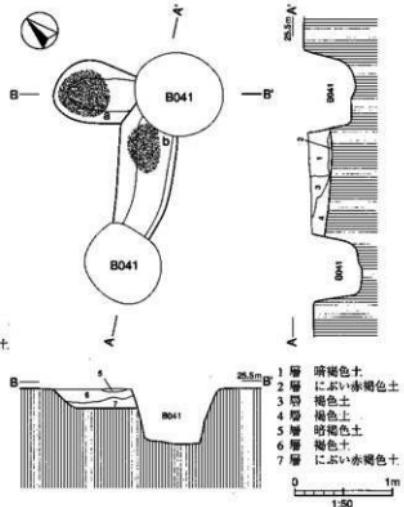


図47 F065

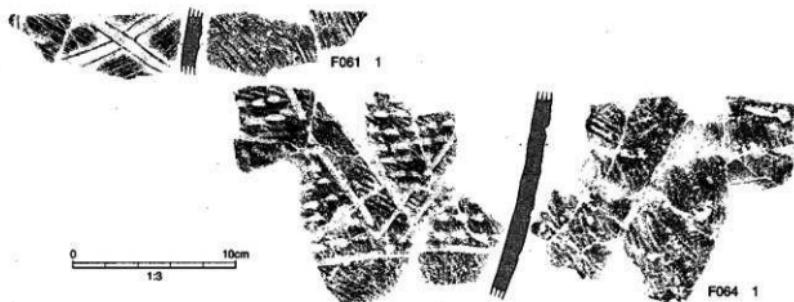


図48 F061・F064

F066

J7-99-1gにて検出。長軸1.12m×短軸1.04m×深さ0.12m、方位はN-83°-Eを示す。平面形は円形である。火床は1ヶ所検出されている。火床の周囲には2ヶ所、凹みが認められた。覆土はにぶい赤褐色土が主体である。赤褐色土の堆積が複雑であり、時間経過が少ない状態で数度の使用が窺われるを考えられるが、火床はブロック状にうすく焼土化しているだけであった。遺物は極めて少ない。

F067

遺構 K8-11-3g、J8-20-4gにて検出。2基の炉穴であるが、攪乱があるため重複関係は不明である。aは長軸1.64m×短軸0.98m×深さ0.11m、方位はN-9°-Wを示し、梢円形である。bは長軸(1.16)m×短軸1.32m×深さ0.11m、方位N-10°-Eを示し、隅丸方形であろう。何れも浅い凹み状であり、火床はごくうすく焼土化しているだけであった。

遺物 それぞれの炉穴とも遺物は少ない。1は口唇がやや尖る口縁部片で、内外面とも擦痕状のものである。2は外面は継に、内面は交差する斜位に貝殻条痕文が施されている。

所見 F067 aの火床の位置が坑底のほぼ中央に位置している。炉穴の火床はほとんど壁際が多く、a坑の平面形も火床付近でややくびれていることから、2基の炉穴を想定できるかもしれない。また、F067 bにおいての覆土は褐色土を主体とするが、ややその堆積が自然堆積と思えないものがある。火床、平面形とともに1基の炉穴を示していると考えられるが、もしかしたら複数の炉穴が想定できるかもしれない。

F068

K8-11-3gにて検出。長軸2.37m×短軸1.22m×深さ0.29m、方位はN-25°-Wを示している。平面形は長梢円形である。火床は1ヶ所検出された。坑底に赤褐色土が人為的に堆積した後、褐色土が自然堆積した炉穴である。平面形や覆土等からみると、単独の炉穴である。遺物は少ない。

F069

K8-11-4g、K8-21-2gにて検出。長軸0.92m×短軸0.75m×深さ0.23m、方位はN-25°-Wを示す。平面形はほぼ円形である。火床は1ヶ所検出された。覆土は一度掘り返されたような人為的堆積を窺わせるが、基本的には1基の炉穴である。出土遺物は少ない。

F070

K8-1-2g、K8-2-1gにて検出。長軸0.94m×短軸0.58m×深さ0.08m、方位はN-7°-Wを示す。平面形は梢円形である。火床は1ヶ所検出された。覆土は褐色土が主体であったが、とくに壁際の褐色土上にはそれに乗るように赤褐色土が堆積していた。また、火床の南東壁際に若干の焼土が認められた。平面形や覆土等から単独の炉穴である。遺物の出土はなかった。

F071

遺構 K8-2-Igにて検出。長軸(1.57)m×短軸1.10m×深さ0.17m、方位はN-86°-Wを示す。平面形は長楕円形である。火床は1ヶ所検出した。その火床もわずかに焼けている程度であった。火床や平面形・覆土等から単独の炉穴と思われる。遺物は少ない。

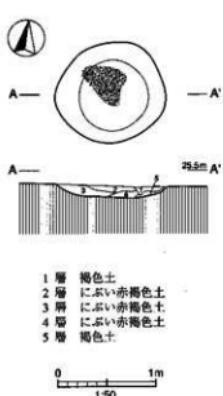


図49 F066

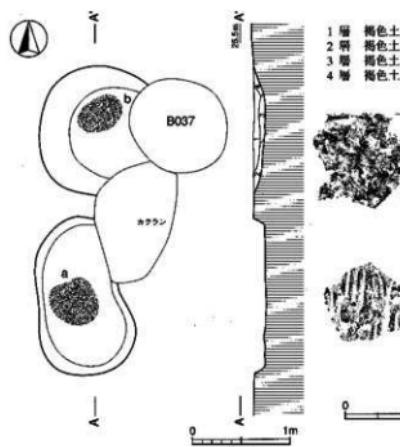


図50 F067

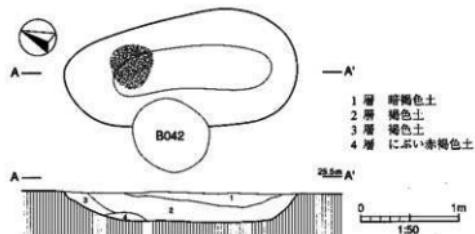


図51 F068

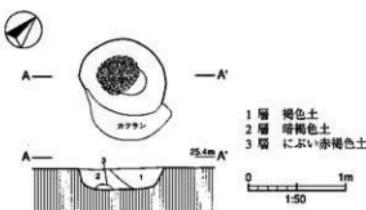


図52 F069

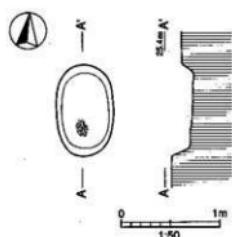


図53 F070

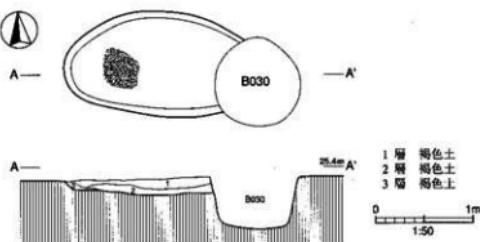


図54 F071

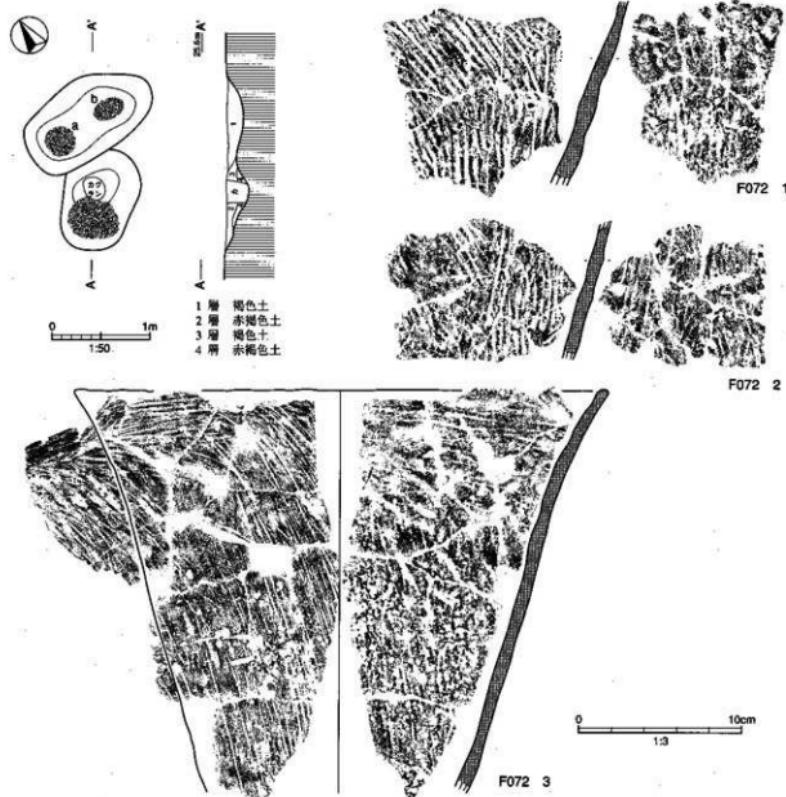


図55 F072

F072

遺構 J8-20-3gにて検出。a坑とb坑の重複である。a坑は長軸1.40m×短軸0.79m×深さ0.16mで、方位はN-90°-Eを示す。平面形は楕円である。火床は2ヶ所検出されたが、各火床とも坑底の中央に位置する。覆土は褐色土の自然堆積である。b坑は長軸1.08m×短軸0.73m×深さ0.23m、方位はN-54°-Eを示す。平面形は隅丸方形である。火床は1ヶ所検出された。

遺物 いずれの炉穴も多くはないが、a坑の火床a付近に多かった。図はいずれもa火床付近出土である。1から2は外表面ともに縦、斜位の貝殻条痕文を施文する。また、3は口縁～胴中位を残す推定口径33.3cm、遺存高25.3cmの大形接合片である。外面口縁部は横位、それ以下は斜位の、内面は口縁部は横位、以下は縦の貝殻条痕文を施している。

所見 新旧関係はF072 bが自然堆積した後に、F072 aが営まれているが、a坑内の火床aと火床bの新旧関係は不明である。

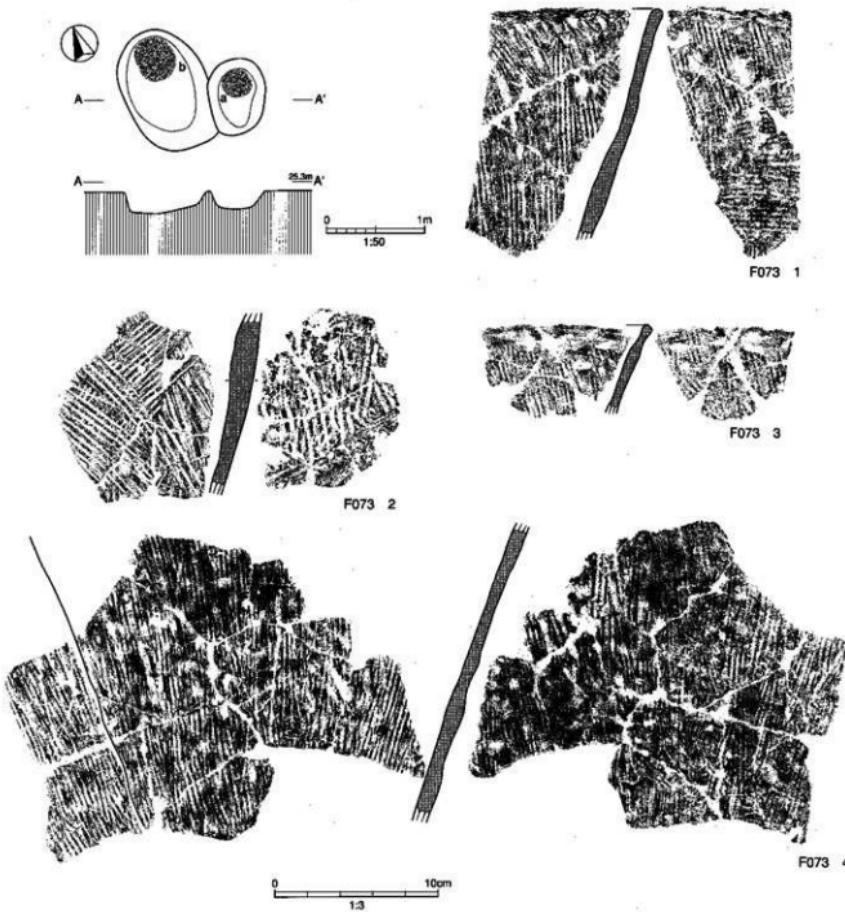


図56 F073

F073

遺構 K8-14-4gにて検出。a坑とb坑の重複である。平面形はそれぞれ隅丸長方形である。a坑は、長軸0.82m×短軸0.57m×深さ0.20m、方位はN-28°-Eを示す。火床は1ヶ所検出されたが、北壁際に赤褐色土が堆積しており、その上に褐色土が自然堆積している。b坑は、長軸1.32m×短軸0.87m×深さ0.22m、方位はN-8°-Wを示す。火床は1ヶ所検出された。

遺物 a坑の火床付近に多く出土している。1から4はa坑の出土である。何れも貝殻条痕文を施し、内外面とも縦位を基本としているが、2の内面は斜位に施文している。

所見 覆土は複雑な堆積であったが、火床・平面形からそれぞれ単独の炉穴と捉えることとした。

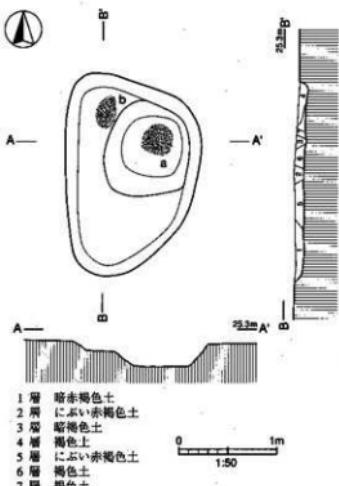


図57 F074

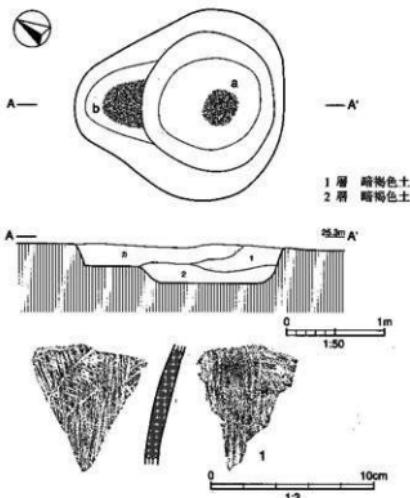


図58 F075

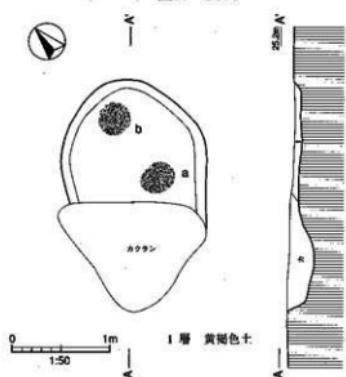


図59 F076

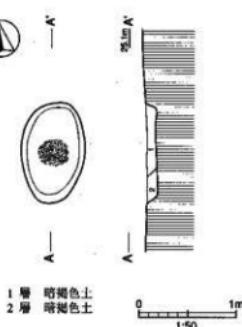


図60 F077

F074

遺構 K8-14-3・4gにて検出。長軸2.00m×短軸1.41m×深さ0.25m、方位はN-20°-Eを示す。最低2基の重複であるため、平面形は台形状である。火床は2ヶ所検出された。火床aは火床bに伴う坑底からさらに掘り込まれたピットの坑底に営まれており、火床位置は坑底のほぼ中央であった。主たる坑に伴う火床bは、深さは0.08mと浅く、凹み状の炉穴である。覆土は火床bのものを捉えたが、赤褐色土と褐色土の複雑な堆積であり、自然堆積というより人為的な堆積をみせている。

遺物 出土遺物は少量であり、図示できるものはなかった。

所 見 覆土セクションでは火床 a・b のそれぞれを捉えることができなかつたため、新旧関係は不明となっている。また、火床 b に対する赤褐色土の堆積状況が複雑であることから、炉穴の坑や火床としては残らなかつたが、いくどかの掘り返しがあつたことが想定できるものである。

F075

遺 構 K8-26-2・4g、K8-27-1・3gにて検出された。長軸2.14m×短軸1.98m×深さ0.40m、方位はN-34°-Wを示す。重複した炉穴であり、平面形は角のとれた三角形状である。擾乱を被るため、火床 a の覆土しか判明しないが、暗褐色土と明褐色土が自然堆積している。火床 a に伴う坑はほぼ円形と思われる。火床 b は擾乱のため覆土も不明だが、平面形は梢円形と捉えられ、火床は赤化するまでにはいたっていない。

遺 物 本地区的炉穴としては、遺物の出土が比較的多い遺構である。1は外面は貝殻条痕文を縦に施した後、2本の沈線を斜行させ、三角状に区画するものである。内面は縱及びやや傾斜のある横の貝殻条痕文を粗く施している。

所 見 擬乱のために火床 b に伴う坑の平面形はやや不明瞭であり、火床のみが残っていたと言えよう。そして覆土の喪失のため火床 a と火床 b の新旧関係は、覆土からは確認できなかつた。しかし火床 b が火床 a の坑によってその南側を失っていることから、火床 a が新しい炉穴と捉えることが可能であろう。

F076

遺 構 K8-27-3gにて検出。長軸(1.27)m×短軸1.50m×深さ0.08m、方位はN-43°-Eを示す。擾乱のため南側が失われた炉穴であるが、平面形は梢円形と考えられる。浅く凹み状の炉穴であった。火床は2ヶ所検出された。それぞれ火床はうっすらと赤化する程度であった。覆土は黄褐色土の自然堆積である。

遺 物 出土した遺物は土器片11点であり、上谷遺跡の炉穴としてはやや多いほうである。しかし、撲糸文と貝殻条痕文が混在していることを指摘しておきたい。

所 見 覆土の状況からは、火床の新旧関係は捉えられなかつた。いずれの火床もうっすらと赤化する程度の炉穴であり、平面形からも単独の炉穴かも知れない。単独の炉穴の場合、火床が2ヶ所に分かれているということは、時間差があまりない段階での火の再使用からくると想定されるものである。

F077

遺 構 K8-37-2gにて検出。長軸1.02m×短軸0.66m×深さ0.11m、方位はN-12°-Eを示している。平面形は、南側が膨らむ歪んだ長梢円形である。火床は1ヶ所検出され、うっすらと赤化している。浅い炉穴であるが、壁は急に立ち上がり、凹み状というわけではない。覆土は褐色土を主体とする自然堆積である。

遺 物 土器片は10片の出土であるが、撲糸文と貝殻条痕文が混在している。

所 見 平面形・火床・覆土の状況から、単独の炉穴と捉えられる。覆土は坑底に最初に褐色土が、つぎに赤褐色土の堆積が認められる。それは坑を掘った後に、褐色土を充填しているような感をあたえる覆土堆積の仕方である。

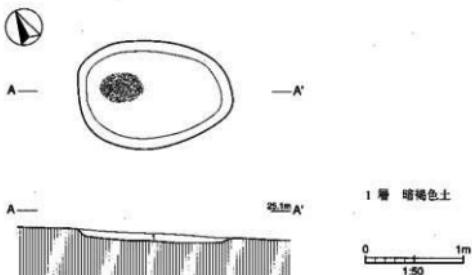


図61 F078

F078

遺構 K8-37-1・2gにて検出。長軸1.57m×短軸1.12m×深さ0.07m、方位はN-46°-Eを示す。平面形はやや歪んだ楕円形である。火床は1ヶ所検出されたが、うっすらと赤い程度であった。掘り込みは深い炉穴であるが、壁の立ち上がりは急である。また、坑底はいくぶん凹凸があるものの、ほぼ平坦である。覆土は暗褐色土を主体とする自然堆積である。

遺物 土器片が6点のみ出土しただけであり、撚糸文と貝殻条痕文が混在して出土している。

所見 火床の赤化の弱さ等から、長期間の使用は想定しづらい炉穴である。平面形や火床から、単独の炉穴と捉えることができよう。

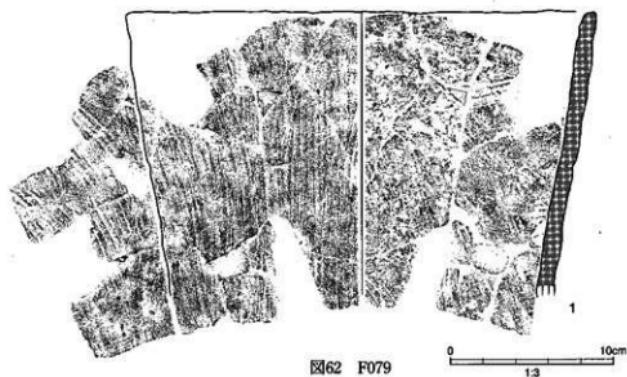
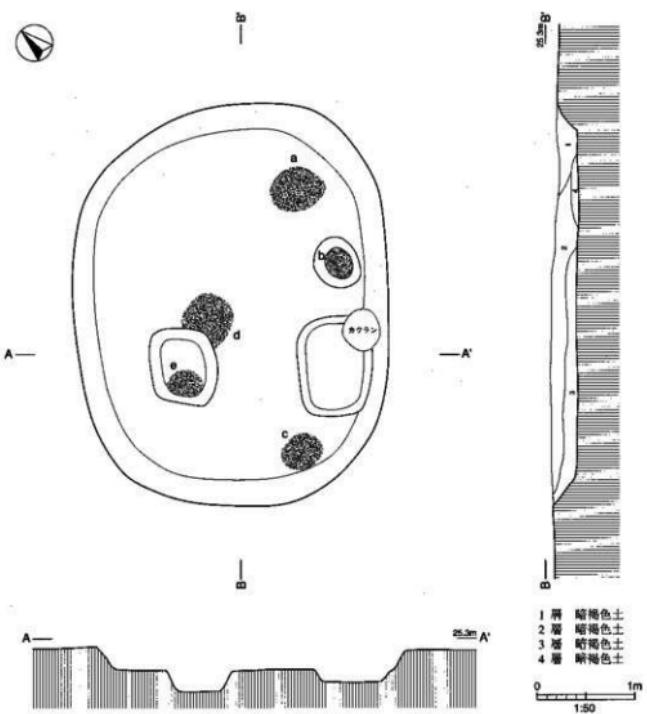
F079

遺構 K8-15-4g、16-3g、25-2g、26-1gにわたって検出された、本坑としては大型の炉穴である。長軸1.41m×短軸3.23m×深さ0.22m、方位はN-46°-Eを示すものである。平面形は隅丸方形であり、一見、竪穴住居跡を思わせる規模である。坑底は全体的に平坦であり、さらに掘り下げて3基のピットが検出されている。これは主たる坑の底を、さらに0.20～0.25m程掘り下げているものであり、このうち2基は火床を有している。火床は5ヶ所検出された。火床a・b・dは真っ赤に赤化し、火床c・eはうっすらと赤化するのみである。覆土は暗褐色土を主体としている。覆土からは新旧関係は明瞭に捉えられなかった。なお、火床をもたないピットにおいても、図示はできなかったが火床らしきものが認められている。

遺物 出土した土器片は、4：6の割合で撚糸文と貝殻条痕文が混在している。1は推定口径28.8cm、遺存高17.6cmの、口縁部～胴部中位の接合片である。口唇は平坦であり、すっと立ち上がる彎曲の少ない土器である。外面は継の、内面は粗く斜位の貝殻条痕文を施している。器厚は1.0cm前後であり、全体に均一にはならず、断面は凹凸が著しい土器である。

所見 全ての火床についての新旧関係は、覆土では捉えられなかった。しかし火床dとeについては、新旧関係を火床平面図からみて、火床eの坑が火床dの西側を一部消失させていることから、火床eが新しいと捉えることができよう。

本遺構は、極めて大型の炉穴となっている。重複しているにもかかわらず、単純な平面形をもつ炉穴である。しかも火床a・c・dは同じ平坦な坑底に営まれているが、火床の状態等からみると、順次、炉穴が営まれたと考えるのが妥当である。おそらくこのような隅丸方形となったのは、炉穴基数の多さと、壁の崩壊などによるものと考えられるものである。また、火床をもたないピットにおいても火床らしきものが調査において確認されているため、7基の炉穴の重複であった可能性があろう。



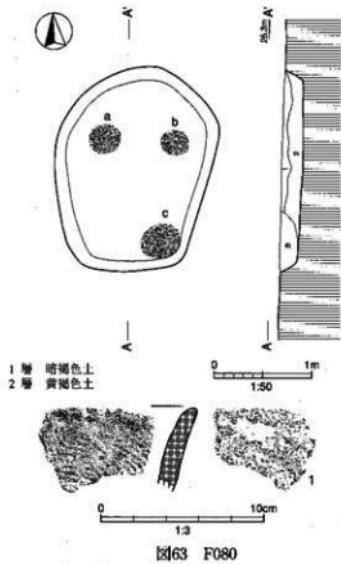


図63 F080

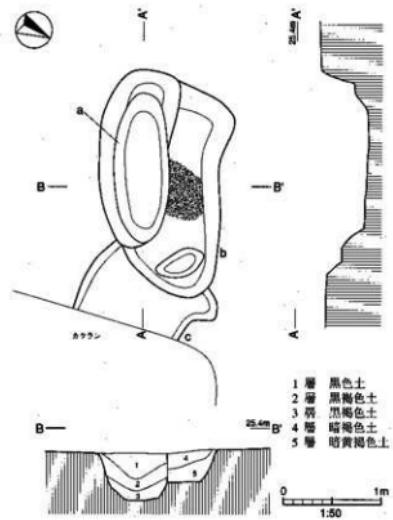


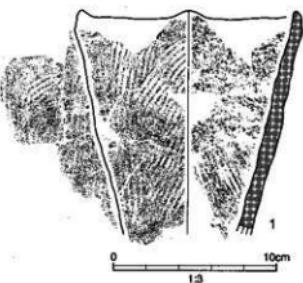
図64 F081

F080

遺構 K8-25-2・4gにて検出。長軸2.12m×短軸1.62m×深さ0.12m、方位はN-14°-Eを示す。平面形は角のとれた五角形である。火床は3ヵ所検出された。火床a・bは赤みを帯びる程度であり、cは真っ赤に赤化していた。壁の立ち上がりは急であった。覆土は自然堆積である。

遺物 貝殻条痕文の出土は多かったが、図示できるものは少なかった。1はやや外反する口縁部に、外面は斜位の貝殻条痕文を施している。内面は無文で、内外面とも磨耗が著しいものである。

所見 覆土からは、火床の新旧関係を捉えることができなかつた。火床の状態より、火床cがもっとも長期にわたって使用された炉穴と考えられる。

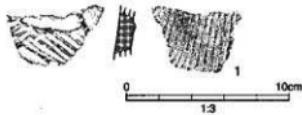
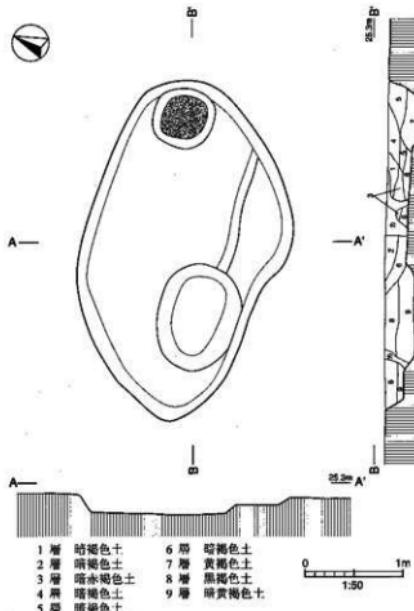
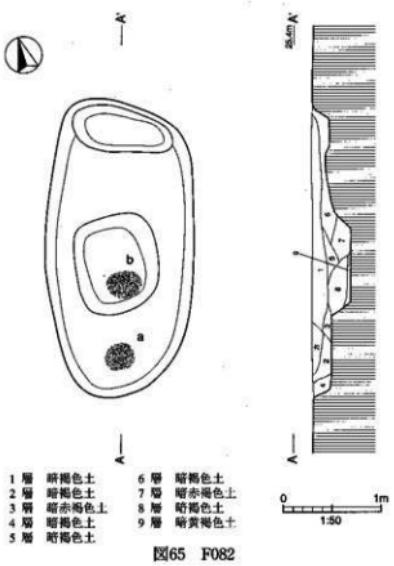


F081

遺構 K8-15-3g、K8-25-1gにて検出した。長軸2.20m×短軸1.22m×深さ0.30m、方位はN-66°-Eを示す。平面形は重複のため不整形である。火床は1ヵ所検出した。

遺物 全体に少ない。重複のためか、土師器片も混入している。1は口縁部～胴部下部で、小型の土器である。推定口径13.8cm、遺存高13.9cmであり、口縁は直交する4ヵ所に小さな山をもつ山形口縁である。内外面とも斜位の貝殻条痕文を施す。

所見 他の遺構と重複しており、やや不明瞭であるが単独の炉穴と考えられる。

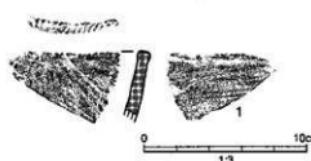


F082

遺構 K8-25-4g、同26-2gで検出。長軸3.04m×短軸1.54m×深さ0.18m、方位はN-18°-Eを示している。平面形は長楕円形。火床は2ヵ所検出した。この他に火床らしきものが、覆土中に認められた。覆土は火床aは1～4層、火床bは5～9層だが、火床に直接伴う層は8～9層である。

遺物 燃糸文と貝殻条痕文が、半数混在する。1は微隆起線による区画のなかに、沈線を施すものである。

所見 火床の新旧関係は、覆土より火床aより火床bが古いものである。



F083

遺構 K8-36-1・2gにて検出された。長軸3.50m×短軸2.12m×深さ0.22m、方位はN-70°-Eを示す。平面形は菱形である。図示できた火床は1ヵ所である。火床はうすらと赤化するだけであった。

遺物 貝殻条痕文の出土が多い。1は口唇に刻み目をつけ、外面は斜位の、内面は横の貝殻条痕文を施すものである。

所見 火床としては1ヵ所しか検出できなかったが、覆土の堆積がいくども掘り返されていることや、火床に伴うと考えられる暗赤褐色土の3層の堆積等から、本遺構は3基以上の炉穴の重複と考えられる。

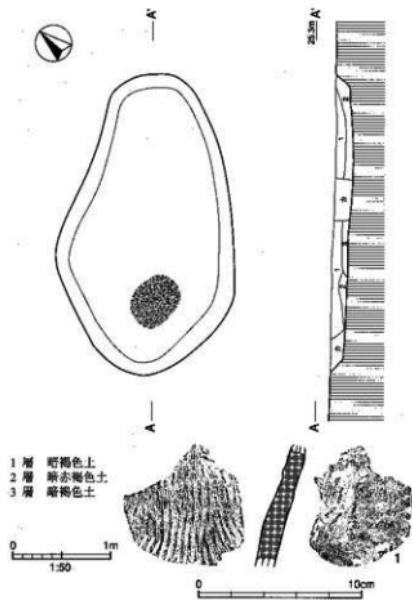


図67 F084

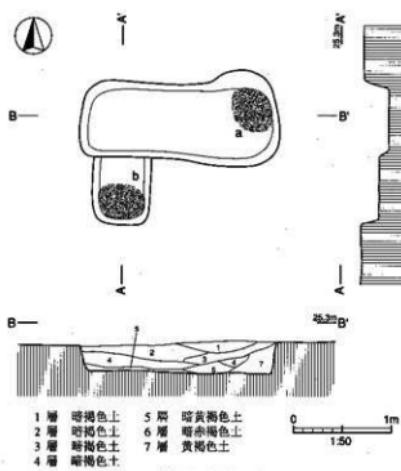


図68 F085

F084

遺構 K8-35-2gにて検出。長軸3.10m×短軸1.70m×深さ0.14mで、方位はN-47°Eを示す。平面形は歪な長楕円形である。火床は1カ所検出されたが、うっすらと赤化したものである。坑底はほぼ平坦であり、壁の立ち上がりは急である。覆土は暗褐色土を主体として、自然堆積であった。

遺物 出土遺物は多くはないが、撲糸文と貝殻条痕文が、ほぼ半数ずつ出土している。1は外面は縦の貝殻条痕文を施し、内面は無文の崩部片である。

所見 長軸が大きな、やや大型の炉穴である。規模から重複を考慮して調査を行ったが、平面形や火床、覆土から単独の炉穴となっている。

F085

遺構 K8-35-4gにて検出。長軸2.00m×短軸0.78m×深さ0.28mで、方位はN-90°Eを示す。2基が重複した炉穴で、長方形が直交したL字型である。火床はそれぞれ1カ所検出された。覆土は、F085a・bは暗褐色土を主体としたもので、交互に堆積しており、人為的な埋戻しを窺わせている。F085bの覆土は、不明となっている。

遺物 それぞれの炉穴とも出土遺物は少なく、撲糸文と貝殻条痕文が出土している。どちらかというと、やや貝殻条痕文土器片が多い炉穴である。

所見 直交するものであるが、各炉穴の新旧関係は捉えられなかった。

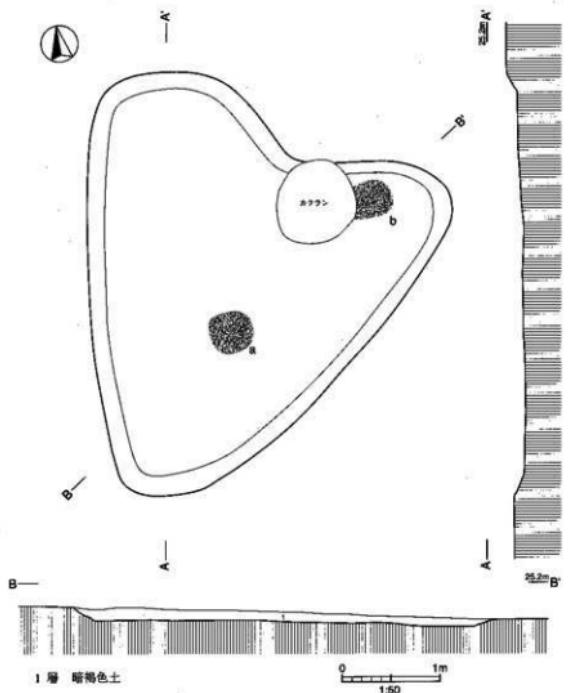
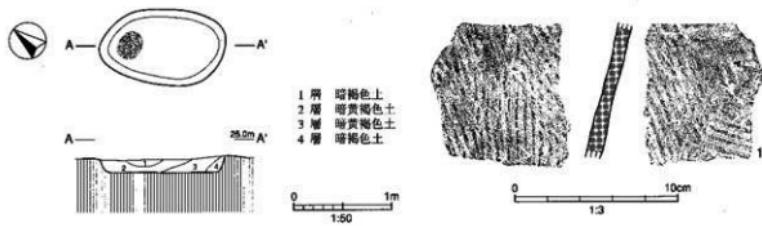


図69 F086



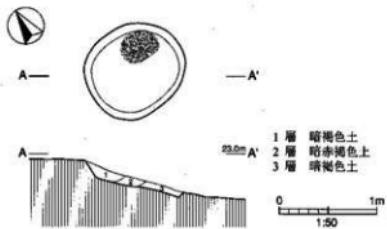


図71 F088

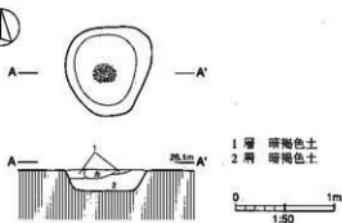


図72 F090

F088

K8-65-4gにて検出。長軸1.00m×短軸1.00m×深さ0.14m、方位はN-48°-Eを示す。平面形は不整な円形であり、火床は1カ所検出した。傾斜面に立地し、その地形に沿うように坑底は掘られている。覆土は暗褐色土を主体とする。傾斜する下側より堆積しており、堆積の状態は不自然である。遺物は、極めて少なかった。

平面形や火床、覆土等から、単独の炉穴と判断されるものである。

F090

K8-43-3gにて検出。長軸0.90m×短軸0.82m×深さ0.22m、方位はN-2°-Eを示す。平面形は丸味のある三角形状である。火床は1カ所検出され、うっすらと赤化している程度であった。覆土は暗褐色土を主体とした自然堆積であり、東壁側から流れ込んでいる。遺物は極めて少ない。

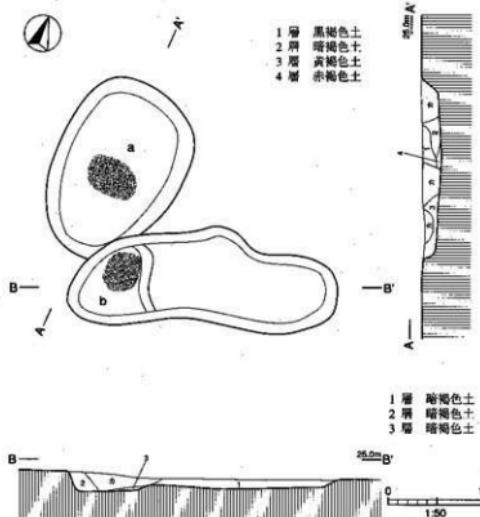
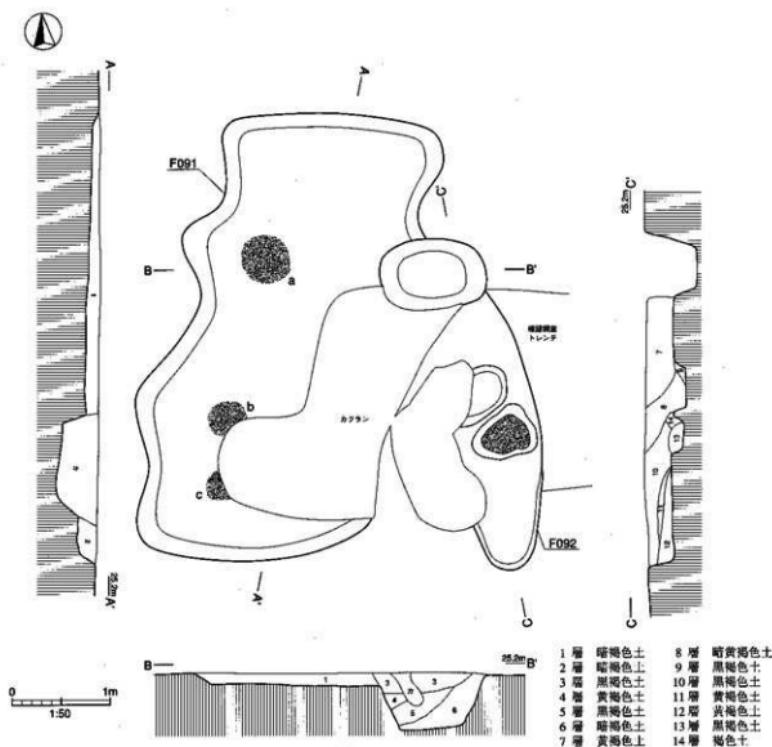


図73 F089

F089

遺構 K8-54-2gにて検出したが、2基の炉穴の複合である。F089aは、長軸1.90m×短軸1.30m×深さ0.16mで、方位N-3°-Eを示す。うっすらと赤化した火床が、1カ所検出された。覆土は、暗褐色土を主体としている。遺物は極めて少ない。平面形や火床等から、単独の炉穴と判断されるものである。F089bは、長軸2.60m×短軸1.00m×深さ0.20mで、方位N-78°-Eを示す。やはりうっすらと赤化した火床が、1カ所検出された。坑底は火床にむかって緩く傾斜し、火床部分にわずかながら凹みを認めた。覆土は、暗褐色土の自然堆積である。遺物は極めて少ない。

所見 残念ながらa・bをとおるセクションが実測できなかつたため、新旧関係は不明である。



F091

遺構 K8-42-2・4g、K8-43-1・3gにて検出。長軸4.20m×短軸(1.32)m×深さ0.10mで、方位はN-17°-Eを示す。平面形は重複した炉穴であるため、長方形状ながら括れをもつものである。火床は3ヵ所検出したが、いずれもうっすらと赤化する程度であった。覆土は火床に対して捉えられたが、暗褐色土1層として把握されたにとどまる。遺物は、土器の小片が多く、野島式を検出している。

所見 火床の新旧関係は捉えることはできなかった。しかし坑底平面の彎曲から、それぞれにピットを有していたことが窺えるものである。

F092

遺構 K8-43-3gにて検出。長軸(2.77)m×短軸は不明×深さ0.40m、方位はN-6°-Wを示す。擾乱が著しいが、平面形は長椭円と思われる。うっすらとした火床が、1ヵ所検出された。また、火床ピットの坑底には、いくぶん凹凸があった。覆土は、黄褐色土と黒褐色土を主体としている。遺物の出土はなかった。

所見 摆乱が多く、遺構確認面では検出しづらかった炉穴である。また、F091と重複するのかも不明であった。火床は1ヵ所であるが、覆土堆積から数基の重複と想定されるものである。

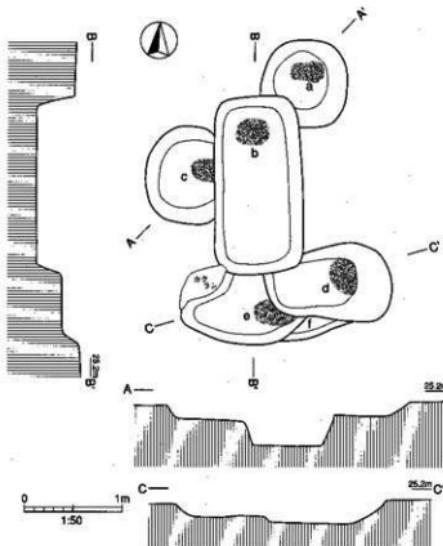


図75 F093

F093

K7-38-1・2gにわたって検出した。a～fの6基の炉穴の重複であった。明瞭に個別の炉穴として捉えられるものであり、本遺構については以下に炉穴単位で報告することとした。

F093a

長軸0.89m×短軸0.81m×深さ0.12mで、方位はN-88°-Eを示す。平面形は隅丸方形である。火床は1カ所検出し、その赤化は弱いものであった。

覆土は、褐色土と暗褐色土を主体とした、自然堆積であった。遺物は多く、とくにbとの重複部に多い傾向が窺われた。

なお、火床の赤化の弱さから、使用期間は長くない炉穴と想定されるものであった。

F093b

長軸1.83m×短軸0.93m×深さ0.44m、方位はN-6°-Wを示す。平面形は長方形である。強く赤化する火床を、1カ所検出した。火床側の北壁の一部も焼けている。坑底はハードロームであり、平坦である。覆土は褐色土を主体として、自然堆積したものである。遺物は炉穴としては極めて多く、とくにaとの重複部付近に集中していた。遺物は1・3～4を図示した。図示した遺物は、平面はaからの出土のように見えるものもあったが、その接合主体がb出土のため本遺構に伴うものと判断した。

F093c
長軸1.01m×短軸(0.69)m×深さ0.15m、方位はN-4°-Eを示す。平面形は隅丸方形である。赤化した火床を、1カ所検出した。坑底はソフトロームとハードロームの不整合面であったため、火床もやや捉えにくくなっていた。覆土は坑底の西壁側に褐色土が、その上に暗褐色土がのるように堆積した炉穴である。遺物は多く出土したが、図示できるものはなかった。

F093d
長軸1.28m×短軸0.82m×深さ0.23m、方位はN-80°-Eを示す。平面形は、片側が膨らんだ隅丸方形である。赤化する火床を、1カ所検出した。覆土は東壁側から流れ込むように、自然堆積している。また、東壁には、若干こびりつくように焼土が混入している。遺物は2が出土している。

F093e
長軸1.29m×短軸(0.73)m×深さ0.15m、方位はN-87°-Eを示す。平面形は不整形である。強く赤化した火床が、1カ所検出された。覆土は褐色土と暗褐色土が、やや複雑に堆積している。遺物は貝殻条痕文を主体として数多く出土している。なお、火床は長期にわたって使用されていたことを窺わせている。

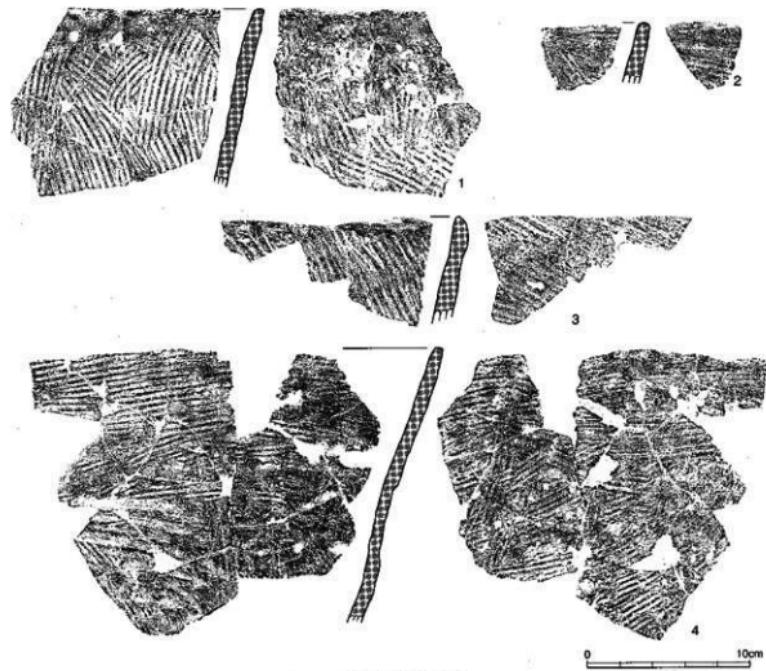


図76 F093 (2)

遺物 遺物の出土は、全遺構とも極めて多い炉穴であった。貝殻条痕文を主体とするが、撫糸文の混入も認められる。図示した遺物はいずれも貝殻条痕文であり、口縁部を掲載した。1・3～4はbの出土であり、とくに4はa炉穴と混在している。1は口縁の内外面は指頭によるおさえにより無文となり、それ以下は縦を中心として斜位に施文される。3は口唇直下から内外面とも斜位に施文され、内面はその角度が緩くなっている。4は口縁は横走し、胴部は斜位に施文される。2は擦痕状に浅く施文する。口唇部は1・2・4が平坦であり、3は外側を丸みをつけながら口唇へ尖ったようにむかうものである。

所見 F093は6基の炉穴が、そのピットをほぼ独立させながら重複したものである。坑底はハードロームまで掘り込んでいた。各炉穴の新旧関係は覆土の堆積状況から、c～b～a・d～eとそれぞれ新しくなるが、a～cとd～eの新旧関係は不明である。なお、F093fはdとeによって壊されており、規模・平面形等は捉えきれなかった。

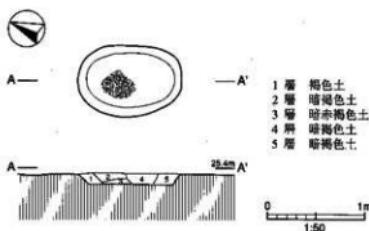


図77 F094

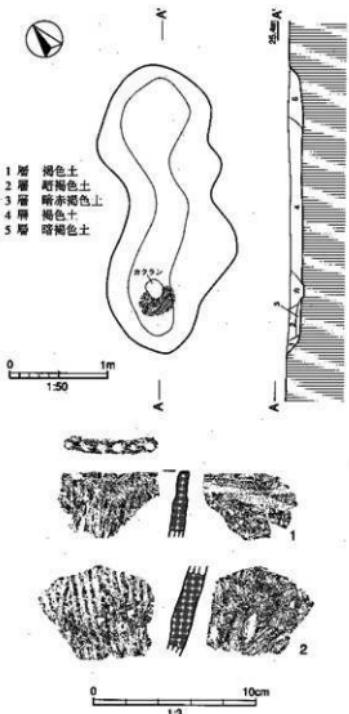


図78 F095

F094

遺構 K7-57-1gにて検出した。長軸1.07m×短軸0.74m×深さ0.14m、方位はN-22°-Wを示す。平面形は橢円である。やや火を被る火床が、1カ所検出された。遺物は極めて少なかった。覆土は暗褐色土を主体とするが、やや複雑な堆積である。火床に伴う覆土は1~3層であり、その後、掘り返され暗褐色土が堆積している。また、火床上に焼土を混入する暗赤褐色土が、壁際からの褐色土の上に堆積しており、褐色土がピットが掘られた後に充填されたようみえる。

遺物 出土遺物は極めて少ない。

所見 火床検出は1カ所であったが、覆土堆積の状況から、重複した炉穴であると想定された。

F095

遺構 K7-46-4g、K7-56-1gにて検出。長軸2.97m×短軸は測定不能×深さ0.19m、方位はN-34°-Eを示す。平面形は不整形である。強く赤化した火床が、1カ所検出された。坑底はソフトロームである。覆土は暗褐色土を主体とした焼化した部分が認められた。覆土は暗褐色土が主体であり、西壁際に暗赤褐色土がほぼ火床上に堆積した後、暗褐色土が自然堆積したものである。

遺物 出土遺物は少なく、貝殻条痕文片が少量出土したのみである。

1・2とも内外面とも貝殻条痕文を施した土器片である。1は平坦な口唇上に刻み目を有しており、外面は縦方向に、内面は横に施したものとなっている。2は外面は縦に、内面は一部に斜位及び縦の施文を施している。

所見 坑底の平面形は蛇行する形であり、形状は不規則である。また、覆土3層と4層の境界は、掘り返したようにやや急なセクションラインとなつた。坑底も長軸方向をみると、弱い凹凸が認められており、これらから本遺構については、2基の炉穴の重複とも考えられる。

F096

遺構 K7-56-2g、K7-57-1gにて検出した。長軸5.02m×短軸1.26m×深さ0.43m、方位はN-5°-Eを示している。長軸が極めて長大であるが複数の炉穴の重複であり、平面形状は縦に長く、幅の狭い長方形である。火床は4ヵ所検出されており、配列したように直線的に並んでいる。覆土は、炉穴の重複が多いため、いくども掘り返され複雑に堆積している。火床aに伴う覆土は11層～14層と考えられる。しかし12層・14層・15層はピットを掘った後に充填したような状態である。火床bの覆土は8・9層、火床cは5・6層、火床dは1・2層と最低限に捉えることとした。

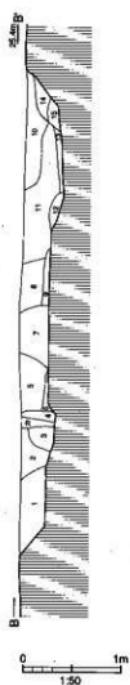
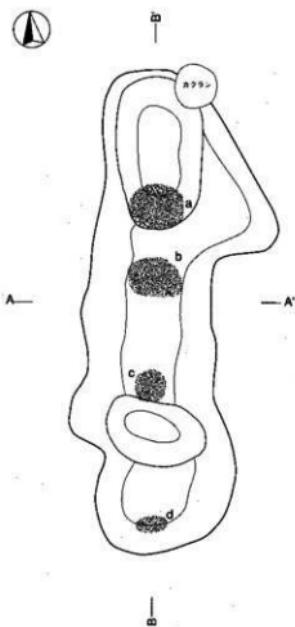
遺物 重複する炉穴のため、全体の出土量は多かった。遺物は平面的には全体に散在するが、火床bとc、そしてその間に多い傾向があった。1～3は土器片錐であり、いずれも貝殻条痕文土器の胴部片を再利用している。4は一括遺物であるためどの火床の炉穴に伴うか判断できないが、口唇は内剥ぎ状であるが、胴部から口縁にいたってやや外反する土器である。火床aに伴う土器は5・6である。5は外面は斜位の集合沈線、内面は横の貝殻条痕文を施すものである。6は内外面ともやや斜めとなる縦の貝殻条痕文である。火床bに伴う土器は7～12である。7は口唇上に貝殻の圧痕がある。8は波状口縁の土器で、外面に擦痕を持ち、内面は無文である。9は推定口径24.2cmの口縁～胴部上半のもので、10は波状の土器で内彎する土器である。11は推定口径28.2cm、遺存高8.2cmを残し、平縁の土器である。11は土器の分布は火床bを中心に、一部、火床cからの接合片があった。いずれも貝殻条痕文を施している。火床cに伴う土器は13～15である。13は口縁部はいくぶん内彎し、14は口縁部にいたってやや外反している。13～15とも外面は粗い貝殻条痕文であり、内面は無文であった。残念ながら火床dに伴う土器は図示できなかった。

所見 火床は4ヵ所であったが、重複する炉穴は複雑な覆土堆積から、それ以上の基数を想定することができる炉穴である。火床に伴う新旧関係は、c～b・c～dへと新しくなっている。

表2 F096遺物観察表

(単位cm)

No	種別 器形	法量 成形・調整等の特徴	色 調 焼 成	胎 土	遺存	備考
1	土錐	6.60×5.80×1.10 縱方形 切り込みは1対。周縁の加工はなし	暗褐色	繊維	略完形	火床b
2	土錐	5.90×4.60×1.10 長方形 切り込みは短径方向に1対。周縁は一部磨耗	暗褐色	繊維	完形	火床b
3	土錐	7.70×5.60×1.10 切り込みは短径方向に1対。周縁は一部磨耗	暗褐色	繊維	完形	火床c



1 層	暗褐色土	9 层	赤褐色土
2 層	暗褐色土	10 层	黑色土
3 层	褐色土	11 层	黑色土
4 层	褐色土	12 层	暗褐色土
5 层	暗褐色土	13 层	暗褐色土
6 层	赤褐色土	14 层	暗褐色土
7 层	暗褐色土	15 层	暗褐色土
8 层	褐色土		

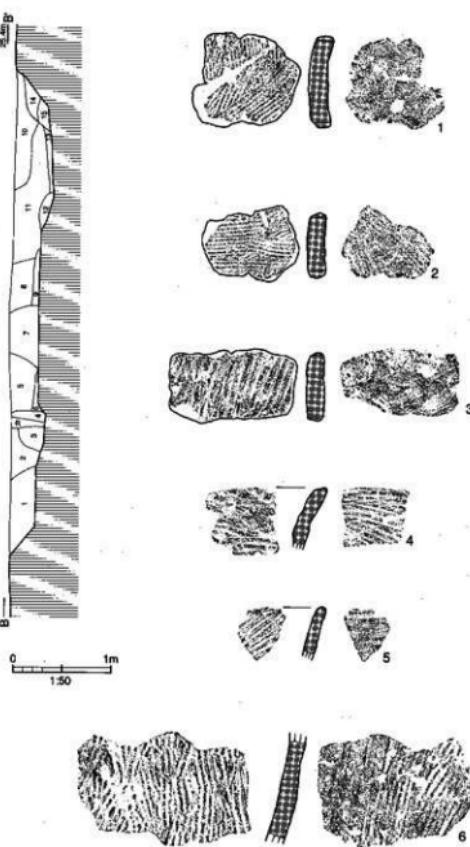
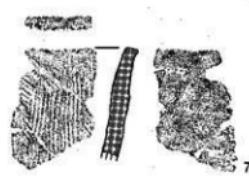


図79 F096

0 10cm
1.3

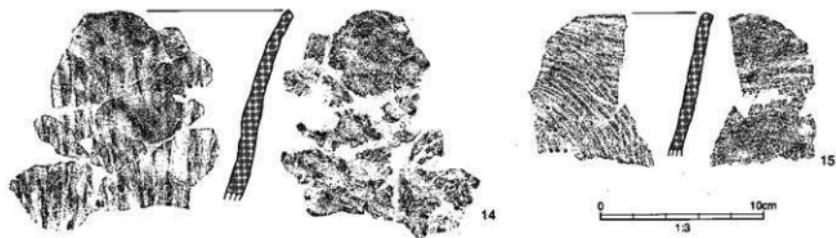
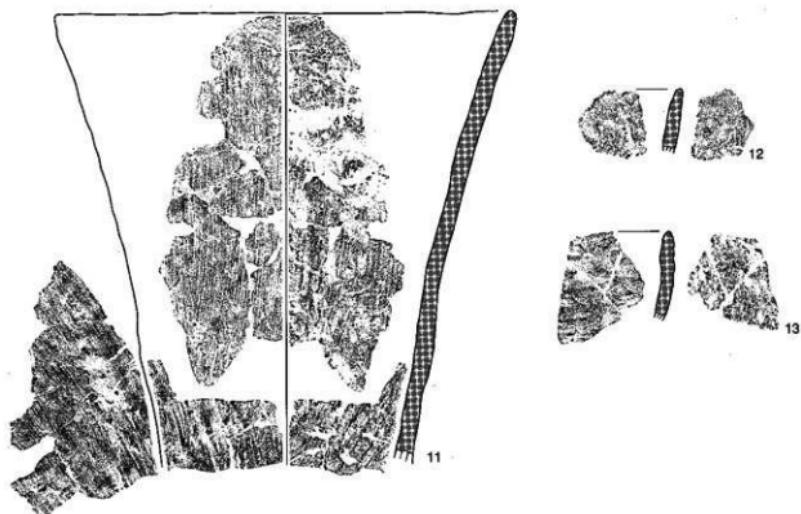
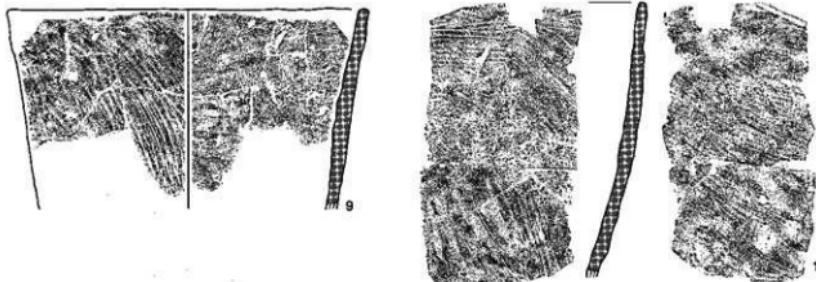


图80 F096 (2)

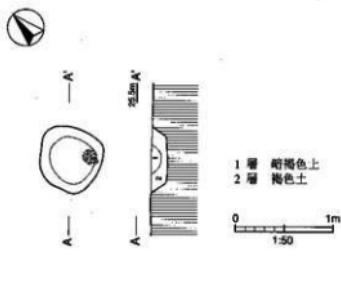


図81 F097

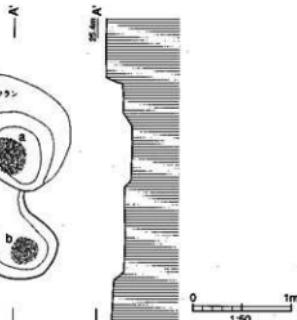


図82 F098

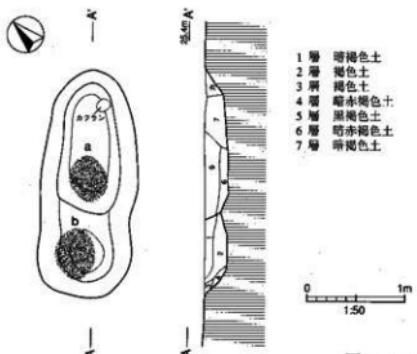


図83 F099

F097

遺構 K7-67-1gにて検出。長軸0.63m×短軸0.63m×深さ0.17m、方位はN-27°-Wを示している。平面形は丸みを帯びた方形である。ソフトロームとハードロームの不整合面に、小さな火床が1ヶ所検出された。しかし不明瞭で、焼土がやや散布する程度であった。覆土は、暗褐色土と褐色土の自然堆積である。本遺構からは土器片は出土せず、礫1点のみの出土であった。

所見 遺構の性格や時期の決定にいたる出土資料がなかったため、平面形や火床の位置、覆土の状況や周辺の遺構検出状況等から、貝穀条痕文期の炉穴と判断した。また、遺構の各状態から単独の炉穴と捉えられた。なお、火床の不明瞭さから本遺構は長期にわたる使用は考えられないものであった。

F098

遺構 K7-67-1gにて検出。2基の炉穴の重複であり、平面形は不整形である。

F098aは、長軸0.89m×短軸0.71m×深さ0.22m、方位はN-29°-Eを示している。単独の炉穴としてみれば、平面形は梢円といえよう。坑底はハードロームで、赤化した火床を1ヶ所検出したが、これは火床に続く壁の途中まで焼土化しているものであった。覆土は、火床上から壁際にかけて若干焼土を混入させた明赤褐色土が堆積した上に、褐色土の流入が認められた自然堆積である。

F098bは、長軸1.12m×短軸0.72m×深さ0.15m、方位はN-26°-Eを示している。単独の平面形は中折れした長楕円形といえよう。火床は1ヶ所検出され、本遺構の火床はF098aの火床に比べてよく赤化していた。覆土はF098aとの重複部分に暗赤褐色土が堆積した後に、暗褐色土を人為的に埋め戻しているような堆積の仕方であった。なお、両遺構とともに出土遺物はなかった。

所 見 両遺構からは遺構の性格や時期を判断する遺物が出土しなかつたが、遺構の形状や周辺遺構の状況から炉穴と判断した。重複する2基の炉穴の新旧関係であるが、調査において、堆積したbの覆土がaによって失われていることが捉えられた。のことよりbが古く、aが新しい炉穴といえよう。

F099

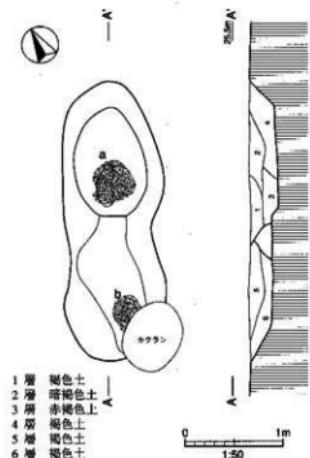
遺 構 K7-67-1gにて検出。2基の炉穴の直線的な重複であり、現状の平面形は長楕円となっている。現状は長軸2.37m×短軸0.92m×深さ0.25m、方位はN-43°-Eを示している。

F099aは、長軸(1.32)m×短軸0.58m×深さ0.24m、方位はN-43°-Eを示している。平面形は楕円形である。ハードロームの上部を強く赤化させた火床が、1ヶ所検出された。本炉穴に伴う覆土は5・6層で、赤褐色土の上に黒褐色土が堆積している。

F099bは、長軸(0.70)m×短軸0.56m×深さ0.22m、方位はN-43°-Eを示している。平面形は楕円と思われる。赤化した火床を、1ヶ所検出している。覆土は1層～4層で、壁際の火床上に暗赤褐色土が堆積した後に、褐色土が自然堆積している。

遺 物 貝殻条痕文が少量出土している。1はF099a出土の胴部片である。内面の剥離が著しい胴部片であるが、内外面とも縱の貝殻条痕文が施されている。

所 見 2基の炉穴の重複であるが、F099bがF099aより古いことが覆土より捉えられた。また、覆土7層がF099aに伴うのか、別の遺構の覆土を掘りこんでいるのか判然としなかった。



F100

遺 構 K7-67-1gにて検出。長軸2.90m×短軸0.87m×深さ0.30m、方位はN-30°-Eを示している。直線的に重複した炉穴であり、平面形は重複部がやや括れた長方形である。

F100aは、長軸1.40m×短軸1.04m×深さ0.32m、方位はN-30°-Eを示す。平面形は楕円形である。坑底はハードロームの上部であり、そこに火床1ヶ所が検出された。覆土は1～4層で、褐色土が堆積した後に、赤褐色土が残されている。

F100bは、長軸1.48m×短軸1.04m×深さ0.26m、方位はN-30°-Eを示す。平面形は楕円形である。やはりハードロームの坑底に、火床が1ヶ所検出された。覆土は5・6層であり、褐色土を主体とする。

図84 F100

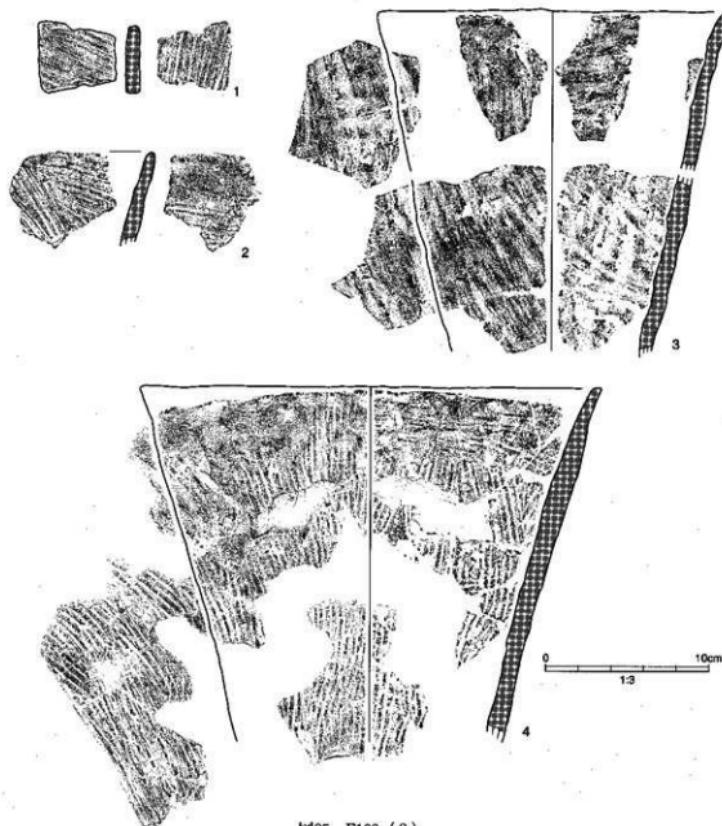


図85 F100 (2)

遺物 貝殻条痕文を主体として、とくにF100aの火床付近に多く出土した。1・3・4はF100a出土の遺物で、1は胴部片を利用した土錐である。長径4.7cm×短径4.0cm×器厚0.9cmのもので、形状は台形となっている。切り込みは短径方向に1対あり、周縁の加工はみられない。3は推定口径28.4cm、遺存高21.9cmを残す、粗い貝殻条痕文の深鉢形土器である。4は推定口径21.6cm、遺存高21.3cmを残す、口唇の断面が三角状となるものである。また口縁部は胴部に比べてやや器厚が薄くなっている。2はF100b出土の遺物であり、内外面とも貝殻条痕文を施すものである。口唇は3に比べ目立たないが、やや薄くなっている。

所見 本遺構は平面形や火床等から2基の炉穴の重複であり、新旧関係は覆土の状況からbが古く、aが新しいことを捉えることができた。しかしa坑の覆土である3層と4層の堆積状態がやや不自然であることから、火床は失われているがあと1基の存在を窺わせるものもある。しかし坑底プランの形状から本來2基の炉穴と捉えると、a坑4層は、F100aが掘られた後に、一部埋め戻されたことを示しているかもしれない。

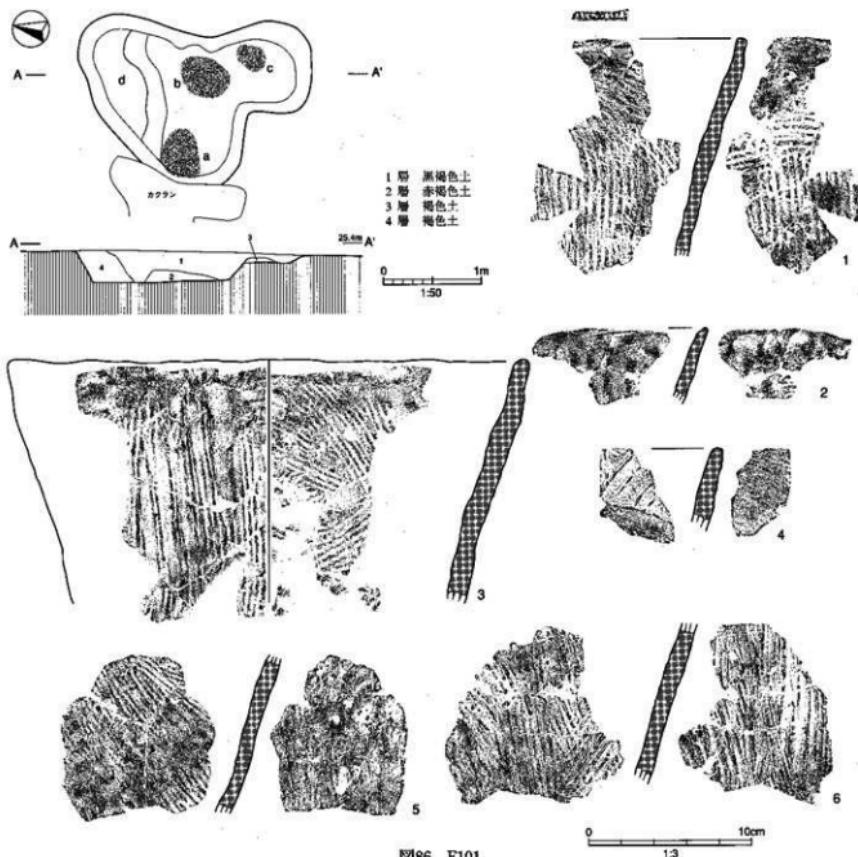


図86 F101

F101

遺構 K7-67-1・3gにて検出。長軸2.33m×短軸1.53m×深さ0.33m、方位はN-14°-Wを示す。平面形は石匙形である。火床は3ヵ所検出された。

遺物 火床bに伴う貝殻条痕文が多く出土し、1～6はいずれも火床bに伴うものである。1は口唇に刺突が施され、2は内面は無文である。3は推定口径32.0cm、遺存高15.1cmの深鉢形土器であるが、外面はほぼ垂直に貝殻条痕文が施されるものである。口縁部はやや薄くなる。4は微隆起線による枠線区画、5は内面は粗い貝殻条痕文が施されている。

所見 火床の新旧関係を覆土からみると、火床bが火床c・dより新しい。また、火床aとの新旧関係は捉えきれなかった。テラス状のdは火床が失われているが、炉穴と判断されるものである。

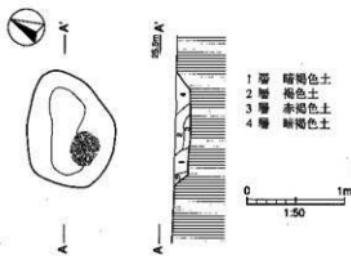


図87 F102

F102

K7-57-4gで検出。長軸1.24m×短軸0.91m×深さ0.15m、方位はN-50°-Eを示す。平面形は楕円形である。ハードローム上部の坑底から火床が1カ所検出されたが、赤化はやや弱いものであった。覆土は、色調が少しづつ異なる褐色土が主体の層であった。また、遺物は貝殻条痕文片が出土しているが、少なかった。

本炉穴は平面形や火床等から単独の炉穴と判断されるものであるが、覆土の堆積状況がやや複雑であった。自然堆積というより、一見、掘り返したような堆積状態である。しかしその跡は確認できず、北西方向からの人為的な投入を窺わせる堆積と捉えた。

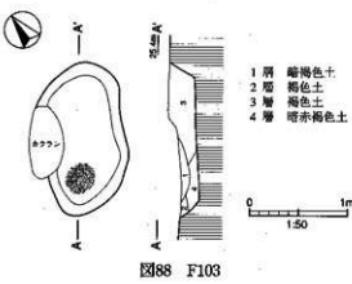


図88 F103

F103

K7-66-2g、K7-67-1gにて検出。長軸1.57m×短軸(0.86)m×深さ0.24m、方位はN-40°-Eを示す。平面形は楕円形である。火床は1カ所検出されたが、赤化はやや弱いものであった。覆土は、壁際に凸レンズ状に堆積した暗赤褐色土の上に、褐色土を主体とした自然堆積したものである。遺物は、貝殻条痕文片が少量出土した。

平面形や火床・覆土から、単独の炉穴と捉えられた。

F104

K7-56-4gにて検出。長軸0.95m×短軸0.52m×深さ0.24m、方位はN-7°-Eを示す。平面形は丸味のある台形状である。火床は坑底の中央に1カ所検出され、若干赤化している。壁の立ち上がりは急であり、坑底は壁からなだらかに火床方向へ凹んでいる。覆土は赤褐色土が凸レンズ状に堆積した上に、褐色土と暗褐色土が自然堆積している。遺物は、貝殻条痕文片が少量出土している。

平面形や火床等から、単独の炉穴と判断される。しかし本地区の炉穴においては、火床のほとんどが壁際や壁に近い所に残されているのに対して、本炉穴の火床はほぼ中央に位置しており、やや異なる状態を示している遺構である。

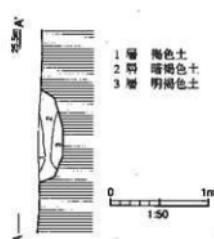


図89 F104

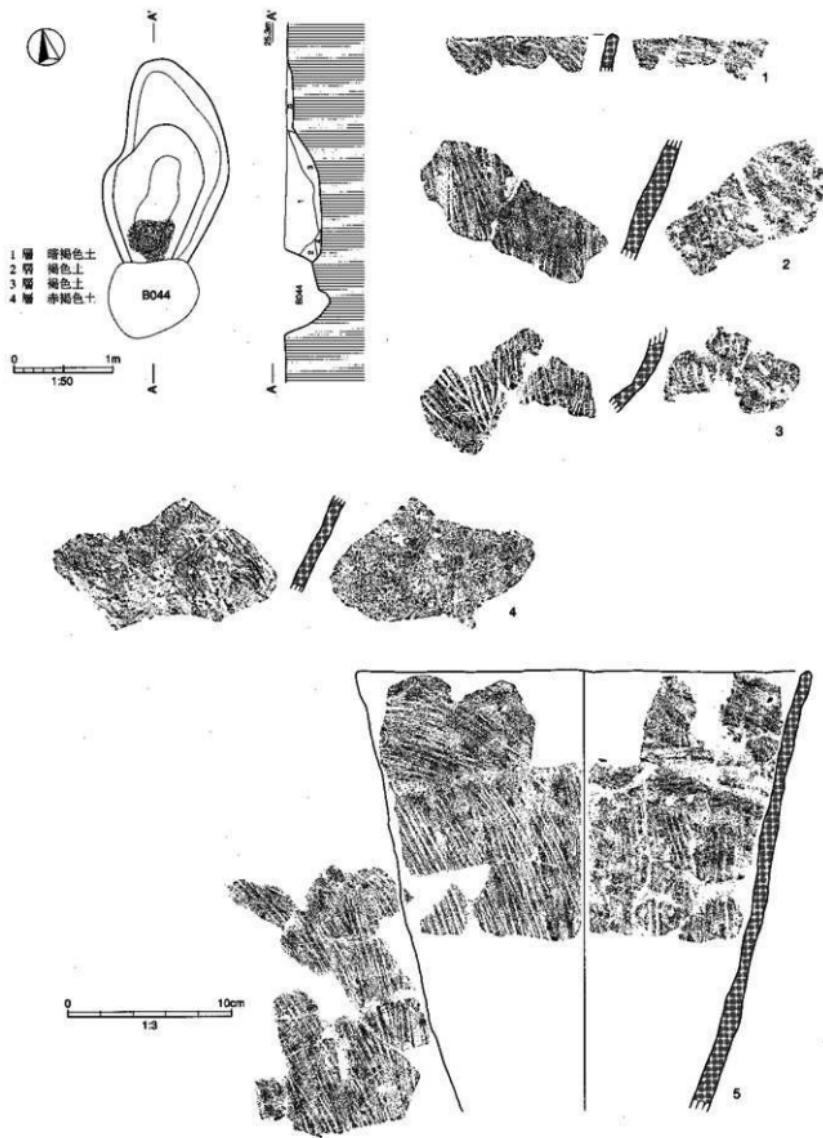


图90 F105

F105

遺構 K7-55-3gにて検出。長軸(2.07)m×短軸1.27m×深さ0.38m、方位はN-10°-Eを示す。B044によって南側の一部が損壊を被るが、平面形は梢円を基本とした不整形である。ピットはハードロームを比較的に深く掘り込んだもので、坑底の南壁側に火床を1ヶ所検出した。壁の立ち上がりまで赤化している。覆土は褐色土を主体としていた。

遺物 貝殻条痕文を主体として遺物は多く、とくに火床上に大型片が出土している。図示したものはいずれも貝殻条痕文であり、器厚は1.0cm前後であるが厚薄が著しいものである。1は外面は斜位、内面は横に施した口縁部をもち、口唇にやや凹みをもつものである。2は外面は斜位に施されたが、内面は器面の磨耗が著しく、かろうじて斜位の施文が確認される。3は外面は斜位、内面は無文の底部付近の破片である。5は推定口径28.0cm、遺存高27.1cmの底部が失われた深鉢形土器で、内外面とも口縁部は斜位に、胴部は縦に施文されるものである。

所見 平面形や火床等から、単独の炉穴と判断される。なお、本炉穴の埋没過程であるが、覆土は自然堆積には不自然なようすを示している。覆土からみると4層の赤褐色土が堆積した後に、2層と3層の褐色土が自然堆積したようすが認められる。しかし1層の暗褐色土の堆積は厚く、一気に投入したような状態であった。このため本炉穴は、遺構廃棄後はしばらく自然堆積にまかせた後に、人為的に覆土が堆積したと捉えられる。

F106

遺構 K7-87-2gにて検出。長軸1.50m×短軸0.99m×深さ0.33m、方位はN-0°-Eを示す。平面形は長方形である。ハードロームの坑底の南壁際にさらに浅いピットを掘り込み、その底に赤化した火床が検出された。火床は1ヶ所である。壁の立ち上がりは急であるが、坑底は平坦である。覆土はやや複雑な堆積がみられるため、色調で5層に分層した。

遺物 貝殻条痕文が主体を占めて多量に出土しているが、その出土層は坑底から離れて1~2層である。図示した遺物は、いずれも貝殻条痕文を施した深鉢形土器片である。1は口縁部内外面とも横に施文し、胴部は斜位の土器である。3は推定口径20.0cm、遺存高11.1cmの、4は推定口径17.0cm、遺存高15.4cmの口縁部~胴部で、外面は縦に施文され、内面は無文である。5は外面は縦に、内面は斜位に施文した胴部片である。6は遺存高14.9cmの胴部下半~尖底部である。外面は縦と斜位に、内面は胴部中位の一部に斜位に施文する。7は遺存高20.2cmの、大きく接合した胴部である。外面は縦に施文され、内面は無文の土器である。2は尖底部付近で、外面は縦に、内面は斜位に施文している。

所見 平面形や火床の存在等から、単独の炉穴として捉えることとした。しかし炉穴と決定することに、疑問点が残る遺構もある。

炉穴としては平面形や断面形をみるときれいすぎる遺構であり、また、2層に黒色土が堆積していることや、遺物も1~2層に集中していることも気になる炉穴である。本地区の炉穴の覆土はほとんど黒色土を堆積させておらず、また、流れ込みのように集中する土器片も、坑底からいわゆる「浮いて」いる状態であった。3層の褐色土の堆積も、坑底備が切られたように捉えられてもいる。これらのことから、本来この位置に営まれた炉穴は後世に掘り返され、再び人為的に1~2層が埋められたものではないかと考えられる。この時の炉穴の破壊においてもかろうじて遺構の一部と火床、また、覆土の3~5層が残ったと捉えられまいか。そうして人為的な埋め戻しは掘り返してからさほど時間をおくないもので、遺物も含めて埋め戻されて、1~2層に入り込んだと捉えた方が蓋然性が高いのではないかと考えられる遺構である。

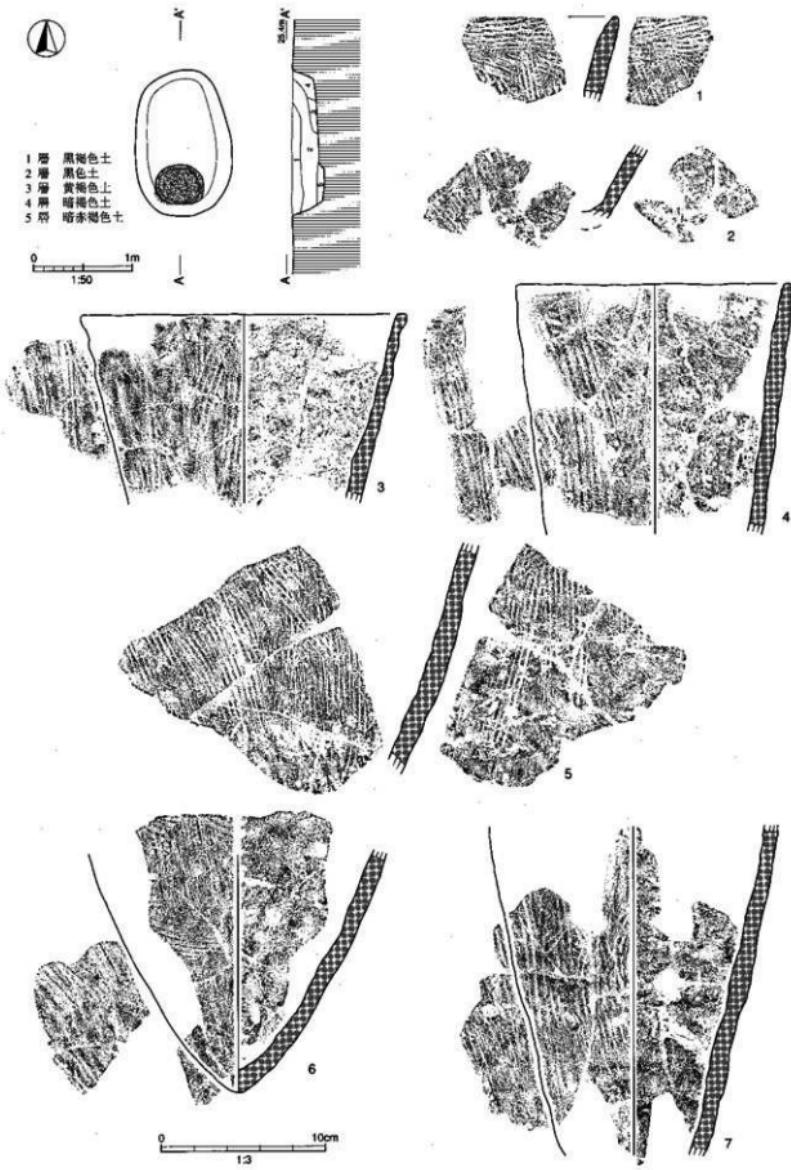


图91 F106

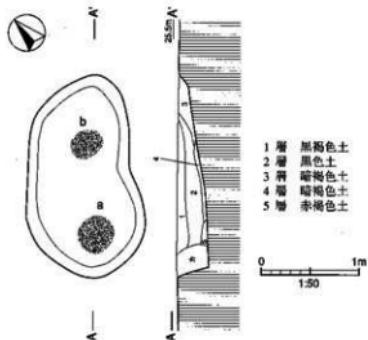


図92 F107

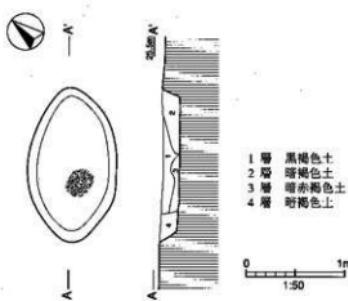


図93 F108

F107

遺構 K7-88-1・2gにて検出。長軸2.10m×短軸1.04m×深さ0.32m、方位はN44°-Eを示す。平面形は、不整橢円形である。火床は2ヶ所検出している。坑底は長軸方向に、北西壁から南東壁にむかって傾斜するものである。火床aに伴う覆土のみが確認された。南西壁際は擾乱をうけており、判然としないが、火床aに伴う赤褐色土が堆積した後に、坑底にはしだいに北西壁側からの暗褐色土の流れ込みが捉えられた。その後、黒色土と黒褐色土が堆積する。火床bに伴う覆土は火床aによって失われていた。出土した遺物はなかった。

所見 遺構の性格や時期を知る出土遺物はなかったが、遺構の形状や周辺遺構の配置から炉穴と判断した。本炉穴は、本来は2基の炉穴の重複と考えられる。坑底の平面形が西壁でやや歪んでいるが、そのそれぞれの延長が各炉穴の平面形であると想定した。

F108

遺構 K7-87-3g、K7-88-1gにて検出。長軸1.60m×短軸0.92m×深さ0.20m、方位はN48°-Eを示す。平面形は橢円形である。火床は坑底ほぼ中央に1ヶ所検出しており、ハードロームに火熱を被る程度であり赤化はしていない。覆土の堆積はやや複雑である。ピットが掘られた後に、埋まったような堆積である4層があり、その後、再び掘り込まれ再び堆積したような1～3層が認められる。遺物の出土はなかった。

所見 遺構の性格や時期を知る出土遺物はなかったが、遺構の形状や周辺遺構の配置から炉穴と判断した。そして覆土の堆積状況は、単純に単独の炉穴とは言い切れないが、平面形及び火床から単独の炉穴と判断した。重複を窺わせる4層の暗褐色土については、炉穴の使用にあたって壁際の一部を埋め戻したものと捉えた。

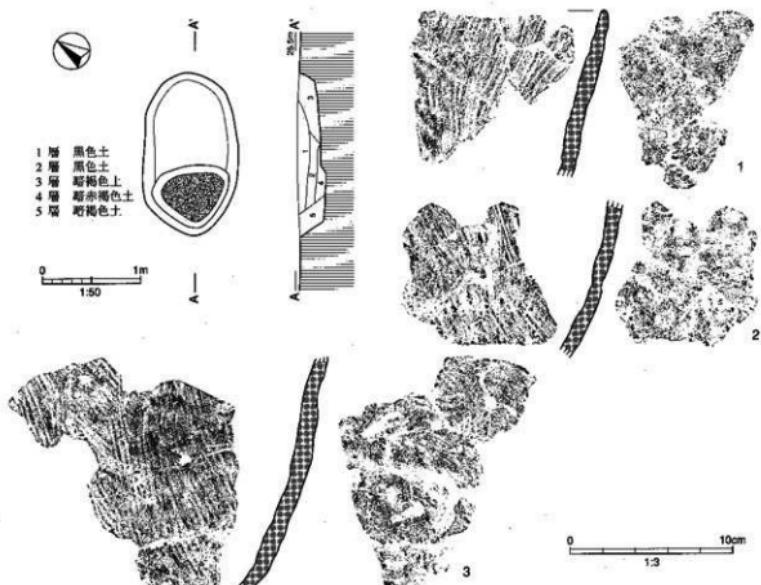


図94 F109

F109

遺構 K7-78-3gにて検出。長軸1.68m×短軸0.98m×深さ0.26m、方位はN-50°-Eを示す。平面形は橢円形である。南東壁際の坑底を浅く掘るピット内に、うっすらと赤化した火床が1カ所検出された。坑底は北東壁側から火床にかけ、緩く傾斜している。覆土は重複を意識させるような堆積である。壁際には暗褐色土が充填されたように堆積し、再堆積したような覆土には暗赤褐色土上に黒色土が堆積している炉穴である。

遺物 本遺構からの出土遺物は貝殻条痕文を主体として、本地区の炉穴では中程度の出土量であった。図示した遺物は、いずれも深鉢形土器であり内面は無文のものである。

1は平縁の口縁部片で、口唇はやや細くなるように器厚が薄くなっているものである。やや傾く縦の施文である。2・3はいずれも胴部下半であり、2は縦の、3は縦及び斜位の施文である。

所見 覆土は重複していることを窺わせる堆積であるが、平面形や火床等から、単独の土坑と捉えることとした。しかし、なお覆土の状況から、単独であるか重複であるかを迷う炉穴でもあった。

確かに重複を窺わせる覆土であるが、次のように捉えることとした。第一段階は、土坑が掘られた後に火が焚かれ、炉穴として使用された。このため坑底内のピットに、第一の火床が生じたと考える。第二段階は、5層の暗褐色土を、火床上の一部（半分程度）から南東壁にかけて埋め戻した。第三段階においては、残された炉穴の火床と一部重複して再び火が焚かれ、新たな炉穴として使用された。第四段階は、炉穴としての使用が終了したのち、褐色土と焼土の混合層が新たに残された火床上に堆積した。このように考えると、1・2・4層と5層の関係は整然と捉えることができる。しかしこの場合、第一段階での炉穴の使用から、第二段階の炉穴の再利用にかけた時間はそう長い時間経過とは考えられないものもある。

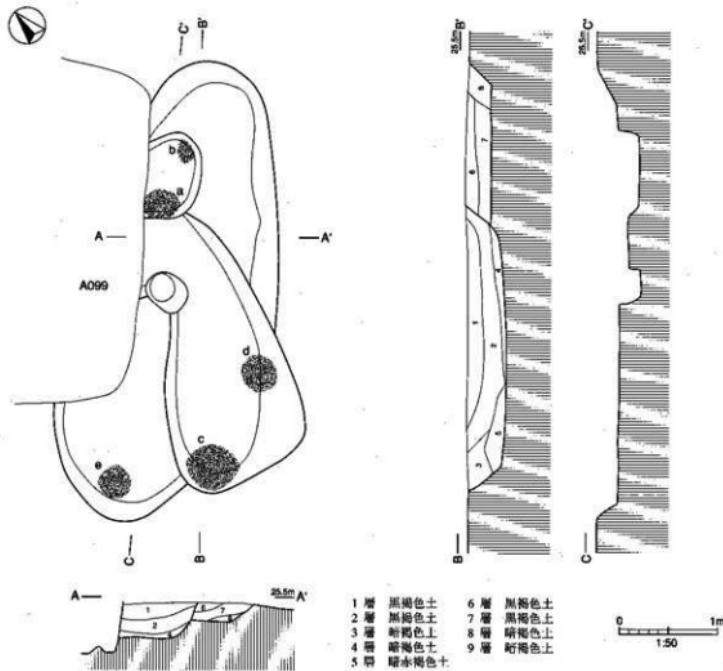


図95 F110

F110

遺構 K7-88-2・4g、K7-89-1gにわたって検出した。長楕円を主体とした炉穴の重複であるため、平面形は不整形となる。ピットとしては4基が確認され、火床は5ヶ所検出されている。火床aに伴うピットは、長軸と方位は不明であるが、短軸0.88m×深さ0.41mとなっている。平面形は不明である。火床はa・bとも赤化している。坑底はほぼ平坦である。火床c・dに伴うピットは長軸(2.78)m×短軸1.33m×深さ0.41m、方位はN-43°-Eを示している。平面形は長楕円だが、先端はL字形に折れるようである。火床はいずれも赤化している。坑底は、ほぼ平坦である。

火床eに伴うピットは、長軸(2.21)m×短軸は不明×深さ0.22mで、方位はN-49°-Eを示している。火床は赤化している。坑底は、ほぼ平坦である。

火床は失われているが、火床a・bのピットが掘り込まれたピットは、長軸(2.65)m×短軸は不明×深さ0.27m、方位はN-54°-Eを示している。坑底はほぼ平坦であり、もっとも浅いものである。

覆土は火床c・dと火床の失われたピットを捉えられたが、覆土下部は暗褐色土を主体として、覆土上部に黒褐色土が堆積していた。8層の暗褐色土以外は自然堆積である。

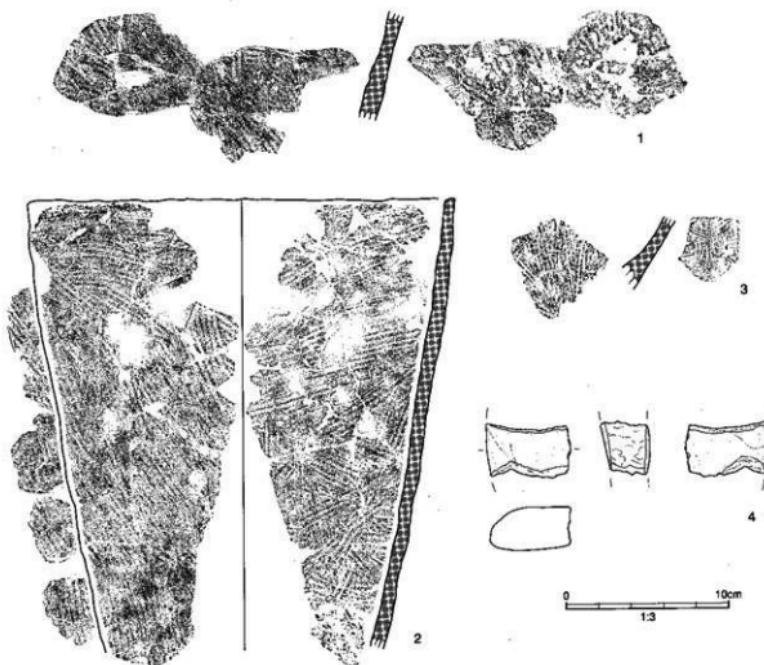


図96 F110 (2)

遺物 本地区の炉穴としては、中程度の遺物の出土である。貝殻条痕文土器片を主体とするが、破損した磨石が1点出土している。1～3は火床dに伴うもので、火床周辺から出土している。1は外面に斜位を主として不定方向の、内面は斜位と縦の貝殻条痕文を施す。2は推定口径26.2cm、遺存高27.0cmの口縁部～胴下半の接合片である。平坦な口唇で、平縁の口縁の土器であるが、口縁部は内外面とも横の、胴部は斜位の貝殻条痕文を施している。3は底部付近となり、外面は縦の、内面は斜位及び縦の貝殻条痕文を施している。4は磨石の破片である。火床が失われたピットから出土している。

所見 それぞれ平面形が長楕円の炉穴が4基、重複した造構である。新旧関係の全てを捉えることはできなかったが、土層堆積より火床bが火床cより古いと確認できた。

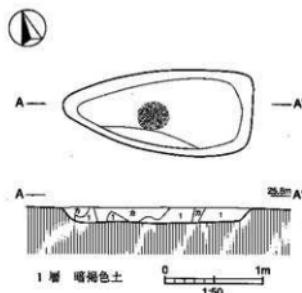


図97 F111

F111

遺構 K7-78-3gにて検出。長軸1.94m×短軸0.84m×深さ0.17m、方位はN-74°-Wを示している。平面形は、二辺が長い二等辺三角形である。火床はほぼ坑底中央に1ヶ所検出されたが、赤化迄には至らず、赤味を帯びる程度であった。覆土は搅乱が多く捉えにくいものであり、暗褐色土のみを把握した。遺物は貝殻条痕文片が3片出土したが、搅乱のためか土師器の混入も認められた。

所見 平面形や覆土等から、単独の炉穴と判断した。また、坑底の状況から、使用期間は短いと考えられるものである。

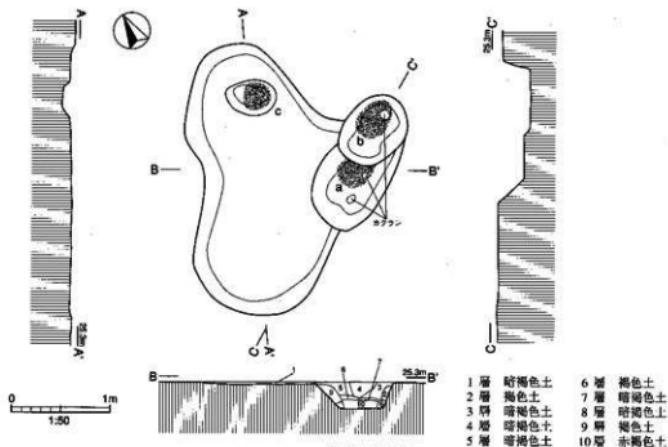


図98 F112

F112

遺構 I7-31-1・2gにて検出した。平面形等から最低3基の炉穴の重複である。

火床 a の坑は、長軸(0.71)m×短軸(0.71)m×深さ0.26m、方位はN-64°-Eを示す。ハードロームの坑底に、火床を検出した。b は、長軸0.78m×短軸0.60m×深さ0.30m、方位はN-63°-Eを示している。北壁の一部も強く焼けた状態で火床が検出されている。火床 c は、長軸2.83m×短軸は不明×深さ0.11mで、方位はN-27°-Eを示す。北壁寄りに浅いピットを掘り込み火床としている。

覆土は、褐色土と暗褐色土を主体として、掘り返したような堆積もあり、やや複雑であった。

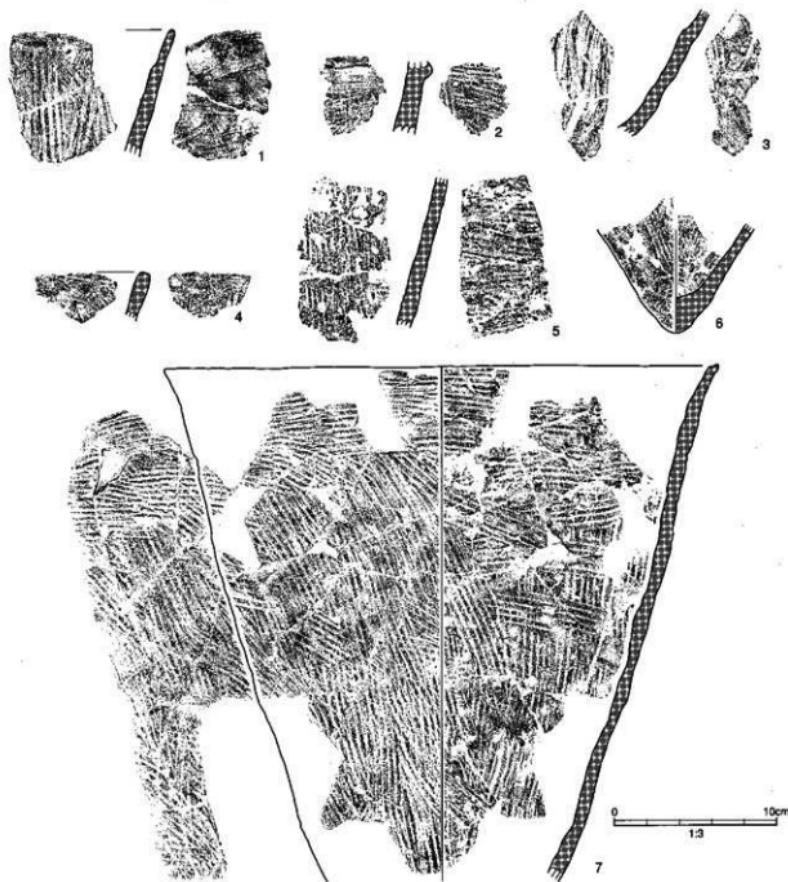


図99 F112 (2)

遺物 遺物出土の傾向は火床 b の上層に集中しており、火床 a・c には少なかった。掲載した土器片はいずれも F112b 出土のものであり、貝殻条痕文を施文するものである。1 は縦い波状口縁の土器で、外面は縦に、内面は横を主体として施文する。2 は外面は斜位に施文するが、内面は無文である。3~5 は胴部片である。3 は隆帯を横に貼付している。5 は尖底部付近であり、6 は尖底部である。いずれも縦方向に施文している。7 は底部を欠損しているが、推定口径 34.0cm、遺存高 32.0cm、器厚は 1.0cm 内外となる。厚さが一定しない土器である。口縁はやや外反し、内外面とも口縁部は横の、胴部は縦を基本として不定方向に施文するものである。

所見 検出した火床の新旧関係は覆土等より、火床 a ~ b ~ c の順に新しくなると捉えられた。しかし本遺構は重複した炉穴であり 3ヶ所の火床であったが、この他に火床は失われているものの、平面形や覆土の堆積状態からさらに数基の炉穴の存在が想定できる遺構であった。

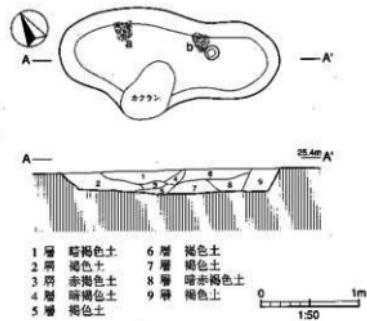


図100 F113

F113

遺構 L7-41-1gにて検出した。長軸2.21m×短軸0.81m×深さ0.25m、方位はN-62°-Wである。平面形は長楕円形で、小さな火床が北西壁に2ヶ所検出されたが、赤化は弱かった。覆土は1~4層が火床aに、6~8層が火床bに伴うものである。遺物は極めて少ないが、貝殻条痕文片が出土している。

所見 それぞれの火床は極めて小さな範囲であるが、平面形や覆土から2基の重複の結合と捉えられる。重複関係は、覆土等より火床bからaへと新しくなっている。

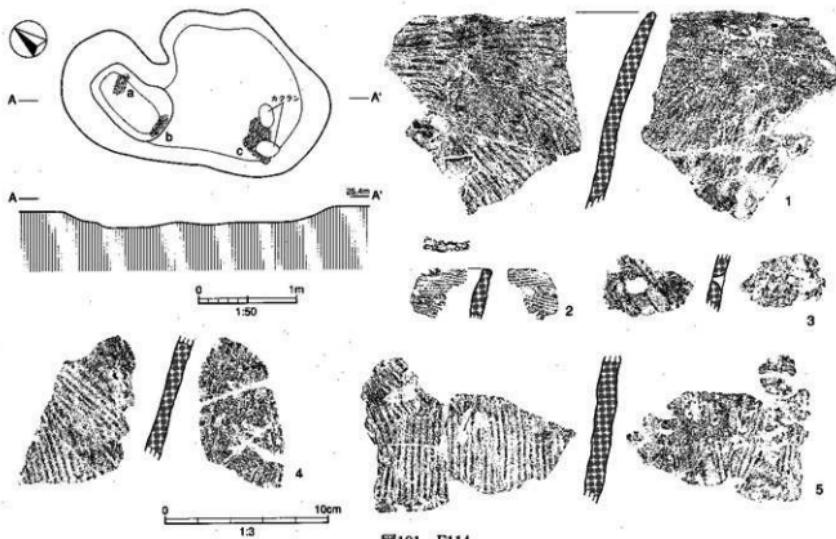


図101 F114

F114

遺構 L7-41-1・2gにて検出。長軸2.73m×短軸1.61m×深さ0.17m、方位はN-40°-Wを示す。凹み状の炉穴で、平面は不整形となる。火床は3ヶ所検出されたが、火床a・bとも赤化は弱く、火床cはやや赤化が強いものであった。覆土は、ローム色の強い褐色土を主体とする。

遺物 遺物は貝殻条痕文片が20片程出土している。1~5は、いずれも貝殻条痕文が施文されている。1は内面は擦痕で調整されたものである。2は内外面とも横に施文され、平坦な口唇をもつ口縁部で、口唇上に放射肋をもつ貝による圧痕がある。3は内外面とも器面の磨耗が著しいもので、補修孔がある。4・5はいずれも胴部片であり、縫を主として不定方向に施文されるものである。

所見 重複の新旧関係は火床b~aへと新しくなるが、火床aとcは捉えられなかった。

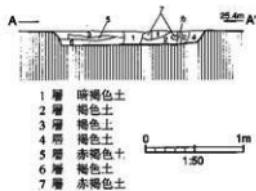
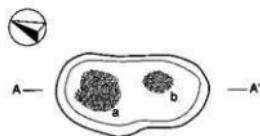


図102 F115

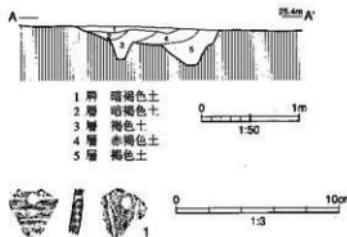


図103 F116

F115

遺構 L7-41-2gにて検出。長軸1.54m×短軸0.82m×深さ0.15m、方位はN-27°-Wを示す。平面形は長楕円である。火床は2ヶ所検出したが、火床aはやや赤化している程度であり、火床bはaに比してやや弱く、焼土ブロックも少なかった。覆土は焼土を混入した、褐色土を主体とする。遺物は極めて少なかった。

所見 平面形から2基の炉穴の重複とも思われるが判然とせず、火床の新旧関係も捉えることができなかつた。

F116

遺構 L7-41-2gにて検出。長軸1.50m×短軸1.24m×深さ0.38m、方位はN-22°-Wを示す。平面形は長方形が角で重なったL字形である。火床はほぼ南北にのびる炉穴の、南東壁コーナー際に1ヶ所検出された。焼土ブロック状の火床であった。覆土は黒色味がやや強い暗褐色土を主体として、南側から流れ込んだように堆積している。

遺物 遺物は貝殻条痕文土器片が出土しているが、その出土量は極めて少なかった。1は、胴部片で孔を穿つものである。

所見 平面形や覆土等から、3基程の炉穴の重複が認められる。

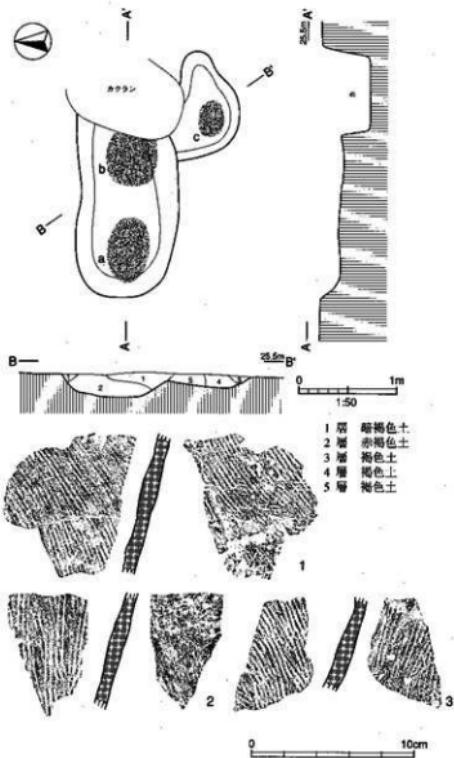


図104 F117

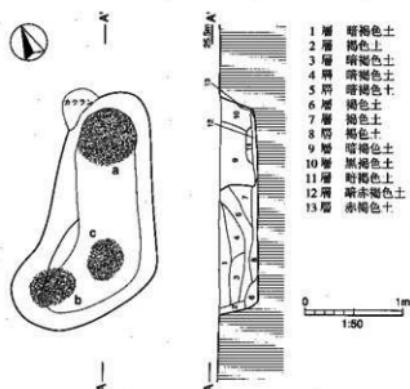


図105 F118

F117

遺構 K 7-51-1・3gにて検出。大きく捉えると2基の坑の重複である。

火床 a のピットは長軸(0.76m)×短軸1.08m×深さ0.13m、方位はN-81°-Eを示している。平面形は不整形である。火床 b・c の炉穴は、長軸(1.68m)×短軸1.03m×深さ0.30m、方位はN-10°-Eを示している。平面形は長方形である。火床は a・b は強く赤化し、c は坑底よりやや浮いて検出されている。覆土は、火床 b は赤褐色土に褐色土が混じり、火床 c は褐色土が堆積している。

遺物 遺物出土は少なかった。1~3 はいずれも、貝殻条痕文が施されるものである。

所見 重複の新旧関係は、火床 c～b～a の順に新しくなっていることが捉えられた。

F118

遺構 L7-69-4gとL7-70-2gにわって検出された。火床は3ヶ所検出されたが、坑の確認は2基だけであった。火床 a を持つ炉穴は、長軸1.02m×短軸0.86m×深さ0.38m、方位はN-34°-Eを示す。平面形は長方形である。火床は1ヶ所であり、強く赤化したものである。火床 b と c をもつ炉穴は、長軸1.64m×短軸0.94m×深さ0.39m、方位はN-89°-Eを示す。平面形は長方形である。火床 b は強く赤化したもので、c は火床とは言いがたいほど赤化は弱いものである。覆土は、火床 a は9~13となり、火床 c は1~8層が堆積している。火床 b の覆土は捉えられなかった。

遺物 貝殻条痕文土器片を出土しているが、炉穴としてはその出土量はやや多く、特に火床 a周辺において多かった。掲載した土器片はいずれも貝殻条痕文を施している。1~6は口縁部であり、1は口唇上に貝殻による圧痕を施し、2は内面は無文である。4は口唇上に刻みを残している。7は推定口径25.4cm、遺存高21.5cmの平緑の口縁をもち、胴部が丸味を帯びて底部にくだるものである。斜位、縦に施文する。8・9は胴部片である。8は外表面は縦に、内面は無文であった。

所見 火床は3ヶ所検出されたが、坑底の平面形から3基の炉穴として捉えた。

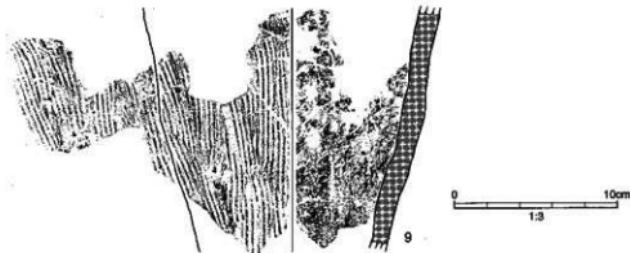
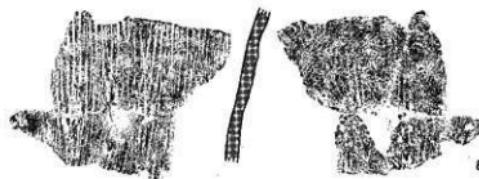
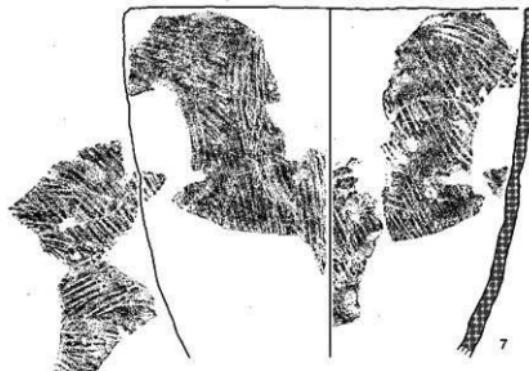


図106 F118 (2)

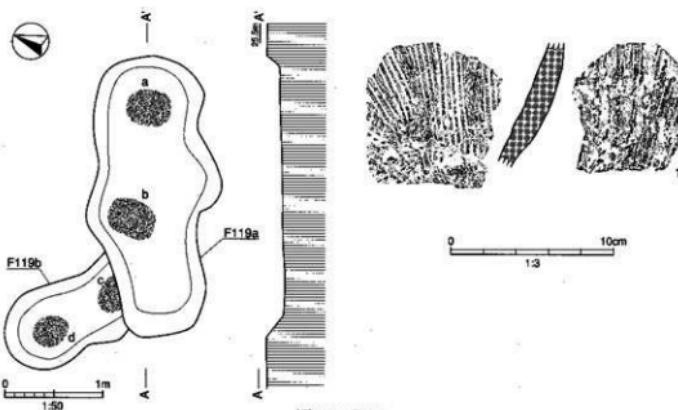


図107 F119

F119

遺構 K7-79-1・3gにて検出した。全体で火床は4ヶ所あるが、大きく2基の炉穴であった。

F119aは長軸2.87m×短軸1.32m×深さ0.19m、方位はN-69°-Eを示している。平面形は、中央が丸く膨れた長方形である。この炉穴からは、火床が2ヶ所検出された。火床aはよく赤化しており、火床bは滲んだような赤化であった。

F119bは長軸(1.29)m×短軸0.79m×深さ0.11m、方位はN-55°-Wを示している。平面形は、コーナーが丸みを帯びた長方形である。この坑からもやはり2ヶ所の火床が検出されており、火床cは滲んだように赤化していたが、火床東半がF119aによって失われている。火床dは焼土ブロック化しており、良好な火床であった。覆土の堆積は、火床が4ヶ所あるためやや複雑となっていた。いずれも火床上の暗赤褐色土の上に、暗褐色土が堆積しているものであった。

遺物 貝殻条痕文の土器片が約30片程出土しているが、小破片が多く図示できるものは1点にとどまっている。1は胴部下半の破片で、内外面とも縦の貝殻条痕文が施されているものである。

所見 火床の重複関係における新旧は、覆土等から火床b～aへと新しくなり、火床cより火床aが新しいものとなっている。また、火床b・cについては、火床の赤化が弱く、長時間にわたっての使用は想定できないものである。

本遺構は現状の炉穴の坑としては2基であり、火床4ヶ所の重複した炉穴であった。しかし平面形等から、火床は失われているものの、5ヶ所程度の火床があった可能性も考えられる炉穴でもある。

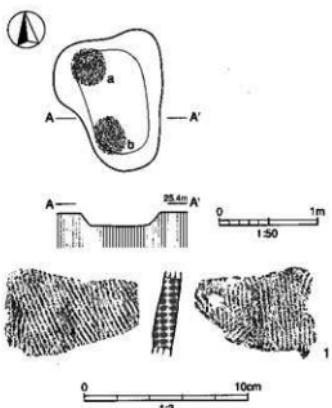


図108 F120

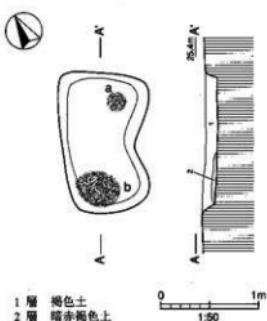


図109 F121

F120

遺構 K7-89-4g、K7-90-3gにて検出した。長軸1.39m×短軸1.12m×深さ0.14m、方位はN-6°-Wを示している。平面形の上場は北側のコーナーが突出した不整形であるが、坑底からみると長方形といえよう。火床は2ヶ所検出された。いずれもよく赤化しており、また、ともに西壁際に残されている。覆土は褐色土が堆積していた。

遺物 出土した遺物は極めて少なかった。図示した1は、内外面とも丁寧な貝殻条痕文を縱及び斜位に施した崩部片である。

所見 火床の重複の新旧関係は捉えられなかった。坑底の平面形から1基の炉穴の坑として掘られたものが、時間的な経過をおかずして火の再使用が行われたと考えられる炉穴でもあった。

F121

遺構 K7-89-4g、K7-90-3gにて検出した。長軸1.45m×短軸0.83m×深さ0.12m、方位はN-30°-Eを示している。平面形は中央がやや括れた長方形であり、火床は2ヶ所検出された。火床aは赤化がやや弱く、火床bは良好なものであった。覆土は火床bに伴うものとして捉えられ、褐色土の自然堆積であった。遺物の出土は少なかった。

所見 火床aに伴うと考えられる覆土が捉えられず、このことから火床はb～aへと新しくなるものであろう。しかしセクションの位置からも火床bの覆土堆積があれば捉えられるはずであり、火床aと火床bの時間差はそう経過していないのではないかと考えられる。また、bの火床範囲が狭く小さいため、火床に伴う火の使用的時間経過も短いものであったのではないかと考えられるものである。

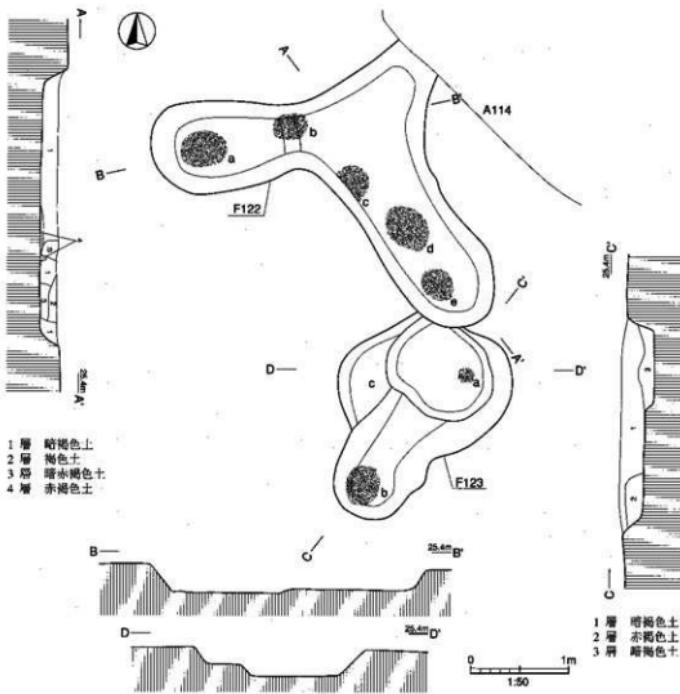


図110 F122・F123

F122

遺構 K7-99-2g, K7-100-1・3gにて検出した。火床は5ヶ所を検出し、ピットも大きく2基の重複であり、平面形は鉗足状の不整形である。

F122 aは長軸2.87m×短軸0.94m×深さ0.30m、方位はN-77°-Eを示す。平面形は長椭円形である。火床は2ヶ所検出された。

F122 bは長軸2.87m×短軸0.92m×深さ0.15m、方位はN-37°-Wを示す。平面形は長椭円形である。火床は3ヶ所検出されている。火床はa～c・eは赤化が強く、dはa等に比べて赤化は弱いものであった。覆土はdによりb・cの覆土が失われている。d・eは暗赤褐色土上に暗褐色土が堆積していた。

遺物 貝殻条痕文を主体として出土量は多量であったが、土師器の混入も多く認められた。図示した土器はいずれも貝殻条痕文を施すものである。1と3は、斜位から縦に施文し、口唇が内剥ぎ状となっている。2は口縁は内外とも横の、それ以下は斜位に施文している。4は推定口径24.2cm、推定高33.4cmの深鉢形土器で、全体を知りうる遺存であった。5は推定口径33.8cm、遺存高25.0cmのもので、内面は無文である。

所見 火床の新旧関係は、a・(b・c)・d・eの順に新しくなることが調査及び覆土等から捉えられた。またF122とF123の新旧関係は、後者が新しいことが調査時に捉えられている。

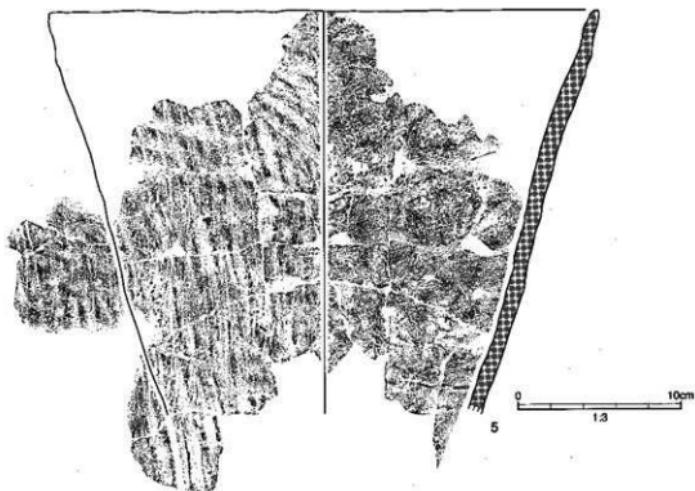
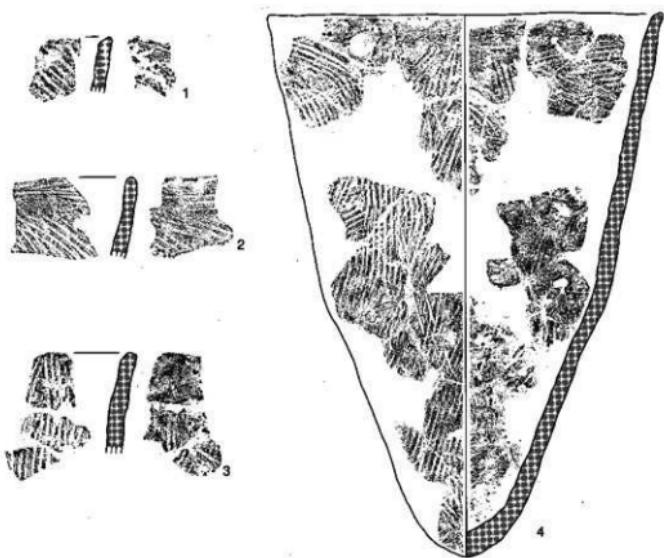
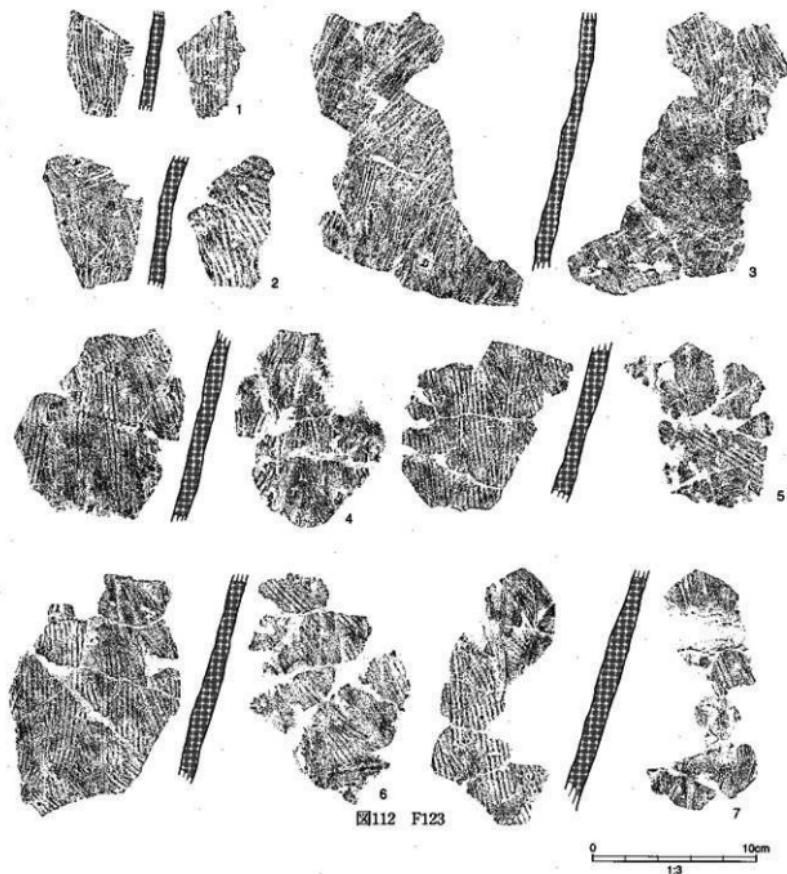


図111 F122



F123

遺構 K7-100-1・3gにて検出。長軸2.26m×短軸1.55m×深さ0.33m、方位はN-37°-Eを示している。3基の炉穴の重複であり、平面形は不整形となっている。火床は2ヶ所検出された。火床aはハードローム中に残され、赤化も弱くあまり使用されていないものと捉えられた。火床bはソフトローム中に残され、赤化は強いものである。覆土は、暗褐色土が堆積している。

遺物 貝殻条痕文を主体として出土量は多い。1～7はいずれも貝殻条痕文が施された、胴部片である。内外面共に、縦乃至斜位に施文されている。

所見 平面形、特に坑底の平面形より、火床a・bの炉穴により火床が1ヶ所失われた炉穴であると判断しうるものであり、本遺構は最低3基の炉穴の重複と捉えられた。そして炉穴の新旧関係は、火床c・b・aと順次、新しくなっていくものと覆土等から捉えることができた。

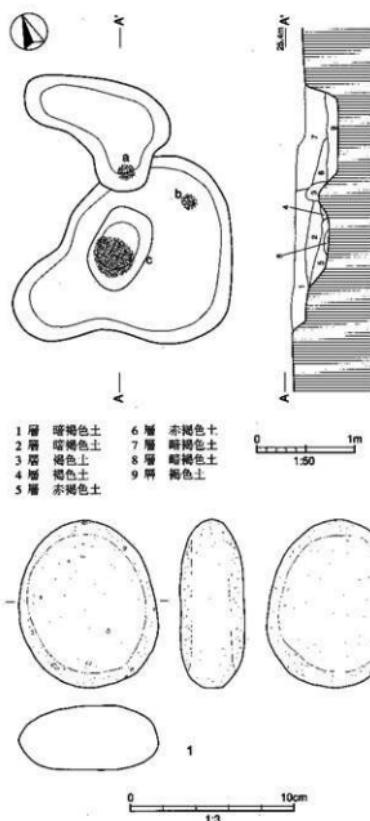


図113 F124

F125

遺構 L7-91-3・4gにて検出した。2基の炉穴の重複であり、平面形は不整形である。

F125aは長軸2.12m×短軸1.14m×深さ0.11m、方位はN-15°-Eを示す。平面形は楕円形である。火床は2ヶ所検出され、火床a・bとも強く赤化していた。覆土は火床bに伴うものであるが、掘り込みが浅く、火床aとの覆土の区別はつきずらいものであった。また、出土遺物は極めて少なかった。

F125bは長軸1.50m×短軸(0.53)m×深さ0.05m、方位はN-11°-Wを示す。平面形は楕円形である。火床は1ヶ所検出された。火床の東側は極めて火熱を被り、いわゆるカリカリとなっているものであった。覆土は捉えきれなかった。また、出土遺物は極めて少なかった。

所見 火床の新旧関係は調査時において、F125a、F125bの火床a・bの順に新しくなるものと捉えられた。

F124

遺構 K7-100-3gにて検出。大きく2つのピットの重複の炉穴である。このため全体の平面形は、不整形となっている。

F124aは長軸1.54m×短軸1.06m×最深0.38m、方位はN-57°-Wを示している。平面形は石匙状である。火床は1ヶ所検出されているが、焼土粒がやや散在する程度である。

F124bは長軸2.47m×短軸1.90m×最深0.50m、方位はN-74°-Eを示している。平面形は小さなL字形である。火床は2ヶ所検出されている。火床cはソフトロームの坑底をさらに掘り込み、強く赤化した火床が残されていた。また、火床bは範囲の狭い小さな火床で、やや焼土が散在する程度である。火床は大きな坑の底の、深さ0.15mの東壁寄りに残されている。

遺物 本炉穴からは撲糸文系土器片と貝殻条痕文系の土器片が併せて17片出土しているが、いずれも小破片であり、量的にはどちらが多いともいえない出土量であった。1は磨石で、長径10.1cm×幅8.1cm×厚さ3.8cmである。

所見 大きく2基の炉穴の重複であった。火床a・bとも範囲が狭く、使用期間が長いものとは捉えられなかった。

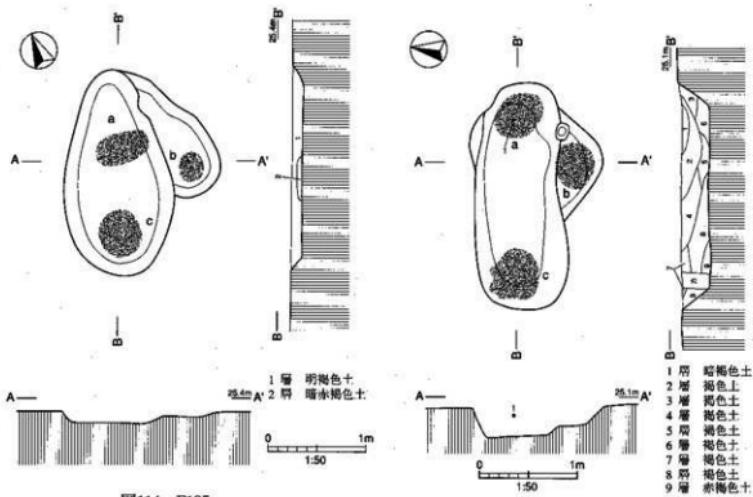


図114 F125

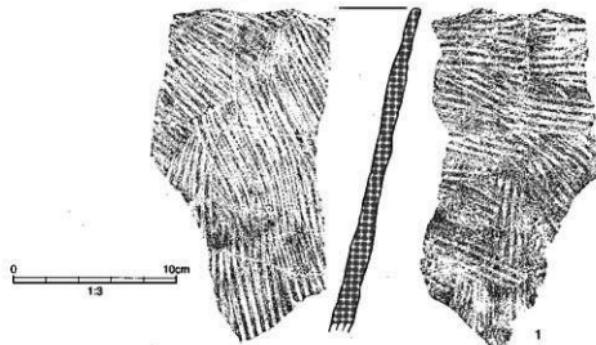


図115 F126

F126

遺構 L7-28-3gにて検出。最低3基の炉穴の重複と捉えられた。

F126aは長軸不明×短軸1.39m×深さ0.29m、方位は不明である。平面形は、方形に近いものと推定される。火床はF126bの覆土に及び、覆土は褐色土と暗褐色土との自然堆積であった。

F126bは長軸2.30m×短軸0.94m×深さ0.30m、方位はN-85°-Eを示している。平面形は不整橢円形である。火床は2ヶ所検出し、いずれも赤化していた。

覆土は3～6層がF126bの火床bに、7～9層が火床cに伴う。遺物はF126a・bを併せて26点であった。1は火床aに伴うも口縁部片で、外面は斜位に、内面は横と斜位の貝殻条痕を施している。

所見 火床の新旧は火床bがaより新しいが、火床aとcの新旧関係は捉えられなかった。

第3項 土坑

上谷遺跡Ⅱ地区において、縄文時代の土坑として捉えた遺構は29基である。この中には竪穴状遺構や陥穴、やや規模の大きな凹み状の遺構なども含まれている。また、炉穴の可能性も否定できないが、炉穴とするには判断資料の乏しいものについては土坑として扱うこととした。しかし土坑の多くは、その用途を明瞭にしえないものであった。

なお、Ⅱ地区における土坑の全体的な傾向としての所属時期であるが、早期末葉の貝殻条痕土器片を包含する土坑が多く、この時期が主体を占めると考えられる。しかし、中期・五領ヶ台期の土坑（竪穴状遺構）が検出されたのは、上谷遺跡を含めて八千代市周辺域にとては新たな知見となっている。

土坑の占地では、全体としてはⅡ地区の北東側の17・18・21・22地区が多く所在し、東側の19地区や南側の16地区には少ない傾向が窺えた。

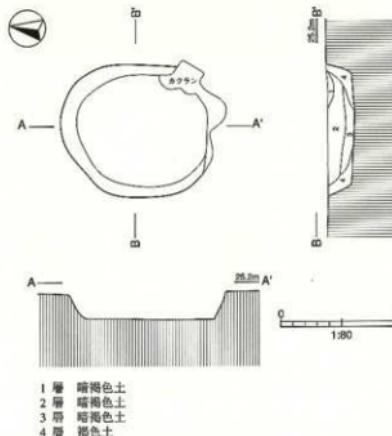


図116 D044

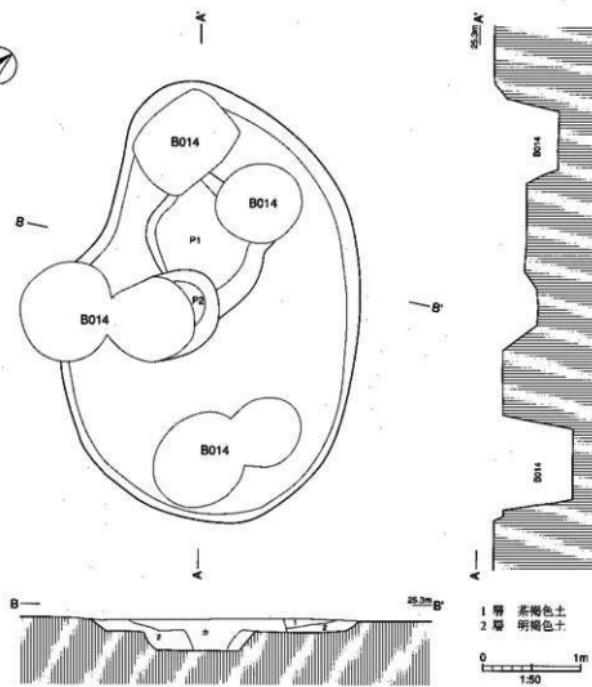
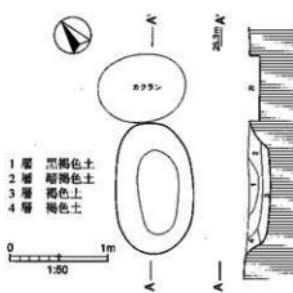
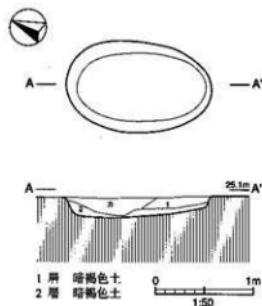
D044

遺構 K7-31-4gからK1-41-2gにわたって検出した、竪穴状遺構である。長軸2.47m×短軸2.16m×壁高0.43m、方位はN-9°-Wを示している。平面形は、ほぼ円形である。ハードロームを掘り込み坑底とし、若干の凹凸はあるが土間状をしている。壁の立ち上がりは全体的に急ではあるが、西壁側においてはやや立ち上がりの角度が緩いものとなっている。坑底の確認では、柱穴や炉を検出するべく精査したが、それらはともに検出できなかった。

なお、本遺構の覆土は暗褐色土を中心とする自然堆積であった。

遺物 出土遺物は極めて少なく、図示はできなかったが、中期・五領ヶ台式の土器片2片と礫2点が散在して出土したのみであった。

所見 初期、小規模な竪穴住居跡と想定して調査をおこなったが、坑底を精査したにも係わらず柱穴や炉が検出できなかったこと、また、床の硬化面も明瞭にしえなかったこと等から竪穴状遺構と捉えることとした。本遺構の所属時期については、遺物の出土が極めて少なく判然としないこともあるが、少ないが五領ヶ台式の土器片の出土や、今後報告する調査地点であるⅢ地区の該期の遺構と覆土が近似するため、中期・五領ヶ台期として捉えられた。



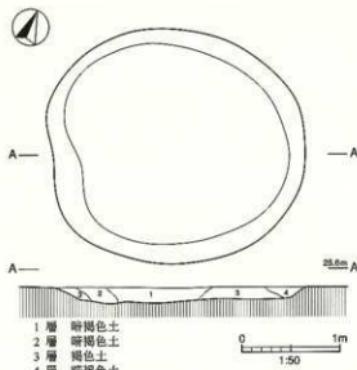


図120 D056

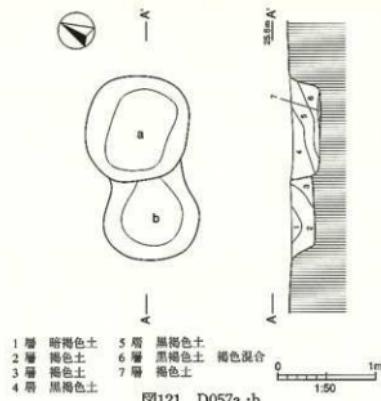


図121 D057a・b

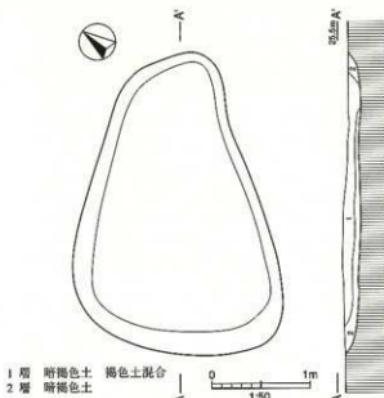


図122 D058

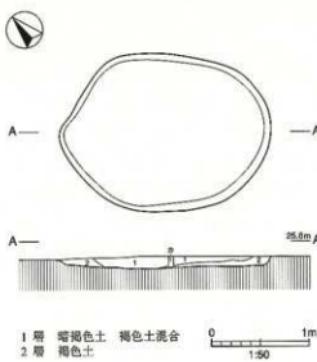


図123 D059

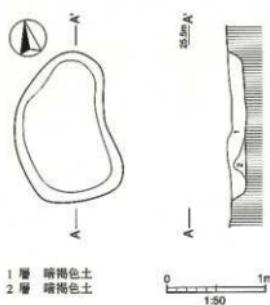


図124 D064

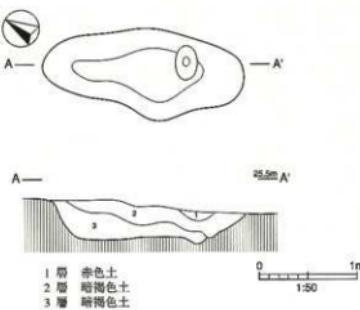


図125 D065

D048

遺構 K7-42-4gにて検出した。長軸1.50m×短軸0.95m×深さ0.21m、方位はN-18°-Wを示している。平面形は橢円である。ソフトロームを掘り込んだ坑底は平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がっている。覆土は暗褐色土を主体とした自然堆積であり、若干、焼土粒や炭化粒を含んでいた。

遺物 本遺構からは土器片は出土せず、小礫1点が出土しただけである。

所見 所属時期を決定する遺物の出土がなく、本土坑の所属時期はやや不明瞭となっている。しかし、覆土の状況等から貝殻条痕文期の所産と捉えた。

D050

遺構 K7-63-2・4g、K-7-64-3gにて検出した。長軸1.35m×短軸0.79m×深さ0.21m、方位はN-40°-Eを示している。平面形は橢円形である。ソフトロームを掘り込んだ坑底は平坦であるが、壁は検出面にむかって外反するようにやや斜めに立ち上がっている。覆土は、床直上層から覆土下層は褐色土、覆土上層は暗褐色土を主体とした自然堆積であった。

遺物 本土坑から出土した遺物はなかった。

所見 所属時期を決定するための遺物の出土がないが、覆土の状況等から貝殻条痕文期の所産と捉えた。

D051

遺構 K7-63-1・2g、K7-53-3gにて検出した。長軸4.45m×短軸2.94m×深さ0.11m、方位はN-50°-Wを示している。平面形は不整形で、しいてあげるなら米粒形である。平面規模が大きく、掘り込みの浅い凹み状の土坑として捉えられた。ソフトロームを掘り込んだ坑底には、浅くビットP1が掘り込まれていた。P1の本坑からの深さは0.20mである。坑底には、硬化面として捉えられるものは確認できなかった。また、壁はやや斜めに立ち上がっている。覆土は褐色土を主体とした堆積であるが、搅乱も著しく自然堆積か捉えづらいものであった。

遺物 遺物は貝殻条痕文系土器片を中心に、小破片のみが出土している。奈良・平安時代の掘立柱建物跡との重複のためと思われるが、土師器片も混入していた。

所見 遺物の量や覆土等から、貝殻条痕文期の所産と捉えられた。本遺構は調査においては堅穴状遺構として把握したものであるが、掘立柱建物跡との重複のため極めて捉えにくい遺構となっている。

D056

遺構 J7-70-4g、J7-80-2gにて検出した。長軸2.55m×短軸2.42m×深さ0.14m、方位はN-20°-Wを示している。平面形は円形である。ソフトロームを掘り込んだ坑底はほぼ平坦であり、壁の立ち上がりはやや斜めである。覆土は暗褐色土を主体としている。

遺物 貝殻条痕文土器の小片が、やや多く出土している。

所見 出土遺物から、本土坑の所属時期を貝殻条痕文期として捉えた。

D057a・b

遺構 J7-70-3・4gにて検出した。2基の土坑の重複である。

D057aは、長軸1.12m×短軸1.03m×深さ0.30m、方位はN-13°-Wを示している。ソフトロームを掘り込み坑底としているが、坑底は方形を意識しているかもしれない。壁は、急に立ち上がっている。覆土は褐色土を主体とした自然堆積であるが、北西方向からの流れ込みが大きくなっている。

D057bは、長軸(0.73)m×短軸0.99m×深さ0.23m、方位はN-55°-Eを示している。ソフトロームの坑底はほぼ平坦であり、壁は比較的急に立ち上がっている。覆土は黒褐色土を主体とする。

- 遺物 D057a・bの土坑を併せて、貝殻条痕文土器片が2片出土したのみである。
- 所見 重複した土坑の新旧関係は、覆土からD057bが自然堆積後に、D057aによって掘り込まれており、このことからD057bが古く、D057aが新しい時期の所産と捉えられた。また、遺構の所属時期であるが、いずれも貝殻条痕文期の所産として捉えられた。
- D058
- 遺構 J7-70-3g、J7-80-4gにて検出した。長軸3.10m×短軸2.09m×深さ0.13m、方位はN-55°-Eを示している。平面形は台形状であり、平面規模に対して深さのない土坑である。ソフトロームを坑底として、やや凹凸があるものの比較的平坦な坑底である。壁はやや斜めに立ち上がっている。覆土は、褐色土を主体とした自然堆積である。
- 遺物 極めて少ないが、貝殻条痕文土器片が出土している。
- 所見 出土遺物より、早期、貝殻条痕文期の所産と捉えられる。
- D059
- 遺構 J7-79-3g、J7-89-1gにわたって検出した。規模は長軸2.16m×短軸1.63m×深さ0.13m、方位はN-46°-Wを示している。平面形は米粒状である。ソフトロームを浅く掘り込みほぼ平坦な坑底とし、壁はやや斜めに立ち上がっている。覆土は褐色土を主体とした、自然堆積であった。
- 遺物 遺物は出土しなかった。
- 所見 調査においては炉穴として扱っていたが、火床が不明瞭であり、明確に炉穴と判断するには資料が乏しすぎる遺構である。このため土坑として分類した。所属時期の根拠となる遺物の出土はなかったが、覆土の状況などから、早期、貝殻条痕文期の属する土坑と捉えた。
- D064
- 遺構 K8-3-3gにて検出した。長軸1.53m×短軸0.94m×深さ0.20m、方位はN-4°-Eを示している。平面形は中折れした長方形状である。
- ソフトロームを掘り込みほぼ南東にむかって緩く傾斜する坑底で、坑底中央にはやや凹みが認められる。壁はやや斜めに立ち上がっている。覆土は暗褐色土を主体としていた。
- 遺物 極めて少なかった。土錘が1点出土している。土錘は遺存長径3.2cm×短径2.6cm×器厚1.2cm、現存重量12gのもので、貝殻条痕文の深鉢形土器の口縁部を使用している。外面は斜めに断面三角形の隆帯により文様帯を区画して、区画内に斜行した沈線を施している。
- 所見 出土遺物から、所属時期は貝殻条痕文期と捉えた。また、本土坑は、調査においては、凹み状の遺構として捉えられていたものである。
- D065
- 遺構 K8-12-2g、K8-13-1gにわたって検出した。規模は、長軸1.53m×短軸0.94m×深さ0.20m、方位はN-24°-Wを示している。平面形は不整形な長椭円形である。坑底はほぼ平坦であるが、北側がやや低くなっている。壁はやや緩く斜めに立ち上がっている。覆土は、暗褐色土が主体である。坑底から浮いた状態で、焼土が若干確認されている。
- 遺物 貝殻条痕文土器片が出土しているが、出土した遺物は少なかった。
- 所見 当初、調査においては炉穴として捉えられた遺構であった。しかし、坑底から浮いて確認された焼土も明瞭ではなく、火床も認められず、土坑として扱うこととした遺構である。所属時期については、出土遺物は少ないが貝殻条痕文期として捉えた。

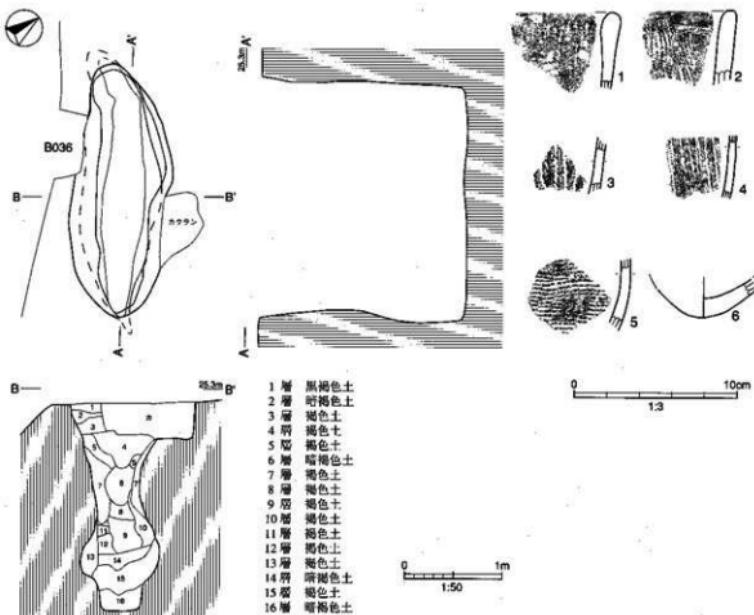


図126 D066

D066

遺構 K8-13-1・3gにわたって検出した。長軸2.70m×短軸1.02m×深さ2.15m、方位はN-60°-Wを示している。平面形は幅のない長楕円形である。陥穴として捉えられる遺構である。遺構はハードドームを深く掘り込んでおり、坑底はほぼ平坦であるが、長軸方向にオーバーハンジしている。オーバーハンジをいたれた坑底の最長は、2.98mを測ることができた。また、壁面も坑底から0.50m付近で、短軸方向においてもオーバーハンジしていた。

覆土 覆土は、壁の崩落及び崩壊したロームを中心とした褐色土が主体であるが、覆土上層では暗褐色土や黒褐色土が堆積していた。

遺物 出土遺物は、撲糸文系の土器片が少量出土したが、この種の遺構としては出土遺物は多いほうである。1～4は撲糸文の土器片である。1は口縁部が肥厚するものである。2はやや斜めに撲糸文が施されるが、1・3・4は継に施されている。5は単節縄文を施したものである。6は尖底部である。1～4・5は夏島式であり、5は後期・加曾利b式である。

所見 遺構の形態から、陥穴として捉えられるものである。覆土からは坑底に暗褐色土が自然堆積した後に、壁等の崩落、崩壊によるロームの大きなブロック状の堆積が行われながらも、暗褐色土が順次、自然堆積していく様子が把握できた。また、本土坑の所在位置は台地の平坦面が広がる一画に設けられており、斜面部及び斜面がはじまる位置ではなかった。

なお、本土坑の所属時期については、遺物が少なく判断資料が乏しいのが現状である。しかし、撲糸文系土器片が覆土下層より出土していることから、土器片の当該期ではないにしても早期の所産であると捉えられると考えている。

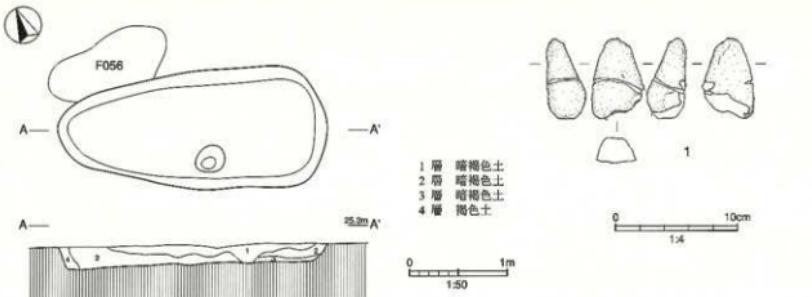


図127 D068

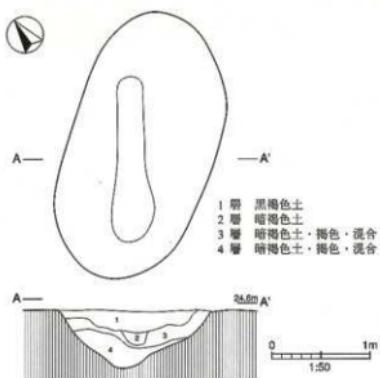


図128 D070

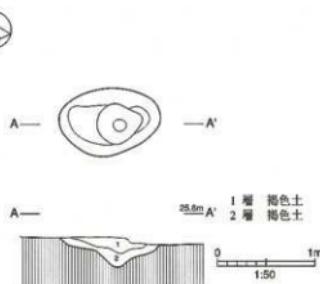


図129 D071

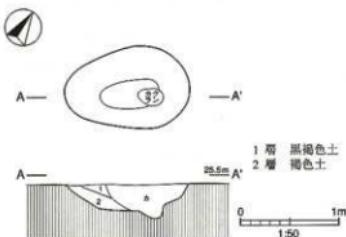


図130 D072

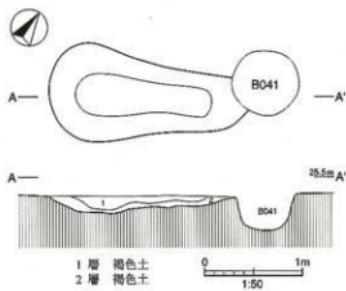


図131 D073

D068

遺構 K8-32-4gにて検出した。長軸2.76m×短軸1.25m×深さ0.23m、方位はN-66°-Wを示している。平面形は長軸の長い三角形である。ソフトロームを掘り込んだ坑底はほぼ平坦であり、浅いピットが掘られている。覆土は、暗褐色土を主体とした自然堆積後、再度、掘り返されて堆積している。

遺物 遺物は極めて少ないが、図示した用途不明の石器が1点出土している。石器は泥岩であり、先端部を欠損しているが、自然面を全面に残したものである。ほぼ中央に線刻状の刻みが入っている。

所見 本土坑は覆土から、一度掘り返されたことが分かるが、その目的は不明である。また、用途不明の石器が出土しているが、自然石をほとんど加工せずに縄を掛ける刻み目を施した石錐と考えられる。

D070

遺構 J8-39-4gにて検出した。長軸2.81m×短軸1.50m×深さ0.58m、方位はN-49°-Eを示している。平面形は長楕円形であるが、上場と坑底の平面形がずれる土坑である。坑底はソフトロームとハードロームの境界付近であり、長軸方向の坑底は南から北に向かって傾斜している。壁は斜めに立ち上がっている。覆土は、坑底より褐色土、暗褐色土、黒褐色土の複雑な堆積であり、自然堆積とは考えられなかった。

遺物 出土遺物はなかった。

所見 時期を決定すべき出土資料はなかった。しかし、覆土等から縄文時代の土坑と捉えたが、時期は不明である。本土坑の立地は、斜面部に所在している。

D071

遺構 J8-19-3gにて検出した。長軸1.03m×短軸0.69m×深さ0.09m、方位はN-56°-Wを示している。平面形は楕円形である。坑底を平坦面とし、さらに0.18m程掘り下げて擂鉢状のピットを設けたものである。覆土は、褐色土を主体とした自然堆積である。

遺物 出土遺物はなかった。

所見 時期を決定すべき出土資料はなかった。しかし、覆土等から縄文時代の土坑と捉えたが、時期は不明である。

D072

遺構 J8-8-4gにて検出した。長軸1.27m×短軸0.86m×深さ0.27m、方位はN-49°-Eを示している。平面形は卵形である。坑底は西から東へ、やや緩い傾斜をもっている。覆土は、褐色土の自然堆積であった。

遺物 貝殻条痕土器片が少量出土している。

所見 時期を決定すべき出土資料が少なく、また、流れ込みの可能性も否定できない出土状態であった。このため、所属時期については早期と捉えておきたい。

D073

遺構 J7-98-4g、J7-99-3gにわたって検出した。規模は、長軸2.05m×短軸1.01m×深さ0.19m、方位はN-64°-Eを示している。平面形は一方が広がる楕円形で、ヘチマ状である。坑底はやや凹凸のあるもので、壁面から坑底にむかってダラダラと下るような土坑である。覆土は、褐色土の自然堆積である。

遺物 出土遺物はなかった。

所見 縄文時代の土坑か疑問も残るが、覆土等から縄文時代の所産と判断した。

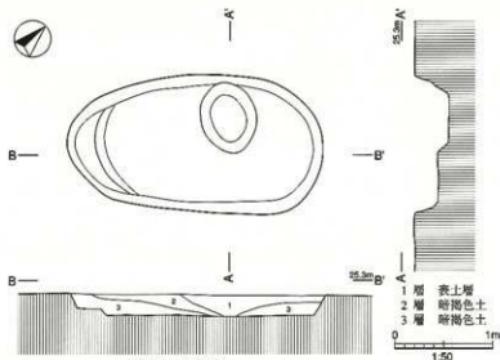


図132 D076

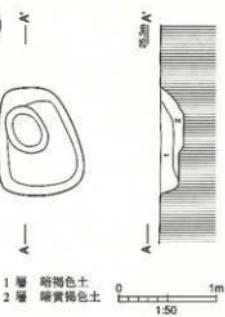


図133 D077

D076

遺構 K8-7-4gにて検出。長軸2.63m×短軸1.42m×深さ0.22m、方位はN-49°-Eを示す。平面形は稍円形であった。北東壁際に狭いテラス状の平坦面を残し、一段下がった坑底も平坦である。また坑中央の西壁際に、浅い皿状のピットを掘り込んでいる。壁の立ち上がりは急である。覆土は、暗褐色土の自然堆積である。

遺物 遺物出土はなかった。

所見 時期決定の資料はなかったが、形状や覆土から、早期・貝殻条痕文期の所産と捉えた。

D077

遺構 K8-16-4gにて検出。長軸1.13m×短軸0.88m×深さ0.25m、方位はN-10°-Wを示している。坑底は平坦であり、北壁際にさらにピットを掘り込んでいる。南壁はほぼ垂直に立ち上がり、北壁は傾斜をもっている。覆土は暗褐色土と黄褐色土の自然堆積であった。

遺物 貝殻条痕文土器片が、若干出土している。

所見 出土遺物から、本土坑は早期・貝殻条痕文期の所産と捉えられた。

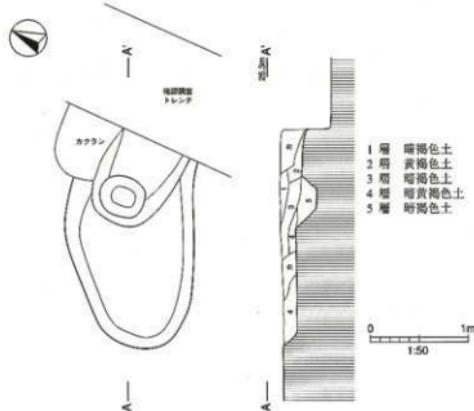


図134 D079

D079

遺構 K8-17-3gにて検出。長軸(2.21)m×短軸1.32m×深さ0.35m、方位はN-65°-Eを示す。平面形は不整形である。最低3基の土坑の重複と捉えられた。坑底はほぼ平坦であり、壁の立ち上がりはやや斜めとなっている。覆土は、いずれも暗褐色土を主体としている。

遺物 磨条文、貝殻条痕文土器片を中心に、須恵器片も若干混在している。

所見 所属時期は、遺物や覆土等から、いずれも早期・貝殻条痕文期と捉えた。

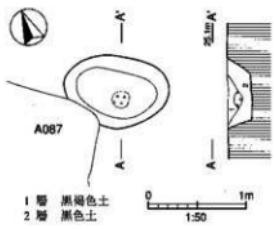


図135 D082

遺構

長軸1.09m×短軸0.74m×壁高0.26m、方位はN-48°-Wを示している土坑である。平面は梢円形であり、ハードロームを掘り込んだ坑底はほぼ平坦である。壁面はやや斜めに急激に立ち上がるもので、断面形は上場がやや開くU字形となっている。

覆土は色調を基準にして2層に分層できた。貝ブロック投棄以外は自然堆積である。

遺物

土器や石器など時期を確定する遺物

は出土していない。しかし覆土中において、鹹水性の8種で構成される貝ブロックが認められた。貝種はオキシジミを主体とし、ハイガイがこれに次ぎ、マガキも若干出土している。また、僅かではあるがアサリ・ハマグリ・シオフキ・マテガイも確認されている。

所見 本土坑の廃絶後、自然堆積により土坑が埋まった後に、貝が投棄されレンズ状に堆積したものと判断された。貝ブロックの規模や量、覆土の状況から、一時に廃棄されたものと考えられる。貝ブロックの大きさは、拳大で小規模なものであった。貝ブロックから検出した貝種は何れも泥底に生息する貝種であるが、本土坑の貝ブロックにおいて特徴的な貝はハイガイの出土であった。土器が無いため時期の判断が困難であるが、ハイガイの出土は印旛沼周辺の遺跡においても早期～前期前半として捉えており、また、本土坑の周辺の遺構状況より縄文時代早期前半の貝殻条痕文期の所産と捉えられよう。

表3 D082貝ブロック出土貝種構成表

項目 貝種	枚数			重量(kg)			備考
	区分	点数	点数割合	区分重量	種別重量	重量割合(%)	
オキシジミ	左	136	32.69	0.1844	0.4908	59.15	微少細片 破片数として把握できず
	右	142	34.13	0.1619			
	微小			0.1445			
ハイガイ	左	64	15.38	0.123	0.273	32.90	微少細片 破片数として把握できず
	右	49	11.78	0.110			
	微小			0.040			
マガキ	左	5	1.20	0.017	0.066	8.00	微少細片 破片数として把握できず
	右	10	2.40	0.033			
	微小			0.016			
アサリ	左	1	0.24	—			
	右	1	0.24	—			
	微小	0					
ハマグリ	左	2	0.48	—			
	右	0					
	微小	1	0.24	—			
シオフキ	左	1	0.24	—			
	右	0					
	微小	0					
マテガイ	微小	2	0.48	—			ダンベエキサゴ?
微小貝殻片		2	0.48	—			
計		416	99.98	—	0.8298		

D083

遺構 K8-42-2・4g、K8-43-1・3gにて検出。長軸1.09m×短軸0.74m×深さ0.53m、方位はN-92°-Eを示す。平面形は橢円形である。長軸を東西にとった土坑であり、坑底の凹凸は激しかった。火床は検出されなかった。壁は急に立ち上がり、覆土は東側から投入したような状態であり、人為的な堆積と捉えられた。

遺物 摺糸文および貝殻条痕文土器片が出土している。

所見 F091と重複する土坑であるが、出土遺物より早期・貝殻条痕文期の所産と捉えた。

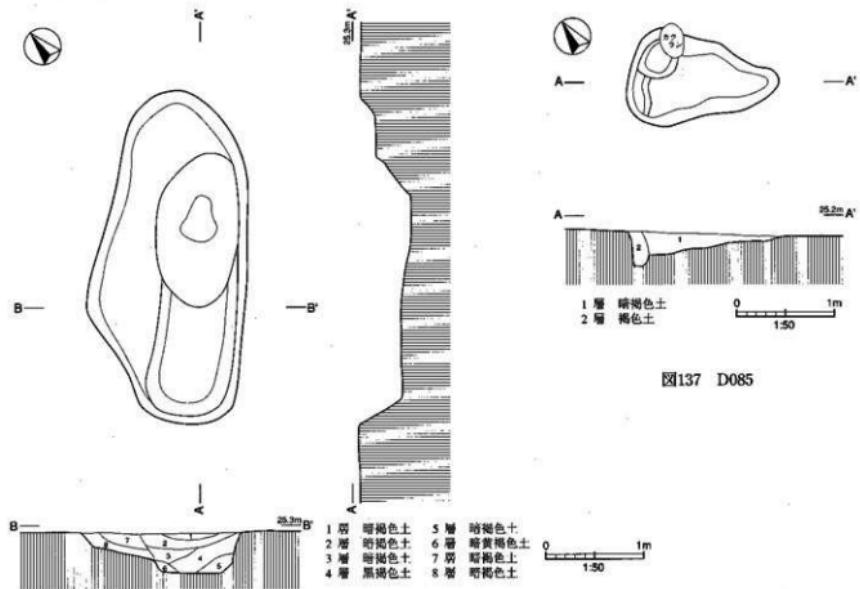


図136 D084

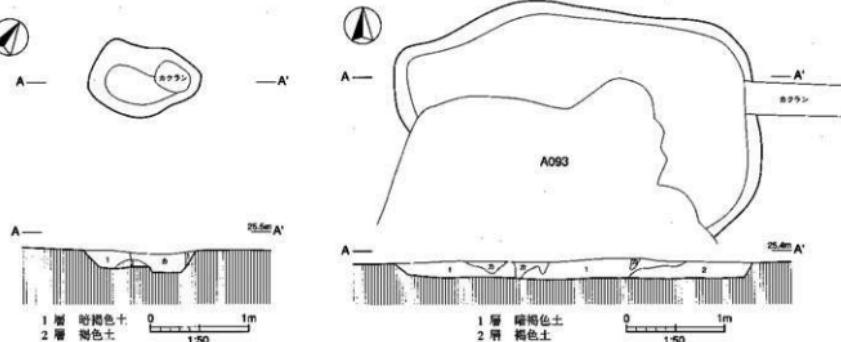


図137 D085

図138 D087

図139 D089

D084

遺構 K7-95-3gにて検出。長軸3.45m×短軸1.63m×深さ0.42m、方位はN-38°-Eを示す。平面形は不整橢円形となっており、最低2基の土坑の重複である。aは深さ0.22mであり、坑底はやや斜めとなっている。覆土は、暗褐色土を主体とした自然堆積である。bの覆土も暗褐色土を主体としているが、人為的な堆積が窺われる。

遺物 遺物は一括して取り上げたため、a・bのいずれの土坑に属するか不明瞭であるが、撲糸文、貝殻条痕文土器片の小片が多い。

所見 覆土はa・bとも暗褐色土を主体としているが、色調の違いで分層した。覆土からは、時間差のない重複と考えられた。また、重複した2基の土坑の新旧関係は、aが古く、bが新しいものである。貝殻条痕文土器片のなかに、野島式が散見できるため、いずれも野島期の所産と捉えた。

D085

遺構 K8-45-1・3・4gにわたって検出した。長軸1.57m×短軸1.02m×深さ0.36m、方位はN-62°-Wを示している。平面形は、歪な三角形状である。東壁際にやや深いピットを伴い、坑底は西壁にむかって凹凸をもしながら次第に高くなっていくもので、坑底と壁の区別がつきにくい土坑であった。覆土は、暗褐色土となっている。

遺物 遺物は、遺構の確認面にて多く出土しており、また、覆土上層に貝殻条痕文土器片がやや多く出土しているが、いずれも小破片であった。チャート小片も4片出土している。

所見 火床が検出されず、土坑として扱うものである。所属時期は、出土遺物から早期・貝殻条痕文期と捉えた。

D087

遺構 K7-67-1gにて検出した。長軸1.09m×短軸0.73m×深さ0.19m、方位はN-74°-Eを示している。平面形は不整形であるが、方形を意識せるものである。ハードロームを坑底として、壁はやや急に立ち上がっている。覆土は擾乱のため不明瞭となっているが、暗褐色土と褐色土との自然堆積と捉えられた。

遺物 貝殻条痕文土器片が、若干出土している。

所見 調査においては、炉穴として捉えた土坑である。しかし火床が検出できなかったため、土坑として扱うこととしたものである。所属時期は出土遺物から、早期・貝殻条痕文期の所産と捉えた。

D089

遺構 K7-45-2・4gにわたって検出した。長軸3.71m×短軸(2.42)m×深さ0.15mであり、方位はN-89°-Eを示している。平面形は隅丸方形である。住居規模の大きさを有する凹み状遺構として捉えた。壁はなだらかに立ち上がっている。坑底はソフトロームであり、硬化面は認められなかった。覆土は暗褐色土と褐色土の自然堆積であった。A093と重複する土坑であり、覆土はその竪穴住居跡によって、失われた部分があった。

遺物 出土遺物は少なかった。

所見 A093と重複するが、覆土の中斷から、本土坑がA093より古いと捉えられた。当初、竪穴住居跡の重複と想定して調査が進められたが、炉や柱穴などは検出されなかった。坑底では床の一部と思われる硬化面も検出できず、大型の凹み状の土坑として捉えることとした。

D091

遺構 K7-85-1gにて検出した。規模は、長軸2.49m×短軸1.13m×深さ2.00mのもので、方位はN-8°-Eを示す。平面形は、幅のない長楕円形である。坑底は長軸方向にオーバーハングし、北壁近くに深さのない浅いピットが検出されている。壁は長軸及び短軸方向共に、壁中位でオーバーハングする。覆土は最下層に黒色土が堆積しているが、下層はロームを主体とした黄褐色土、上層は黒褐色土を主体としている。1~4層はロームをほとんど含まないものであった。

遺物 遺物はほとんど出土していないが、撲糸文及び貝殻条痕土器片が若干出土している。

所見 形態などから、陥穴として捉えられる土坑である。黒色土の自然堆積後、壁のロームの崩壊・崩落によって一気に埋まったと捉えられ、その後、黒褐色土・暗褐色土が自然堆積したものと想定される。本土坑の立地は台地平坦面のなかにあり、斜面部及び斜面がはじまる位置ではなかった。この傾向は約29mと離れているが、D066と同様である。時期は遺物が少なく判断資料が乏しいが、撲糸文期として捉えた。

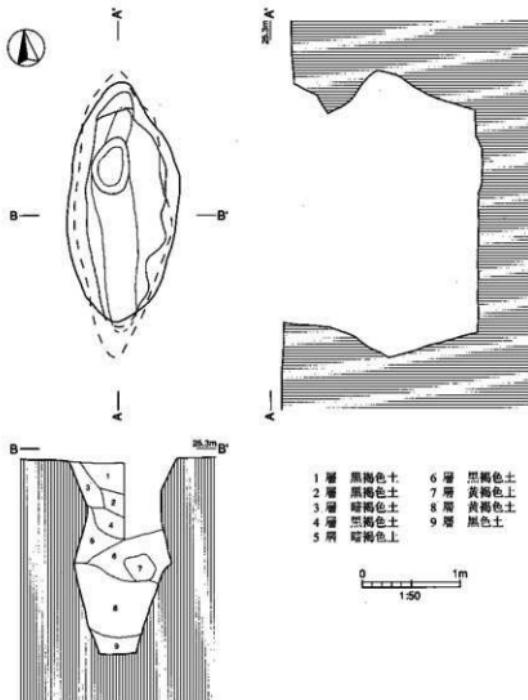


図140 D091

D097

遺構 L7-11-4gにて検出。長軸1.05m×短軸0.74m×深さ0.36m、方位はN-41°-Eを示す。平面形は不整形である。坑底の平面形は不規則であり、蛸足状である。覆土は、暗褐色土を主体とする。遺物はなかった。用途不明の土坑であり、覆土から縄文時代としたが、時期は不明である。

D098

遺構 K7-30-2・4g、L7-21-3gにわたって検出。長軸3.15m×短軸1.50m×深さ0.21m、方位はN-50°-Eを示す。平面形は長楕円形である。坑底は、北壁から南壁にかけて緩く傾斜しており、北側はやや硬くなっている。覆土は褐色土を主体としている。遺物は、貝殻条痕文土器片が若干出土している。凹み状の遺構であり、遺物から早期・貝殻条痕文期と捉えた。

D099

遺構 K7-23-3gにて検出。長軸1.17m×短軸0.75m×深さ0.15m、方位はN-53°-Eを示す。平面形は椭円形である。ソフトロームを坑底とし、南東側に緩く傾斜している。壁はなだらかに立ち上がっている。覆土は、褐色土を主体としたもので、稀に焼土が混じっている。遺物は出土しなかった。覆土から、縄文時代の土坑と判断したが、時期は不明である。

D100

遺構 K7-2-2gにて検出。長軸0.91m×短軸0.68m×深さ0.38m、方位はN-60°-Eを示す。平面形は円形である。掘り込みはやや深く、ハードロームを坑底とするが、土坑としてもやや不明瞭な遺構である。覆土は暗褐色土を主体として、稀に焼土を含んでいる。

遺物 遺物は出土しなかった。

所見 覆土から、縄文時代の土坑と判断したが、時期は不明である。

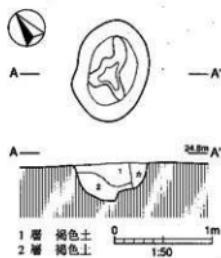


図141 D097

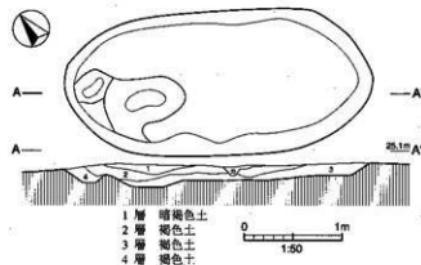


図142 D098

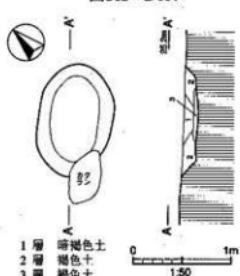


図143 D099

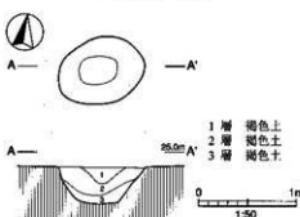


図144 D100

第2節 弥生時代

上谷遺跡では、I地区からV地区に分けて調査の成果を報告することとしているが、弥生時代の竪穴住居跡もこの5地区にわたり検出しているものである。また、竪穴住居跡群は5地区的うち、I地区・II地区・III地区・IV～V地区にわたる4カ所の地点に分かれて集落を検出しており、遺構数の多寡に大きな違いがあることが特徴的である。平成13年度に報告したI地区は、上谷遺跡に東側から入り込む谷頭によって地形的に区分される地区であり、この地区的北側に竪穴住居跡34軒・方形周溝墓1基・土坑1基が検出されており、後期・久ヶ原期から弥生町期にわたって集落を展開していたことが捉えられている。また、久ヶ原式土器・弥生町式土器とともに、印彌沼周辺に特徴的な土器もあわせて出土していた。

今回、ここに報告するII地区の弥生時代は、この上谷遺跡に入り込む谷頭の南側の一画に位置している。そしてこの谷頭の南に、谷津に沿うように所在する遺構群である。検出した遺構は、竪穴住居跡2軒と土坑（竪穴状遺構）1基と少ないものであった。

I地区の弥生時代の集落とII地区の各遺構は最も近い遺構でおよそ90m離れており、今後に報告するIII地区の弥生時代の遺構とも270m程離れている。I地区的古墳時代初頭の竪穴住居跡とはさらに距離があり、本地区の弥生時代は、距離からみるとやや孤立した遺構群となっている。

同じ台地の北西に所在し、上谷遺跡と隣接する栗谷遺跡は、弥生時代中期・宮ノ台期の集落と方形周溝墓が検出されており、位置を変えながら後期・久ヶ原期から弥生時代終末・古墳時代初頭へと集落が形成された遺跡である。しかし上谷遺跡ではI地区・II地区とも中期・宮ノ台期の遺構は検出されず、遺跡の姿の趣を異にしている。両遺跡とも整理を進行させている状態であり、後期の集落については、上谷遺跡、栗谷遺跡の間にわたって将来的に再検討しなければならないと考えている。

なお、本地区における遺構で明確に弥生時代の遺構とされるものは竪穴住居跡1軒であり、他の竪穴住居跡1軒と竪穴状遺構1基はその時代決定について明瞭な資料が得られず、弥生時代終末から古墳時代初頭と考えられるものであった。遺構数も少なく、弥生時代から古墳時代初頭と捉えられるため併せてここで報告することとした。

第1項 弥生時代の遺構

先述したように、上谷遺跡II地区での弥生時代の検出された遺構は、竪穴住居跡2軒と土坑（竪穴状遺構）1基のみであった。規模の比較や立地の検討等ができる遺構数のため、本地区の弥生時代は上谷遺跡の全体の整理の進行をまって考えていきたいが、各遺構はいずれも近接しており、標高25mの台地平坦部の縁辺に位置していることを指摘しておきたい。また、各遺構からの出土遺物は、ともに極めて少なかった。

以下、各遺構について報告するが、弥生時代については遺構数が少ないので、竪穴住居跡と土坑（竪穴状遺構）を別立にせず報告することとした。

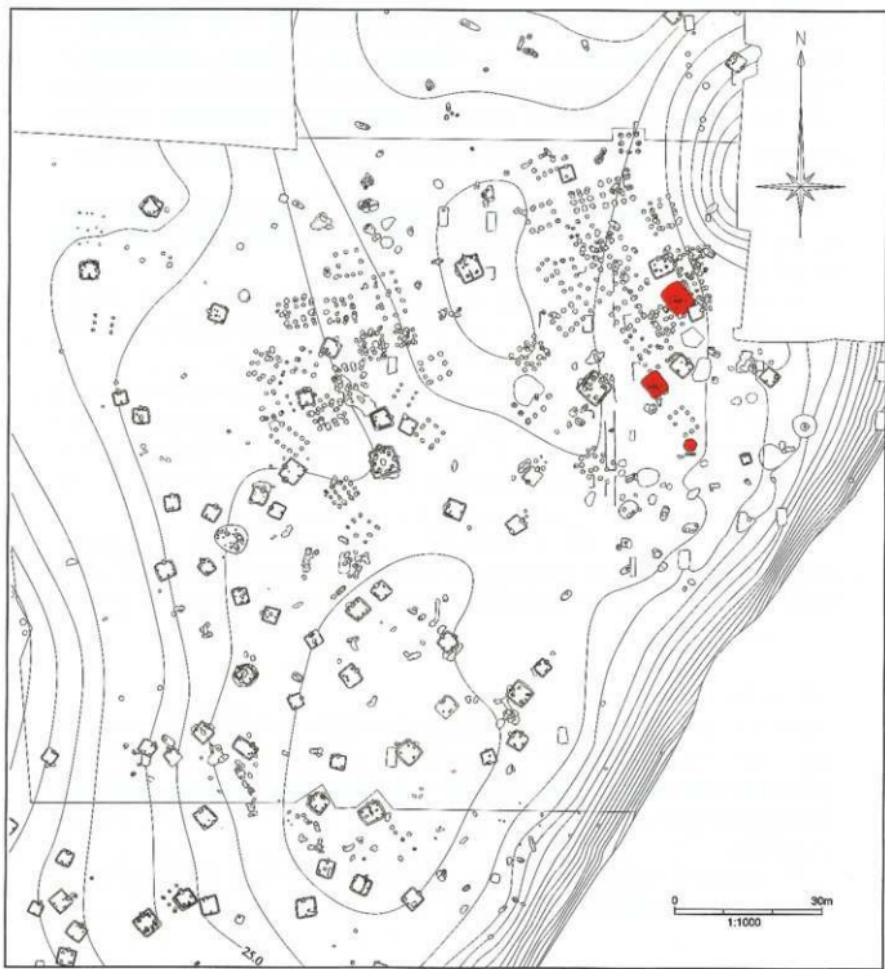


図145 弥生時代遺構配置図

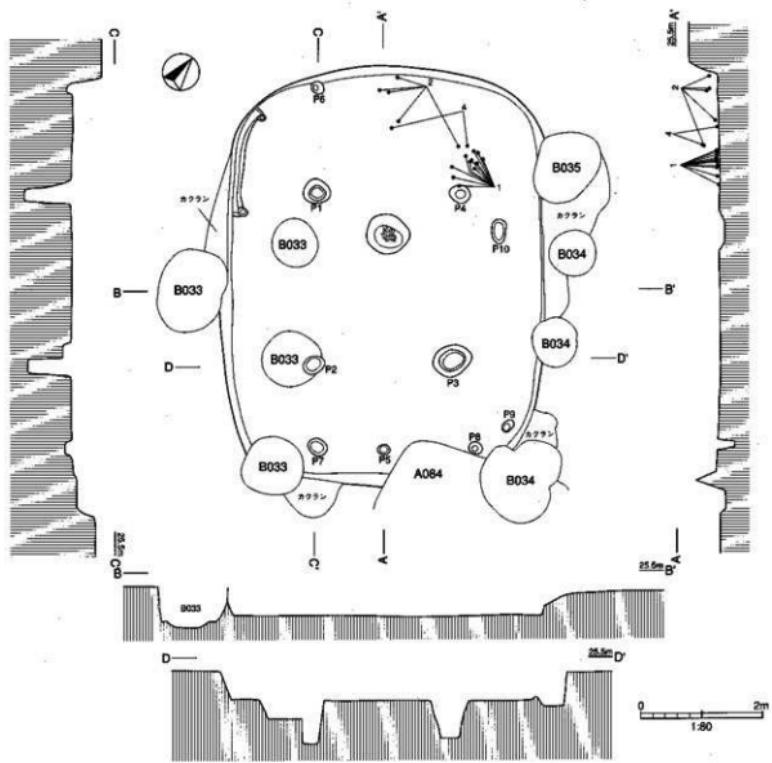


図146 A081

表4 A081遺物観察表

(単位cm)

No	種別 器形	法量 成形・調整等の特徴	色 焼	調 成	胎 土	遺存	備 考
1	赤生 堀	18.6×6.90×24.4 口縁一折り返し 口唇及び口縁にR L単筋繩文。下端は押圧する。颈部は無筋と単筋の結節繩文。剣部は熱糸文を施す	暗 褐 青	砂粒少	完形	底部	木葉痕
2	弥生 堀	—×7.00×(18.8) 外面 热糸文 内面 ナデ	暗 褐 青	砂粒多	胴下半 ～底部	底部	木葉痕
3	土師器 堀	—×4.00×(3.10) 外面 ハケ目 下端一指による押圧 内面 ハケ目 底部ややもちあがる	黒 褐 硬	雲母	胴下半 ～底部		
4	土師器 台付堀	—×9.80×(6.20) 台部のみ 外面 ハケーナデ 内面 ナデ→指頭のおさえ	褐色	雲母	台部		
5	土師器 堀	—×— ロクロ成形	褐	雲母	破片	墨書	体部外面 「□」
6	土師器 堀	(15.8)×—×(12.7) 外面 口縁一ハケ後ナデ 脚部一痕いハケ 内面 口縁一ハケ後ナデ 脚部一ナデ	明 褐 硬	雲母 長石	口縁～ 胴上部	台付堀？	

A081

検出地区 K8-21-3・4g、K8-22-3g、K8-31-1・3g、K8-32-1gのグリッドにわたって検出された。

遺構 長軸6.82m×短軸5.13m×深さ0.45m、主軸方位N-39°-Wを示し、平面形はやや胴張の隅丸方形であり、やや大きな竪穴住居跡である。ハードローム上部を床としており、P3とP5間に硬化面が形成されていた。炉は住居北東の主柱穴近くに設けられている。主柱穴はP1～4の4本を検出し、柱穴の深さは床面よりP1-0.80m、P2-0.77m、P3-0.60m、P4-0.74mとやや深くなっている。P5は出入口のピットと考えられる。支柱穴(P6～10)も検出されている。炉は北東側のP1とP4に近く、そのほぼ中間に設けられている。深さは0.07mであり、火床は凹み状のものであった。周溝は深さ0.04m、幅0.10m程度、西コーナーに一部設けられているだけであった。壁はほぼ垂直に立ち上がるが、上部では一部について壁の崩壊が認められている。

覆土は上層が黒褐色土、中層から床直上層は暗褐色土を主体として、自然堆積したものである。

遺物 覆土上層部では刷毛目の土器片を散見したが、本住居跡からの遺物の出土は少ない。また、土師器の混入等も認められた。

所見 弥生時代の竪穴住居跡からの遺物出土は少ない傾向があり、本遺構もそれに近いものである。床直上層の出土遺物などから、弥生時代後期後半期のものと捉えることができよう。

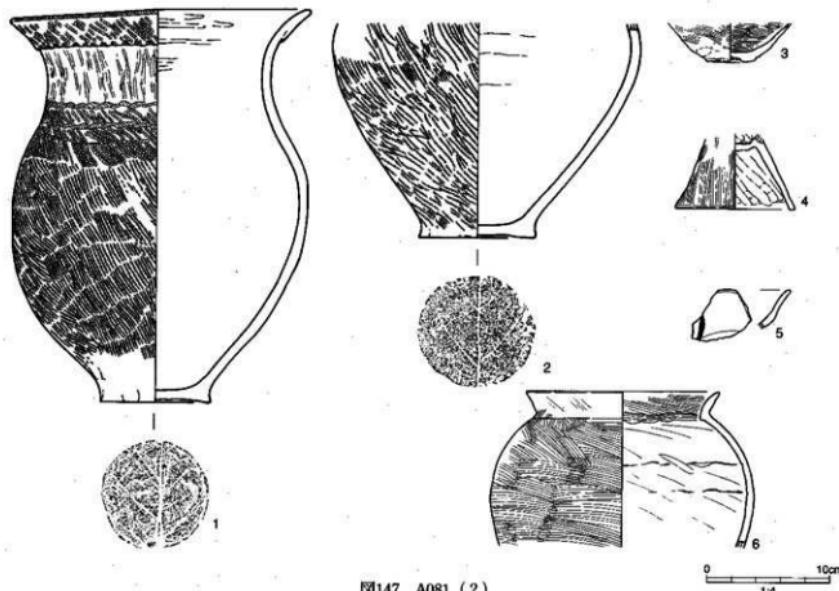


図147 A081 (2)

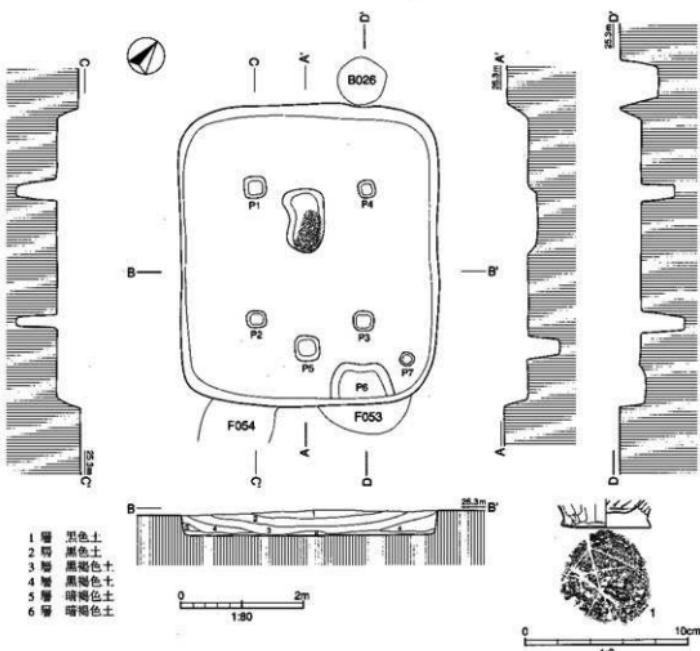


図148 A079

A079

検出地区 K8-23-1・2・3・4gにわたって検出した。

遺構 長軸4.93m×短軸4.15m×深さ0.37m、主軸方位N-38°-Wを示し、平面形は隅丸方形である。床はハードロームに暗褐色土が混じったような床であり、硬化面は認められなかった。壁はやや斜めに立ち上がるるものである。P 1～4が主柱穴であり、床面よりそれぞれ0.50～0.70m程掘り込まれていた。P 5は立ち上がりが住居の壁側が少し傾斜し、それ以外の方向はほぼ真っ直ぐに立ち上がるものであった。出入口に設けられたピットである。炉は住居の中央から北西壁に寄り、P 1とP 4の中間に設けられている。平面は不整形となっており、凹凸のある坑底である。火床は中央からやや南にかけて確認された。

覆土は色調を中心に捉え、上層～中層は黒褐色土を、下層から床直上層は暗褐色土が主体の自然堆積したものである。

遺物 遺物は極めて少ない。縄文時代撚糸文系及び貝殻条痕文系の土器片が少量出土しており、本遺構の出土遺物の主体となってしまっている。古墳時代初頭の土器片も稀に出土している。1は底部木葉痕を残す甕である。胴下端はケズリを行った後にナデによる調整を残し、底部径は7.4cmである。

所見 本竪穴住居跡の床は極めて汚れたような状態であり、床が損壊しているような印象を受けるものであった。主柱穴は方形を意識しているかも知れない。なお、本遺構に伴うと考えられる遺物が1点のみであり所属時期については判然としないが、遺構の平面形及び覆土の状況から、弥生時代後期末～古墳時代初頭に属するものと捉えることとした。

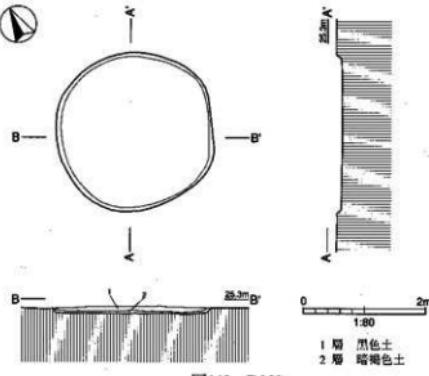


図149 D060

D060

検出地区 K8-34-2gで検出した。調査区の北西域にあたる。

遺構 長軸2.64m×短軸2.56m×深さ0.10m、主軸方位はN-88°-Eを示している。平面形は、やや形状の崩れた円形の土坑である。壁はほぼ垂直に立ち上がり、ソフトロームを掘り込んだ平坦な坑底で、硬化面は確認できず、軟弱なものであった。

本遺構の掘り込みは浅く覆土の堆積状態は良好ではなかったが、床直上層として暗褐色土が、その上に黒色土が堆積しており、2層に分層することができた。覆土の状況からやや判然としないむきもあるが、自然堆積した覆土といえよう。

遺物 本遺構からの遺物出土は少ない。しかも覆土中から、縄文時代の燃糸文系及び貝殻条痕文系土器片が少量出土しているが、出土状況から流れ込みと判断される。弥生時代～古墳時代初頭の土器片は1片のみであった。

所見 本遺構の調査は小規模な竪穴住居跡と判断し着手したが、炉や柱穴、周溝も検出されず、また、掘り込みも浅く、坑底も軟弱であるため竪穴状遺構と判断した。長軸・短軸ともほぼ同規模の竪穴状の土坑であり、主軸方向は異なる可能性もある。本遺構の所属時期については遺物が極めて少ないので判然としない面があるが、覆土の状況などから弥生時代後期～古墳時代初頭と捉えたい。

第3節 奈良・平安時代

上谷遺跡Ⅱ地区における検出された奈良・平安時代の遺構は、竪穴住居跡51軒・掘立柱建物跡56棟・土坑14基にのぼっている。その検出地区の中心は他の時代の遺構分布に対して、ほぼ調査区全体にわたりており、特に、18・22地区の谷頭付近や16・19・21地区的台地平坦部であった。しかし19地区東半部の西側は遺構密度が少なくなる傾向が窺えた。

竪穴住居跡は台地平坦部に多く、平坦部縁辺には少なかった。住居跡の竪による主軸方位は、北東及び北西に多く、北及びそれ以外の方位を示すものは少なかった。また、I地区の竪穴住居群とは距離があり、今後報告するⅢ地区への連続が窺われるものである。

Ⅱ地区における竪穴住居跡の調査によって捉えられた傾向を示すと、住居廃絶後に人為的な土砂の投入により、一気に埋戻した竪穴住居跡が数多く検出されたことである。まるで自然堆積による埋没を待てぬように、整地し平坦面をつくりだすような状態であった。掘立柱建物跡を建てるために埋戻したものというより、掘立柱建物跡群より他の調査地区が多く、竪穴住居跡56軒中25軒がこのような例として確認されており異例な軒数といえよう。一方、自然堆積によって埋没した竪穴住居跡もあり、時期的な差も窺えるものであった。また、人為的堆積や自然堆積を問わず、埋没した竪穴住居跡を掘り返し、不用材などの焼却行為を行ったものも6軒捉えられている。

掘立柱建物跡はⅡ地区の北東地区に所在し、21・22・17地区に集中している。大きく東群と西群の2群に群把握が可能な配置であった。残された掘立柱建物跡の柱穴の覆土では、比較的多くの柱痕が確認されている。重複する掘立柱建物跡の場合、新たに建てられた掘立柱建物に重なって、古い掘立柱建物跡の柱痕が確認されることもある。このように廃絶後の掘立柱建物跡の自然放置による柱の立腐れというより、地上の構造物は撤去するが、柱穴内の柱部分だけ残されたのではないかと捉えられるような検出状況もあった。

Ⅱ地区的出土遺物は、墨書き器を主体として線刻・範書等、文字等が記された土器が多量に出土している。また、朱書きも多くはないが出土している。墨書き器は器種は土師器杯が圧倒的に多いが、皿や須恵器杯、土師器壺や小型壺等にも墨書きされていた。出土した点数は410点となるが、ほとんどは1字である。単字の墨書きは「得」が最も多く、墨書き・朱書き・線刻を含めて97点を数えた。次いで「万」が46点となり、線刻・範書のみの「×」が22点となっている。この出土点数から「得」「万」は、Ⅱ地区の集落の象徴的な文字となっていることが窺えた調査結果である。なお、「則天文字」も使用されていた。

一方、出土点数は少ないが長文の墨書き器が出土している。所謂「延命長寿祈願」の土器であるが、部姓十名前十目的+(祈願年月日)が記されたものや、断片のため部分的にならざるを得ないが、郷名が記されたものもある。また、人面が墨書きされた小型壺も出土している。

以下、遺構区分ごとにⅡ地区的奈良・平安時代を報告することとする。

第1項 竪穴住居跡

上谷遺跡Ⅱ地区における奈良・平安時代の竪穴住居跡は、遺構としては56軒に上っている。竪の再構築もあり、時間的な差を考えるとそれ以上の軒数の竪穴住居の存在として捉えられるが、この遺構分布は先述したようにI地区とはかなりかけ離れており、Ⅲ地区との関係が捉えられるものである。そして台地上平坦部を中心に所在し、縁辺部にはその数は少なくなっている。また、調査区北東部には少なく、北西から南西部にかけてが中心となっていた。以下、竪穴住居跡について報告したい。

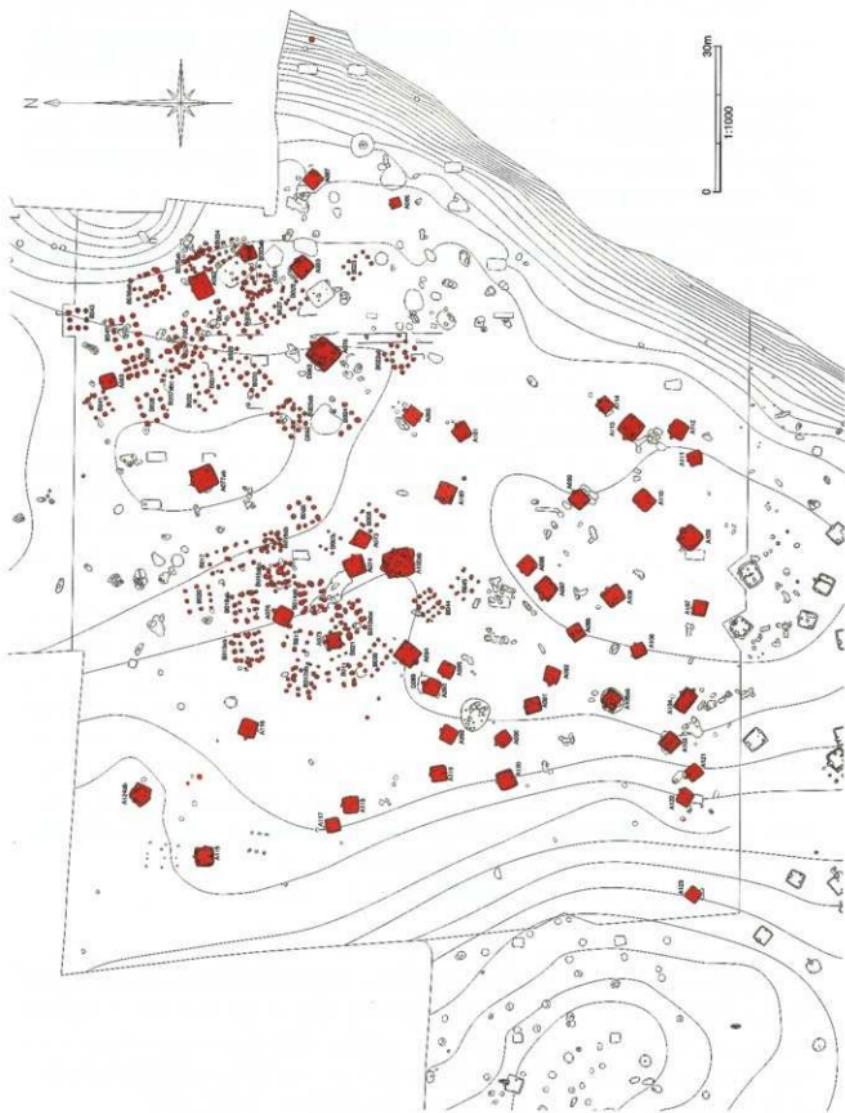


図150 奈良・平安時代遺構配置図

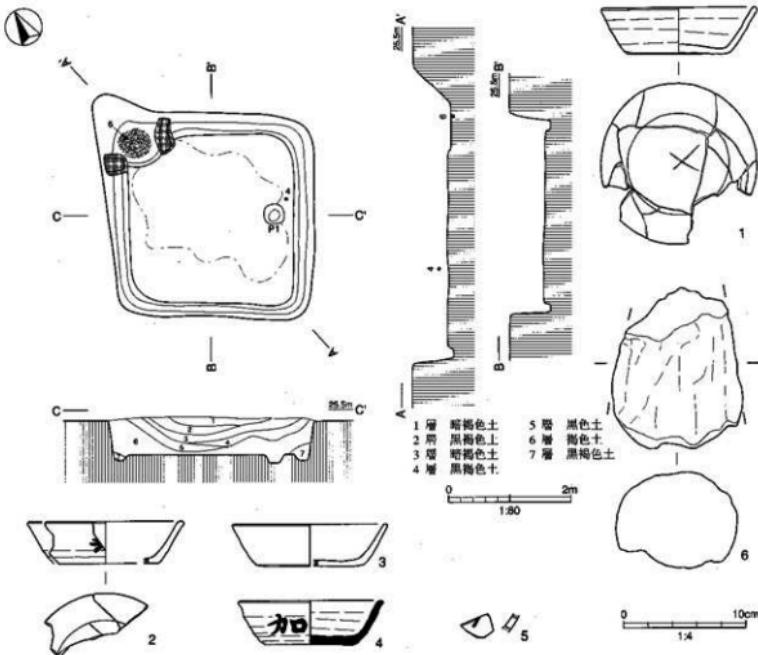


図151 A073

A073

検出地区 K7-94-1・3・4g

遺構 長軸3.35m×短軸3.32m×壁高0.55m、主軸方位はN-12°-Wを示す。長軸、短軸の差のない隅丸方形である。床は竈から出入口にかけて、よく踏み固められた硬化面が広がる。壁はほぼ垂直に立ち上がっている。周溝は全周し、竈ピット内に入り込んでいる。竈は北西コーナーに設けられており、天井部は崩落していたが、両袖の遺存は良好であった。主柱穴や壁柱穴は検出されず、出入口施設のためと思われるピットは北東壁際のほぼ中央に検出された。覆土は色調を基本に7層に捉えた。住居廃絶時に褐色土の人為的な埋戻しをある程度行い、その後は黒褐色土と暗褐色土を主体とした自然堆積と捉えられた。

遺物 出土遺物は多くはなかった。竈火床中央に、支脚が正置の状態で出土している。墨書き土器が3点、箋書き土器が1点出土している。また、墨書き土器に箋書きをした土師器壊が出土している。

所見 II地区の堅穴住居跡としては少ない、コーナーに竈を設ける住居である。覆土は壁際から床直上では色調や包含物をみても分層できず、また、床直上層である6層は遺物が少ないとあり、住居廃絶時に人為的に投入したものと判断できた。

表5 A073遺物観察表

(単位cm)

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色 焼	調成	胎土	遺存	備考
1	土師器 壺	12.8×8.40×3.90 ロクロ成形 外体部下端一静止ヘラケズリ 底部一回転ヘラ切り、回転ヘラケズリ	褐 褐色 青母 長石	褐 褐色 青母 長石	略完形	ヘラ書 外底「×」 覆土中	
2	土師器 壺	(12.8)×(8.40)×3.50 ロクロ成形 外体部下端一回転ヘラケズリ 底部一回転ヘラケズリ 破片のため切り離し不明	褐 硬	青母 長石	1/5	墨書 外体正位 「四」 ヘラ書 外底「口」	
3	土師器 壺	(12.6)×(8.40)×3.60 ロクロ成形 底部一器面が粗いため不明	暗茶褐色 硬	長石 青母 赤色砂	1/3		
4	須恵器 壺	11.8×7.10×3.70 ロクロ成形 底部一回転糸切り、回転ヘラケズリ後静止ヘラケズリ	暗褐 灰 硬	青母 長石	完形	墨書 外体正位 「加」	
5	土師器 壺	-×-×- ロクロ成形	褐 硬	青母	体部片	墨書 外体 「口」	
6	土製品 支柱	肩部径10.0×(7.70)×高さ(13.2) 720g	暗褐	砂粒	1/2		

A074

検出地区 K7-63-4g、64-3g、73-2g、94-1gにわたって検出。

遺構 長軸4.15m×短軸4.07m×壁高0.41m、主軸方位はN-66°-Eを示す。長軸、短軸の差があまりない隅丸方形である。竪穴を再利用した、拡張した竪穴住跡である。床は、住居廃絶後の火の使用により若干壊されてやや凹凸があるが、住居中央部の床は硬化面が残っていた。柱穴はP 1～5の5本が検出された。柱穴覆土の観察から、柱材は住居廃絶時に引抜かれていた。拡張した住居のため周溝は2条巡っているが、南及び西コーナーではそれぞれの周溝は区別ができる幅の広い状態となっていた。竪坑下まで全周する周溝であった。竪坑の袖はしっかりしたもので、白色粘土を主体として黒褐色土が混入して築かれていた。覆土は、住居廃絶後の初期に床からやや浮いて焼土の堆積が、竪坑方向を開口部として馬蹄形状に認められており、下層においては人為堆積と考えられる。しかし、覆土中層から上層は基本的に黒褐色土を主体とする自然堆積であった。

遺物 比較的に遺物の多い住跡である。また、鉄器の出土が比較的多いことが、本住跡の特徴となっている。鐵鏟は4点・刀子2点・角釘2点が出土しているが、覆土中層が多く床直上の出土ではなかった。5は須恵器の高台付壺が、壺部の破損後に破断面を磨り、皿と転用されたものである。竪坑内から1、11が出土しており、本住跡の時期決定資料となっている。また、破片を含めて18点の墨書土器が出土し、出土文字資料の多い住跡であった。

所見 覆土の状況から、本住跡は廃絶時初期に人為的な埋戻しが考えられる遺構である。また、柱穴のうち、P 3・4の2本を主柱穴と捉えた。P 5も柱穴と考えられるが、竪坑に近寄りすぎるものである。P 1・2は出入口施設のピットであるが、P 1が旧住跡に、P 2が拡張後の住跡に伴うものと捉えられた。

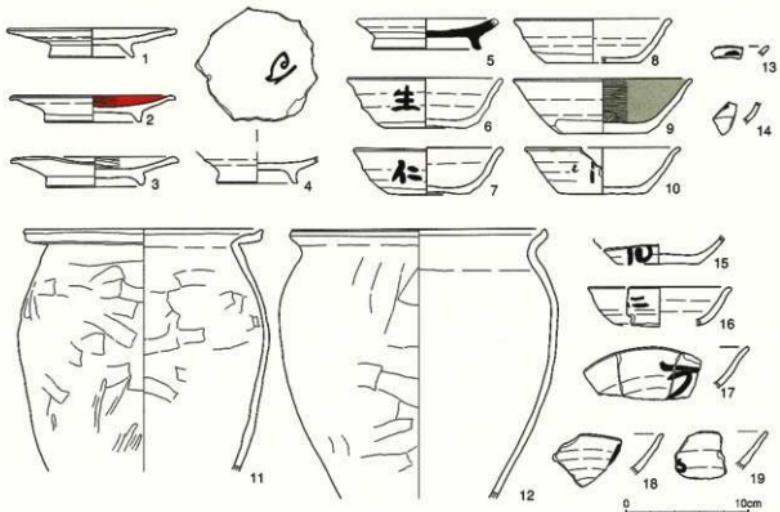
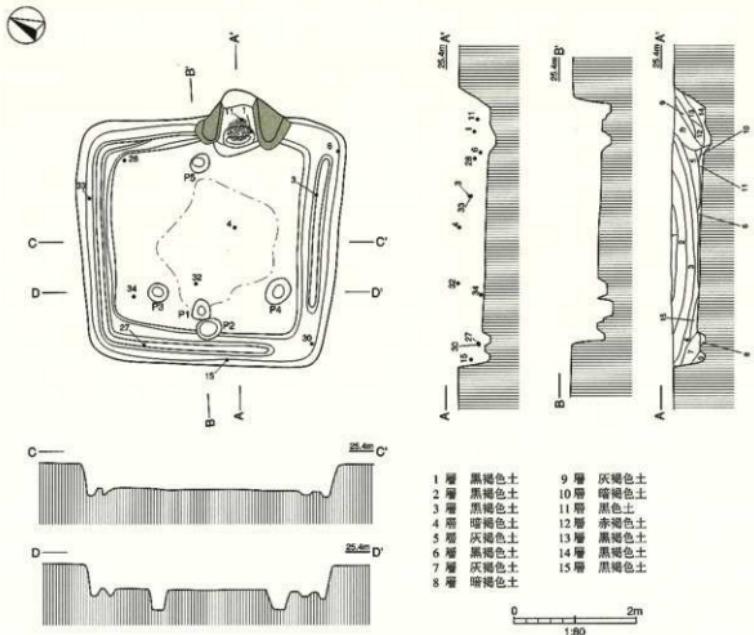


図152 A074

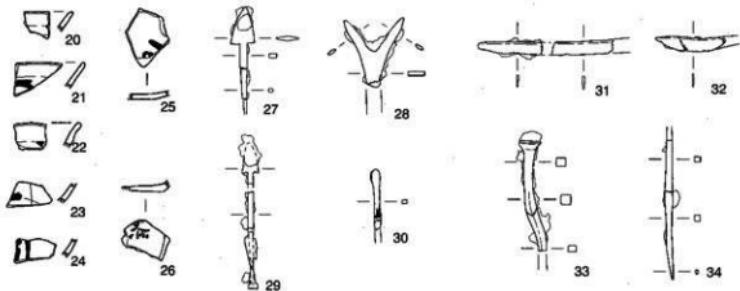


図153 A074 (2)

(単位cm)

表6 A074遺物観察表

No	種別 器形	法量 成形・調整等の特徴	色 調成	胎 土	遺存	備考
1	土師器 高台付 皿	(13.8)×-×2.40 高台径(6.80) ロクロ成形 高台際-ハラケズリ 底部-回転ヘラケズリ 高台部-ナデ	橙褐色 硬	長石 雲母	1/2	
2	土師器 高台付 皿	(13.4)×-×2.20 高台径(7.80) ロクロ成形 内部-密なヘラミガキ 底部-回転糸切り 高台部-ナデ	褐 硬	雲母	1/2	内体部-赤彩
3	土師器 高台付 皿	(13.8)×-×2.30 高台径7.80 ロクロ成形 内部-密なヘラミガキ 底部-回転糸切り、回転ヘラケズリ 高台部-ナデ	褐	雲母	1/2	
4	土師器 高台付 皿	-×-×(2.60) 高台径6.60 ロクロ成形 底部-回転ヘラケズリ 高台部-ナデ 切り離し不明	棕褐色 硬	雲母	底部	墨書 内底 「桟」
5	須恵器 高台付 坪	-×-×(2.50) 高台径9.00 ロクロ成形 底部-回転ヘラケズリ 高台部-接合部-ナデ	灰 硬	白色・ 長石多 黒色	底部	転用皿
6	土師器 坪	12.7×6.60×4.20 ロクロ成形 外体部下端-回転ヘラケズリ 底部-回転糸切り、回転ヘラケズリ	黑褐～ 暗褐色 硬	雲母 長石	略完形	墨書 外体正位 「牛」
7	土師器 坪	12.3×6.60×3.90 ロクロ成形 外体部下端-回転ヘラケズリ 底部-回転糸切り、回転ヘラケズリ	褐 硬	白色 赤色	完形	墨書 外体正位 「仁」
8	土師器 坪	12.8×(7.60)×3.70 ロクロ成形 外体部下端-回転ヘラケズリ 底部-静止ヘラケズリ 全面ヘラケズリのため切り離し不明	暗棕 ～ 黒褐色 硬	白色 長石	2/3	
9	土師器 坪	(14.6)×7.00×4.50 ロクロ成形 外体部下端-回転ヘラケズリ 底部-回転糸切り、回転ヘラケズリ	褐 硬	雲母	1/4	内墨
10	土師器 坪	13.2×7.00×3.80 ロクロ成形 外体部下端-回転ヘラケズリ 底部-回転ヘラケズリ	褐 硬	雲母 赤色	1/3	墨書 外体 「口」 スス瓶
11	土師器 甕	(19.8)×-×(20.2) 最大径20.6 ロクロ成形 外面 ヘラナデ後一部ヘラミガキ 内面 口縁部-ヘラナデ 脚部-ヨコヘラケズリ	暗赤褐 軟	砂粒多	1/2	
12	土師器 甕	21.4×-×(20.2) 最大径23.0 ロクロ成形 外面 口縁-頸部-ヨコナデ 脚部-タテヘラケズリ→ヨコヘラケズリ 内面 ヨコナデ	暗赤褐 軟	砂粒多	1/2	

No	種別 器形	法量 成形・調整等の特徴	色 焼	調成	胎 土	遺存	備考
13	土師器 壺	-×-×- ロクロ成形	褐	-	口縁片	墨書 外体「口」	
14	土師器 壺	-×-×- ロクロ成形 外体部下端-回転ヘラケズリ	褐	-	体部片	墨書 外体「口」	
15	土師器 壺	-×6.60×(2.10) ロクロ成形 外体部下端-回転ヘラケズリ 底部-全面回転ヘラケズリ 切り離し不明	褐 橙褐	雲母	底部	墨書 外体「囲」	
16	土師器 壺	(11.8)×-×(3.20) ロクロ成形 外体部下端-回転ヘラケズリ	褐～暗褐 硬	雲母 長石	口縁部	墨書 外体正位「口」	
17	土師器 壺	-×-×- ロクロ成形	褐	-	口縁片	墨書 外体正位「万」	
18	土師器 壺	-×-×- ロクロ成形 外体部下端-ヘラケズリ	褐	-	口縁片	墨書 外体「口」	
19	土師器 壺	-×-×- ロクロ成形	褐	-	口縁片	墨書 外体「囲」	
20	土師器 壺	-×-×- ロクロ成形 内体部-密なヘラミガキ	褐	-	口縁片	墨書 外体「口」	
21	土師器 壺	-×-×- ロクロ成形	褐	-	口縁片	墨書 外体「囲」	
22	土師器 壺	-×-×- ロクロ成形	褐	-	口縁片	墨書 外体「口」	
23	土師器 壺	-×-×- ロクロ成形 外体部下端-ヘラケズリ	褐	-	体部片	墨書 外体「口」	
24	土師器 壺	-×-×- ロクロ成形 外体部下端-回転ヘラケズリ	褐	-	体部片	墨書 外体「囲」	
25	土師器 皿	-×-×- ロクロ成形 外体部下端-ヘラケズリ 底部-静止ヘラケズリ、回転ヘラケズリ	褐	-	底部片	墨書 内底「囲」	
26	土師器 壺	-×-×- ロクロ成形	褐	-	底部片	墨書 内底「囲」	
27	鉄製品 鉄鑓	(7.60)×1.90×厚み0.35 -×0.60×厚み0.30	11.5g -×0.40×厚み0.30	-	-	略完形	
28	鉄製品 鉄鑓	(5.50)×0.70×厚み0.25 -×0.70×厚み0.25	14.6g -×1.40×厚み0.35	-	-	先端	
29	鉄製品 鉄鑓	(2.85)×1.30×厚み0.40 (3.00)×(3.00)×厚み0.50	15.8g (4.80)×-×-	-	-	略完形	
30	鉄製品 鉄鑓	(3.95)×0.40×厚み0.30 (0.70)×-×-	5.0g	-	-	片	
31	鉄製品 刀子	(5.30)×0.90×厚み0.15 (5.10)×1.05×厚み0.20	11.8g	-	-	片	
32	鉄製品 刀子	(5.50)×1.10×厚み0.10	3.6g	-	-	片	
33	鉄製品 釘	(9.00)×0.75×厚み0.70 -×0.80×厚み0.80	26.9g -×0.55×0.50	-	-	片	
34	鉄製品 釘	(11.45)×0.50×厚み0.45 -×0.25×厚み0.30	13.6g -×0.25×0.30	-	-	片	

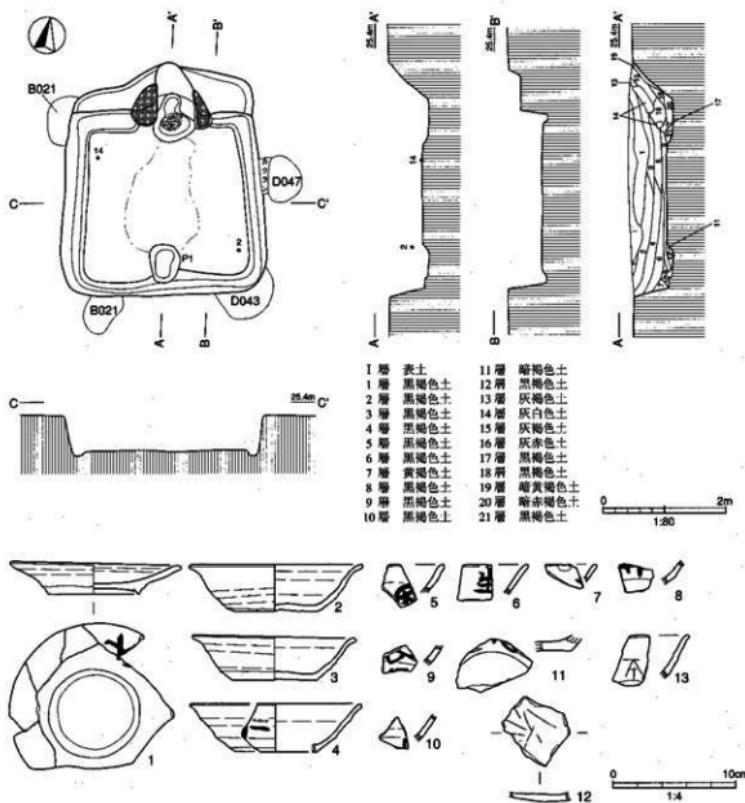


図154 A075

A075

検出地区

K7-53-2・4gにて検出。

造構

長軸3.22m×短軸3.01m×壁高0.59m、主軸方位はN-13°-Wを示す。平面形は、隅丸方形である。多量のロームブロックが混じった床で、住居中央部に硬化面を認めた。床はわずかであるが、壁際より住居中央が高まりをもつていて、周溝は竈ピット下までは巡らなかった。壁の立ち上がりは急であった。竈は天井の崩落が認められ、自然崩壊と捉えられた。煙道部は竈火床から、急傾斜で立ち上がりがついている。竈側壁上には確認面から0.10~0.20m掘り込み、幅は住居跡とほぼ同じ浅い方形の棚状のピットが検出された。覆土は住居跡と同じであり、本住居に伴うものと判断された。なお、住居の覆土はやや複雑な堆積をみせるが、黒褐色土の自然堆積である。

遺物 接合できない破片が多いが、墨書き器9点・線刻1点が出土した。また、床直上で石製紡錘車が出土している。

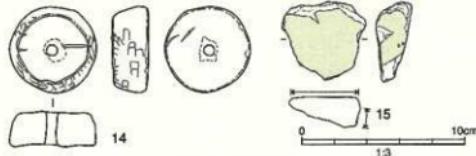


図155 A075(2)

表7 A075遺物観察表

(単位cm)

No	種別 器	法量 成形・調整等の特徴	色 焼	調成	胎土	遺存	備考
1	土師器 高台付 皿	(14.2)×-×2.50 高台径7.50 ロクロ成形 底部一回転糸切り 高台部一ナデ	褐	雲母 長石	1/2	墨書 外体横位 「凶」	
2	土師器 坏	14.1×6.70×4.10 ロクロ成形 外体部下端一静止ヘラケズリ 底部一回転ヘラ切り、静止ヘラケズリ	橙褐 硬	雲母 黒色	1/2		
3	土師器 坏	13.2×6.70×3.70 ロクロ成形 外体部下端一回転ヘラケズリ 底部一回転糸切り、回転ヘラケズリ	橙褐 硬	雲母 長石	略完形		
4	土師器 坏	(14.0)×(6.60)×4.00 ロクロ成形 外体部下端一回転ヘラケズリ 底部一回転ヘラケズリ 欠損のため切り離し不明	褐 硬	雲母 長石	1/5	墨書 外体正位 「口」	
5	土師器 坏	-×-×- ロクロ成形 内体部一密なヘラミガキ	褐	-	口縁片	墨書 外体正位 「凶」	
6	土師器 坏	-×-×- ロクロ成形	褐	-	口縁片	墨書 外体正位 「生」	
7	土師器 坏	-×-×- ロクロ成形	褐	-	口縁片	墨書 外体 「口」	
8	土師器 坏	-×-×- ロクロ成形 外体部下端一回転ヘラケズリ	褐	-	体部片	墨書 外体 「口」	
9	土師器 坏	-×-×- ロクロ成形 外体部一ヘラケズリ	褐	-	体部片	墨書 外体 「口」	
10	土師器 坏	-×-×- ロクロ成形 外体部下端一ヘラケズリ	褐	-	体部片	墨書 外体 「口」	
11	土師器 坏	-×-×- ロクロ成形 外体部下端一回転ヘラケズリ 内体部一密なヘラミガキ 底部一回転ヘラケズリ 破片のため切り離し不明	褐	-	底部片	墨書 外体 「凶」	
12	土師器 坏	-×-×- ロクロ成形 底部一回転糸切り後回転ヘラケズリ	褐	-	底部片	雜刻 外底 「口」	
13	土師器 坏	-×-×- ロクロ成形	褐	-	体部片	雜刻 外体 「凶」	
14	土製品 紡錘車	上径4.20×下径5.20×厚さ2.10 軸孔径0.60 上面に浅い溝状の切り込みが見られる	-	-	完形		
15	石 器 砥石	(6.20)×(5.90)×(2.50)	-	-	破片		

所見 所謂「棚状造構」
が、本遺跡の中でいかなるもの
なのかは、整理の進捗をまって
検討したい。なお、P 1は出入
口施設に伴うピットである。

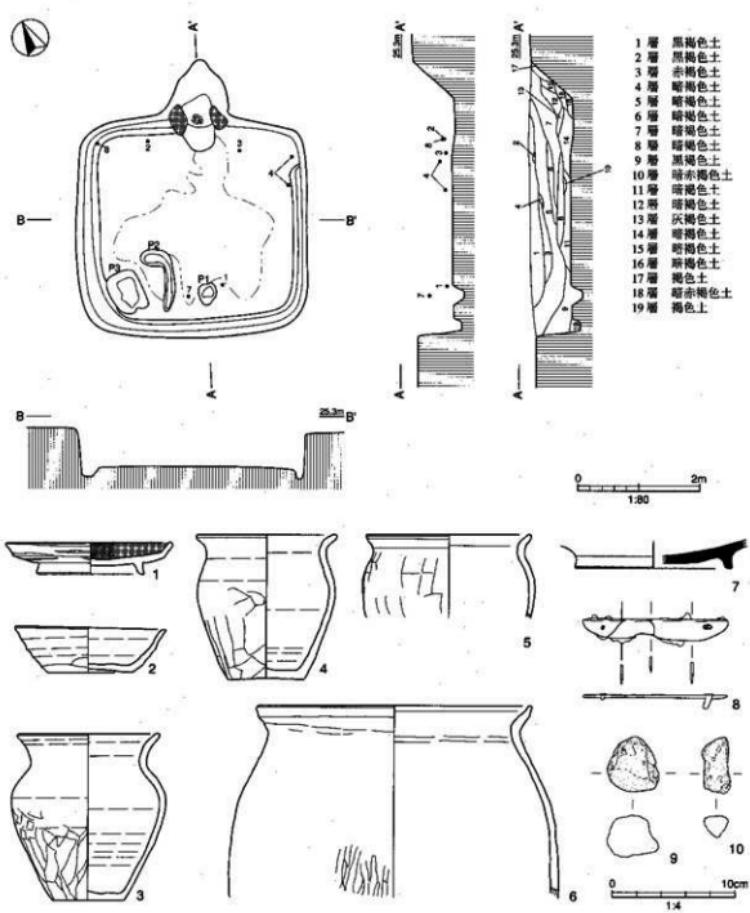


図156 A076

A076

検出地区 K7-52-2・4g

遺構 長軸3.75m×短軸3.69m×壁高0.6m、主軸方位はN-25°-Eを示す。平面形は隅丸方形である。床は住居中央部に硬化面を残しているが、四隅は貼床で軟弱となっている。壁は、ほぼ垂直に立ち上がっている。周溝は竈右袖から北東コーナーではなく、他は浅く巡り、北西及び南東壁の周溝は幅広くしっかりと掘り込まれていた。そして竈左袖下まで巡っていた。南東コーナーには、間仕切状の溝が認められた。この溝の覆土は褐色土が主体であったが、壁際に伸びる溝に焼土や炭化材を含む黒色土が入り込んでいた。

表8 A076遺物観察表

(単位cm)

No	種別 器形	法量 成形・調 整等の特 徴	色 焼成	胎 土	遺存	備 考
1	土器 高台付 皿	13.6×-×2.70 高台径8.70 ロクロ成形 外体部-粗いハラミガキ 内体部-密なハラミガキ 底部-回転ヘラケズリ 切り離し不明	黒褐色～暗 黒～暗褐色	雲母 長石	1/2	焼成 硬 高台部は摘み上 げてナデである
2	土器 壺	12.2×6.80×3.70 ロクロ成形 外体部下端一回転ヘラケズリ 底部一回転糸切り 未調整	硬	長石 石英	略完形	
3	土器 小型甕	11.8×6.00×13.8 ロクロ成形 外面 口縁部-ヨコナデ 脇部-ナデ後下半継続・斜位ヘラケズリ 内面 ナデ 底部-回転糸切り	暗褐色 暗褐色 硬	雲母 多 白色 長石	略完形	
4	土器 小型甕	11.6×6.40×12.0 最大径11.4 ロクロ(左回) 外面 脇下半ヘラケズリ 底部一回転糸切り	明褐色 硬	砂粒 雲母	完形	脇部一部欠損 外内スス付着
5	土器 小型甕	(13.6)×-×(6.80) 最大径14.0 外面 口縁～頸部-ヨコナデ 脇部-タテヘラケズリ 内面 ナデ	暗赤褐色	砂粒多	口縁部	外内スス付着
6	土器 甕	22.6×-×(15.7) 最大径27.0 外面 口縁～頸部-ヨコナデ 脇部-タテヘラミガキ 内面 ヨコナデ	明褐色	雲母	口縁	口縁内面一部 スス付着
7	須恵器 蓋 (長瀬?)	-×-×(2.30) 台部径12.8 ロクロ成形 外体部-ナデ 内体部-ナデ 底部-回転ヘラケズリ 切り離し不明	灰 硬	長石	底部 1/2	高台部は摘み上 げてナデである
8	鉄器 鍔擴具	11.9×1.60×厚さ0.15 17.0g 1.25×厚さ0.15 1.70×厚さ0.20	-	-	略完形	
9	石器 軽石	4.50×4.30×厚さ10.6 10.6g	-	-	片	
10	石器 輕石	4.60×2.30×厚さ1.80 5.7g	-	-	片	

また、西コーナー及び西南西壁中央際の床面に、ピットを2ヶ所検出した。覆土は暗褐色土を主体とした人為的な堆積が窺われる、複雑な堆積状態である。さらに住居跡中央の覆土上層下部(3層)に、焼土と粘土が廃棄されたような状態で検出されており、また、覆土中層から下層において炭化物が数多く検出された。のことから覆土中層以上は、人為的な堆積が確実に捉えられた。

遺物 遺物は、流れ込んだような状態で出土するもの多かった。しかし本遺跡で数多く確認される墨書き土器は出土しなかった。

所見 床面を精査したが柱穴は検出できず、掘方まで掘り進め床面下の調査を行ったが、主柱穴と捉えられるピットは確認できなかった。床面で検出されたP1は出入口施設に伴うピットであるが、P2は貯蔵穴とは捉えづらいものであった。

覆土は、住居廃絶後の当初は自然堆積であり、覆土の上層になってから人為的な堆積が行われたと考えていた。しかし粘土・焼土・炭化材の垂直分布を検討すると、当初からの人為的な堆積が強く窺われた住居跡である。

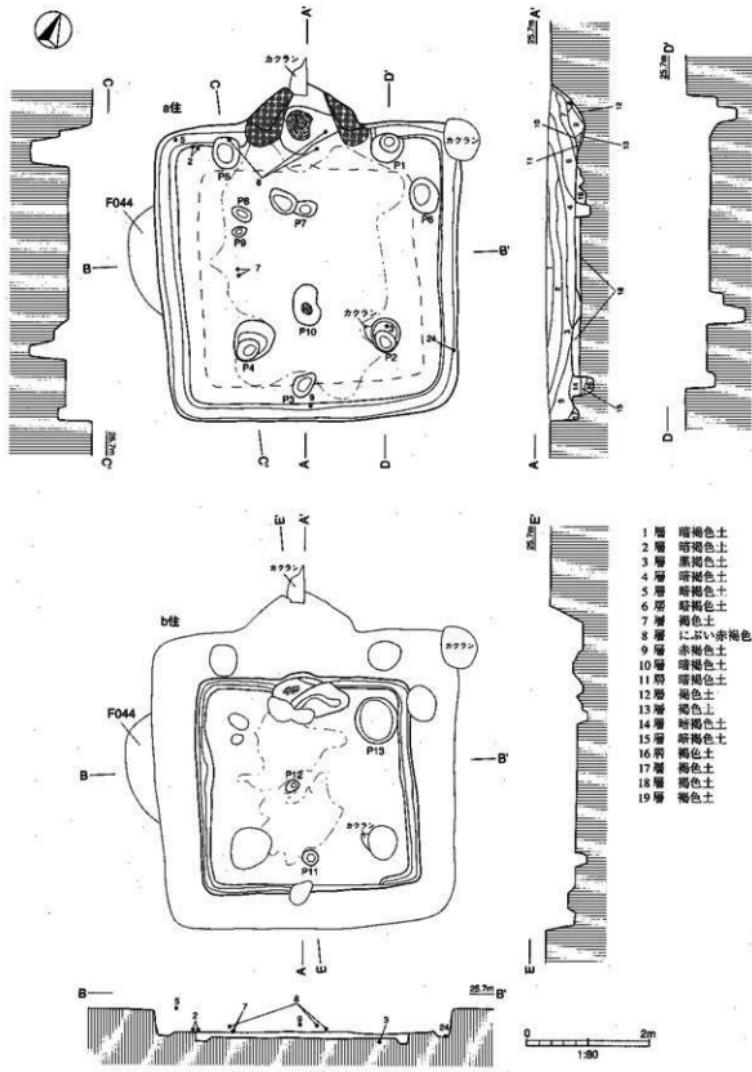


図157 A077a・b

A077

検出地区 J7-90-2・4g, K7-81-1・3gにて検出。

遺構 2軒の重複した竪穴住居跡である。

A077aは、長軸4.88m×短軸4.87m×壁高0.36m、主軸方位はN-25°-Wを示す。平面形は隅丸方形である。凹凸はあるが平坦な床で、住居跡中央部はよく踏み固められた硬化面となっている。

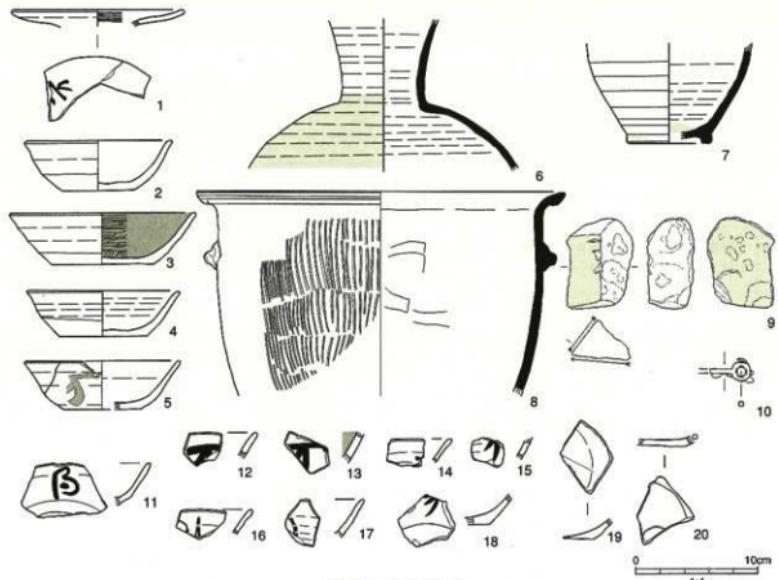


図158 A077 (2)

表9 A077遺物観察表

(単位cm)

No	種別 器形	法 量 成 形・調 整等の特 徴	色 焼 成	陶 土	遺 存	備 考
1	土器 皿	(14.2)×-×(1.40) ロクロ成形 内体部-密なヘラミガキ	明褐色 硬	雲母 1/5	口縁部 墨書き 外体横位 「□万」	
2	土器 壺	(12.0)×5.80×4.00 ロクロ成形 外体部下端-ヘラケズリ 底部-回転糸切り、回転ヘラケズリ	暗褐色 橙褐色 硬	雲母 長石 1/2	体部外面にくさび 状の剥み数カ所 有り	
3	土器 壺	(15.0)×(8.20)×4.30 ロクロ成形 外体部下端-ヘラケズリ 内体部-全体に密なヘラミガキ 底部-回転糸切り、回転ヘラケズリ	黒褐色 暗褐色 黒 硬	雲母 長石 1/2	内黒	
4	土器 壺	(12.4)×7.20×3.80 ロクロ成形 外体部下端-ヘラケズリ 底部-回転糸切り、回転ヘラケズリ	褐色 硬	雲母 長石 1/3	底部外面及び体 部内面にくさび 状の剥み有り	
5	土器 壺	(12.6)×(6.30)×4.00 ロクロ成形 外体部下端-ヘラケズリ	黒褐色 暗褐色 硬	雲母 長石 1/3	墨書き 外体正位 「団」	
6	須恵器 (長颈 壺)	-×-×- ロクロ成形	暗褐色 灰 骨	砂粒 頸部～ 胴部		自然釉
7	須恵器 壺	-×7.00×(8.20) ロクロ成形	暗褐色 灰 骨	砂粒多 胴下半		自然釉
8	須恵器 瓶	30.4×-×(17.0) 外面 口縁部-ヨコナデ 脇部-綫位平行タキ後ナデ 内面 ナデ	暗赤褐色 硬	白色 雲母 長石 1/2	口縁～ 胴部	把手 2個

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色焼 調成	胎土	遺存	備考
9	石器 砥石	(7.20)×(4.80)×	—	—	片	
10	鉄器 鍛?	(3.25)×0.40×厚み0.40 6.1g 0.40×厚み0.40	—	—	片	環頭
11	土師器 坏	—×—×— ロクロ成形 底部—ハラケズリ 欠損のため切り離し不明	褐	—	口縁～ 底部片	墨書 外体正位 「得」
12	土師器 坏	—×—×— ロクロ成形	褐	—	口縁 部片	墨書 外体正位 「四」
13	土師器 坏	—×—×— ロクロ成形 内体部—密なハラミガキ	褐	—	体部片	墨書 外体 「四」 内墨
14	土師器 坏	—×—×— ロクロ成形	褐	—	口縁 部片	墨書 外体 「口」
15	土師器 坏	—×—×— ロクロ成形	褐	—	体部片	墨書 外体 「四」
16	土師器 坏	—×—×— ロクロ成形	褐	—	口縁 部片	墨書 外体 「四」
17	土師器 坏	—×—×— ロクロ成形 外体下端—ハラケズリ 底部—回転糸切り、回転ハラケズリ	褐	—	口縁 部片	墨書 外体 「口」
18	土師器 坏	—×—×— ロクロ成形 外体下端—回転ハラケズリ 底部—回転糸切り	褐	—	底部片	墨書 外体正位 「四」
19	土師器 坏	—×—×— ロクロ成形 外体下端—静止ハラケズリ 底部—静止ハラケズリ	褐	—	底部片	線刻 内底 「口」
20	土師器 坏	—×—×— ロクロ成形 外体下端—回転ハラケズリ 底部—回転糸切り、回転ハラケズリ	褐	—	底部片	ヘラ書 外底 「口」

周溝はしっかりと掘り込みで、竈脇まで巡っている。ピットはP1～9まで検出されたが、主柱穴はP1・2・4・5である。P3は出入口施設のピットであった。

A077bは、長軸3.54m×短軸3.43m×壁高0.48m、主軸方位はN-24°-Wを示す。平面形は隅丸方形である。A077aの下から検出された住居跡である。竈から出入口にかけてと、住居西側に硬化面を検出した。竈は建替えのため激しく壊され、火床と竈の痕跡が残るのみであった。ピットはP11～13が検出されたが、主柱穴は不明である。

遺物 混入しているとも考えられるが、出土遺物はA077aのものである。

所見 A077aの調査中に、A077bを確認したものである。主軸方位等から建替えと捉えられた。覆土は16層の床面以外は、A077aに伴うもので、自然堆積である。

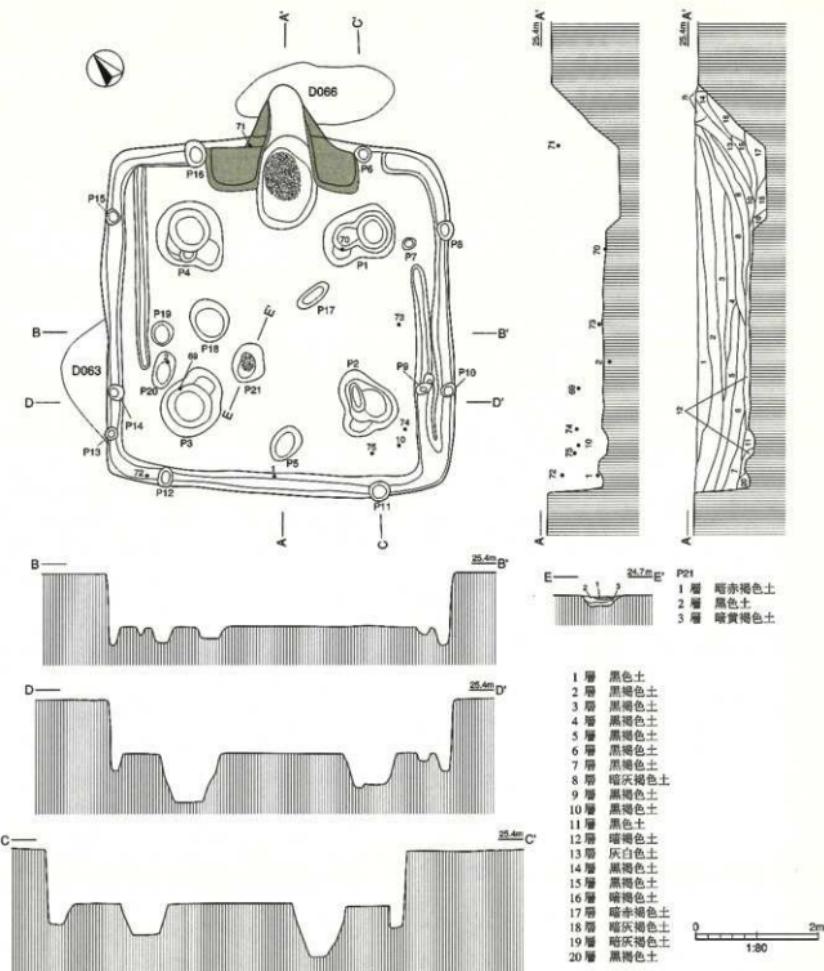


図159 A078

A078

検出地区 K8-3-3・4g、K8-21-1・3gにて検出。

遺構 建替の住居跡であり、2軒の重複であった。

A078aは、長軸5.73m×短軸5.6m×壁高0.89m、主軸方位はN-42°-Eを示す。平面形は隅丸方形である。深い掘り込みをもつ住居であり、住居中央部はハードロームの地床とし、壁際は貼床としていたが、明瞭な硬化面は認められなかった。周溝はほぼ全周するが、竪袖付近で途切れる。ピットは4本の主柱穴(P1～4)と、0.30m前後の深さの9本の壁柱穴が検出された。主柱穴はA078bの柱穴の外側を拡張して

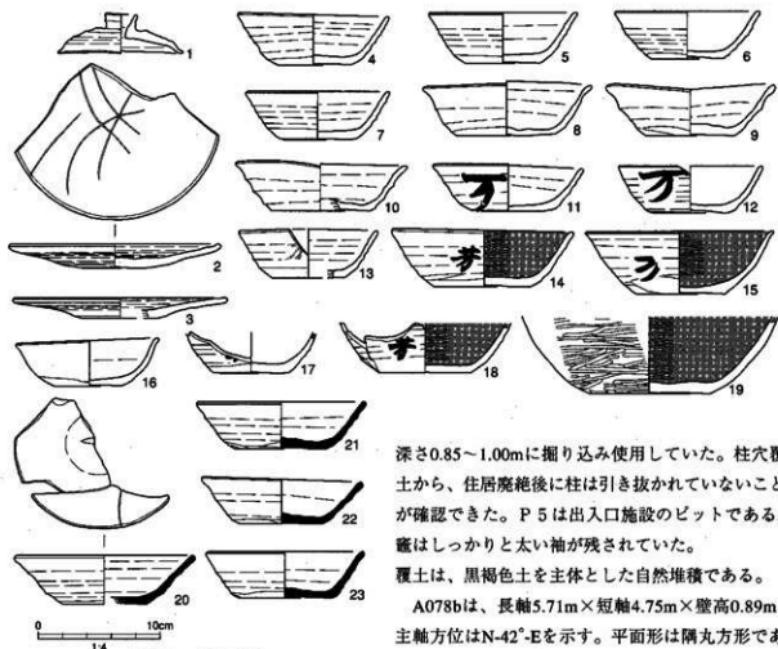


図160 A078 (2)

の北西壁と南東壁の周溝に沿うように、住居の内側の床に一部残されていたが、全周かどうかは確認することができなかった。周溝の深さはA078aよりやや浅いものである。竈の所在は確認できなかつたため、A078aが再利用したものと捉えられ、また、主柱穴(P1~4)も、柱穴の内側を使用しており、深さは0.50~0.70mであった。出入口施設のピットはP5である。覆土はA078aにより不明である。P21は平面が橢円形で、坑底がほぼ平坦なピットであるが、壁はほぼ垂直に立ち上がり、覆土は黒色土が堆積していた。床と同面には焼土層が認められ、炉のようなピットである。

遺物 住居の規模に比例して遺物は多かったが、覆土一括資料として取り上げており、多くの遺物は分布図を提示するに至らなかった。本住居跡の遺物は、基本的にA078aに伴うものである。また、出土遺物は墨書き器が多く、破片を含めて38点に上っている。墨書き器に記された文字は「万」が、14点と数量的に圧倒して出土しており、「万升」が2点出土している。鉄器は鐵鎌3点と刀子3点、穂捕具と思われるものが1点出土している。なお、クルミが1点出土している。

所見 本住居跡は壁高が0.90mと、掘り込みの深い豎穴住居跡である。主柱穴、周溝の平行性等から、A078bからA078aへと拡張・建替えられた住居と捉えられた。床面は建替え後、やや低くなっているようである。A078aのような壁柱穴を有する住居跡はI地区・II地区とも少なく、珍しい例となっている。

本豎穴住居においては、墨書き器等が多く出土している。墨書き器は土師器壺に記されたものがほとんどであるが、土師器皿と須恵器壺に線刻されたものも2点出土している。住居規模や墨書き器の多さから、本住居跡はII地区の豎穴住居の中心的存在の1軒であったかもしれない。

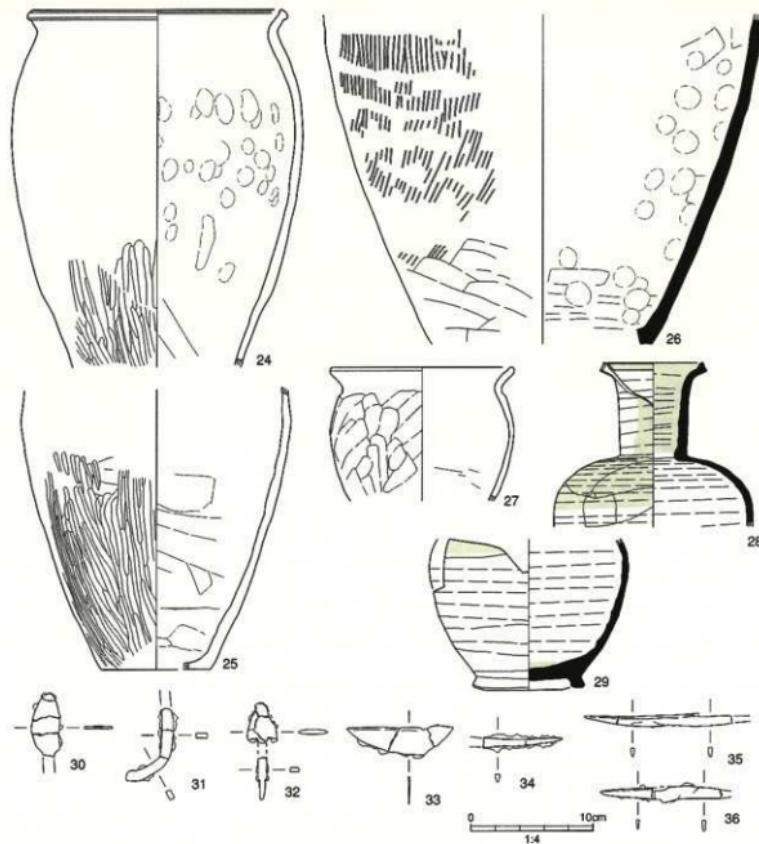


図161 A078 (3)

表10 A078遺物観察表

(単位cm)

No	種別 器形	法 量 形 調 整 等 の 特 徴	色 調 成	胎 土	遺 存	備 考
1	土器器 蓋	10.3×××3.30 ロクロ成形 外面 つまみ部分-ナデ 天上部-回転ヘラケズリ 内面 つまみ部-天上部にかけて貫通している	明褐色 -橙 硬	雲母多 石英 白色	略完形	
2	土器器 皿	(17.6)×(6.00)×2.00 ロクロ成形 外面 体部下端-回転ヘラケズリ 底部-回転糸切り、回転ヘラケズリ	褐 色	雲母多 白色	1/2	観察 体部～ 底部内面「□」
3	土器器 皿	(17.6)×(6.20)×1.70 ロクロ成形 外体部下端-回転ヘラケズリ 底部-回転糸切り、回転ヘラケズリ	褐 色	雲母 白色	1/3	
4	土器器 坏	12.4×6.00×4.20 ロクロ成形 外体部下端-回転ヘラケズリ 底部-回転糸切り、回転ヘラケズリ	暗褐色～ 明褐色 硬	赤色粒 や砂質	略完形	

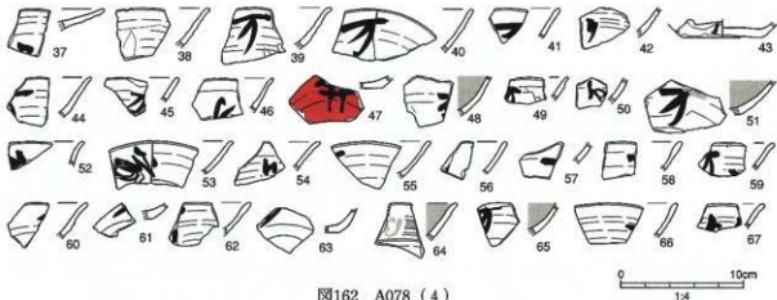


図162 A078 (4)

No	種別 器形	法 量 口様 底径 成 形 ・調 整 等 の 特 徴	焼 成 色 調 成	胎 土 雲母 多 白 色 赤 色	造 存 略完形	備 考
5	土師器 壺	12.2×6.00×4.20 ロクロ成形 外体部下端一回転ヘラケズリ 底部一回転糸切り、回転ヘラケズリ	明褐色～ 橙褐色 硬	雲母多 白色 赤色		
6	土師器 壺	11.8×6.00×3.90 ロクロ成形 外体部下端一回転ヘラケズリ 底部一回転糸切り、回転ヘラケズリ	暗褐色～ 褐色 硬	雲母多	1/2	
7	土師器 壺	11.8×6.30×4.00 ロクロ成形 外体部下端一回転ヘラケズリ 底部一回転ヘラケズリ 全面ケズリのため切り離し不明	明褐色 硬	雲母	1/2	
8	土師器 壺	13.9×8.00×4.40 ロクロ成形 外体部下端一回転ヘラケズリ 底部一回転ヘラケズリ 全面ヘラケズリのため切り離し不明	黒褐色～ 白色 赤褐色 硬	白色雲 母石英 赤色	略完形	
9	土師器 壺	13.8×7.20×4.00 ロクロ成形 外体部下端一回転ヘラケズリ 底部一回転ヘラケズリ 静止ヘラケズリ	明褐色 硬	赤色白 色石英 長石砂	1/2	
10	土師器 壺	14.1×8.00×3.80 ロクロ成形 外体部下端一帶止ヘラケズリ(一部) 底部一帶止ヘラケズリ 欠損のため切り離し不明	暗褐色	白色多 雲母 長石	略完形	
11	土師器 壺	12.3×6.00×3.90 ロクロ成形 外体部下端一回転ヘラケズリ 底部一回転糸切り、回転ヘラケズリ	褐色 橙褐色 硬	雲母多 白色	略完形	墨書 外体正位 「万」
12	土師器 壺	11.8×6.60×3.90 ロクロ成形 底部一回転糸切り、回転ヘラケズリ	明褐色 硬	雲母多	略完形	墨書 外体正位 「万」
13	土師器 壺	(11.4)×6.00×4.00 ロクロ成形 外体部下端一回転ヘラケズリ 底部一回転ヘラケズリ 欠損のため切り離し不明	明褐色 硬	雲母 赤色 白色	1/4	墨書 外体正位 「万」
14	土師器 壺	14.9×7.80×4.70 ロクロ成形 外体部下端一回転ヘラケズリ 内体部一密なヘラミガキ 底部一回転糸切り、回転ヘラケズリ	暗褐色	雲母 赤色 白色	完形	墨書 外体 「升万」 内黑
15	土師器 壺	15.4×7.30×5.20 ロクロ成形 外体部下端一回転ヘラケズリ 内体部一密なヘラミガキ 底部一回転糸切り、回転ヘラケズリ	暗褐色	雲母 赤色 白色	4/5	墨書 外体 「四」 内黑
16	土師器 壺	11.7×5.50×3.80 ロクロ成形 外体部下端一回転ヘラケズリ 底部一回転ヘラケズリ 全面ヘラケズリのため切り離し不明	暗褐色	雲母 赤色 白色	略完形	
17	土師器 壺	—×6.20×<3.40> ロクロ成形 外体部下端一回転ヘラケズリ 底部一回転糸切り、回転ヘラケズリ	明褐色 硬	雲母多	底部	墨書 外体 「口」

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
18	土師器 壺	-×7.40×(4.10) ロクロ成形 外体部下端-回転ヘラケズリ 内体部-密なヘラミガキ 底部-回転糸切り→回転ヘラケズリ	暗褐色	雲母 白色	1/2	墨書き 外体「廿万」 内黒
19	土師器 壺	-×9.80×(6.40) ロクロ成形 外体部下端-回転ヘラケズリ 粗いミガキ 内体部-密なヘラミガキ 底部-回転ヘラケズリ	暗褐色	雲母 白色	2/3	内黒
20	須恵器 壺	(14.9)×(6.90)×4.00 ロクロ成形 外体部下端-回転ヘラケズリ 底部-回転ヘラ切り→回転ヘラケズリ	灰 底部墨 普	雲母多 長石 白色	1/2	縫刻 内底「人」 焼成炎失着部分 有り底部-体部
21	須恵器 壺	(13.8)×7.40×3.90 ロクロ成形 外体部下端-静止ヘラケズリ 底部-全面静止ヘラケズリ	硬	白色多 長石雲 母赤色	1/4	
22	須恵器 壺	13.2×6.80×3.70 外体部下端-静止ヘラケズリ 底部-全面静止ヘラケズリ	硬	白色多 長石	1/2	
23	須恵器 壺	12.9×7.50×3.90 ロクロ成形 外体部下端-静止ヘラケズリ 底部-全面静止ヘラケズリ	硬	白色多 長石	略完形	
24	土師器 壺	21.2×-×(29.4) ロクロ成形 外面 脚下半部-縦位のヘラミガキ 内面 脚部-指頭痕	赤褐色 / 黑褐色	雲母 長石	1/4 口縁	
25	土師器 壺	-×(8.80)×(23.0) 外面 脚中位-ヘラケズリ調整後下部へラミガキ調整(縦位) 内面 輪積痕一部残る ヘラナダ調整(横位) 底部一本業痕	赤褐色 / 黑褐色	雲母 長石多	1/4 脚～ 底部	破損後二次被熱
26	須恵器 瓶	-×(18.0)×-×24.0 外面 脚部-タタキメ 脚下半部-ヘラケズリ 内面 上下にヘラナダ 全体に当具痕	灰 硬	雲母赤 色砂白 色長石	1/4	
27	土師器 壺	(15.0)×-×(11.0) ロクロ成形 外面 脚部-縦位・斜位のヘラケズリ 内面 横位ナダ	暗褐色 硬	白色 長石	1/4 口縁	
28	須恵器 長頸壺	(8.20)×-×(13.5) ロクロ成形 外面 口縁部・頸部の一部-胴上半部に自然軸 内面 口縁～頸部に自然軸	硬	石英	1/3 口縁部～ 胴部	嵌入品
29	須恵器 長頸壺	-×-×(12.4) 台部厚0.00 ロクロ成形 外面 脚部下端-回転ヘラケズリ 脚上部-胴下端の一部に自然軸 内面 底部に自然軸 底部-高台部貼り付け	硬	石英	脚部～ 底部	28と同一か?
30	鉄器 鉄鎌	(5.15)×2.30×厚み0.20 10.1g	-	-	先端部	
31	鉄器 鉄鎌	(5.90)×0.90×厚み0.40 0.75×厚み0.40 11.8g	-	-	茎?	屈曲
32	鉄器 鉄鎌	(3.40)×2.35×厚み0.40 (3.45)×0.70×厚み0.35 9.10g	-	-	茎 一部欠	
33	鉄器 懸樋具	8.20×2.20×厚み0.15 11.7g	-	-	略完形	錆か?
34	鉄器 刀子	(6.50)×0.60×厚み0.40 7.00g	-	-	片	

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色焼 調成	胎土	遺存	備考
35	鉄器 刀子	(12.1)×0.70×厚み0.30 0.70×厚み0.30 13.9g	—	—	略完形	
36	鉄器 刀子	(3.80)×0.75×厚み0.20 (5.00)×0.90×厚み0.30 9.40g	—	—	略完形	
37	土師器 皿	—×—×— ロクロ成形	—	—	口縁 部片	墨書 外体 「口」
38	土師器 坏	—×—×— ロクロ成形 外体部下端一へラケズリ	硬	—	口縁 部片	墨書 外体正位 「万」
39	土師器 坏	—×—×— ロクロ成形 外体部下端一回転へラケズリ	—	—	口縁 部片	墨書 外体正位 「万」
40	土師器 坏	—×—×— ロクロ成形	—	—	口縁 部片	墨書 外体正位 「万」
41	土師器 坏	—×—×— ロクロ成形	—	—	口縁 部片	墨書 外体 「口」
42	土師器 坏	—×—×— ロクロ成形 外体部下端一回転へラケズリ 内体部一密なヘラミガキ	—	—	体部片	墨書 外体正位 「四」
43	土師器 坏	—×6.40×(2.50) ロクロ成形 底部一回転へラケズリ、回転糸切り	褐 硬	雲母多 赤色	底部	墨書 外体 「口」
44	土師器 坏	—×—×— ロクロ成形	—	—	口縁 部片	墨書 外体 「口」
45	土師器 坏	—×—×— ロクロ成形	—	—	口縁 部片	墨書 外体正位 「万」
46	土師器 坏	—×—×— ロクロ成形 外体部下半一へラケズリ	—	—	口縁 部片	墨書 外体横位 「四」
47	土師器 坏	—×—×— ロクロ成形 外体部下端一回転へラケズリ 底部一回転へラケズリ 破片のため切り離し不明	—	—	底部片	墨書 外体～外底 「口」 赤彩(外体)
48	土師器 坏	—×—×— ロクロ成形 外体部下端一回転へラケズリ 内体部一密なヘラミガキ	—	—	体部片	墨書 外体正位 「四」 内黑
49	土師器 坏	—×—×— ロクロ成形 外体部一へラケズリ後口縁部横ナデ 内体部一粗いへラミガキ	—	—	口縁 部片	墨書 外体正位 「万」
50	土師器 坏	—×—×— ロクロ成形 外体部下端一回転へラケズリ	—	—	体部片	墨書 外体横位 「万」
51	土師器 坏	—×—×— ロクロ成形 外体部下端一回転へラケズリ 内体部一密なヘラミガキ	暗褐	—	体部片	墨書 外体正位 「万」

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色焼 調成	胎土	遺存	備考
52	土師器 壺	-×-×- ロクロ成形	-	-	口縁 部片	墨書 外体 「口」
53	土師器 壺	-×-×- ロクロ成形 外体部下端-回転ヘラケズリ	-	-	口縁 部片	墨書 外体横位 「家」
54	土師器 壺	-×-×- ロクロ成形	-	-	口縁 部片	墨書 外体 「団」
55	土師器 壺	-×-×- ロクロ成形	-	-	口縁 部片	墨書 外体 「口」
56	土師器 壺	-×-×- ロクロ成形	-	-	口縁 部片	墨書 外体 「口」
57	土師器 壺	-×-×- ロクロ成形 外体部下端-回転ヘラケズリ	-	-	体部片	墨書 外体 「口」
58	土師器 壺	-×-×- ロクロ成形	-	-	口縁 部片	墨書 外体 「口」
59	土師器 壺	-×-×- ロクロ成形	-	-	口縁 部片	墨書 外体正位 「万」
60	土師器 壺	-×-×- ロクロ成形 外体部下端-回転ヘラケズリ	-	-	口縁 部片	墨書 外体 「口」
61	土師器 壺	-×-×- ロクロ成形 外体部下端-回転ヘラケズリ 底部-回転ヘラケズリ 破損のため切り離し不明	-	-	底部片	墨書 外体 「口」
62	土師器 壺	-×-×- ロクロ成形	-	-	口縁 部片	墨書 外体 「口」
63	土師器 壺	-×-×- ロクロ成形 外体部下端-回転ヘラケズリ 底部-回転ヘラケズリ 破損のため切り離し不明	-	-	底部片	墨書 外体 「口」
64	土師器 壺	-×-×- ロクロ成形 外体部-粗いヘラミガキ 内体部-密なヘラミガキ	-	-	口縁 部片	墨書 外体倒位 「得」 内黒
65	土師器 壺	-×-×- ロクロ成形 外体部-粗いヘラミガキ 内体部-密なヘラミガキ	-	-	体部片	墨書 外体正位 「万」 内黒
66	土師器 壺	-×-×- ロクロ成形	-	-	口縁 部片	墨書 外体 「口」
67	土師器 壺	-×-×- ロクロ成形	-	-	口縁 部片	墨書 外体 「口」

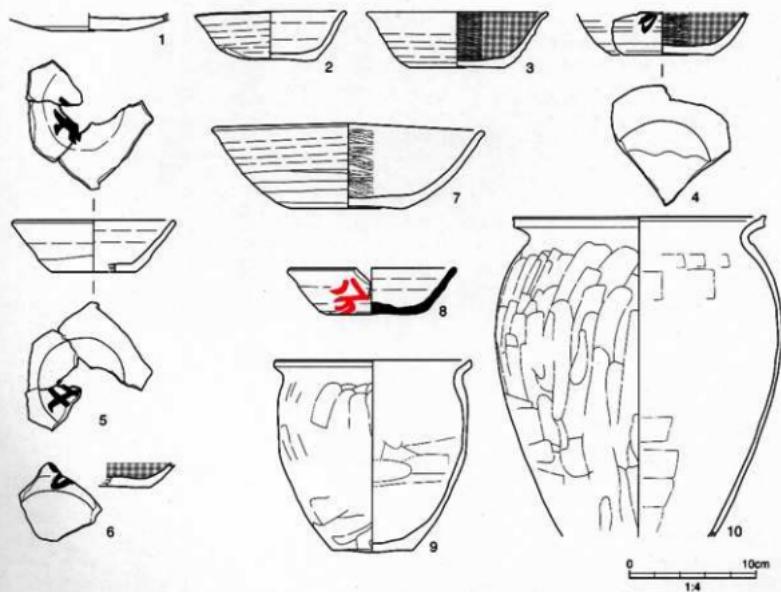
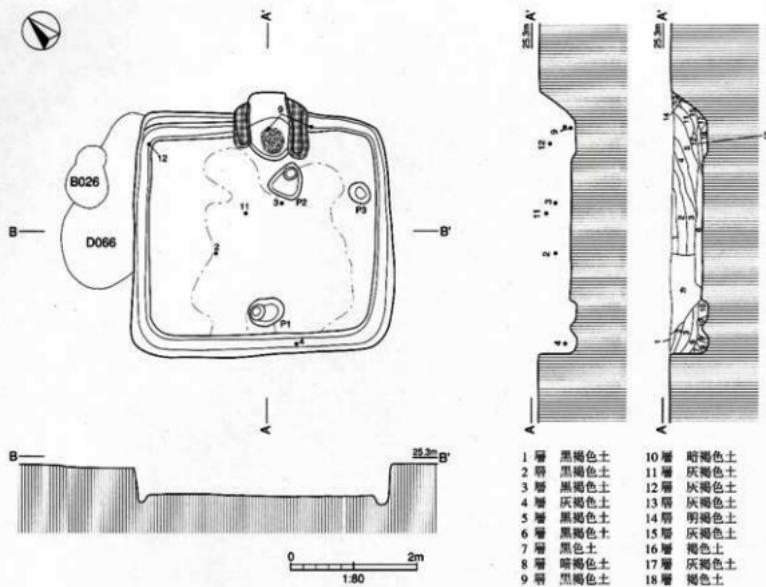


图163 A080

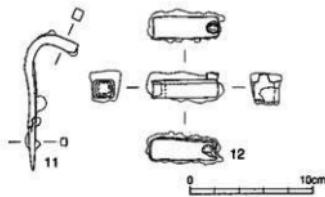


図164 A080 (2)

A080

検出地区 K8-33-1g, K8-32-2g, K8-23-3g, K8-22-4g
にて検出した。

遺構 長軸4.05m×短軸3.79m×壁高0.49m、主軸方位はN-45°-Eを示す。平面形は隅丸長方形である。床は暗褐色土混じりの貼床で、やや凹凸があった。住居跡中央部、竈前から出入口にかけては硬化面を確認できた。

壁の立ち上がりはほぼ垂直であった。床面には3基のピットが検出されたが、主柱穴は不明である。P1は出入口施設のピットである。周溝は竈ピット内まで全周し、幅が広く掘り込みは深かった。北西壁側の周溝は壁際ではなく、やや住居の内側に入り込むように巡らせていました。覆土は黒褐色土を主体とした、自然堆積と捉えられた。

表11 A080遺物観察表

(単位cm)

No	種別器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色焼成	胎土	遺存	備考
1	土器盤	—×6.00×(1.40) ロクロ成形 外体部下端一回転ヘラケズリ 底部一回転ヘラケズリのため切り離し不明	赤褐硬	雲母多 白色	底部	
2	土器器 坏	12.0×5.50×3.80 ロクロ成形 外体部下端一静止ヘラケズリ 底部一回転糸切り、静止ヘラケズリ 回転ヘラケズリ調整の失敗。体底部へ入り込む	暗褐硬	雲母 白色	2/3	手持ヘラナデで 溝調整し指頭で押 さえる
3	土器器 坏	14.4×7.40×4.50 ロクロ成形 外体部下端一回転ヘラケズリ 内体部一密なヘラミガキ 底部一回転糸切り後周回転ヘラケズリ 内面一密なヘラミガキ	棕褐 黒硬	雲母・ 白色多	1/2	内黒
4	土器器 坏	—×(8.00)×(3.40) ロクロ成形 外体部下端一回転ヘラケズリ 内体部一密なヘラミガキ 底部一回転ヘラケズリ 内面一密なヘラミガキ 底部外面に墨痕	暗褐～ 棕褐 黒硬	雲母多 石英 白色	1/4	墨書 外体正位 「匁」内黒 鉢用窓か?
5	土器器 坏	(13.0)×6.80×4.10 ロクロ成形 外体部下端一回転ヘラケズリ 底部一静止糸切り、回転ヘラケズリ	淡褐硬	雲母赤 色 長石 白色	1/5	墨書 外底「匁」 内底「匁」?
6	土器器 坏	—×—×— ロクロ成形 外体部下端一回転ヘラケズリ 内体部一密なヘラケズリ 底部一回転糸切り後回転ヘラケズリ	硬	雲母	底部片	墨書 外体正位 「圓」 内黒
7	土器器 大型坏	21.6×9.00×6.80 ロクロ成形 外体部下端一回転ヘラケズリ 内体部一密なヘラミガキ 底部一回転ヘラケズリ	暗褐硬	雲母 白色	3/5	
8	須恵器 坏	(3.40)×7.20×3.70 ロクロ成形 外体部下端一静止ヘラケズリ 底部一回転ヘラケズリ、静止ヘラケズリ	暗灰黑 灰一部 淡褐硬	長石多	3/4	墨書 外体正位 「八万」
9	土器器 小壺	(15.6)×6.40×15.2 外面 頭部～胴上半部一縦位ヘラケズリ 脇下半部一横位・斜位ヘラ ケズリ 底部一静止ヘラケズリ 全面ケズリのため切り離し不明	赤褐軟	長石	3/5	口縁～肩 3/4欠 火熱のため ボロボロ
10	土器器 壺	(20.0)×—×(25.4) 外面 脇全体に縦位のヘラケズリ 脇中央の一部に横斜位のヘラケズ リ 内面 橫位ヘラナデ	褐 暗褐	雲母 石英	1/3	底部 なし 火熱を被る
11	鐵器 釘	(11.5)×0.50×厚み0.60 0.85×厚み0.70 36.6g	—	—	頭部欠	屈曲
12	鐵器 不明	5.40×2.00×厚み1.65 44.8g	—	—	—	海老鋸?

遺物 覆土から多量の小砾が出土しており、そのうち小さな軽石が10点余の出土をみた。竈内からは9が出土している。当初は竈内に倒立して出土したため支脚への転用と捉えられたが、竈火床から5cm程離れており、支脚としての使用はなかったものと考えている。図示した遺物はほとんどが覆土中層のものであるが、9によって時期決定できるものである。朱書き土器が1点、墨書き土器は4点が出土した。「八万」「万」が出土し、上谷遺跡II地区における2番目に多い文字例の墨書き土器が、本住居跡からも確認されたこととなる。

所見 本住居跡は縄文時代のD066との重複であり、北西壁の上場の一部分が不明瞭となっている。柱穴は不明であり、P3が使用されたかは判断できなかった。壁の立ち上がりがほぼ垂直であることから、時間がかからずに埋没したものと考えられるが、覆土は自然堆積であった。貼床を有するため、住居の掘り方も調査を実施したが、床下からは遺構は検出されなかった。

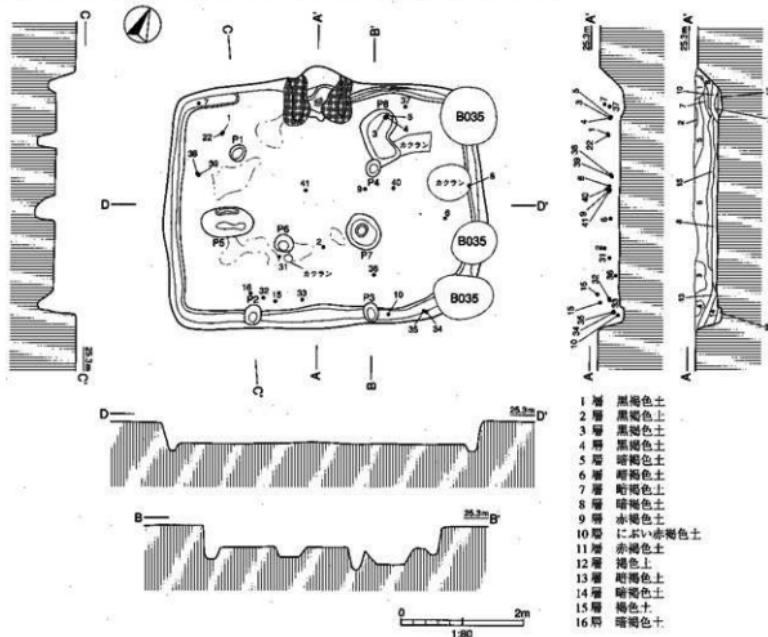


図165 A082

A082

検出地区 K8-22-4g、K8-23-3g、K8-32-2g、K8-33-1gにわたって検出された。

遺構 長軸4.05m×短軸3.79m×壁高0.49m、主軸方位N-45°-Eを示す。平面形は竈と平行した長軸をもつ、隅丸長方形である。床はやや凸凹があり、暗褐色土にロームブロックが混じる貼床で、竈前から出入口の住居跡中央は硬面を残している。壁はやや斜めに立ち上がっている。床面にピットが8基検出されたが、柱穴と捉えたのはP1～P4であった。周溝は竈左袖側にはないが、ほぼ全周するといってよいだろう。竈右側からの周溝は竈袖下まで入り込んでいた。覆土は暗褐色土と黒褐色土を主体とした、自然堆積として捉えられた。

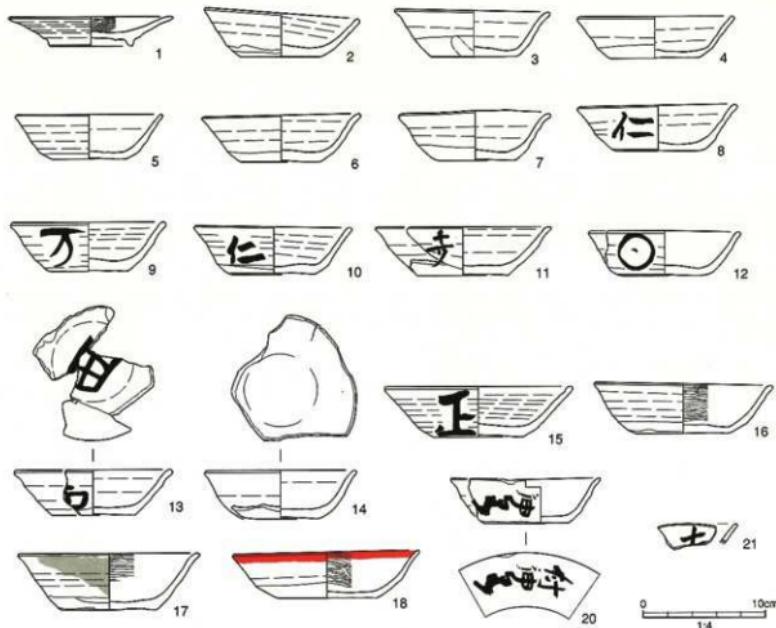


図166 A082 (2)

遺物 接合ができた遺物は土師器壺が多いが、土師器壺片や須恵器片も出土している。しかし壺の接合遺物は、須恵器は全くといっていいほどなかった。1の壺は22の倒立した小型壺の中に入った状態で出土している。壺は正置であった。3~5は3枚が重なって出土した。18は口縁部に赤彩を施していた。墨書き器は9点出土している。鉄器は鉄斧1点が出土している。鉄器数は11点であり、上谷遺跡II地区の住居跡としては多いものである。

所見 B035と重複する竪穴住居跡であるが、新旧関係は不明瞭であった。そう時間差のないものと考えられるが、B035が新しい遺構であると捉えておきたい。貼床のため床面が不明瞭なこともあります、掘り方を調査したが、凹凸が著しく、本住居に伴う床下の遺構は検出できなかった。

本住居跡の廃絶時において、不用材の消却を行ったものと思われ、床より細かな炭化材が多量に出土している。その方向は壁から住居跡中央に向かうものであり、覆土8層の褐色土は、その消火のための人为的な投入かも知れない。しかしその後は、自然堆積であり、消火層としても住居跡全体を埋戻すものではなかった。

墨書き土器の出土は8点と多くはないが、「万」と「西」の出土に注意がむけられる。万は文字として出土数が極めて多いが、西の文字は本地区では人名墨書きと共に記されている例も多かった。また、西は今後報告するIV地区では、その出土が多い印象を与える文字でもある。

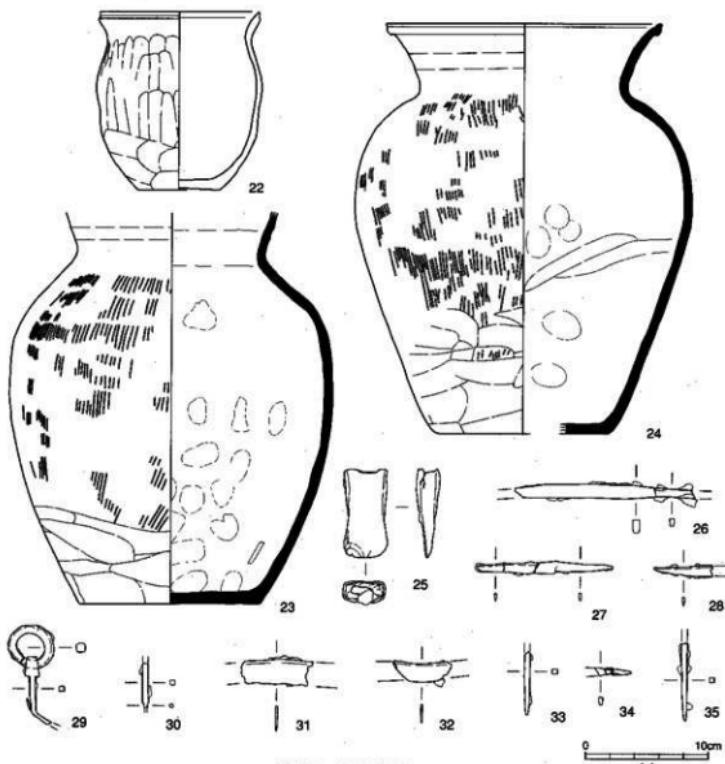


図167 A082 (3)

表12 A082遺物観察表

(単位cm)

No	種別 形	法量 成形・調整等の特徴	焼成	胎土	遺存	備考
1	土師器 高台付 皿	(13.4)×-2.40 ロクロ成形 内体部-密なヘラミガキ 底部-回転糸切り 高台部分-ナード	普	雲母赤色 白色	1/2	
2	土師器 壺	12.8×6.50×3.60 ロクロ成形 外体部下端-回転ヘラケズリ 底部-回転糸切り、回転ヘラケズリ	褐 硬	雲母 赤色 白色	完形	
3	土師器 壺	12.7×7.00×3.80 ロクロ成形 粘土の焼成前後の付着外体に2ヶ所有 外体部下端-回転ヘラケズリ 底部-静止ヘラ切り、回転ヘラケズリ	暗褐 普	白色	完形	外面・内面 赤彩(?)
4	土師器 壺	12.8×7.40×3.50 ロクロ成形 外体部下端-回転ヘラケズリ 底部-回転ヘラケズリ調整	普	白色 紫多 石英	完形	内面 スス付着

No	種別 器形	法量 成形・調整等の特徴 口径×底径×高さ	色焼 調成	胎土	遺存	備考
5	土師器 壺	12.0×6.00×3.70 ロクロ成形 外体部下端一回転ヘラケズリ 底部一回転糸切り、回転ヘラケズリ	暗褐 硬	雲母赤 色黑色 砂粒	1/4	底縁煤痕
6	土師器 壺	13.0×6.50×3.90 ロクロ成形 外体部下端一回転ヘラケズリ 内体部一ナデ 底部一回転ヘラケズリ	暗褐 黒褐	雲母 白色	2/3	赤彩(?)
7	土師器 壺	12.5×6.20×4.10 ロクロ成形 外体部下端一回転ヘラケズリ 底部一回転ヘラケズリ、静止ヘラケズリ	茶暗褐	雲母赤 色長石 白色	2/3	
8	土師器 壺	13.1×7.60×3.80 ロクロ成形 外体部下端一回転ヘラケズリ 底部一回転ヘラケズリ 切り離し不明	褐 硬	長石 赤色 白色	完形	墨書 外体正位 「仁」
9	土師器 壺	12.6×6.20×4.00 ロクロ成形 底部一回転糸切り、静止ヘラケズリ	暗褐 淡褐	雲母黑 色赤色 白色	略完形	墨書 外体正位 「万」 不鮮明
10	土師器 壺	12.9×6.70×3.90 ロクロ成形 外体部下端一回転ヘラケズリ 底部一回転ヘラ切り	褐 硬	赤色 白色	完形	墨書 外体正位 「仁」
11	土師器 壺	(14.4)×7.40×4.00 ロクロ成形 外体部下端一回転ヘラケズリ 底部一回転ヘラ切り、静止ヘラケズリ	暗褐 硬	雲母 赤色 白色	1/3	墨書 外体正位 「田方」か?
12	土師器 壺	(12.4)×7.60×3.70 ロクロ成形 外体部下端一回転ヘラケズリ 底部一回転ヘラ切り 切り離し不明	暗褐 硬	雲母 白色	2/3	墨書 外体 「○」
13	土師器 壺	(12.8)×6.80×3.70 ロクロ成形 外体部下端一回転ヘラケズリ 底部一回転糸切り、回転ヘラケズリ	淡褐	雲母 赤色	1/3	墨書 外体正位 「西」 内底「西」
14	土師器 壺	(12.4)×6.00×4.00 ロクロ成形 外体部下端一回転ヘラケズリ 底部一回転ヘラケズリ	暗褐 硬	雲母多 赤色 黑色	1/2	墨書 外体「口」 線刻 内底「-」
15	土師器 壺	15.4×7.20×4.20 ロクロ成形 外体部下端一回転ヘラケズリ 口縁～体部の一部にスス付着 底部一回転糸切り、回転ヘラケズリ 外体～口縁内の一部タール付着	褐 硬	赤色	2/3	墨書 外体正位 「正」 灯明皿
16	土師器 壺	14.6×7.50×4.10 ロクロ成形 外体部下端一回転ヘラケズリ 内体部一密なヘラミガキ 底部一回転ヘラ切り	褐 硬	雲母 白色	略完形	
17	土師器 壺	14.8×7.60×4.70 ロクロ成形 外体部下端一回転ヘラケズリ 内体部一粗いヘラミガキ 底部一回転ヘラ切り	暗褐	雲母赤 色長石 白色	1/2	口縁～体部の一部にスス付着
18	土師器 壺	15.2×8.20×3.90 ロクロ成形 外体部下端一回転ヘラケズリ 内体部一横位ヘラミガキ 底部一回転糸切り、回転ヘラケズリ	暗褐	雲母 白色	2/3	赤彩 外・内体
19	土師器 壺	12.8×7.00×4.90 ロクロ成形 外体部下端一回転ヘラケズリ 底部一回転糸切り、回転ヘラケズリ	暗褐	雲母	完形	墨書 「西口」
20	土師器 壺	12.5×6.80×3.80 ロクロ成形 外体部下端一回転ヘラケズリ 底部一回転糸切り、回転ヘラケズリ	褐 硬	赤色 雲母 黑色 白色	略完形	墨書 外体横位 「村持郷○召」
21	土師器 壺	—×—×— ロクロ成形	—	—	口縁片	墨書 外体 「口」

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色焼 構成	胎土	遺存	備考
22	土器器 小壺亮	13.2×6.60×14.7 火熱を被るため煮沸使用か? 外面 脊部上端～中央まで縦位へラケズリ 下端～横位へラケズリ 内面 頸部～ナデ 底部～静止へラケズリ 切り離し不明	暗赤褐 黒・暗 淡褐色	雲母赤 色長石 砂粒	1/2	表面剥離有り 内面ビビ割れ多
23	須恵器 甌	—×14.8×(32.2) 制御径—26.4 外面 タタキメナヘラナデ有り 脊部下端～へラケズリ 内面 当具痕 底部～回転へラケズリ 切り離し不明	黒 断面褐色 硬	長石	2/3	タタキメ極めて 浅い
24	須恵器 甌	(22.7)×15.0×33.8 外面 口辺部～ロクロ成形 脊中央～上半部～ タタキメ 脊下半部～へラケズリ 内面 口辺部～ロクロ成形 脣中央～下半部にかけヘラナデ 指頭痕	黑色 硬	雲母 石英多	2/3	胎土 長石・砂・赤 色・白色
25	鉄器 斧	7.25×3.40×1.90×101.7g	—	—	略完形	
26	鉄器 刀子?	(14.6)×1.15×0.55×46.0g 0.60×0.40	—	—	完形	
27	鉄器 刀子	11.0×0.60×0.20×11.8g 0.60×0.20	—	—	完形	
28	鉄器 刀子	(4.80)×0.70×0.20×3.00g	—	—	片	
29	鉄器 輪掛付 金具	(8.15)×0.75×0.70×45.3g 0.40×0.40	—	—	完形	
30	鉄器 鉄鎌	(3.65)×0.45×0.40×4.00g 0.25×0.25	—	—	片	
31	鉄器 鎌	(5.85)×2.05×0.20×10.0g	—	—	片	
32	鉄器 鎌	(4.80)×1.50×0.15×3.80g	—	—	片	
33	鉄器 釘	(5.20)×0.40×0.40×2.90g	—	—	片	
34	鉄器 刀子	(3.00)×0.60×0.35×2.60g	—	—	茎片	釘?
35	鉄器 釘	(6.35)×0.40×0.40×0.69g	—	—	片	

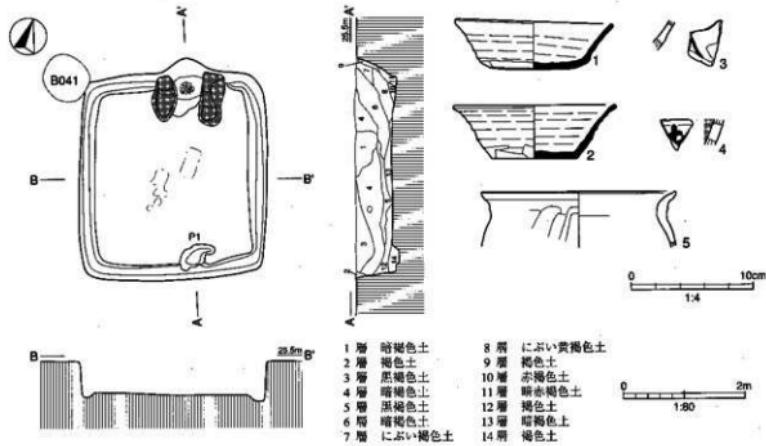


図168 A083

表13 A083遺物観察表

(単位cm)

No	種別 器形	法 量 成 形・調 整等の特 徴	色 調 成	胎 土	遺存	備 考
1	須恵器 壺	13.0×6.90×4.00 ロクロ成形 外体部下端一静止ヘラケズリ 底部一全面静止ヘラケズリ	硬 くすべ	白色多 長石砂 赤色	略完形	
2	須恵器 壺	(13.4)×(7.00)×4.40 ロクロ成形 外体部下端一静止ヘラケズリ 底部一静止ヘラケズリ	灰 硬	雲母 白色	1/3	
3	土師器 壺	-×-×- ロクロ成形	-	-	体部片	墨書 外体 「□」
4	土師器 壺	-×-×- ロクロ成形 外体部下端一ヘラケズリ	-	-	体部片	墨書 外体 「□」 内黒
5	土師器 小型壺	(16.0)×-×<4.60> ロクロ成形 外面 口縁部-ヨコナゾ後胴部縦位ヘラケズリ 内面 ナデ	黒褐 硬	雲母 白色	1/8 口縁部	

A083

検出地区 J8-8-4g、J8-9-3gにて検出した。

遺構 長軸3.38m×短軸3.03m×壁高0.55m、主軸方位は、N-18°-Wを示す。平面形は隅丸方形である。床は貼床主体の床で、住居跡中央に硬化面が残されている。壁はほぼ垂直に立ち上がり、柱穴は確認できなかった。P 1は出入口施設のピットと捉えられた。周溝はほぼ全周する。覆土は複雑な堆積で、人為的な埋戻しと捉えられた。

遺物 出土遺物は多くはなかった。

所見 住居廃絶後、竈方向から的人為的な投入の堆積と捉えられた住居跡である。

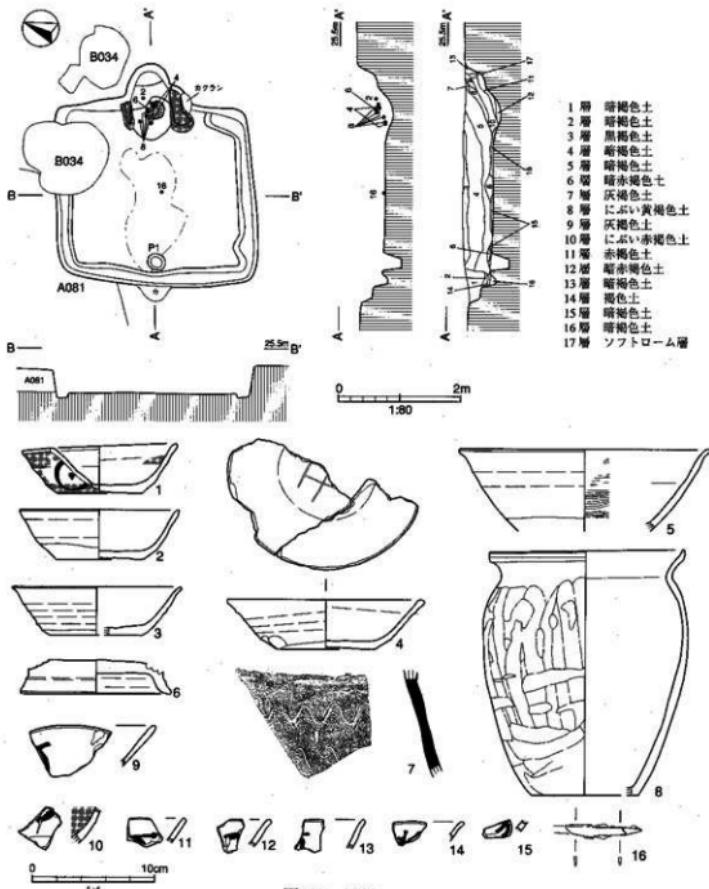


図169 A084

A084

検出地区 K8-31-2・4g、K8-32-1・3gにて検出した。

遺構 長軸3.25m×短軸3.05m×壁高0.44m、主軸方位は、N-69°-Eを示す。平面形は隅丸方形である。ロームを主体とした貼床で、全体的にしまっている。中央に硬化面が残り、竈直下まで認められた。柱穴は検出されず、P1は出入口施設のピットである。周溝は竈側の壁にて途切れている。覆土は自然堆積である。

遺物 完形となる遺物は少なく破片が多いが、「万」の字を中心として墨書き土器が9点出土している。

所見 竈の煙道と出入口ピットが直線となった数少ない住居である。墨書き土器は「万」の字が多く、本住居跡の特徴的な字となっている。

表14 A084遺物観察表

(単位cm)

No	種別 器形	法量 成形×底径×器高 口徑×底徑×器高 調整等の特徴	色 焼 成	胎 土	遺存	備考
1	土師器 壊	12.8×7.00×3.90 ロクロ成形 外体部下端一回転ヘラケズリ 底部一静止糸切り後回転ヘラケズリ	基本淡 褐・黑 淡	赤色	3/4	墨書 外体 「□」 スス付着
2	土師器 壊	13.0×7.00×4.10 ロクロ成形 底部一回転ヘラケズリ	暗褐 硬	青母多 赤色 黑色白色	4/5	
3	土師器 壊	(13.8)×7.50×4.00 ロクロ成形 外体部下端一回転ヘラケズリ 底部一回転ヘラケズリ	淡褐 硬	青母 黑色	1/2	
4	土師器 壊	16.2×(8.00)×4.10 ロクロ成形 外体部下端一静止ヘラケズリ 底部一欠損のため切り離し不明	赤褐～ 黒 暗褐～黑	青母	1/2	線刻 内底 「□」
5	土師器 鉢	(20.6)×-×(6.80) ロクロ成形 外体部下端一回転ヘラケズリ 内体部一密な横位ヘラミガキ	褐・サ ンドイ チ状	青母 長石	1/5	
6	土師器 高台付 壊	-×-×(2.90) 台部径12.3 ロクロ成形 内体部一密なヘラミガキ(坏部内底) がっしりした高台であり、壊というより鉢に近い器の高台と想定する	褐・黑 1/4赤	青母 赤色 黑色	高台部	内黑
7	須恵器 大甕	-×-×- 自然釉 外面 槌撲波状文 内面 横位のナデ	黑 灰 硬	長石	胴部片	搬入品
8	土師器 壺	(16.0)×(8.80)×20.3 外面 脇上半部一ナデ 上半部～中央部一縦位ヘラケズリ 中央部～下部一横位ヘラケズリ 底部一静止ヘラケズリ	褐 褐・や や赤味	青母赤 色黑色 白色	3/4	煮沸に使用 (焼痕有り)
9	土師器 壊	-×-×- ロクロ成形	-	-	口縁 部片	墨書 外体正位 「□」
10	土師器 壊	-×-×- ロクロ成形 外体部下端一回転ヘラケズリ 内体部一密なヘラミガキ	-	-	体部片	墨書 外体 「□」 内黑
11	土師器 壊	-×-×- ロクロ成形	-	-	口縁 部片	墨書 外体正位 「□」
12	土師器 壊	-×-×- ロクロ成形	-	-	口縁 部片	墨書 外体 「□」
13	土師器 壊	-×-×- ロクロ成形	-	-	口縁 部片	墨書 外体正位 「□」
14	土師器 壊	-×-×- ロクロ成形	-	-	口縁 部片	墨書 外体 「□」
15	土師器 壊	-×-×- ロクロ成形	-	-	体部片	墨書 外体 「□」
16	鉄器 刀子	(6.20)×0.75×0.20 5.8g 0.60×0.20	-	-	茎	一部刃部残

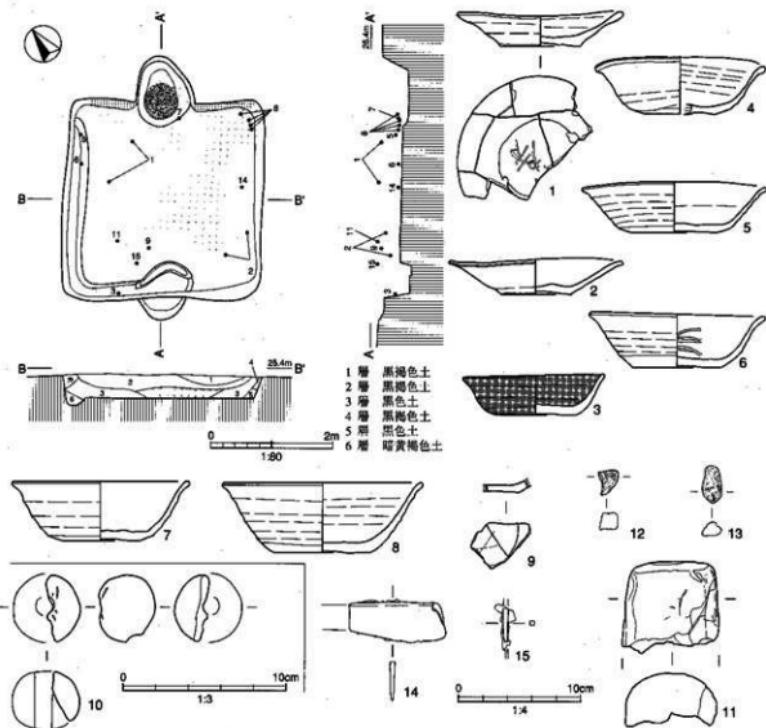


図170 A085

A085

検出地区 K7-95-3・4g, K8-5-1・2gにて検出した。

遺構 長軸3.25m×短軸3.16m×壁高0.36m、主軸方向は、N-37°-Eを示す。平面形は隅丸方形である。床は、住居廃絶後に不用材の焼却が行われたため、平坦であることは確認できたが、表面は火熱のために壊されていた。壁はほぼ垂直に立ち上がっていた。柱穴は検出できず、南西壁中央壁沿いにへの字のようなビットが、出入口施設のためのビットとして設けられ、壁上も半円形に掘られていた。周溝は、住居跡の中央西側にのみ巡っていた。竈は住居廃絶時に壊されたものか、かろうじて粘土が壁にこびりつくよう残るだけであった。覆土は3~6層の自然堆積後、掘り返され、不用材を焼却して埋戻しを行った人為堆積との二段階に捉えられた。

遺物 床や直上層からの出土は少なく、人為堆積土及び覆土上層からの出土が多くかった。また、垂直分布としては、焼土層より上層からの出土が多い。

所見 本住居跡では自然堆積後、覆土を掘り返して不用材を焼却しており、炭化材が壁際から住居跡中央の床にむかって放射状に検出された。この焼却に伴い焼土も広く散布していたが、炭化材・焼土は住居跡中央部では床面に達しており、壁際では床から20cm程浮いた状態であった。このことや覆土から、本住居跡は埋没過程での不用材の焼却であったと捉えられる。

表15 A085遺物観察表

(単位cm)

No	種別 器形	法量 成形・調整等の特徴	色 焼	調 成	胎 土	遺存	備考
1	土師器皿	(13.6)×(6.20)×2.50 ロクロ成形 底部一回転糸切り	赤褐色 暗淡褐色 普	白色	1/2	ヘラ骨 外底 「□□」	
2	土師器皿	14.3×5.80×2.90 ロクロ成形 底部一回転糸切り 未調整	橙褐色 硬	白色多 雲母	1/2		
3	土師器皿	11.6×6.50×3.30 ロクロ成形 底部一静止ヘラケズリ 外面・内面-黒色	黒 普	雲母 白色	完形		
4	土師器皿	(14.1)×(5.60)×4.70 ロクロ成形 外体部下端一回転ヘラケズリ 底部一面回転ヘラケズリ	明褐色 硬	白色多 雲母	1/4		
5	土師器皿	(15.2)×(6.80)×4.10 ロクロ成形 外体部下端一回転ヘラケズリ 底部一回転糸切り、回転ヘラケズリ	黒～褐色 硬	白色多 雲母長石 赤色	1/2		
6	土師器皿	14.4×7.30×4.40 ロクロ成形 外体部下端一回転ヘラケズリ 内体部一ハラミガキ 底部一回転糸切り、回転ヘラケズリ	黒褐色 硬	白色多 雲母 長石	完形		
7	土師器皿	(14.5)×6.40×4.90 ロクロ成形 外体部下端一回転ヘラケズリ 底部一回転糸切り、回転ヘラケズリ	赤褐色 硬	白色多 雲母	1/3		
8	土師器皿	(16.6)×8.00×5.80 ロクロ成形 外体部下端一回転ヘラケズリ 底部一回転糸切り、回転ヘラケズリ	硬	雲母 ・ 白色多	1/2		
9	土師器皿	-×-×- ロクロ成形 外体部下端一回転ヘラケズリ 底部一回転糸切り、回転ヘラケズリ	-	-	底部片	線刻 外底 「×」	
10	土製品 土玉	(2.80)×(2.60)×孔径(0.80)	明赤褐色 普	砂粒多	1/2		
11	土製品 支脚	上部径 7.8×(4.00)×(7.50) 230g 外面 ヘラケズリ後指頭及びヘラナデ	褐 軟	砂粒多 白色	1/3		
12	石器 軽石	2.10×1.60×1.40	-	-	片		
13	石器 蛭石	3.10×1.70×1.20	-	-	片		
14	鉄器 鎌	(7.80)×(3.20)×(0.40)	-	-	片	刃部	
15	鉄器 釘	(2.75)×(0.40)×(0.40)	-	-	片		

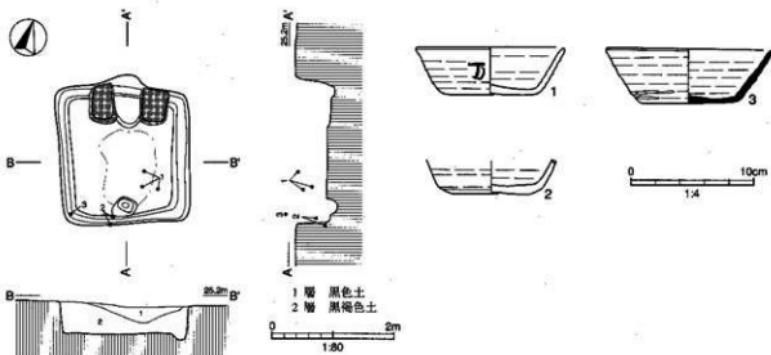


図171 A086

A086

検出地区 K8-44-2g、K8-45-1・3gにて検出した。

遺構 規模は、長軸2.23m×短軸2.10m×壁高0.51m、主軸方位はN-15°-Wを示す。平面形は隅丸方形で、小規模であるが、深さを有する住居跡である。ハードロームと褐色土が混じり合った踏み固められた平坦な床であり、特に住居中央は硬化面を残している。柱穴は検出されず、出入口施設のピットだけが認められた。周溝は全周し、竪ピットより深く掘り込まれていた。また、住居中央から東側は幅が広く掘り込みもしっかりとしたものであるが、西側は狭く深さも浅くなっている。壁は、ほぼ垂直に立ち上がっていった。竪は壊されており、袖も基礎部の、床から5~10cm程が残されたのみである。覆土は、黒色土と黒褐色土に単純に分層できた。

遺物 遺物は少なく、散在するといった感じを与えていた。本住居跡に伴う遺物は2である。

所見 覆土は黒色土と黒褐色土の2層にしか分層できないという、単純な堆積としか捉えられなかった。堆積状態や土質などから、この覆土は住居廃絶時における人為的な投入、しかも一気に埋戻されたものであると判断された。このことから図示した遺物1・3は、埋戻しの土砂と共に投入されたものと考えられる。上谷遺跡II地区では、このような一気に埋戻すという例が何軒かあり、集落として意識的に廃絶した住居があったことを窺わせるものである。

表16 A086遺物観察表

(単位cm)

No	種別 器形	法量 成形・調整等の特徴	色 焼	調成	胎土	遺存	備考
1	土器 壺	12.2×6.40×3.90 ロクロ成形 外体部下端一ハラケズリ 底部一回転糸切り、回転ハラケズリ	褐 硬	雲母多 白色	1/2	墨書 外体正位 「四」	
2	土器 壺	—×6.40×(2.90) ロクロ成形 外体部下端一回転ハラケズリ 底部一全面回転ハラケズリ	赤褐 硬	雲母・ 長石・ 白色多	底部		
3	須恵器 壺	13.6×8.00×4.50 ロクロ成形 外体部下端一部分にハラケズリ 底部一回転糸切り、静止ハラケズリ	灰 硬	雲母	1/2		

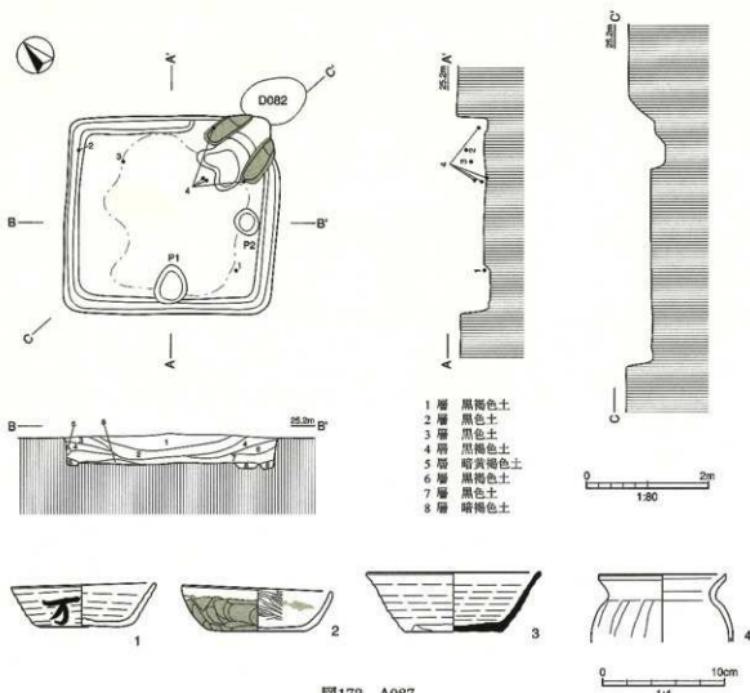


図172 A087

A087

検出地区 K8-43-3・4g、K8-53-1gにて検出した。

遺構 長軸3.46m×短軸3.23m×壁高0.44m、主軸方位は、N-86°-Eを示す。平面形は隅丸方形であり、竈を北東コーナーに築く住居跡である。床はハードロームのほぼ平坦なものだが、竈前はやや低く凹んでいる。竈前から住居中央の床は硬化面を残している。周溝は全周せず、竈左袖付近で途切れ、また、竈右袖下で止まるものである。柱穴は検出できず、P1は出入口施設のピットと捉えられた。竈は、住居廃絶時に天井部が壊されていた。袖の内壁は赤化が著しく、使用度が高かったことを窺わせる。覆土は自然堆積した後に、掘り返されていた。覆土中層において、炭化材は検出されなかつたが、焼土を多量に含む層が捉えられた。

遺物 住居跡としては少ない。1は土師器坏で「万」を記す墨書土器である。4の小型壺は竈右袖脇から横に倒れていた。共に床から出土している。

所見 覆土中層における焼土は、住居の廃絶後に、3～7層が自然堆積によって住居の埋没後、掘り返されて焼土を含む層の二次的利用が想定できるものである。炭化材が検出されないことが、残らない程に焼却されたか、焼土の投棄であったかは不明である。

表17 A087遺物観察表

(単位cm)

No	種別 器形	法 長 径×底 径×器 高 成 形・調 整等の特 徴	色 焼 度 調 成	胎 土	遺存	備 考
1	土師器 壺	11.7×6.20×3.40 ロクロ成形 底部—全面回転ヘラケズリ	褐 硬	雲母多 白色	完形	墨書 外底正位 「万」
2	土師器 壺	12.3×7.80×3.50 ロクロ成形 外体部—ヘラケズリ 内体部—密なヘラミガキ 底部—手持ヘラケズリ 全面ケズリのため切り離し不明	暗褐 硬	雲母 白色	略完形	外面 黒色 内面 外・内体焼付着
3	須恵器 壺	(14.4)×8.00×4.80 ロクロ成形 外体部下端—静止ヘラケズリ 底部—回転ヘラ切り	灰 硬	雲母・ 長石・ 白色多	1/3	
4	土師器 小型壺	10.4×—×(5.30) 外面 口縁～頸部～ヨコナデ 脇部～タテヘラケズリ後ナデ 内面 ヨコナデ	暗橙黒 硬	砂粒	口縁～ 脇部	

A088

検出地区 K7-35-2g、K8-36-1・3gにて検出した。

遺構 長軸3.33m×短軸3.22m×壁高0.36m、主軸方位N-21°-Eを示す。平面形は長軸と短軸の差のあまりない隅丸方形である。床は住居中央がやや凹んでいる。硬化面は住居跡の東側を中心にして、竈周囲から出入り口付近まで認められた。周溝は竈ピットまで全周している。柱穴は明瞭にしがたかった。住居廃絶後、不用材を床面で焼却しており、細かな炭化材が散っている。覆土は全体的に黒褐色度を主体としたものであったが、1～5層の自然堆積と、掘り返されて投棄された鹹水性貝層の貝層、その後の自然堆積である6～8層とに三分できる。

遺物 床直及び直上層の遺物は少なく、住居廃絶後の廃棄が主体で、覆土中層の遺物出土が多かった。図示した遺物で本住居跡に伴うものは、18の1点のみである。接合した遺物は土師器壺が主体となっており、土師器壺や須恵器壺は少なかった。また、貝層部からは須恵器壺の大型片が出土している。墨書土器は6点と少ないが、17のように「三寶」と記された土器片もあり、仏教的な色彩も窺われる。他の墨書土器では、「得」と「万」が混在していた。5は赤彩土器である。

鹹水性貝層の廃棄により自然遺物として、ハマグリ、チョウセンハマグリ、シオフキを主体として、二枚貝はアサリ、マガキ、サルボウ、ムラサキガイ、マテガイ、カガミガイの9種が、巻貝はダンペエキサゴ、ウミニナ、イボウミニナ、アカニシの4種、淡水性貝層としてオオタニシ1種の計14種が認められた。また、カタツムリ類も出土している。その点数割合における構成率は、ハマグリ類48.87%、シオフキ33.51%を占め、アサリ以下は1%未満であった。また、本貝層中には、貝に混じり須恵器壺の大形片が多く出土している。

所見 本住居跡の埋没は自然堆積と貝の廃棄に係わる人為堆積、そしてその後の自然堆積による埋没と、三段階に明瞭に分かれるものであった。覆土の堆積状況をみると、ほぼ埋没した住居跡を掘り返して貝を廃棄しており、これがいかなる理由によるものか判断がつきにくいものであった。貝の廃棄ではないが、A085の場合は不用材の焼却という行為が行われていた。同時代の同時期における竪穴住居跡が100軒単位で構成された上谷遺跡において、廃絶住居の自然堆積による埋没時間を考えると、凹地となった竪穴住居が残されていたはずである。調査では、再度掘り返した凹地を使用する理由は捉えられなかった。上谷遺跡Ⅱ地区では人為的に廃絶住居を一気に埋戻した例があり、これと係わりがあるのかもしれない。廃棄された貝の構成は浅海砂泥底に生息する貝であり、オオタニシが若干出土するとしても貝層は純鹹水性貝層といえよう。繩文時代の海進のような時代とは異なり、

かつて印旛沼に面した奈良・平安時代の上谷遺跡ではあるが、この時代には海は遙かに後退しており、採集地の問題が考慮されよう。ハマグリ、シオフキ等の砂泥底に生息する貝を中心であつたが、距離的にも東京湾からの搬入と考えている。確かに印旛沼から利根川への水路を開けていたと考えられるが、東京湾の方が新川を遙かに近く、新川上流と東京湾へ流入する河川は上流では1kmも離れていないことも考慮すべきであろう。

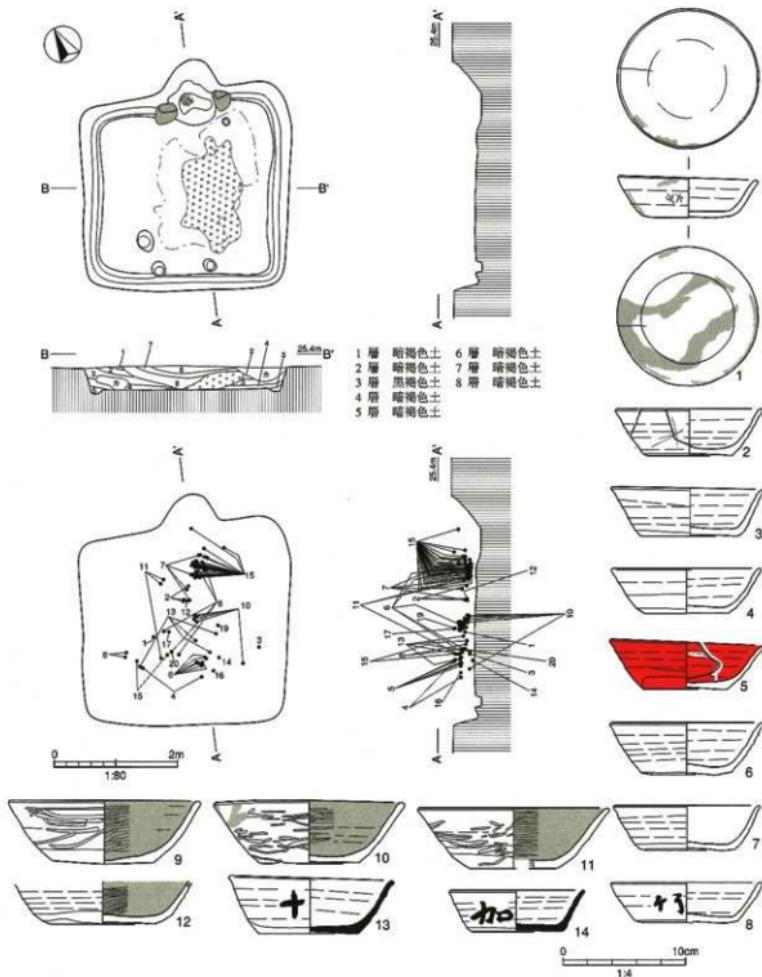


図173 A088

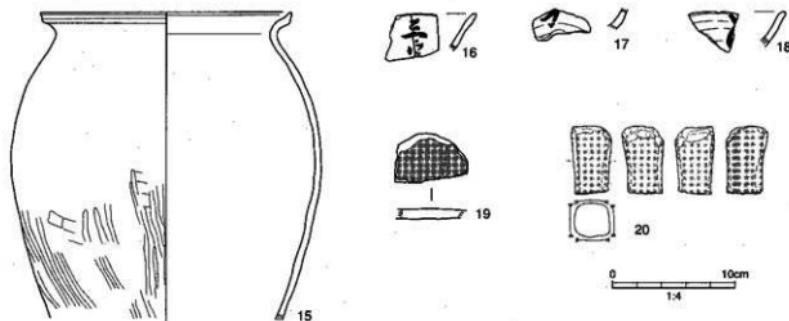


図174 A088(2)

表18 A088出土貝種構成表

項目貝種	枚 数				重 量 (kg)			備 考
	区分	点数	種別点数	点数割合	区分重量	種別重量	重量割合	
ハマグリ	左	1588	3233	48.87	左 3.93	10.04	54.62	種別重量は 微小片含む
	右	1689			右 4.43 微小 1.68			
シオフキ	左	1286	2217	33.51	左 3.84	7.91	43.04	種別重量は 微小片含む
	右	931			右 2.39 微小 1.68			
アサリ	左	23	47	0.71	左 0.06	0.14	0.76	種別重量は 微小片含む
	右	24			右 0.06 微小 0.02			
オキシジミ	左	12	25	0.38	左 0.06	0.15	0.82	種別重量は 微小片含む
	右	13			右 0.07 微小 0.02			
マガキ	左	4	28	0.42	左 0.02	0.08	0.44	種別重量は 微小片含む
	右	24			右 0.04 微小 0.02			
サルボウ	左	3	27	0.41	左 0.02	0.03	0.16	種別重量は 微小片含む
	右	24			右 0.00 微小 0.00			
ムラサキガイ	左	2	9	0.14	左 0.01	0.06	0.33	種別重量は 微小片含む
	右	7			右 0.02 微小 0.03			
マテガイ		47	47	0.71	0.01	0.01	0.05	
カガミガイ	左	2	4	0.06				
	右	2						
ダンベエキサゴ		906	906	13.70				
ウミニナ		12	12	0.18				
イボウミニナ		7	7	0.11				
アカニシ		1	1	0.02				
オオタニシ?		47	47	0.71				
カツムリ類		5	5	0.08				
微	ダンベエキサゴ	259						
小	ウミニナ	93						
片	不明種	1						
			6615			18.34	100.22	

表18b A088遺物觀察表

(単位cm)

No	種別 器形	法量 成形・調整等の特徴	色 焼成	胎 土	遺存	備考
1	土師器 壺	11.5×7.00×3.30 ロクロ成形 底部一回転糸切り後回転ヘラケズリ 口縁部内外面、体部～底部外面にスス有り	褐 硬	雲母長 石赤色 白色	完形	線刻 外体横位 「大方」 灯明里
2	土師器 壺	(12.0)×6.90×7.00 ロクロ成形 外体部下端一回転ヘラケズリ調整 底部一回転糸切り後周縁回転ヘラケズリ	橙褐色 硬	雲母多 白色	略完形	線刻 外体 「口」
3	土師器 壺	12.6×8.00×4.00 ロクロ成形 外体部下端一回転ヘラケズリ調整 底部一回転糸切り後周縁回転ヘラケズリ	淡褐色 硬	雲母石 英長石 白色多	略完形	
4	土師器 壺	(12.4)×6.90×3.70 ロクロ成形 外体部下端一回転ヘラケズリ調整 底部一面全ヘラケズリのため切り離し不明	暗褐色 硬	雲母石 英長石 白色多	1/2	
5	土師器 壺	12.6×6.80×3.90 ロクロ成形 外体部下端一回転ヘラケズリ調整 底部一回転糸切り後周縁回転ヘラケズリ	硬	雲母 白色	略完形	線刻 内体 「口」 赤彩
6	土師器 壺	(12.6)×7.50×4.30 ロクロ成形 体部下端一調整ケズリなし 底部一回転糸切り後周縁回転ヘラケズリ	暗褐色 硬	雲母・ 白色多 石英	1/2	
7	土師器 壺	12.1×7.60×3.70 ロクロ成形 外体部下端一回転ヘラケズリ調整 底部一回転糸切り後周縁回転ヘラケズリ	明褐色 硬	雲母多 白色	1/2	
8	土師器 壺	(12.0)×(8.50)×3.30 ロクロ成形 底部一回転ヘラ切り後回転ヘラケズリ	明褐色 硬	雲母長 石砂粒 白色多	1/4	墨書 外体正位 「竹」
9	土師器 壺	15.6×8.20×5.10 ロクロ成形 外体部下端一回転ヘラケズリ、ヘラミガキ 内体部一密なヘラミガキ 底部一回転糸切り後回転ヘラケズリ	褐色 黑色研磨 硬	雲母 赤色 白色	2/3	内黒
10	土師器 壺	15.6×8.10×5.20 ロクロ成形 外体部下端一回転ヘラケズリ 粗いヘラミガキ スス付着 内体部一密なヘラミガキ 底部一回転ヘラ切り	暗褐色 硬	雲母 白色	1/2	内黒
11	土師器 壺	(16.0)×(7.00)×5.00 ロクロ成形 外体部一粗いヘラミガキ 内体部一密なヘラミガキ 底部一回転糸切り後回転ヘラケズリ	暗褐色 硬	雲母 白色	1/3	内黒
12	土師器 壺	—×8.40×(3.50) ロクロ成形 外体部下端一回転ヘラケズリ 内体部一密なヘラミガキ 底部一回転糸切り後周縁回転ヘラケズリ	橙褐色 黑硬	雲母石 英長石 白色	1/2 底部	内黒
13	須恵器 壺	13.5×8.20×4.60 ロクロ成形 外体部下端一回転ヘラケズリ調整 内体部一粗いヘラミガキ 底部一回転糸切り後周縁回転ヘラケズリ 成形等から須恵と判断	淡褐色 硬	雲母多 石英 白色	略完形	墨書 外体 「十」
14	須恵器 壺	11.0×7.60×3.40 ロクロ成形 外体部下端一回転ヘラケズリ調整 底部一回転糸切り後周縁回転ヘラケズリ	灰 硬	雲母 長石 白色多	略完形	墨書 外体正位 「加」
15	土師器 壺	20.6×—×(25.5) ロクロ成形 外面 口縁部ヨコナデ 頂部ドボー横位ヘラケズリ後縱位ヘラミガキ 内面 ナデ	暗褐色 明褐色 暗褐色 硬	雲母石 英長石 白色多	口縁～ 肩部	
16	土師器 壺	—×—×— ロクロ成形	褐		口縁～ 体部片	墨書 外体正位 「三實」 F086Na1と接合

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色焼 調成	胎土	遺存	備考
17	土師器 壺	-×-×- ロクロ成形 外体部下端一回転ヘラケズリ調整	-	-	体部片	墨書 外体側位「四」
18	土師器 壺	-×-×- ロクロ成形	-	-	口縁片	墨書 外体側位「四」
19	土師器 壺	-×-×- ロクロ成形 底部内面一帯なヘラミガキ 回転糸切り後回転ヘラケズリ	-	-	底部片	線刻 内底「□」 内黒
20	石器 石器 石器	(5.6)×2.9×2.8	-	-	1/2	やや減りが 少ない

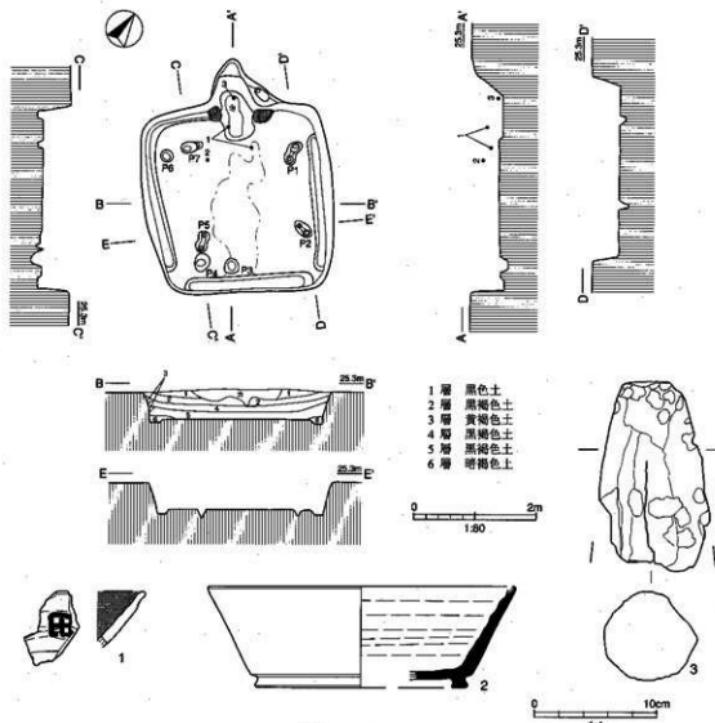


図175 A090

検出地区 K7-37-1・3gにて検出した。

遺構 長軸3.10m×短軸3.07m×壁高0.45m、主軸方位はN-39°-Wを示す。平面形は長軸と短軸がほとんど差のない四角形である。床はやや凹凸のあるものの、ハードロームの地床である。

床面にビットを7基検出したが、主柱穴はP 1・2・5・7であり、P 3は出入口施設のビットと捉えられた。また、竈右袖の壁上に小さなビットを検出したが、用途は不明である。周溝は、北西コーナーから北西壁下へ続くものと、南東壁、北東壁の3本に分かれていた。壁はやや斜めに立ち上がっていいる。竈は粘土の遺存が少なく、壊されていた。覆土は、黒褐色土を主体とした自然堆積である。

遺物 住居跡としては少なかった。

所見 主柱穴は4本とも拡張されており、坑底もそれぞれ2カ所確認された。このことから柱穴の内側から外側へ、柱の配置換えが行われていたと考えられる。また、P4・6も当初は柱穴と考えたが、壁と平行せず、用途不明のピットである。竈は粘土の遺存が少なく袖も小さくなっており、人為的に壊されたという印象を与えるものであった。

表19 A090遺物觀察表

(单位cm)

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	土師器 壺	一×一×一 ロクロ成形 外体部下端一回転ヘラケズリ調整 内面一密なミガキ	暗褐色 硬	雲母 白色	口緣片	墨書 外体正位 「田」 内黒
2	須恵器 高台付 壺	(25.2)×(17.0)×8.40 ロクロ成形 外胴部一横位ヘラケズリ 底部一ケズリ不明 ナデ 切り離し欠損のため不明	灰 硬	長石 黒色	1/5 胴下～ 高台	
3	土製品 支脚	(5.2)×一×(15.6) ボロボロ	褐	長石 粗砂粒 白色	4/5	

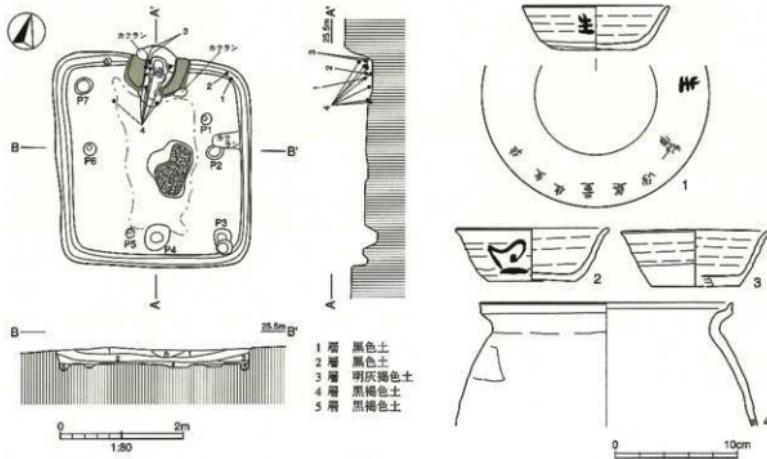


图176 A091

表20 A091遺物観察表

(単位cm)

No	種別 器形	法 量 成 形 口 径 × 底 径 × 器 高 度 調 整 等 の 特 徴	色 調 成	胎 土	遺存	備 考
1	土師器 坏	12.0×6.60×3.60 ロクロ成形 体部下端一回転ヘラケズリ 底部一回転糸切り後回転ヘラケズリ 線刻一外体正位「往生徒量□□□」	褐 硬	雲母	略完形	墨書 外体正位 「生」
2	土師器 坏	12.5×7.10×4.00 ロクロ成形 外体部下端一回転ヘラケズリ調整 底部一回転糸切り後周縁回転ヘラケズリ	褐 褐 硬	雲母 白色	略完形	墨書 外体横位 「得」
3	土師器 坏	(12.2)×(7.20)×4.70 ロクロ成形 外体部下端一回転ヘラケズリ調整 底部一回転糸切り後周縁回転ヘラケズリ	褐 赤 褐 硬	雲母	1/3	
4	土師器 甕	20.8×-×(10.2) 外面 口縁部ニヨコナデ 腹部ニナデ 内面 ヘラナデ	暗褐 褐 硬	雲母石 英長石 白色多	口縁～ 腹部	

A091

検出地区 K7-37-4g、K7-38-3g、K7-47-2g、K7-48-1gにわたって検出した。

遺構 長軸3.44m×短軸3.07m×壁高0.23m、主軸方位はN-15°-Wを示す。平面形は隅丸方形である床は全体的に踏み固められ、特に、竈前から出入り口にかけて細長く硬化面を残している。壁はほぼ垂直に立ち上がっている。床面にビットは7基検出されたが、主柱穴はP1・3であり、P2・6は浅く置柱のような柱穴であった。P4は出入口施設のビットである。周溝はやや幅の狭いものであるが、竈下まで巡っている。住居跡中央に本住居跡に伴う火床を伴う浅いビットが検出されたが、付帯ビット等は見つからず用途不明となっている。覆土は、下層に黒褐色土を、上層に黑色土を主体に堆積したもので、自然堆積であった。

遺物 土師器片が主体を占め、須恵器片は数点の出土であるが、遺物は少なかった。墨書土器は2点出土し、2は「得」の墨書がある土師器坏である。1・2とも床から3cm程浮いて出土している。

所見 住居跡中央の床面にて検出した火床をもつビットであるが、ビットはどちらかというと凹み状であり、坑底がはっきりとせず、凹凸のあるものである。かなり強い火熱を被っていた。火の使用に係わる作業スペースとも考えられるが、付帯する遺構や遺物がなく、用途不明として報告する。

A092

検出地区 K7-48-1・3gにて検出した。

遺構 長軸3.25m×短軸1.18m×壁高0.52m、主軸方位はN-74°-Wを示す。平面形はやや歪んだ隅丸方形である。床は少し凹凸があるが、全体的にはよく踏み固められており、硬化面は竈前から各柱穴間に残されていた。壁はほぼ垂直に立ち上がるが、南東壁はやや斜めとなっている。床面にビットは4基検出されたが、主柱穴はP1・4であり、P3は出入口施設のビットである。P2は周溝と平行した、長楕円形の溝状のものである。周溝は竈袖際まで巡っていた。竈袖は、暗褐色土が多く含まれたものであった。覆土は黒褐色土主体であるが、5層において火の使用による焼土が認められ、人為堆積後に自然堆積したものであった。

遺物 遺物は多かったが5層以上の遺物出土が主体となっており、本住居跡に伴う遺物は少なかった。なお、「万」の墨書土器が出土している。

所見 本住居跡も、床は中央に火床を伴う浅いビットが検出された。A091と同様であると考えられるが、用途は不明である。

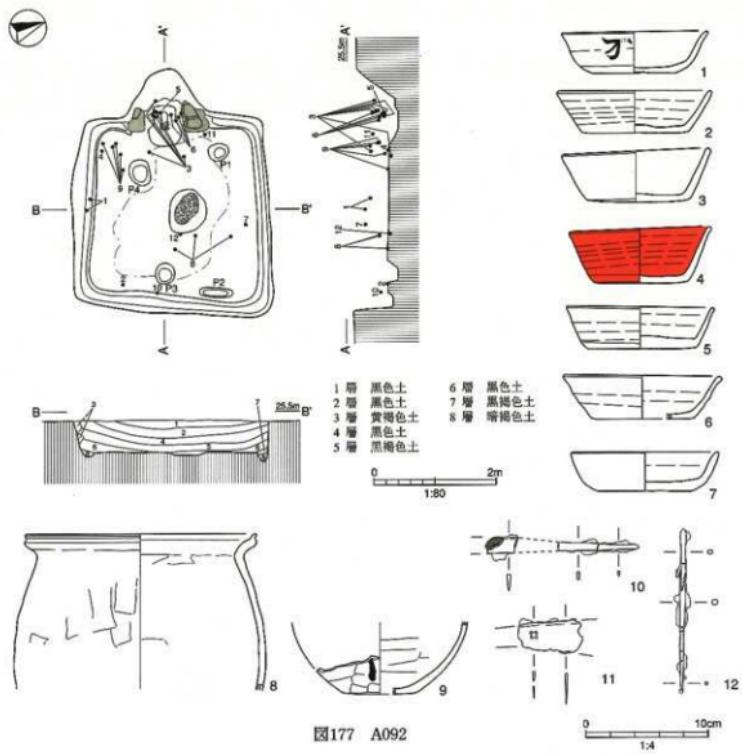


図177 A092

表21 A092遺物観察表

(単位cm)

No.	種別 器形	法量 成形・調整等の特徴	色 焼	胎 土	遺存	備考
1	土師器 壺	11.9×6.80×3.50 ロクロ成形 外体部下端一回転ヘラケズリ調整 底部一回転糸切り後周縁回転ヘラケズリ	褐 程 硬	雲母 白色	略完形	墨書 外体正位 「万」
2	土師器 壺	12.6×8.60×3.50 ロクロ成形 底部一回転ヘラ切り後静止ヘラケズリ	暗褐 ～ 黒褐 硬	雲母 石英 白色	略完形	
3	土師器 壺	12.2×8.50×4.30 ロクロ成形 底部一全面静止ヘラケズリのため切り離し不明	赤褐 硬	雲母 ・ 白色 多 石英	略完形	
4	土師器 壺	11.6×7.70×4.50 ロクロ成形 外体部下端一回転ヘラケズリ調整 底部一回転ヘラ切り後静止ヘラケズリ	暗赤褐 硬	雲母 石英 白色	完形	赤彩

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・清整等の特徴	色 焼	調成	胎土	遺存	備考
5	上部器 坏	12.1×8.90×3.50 ロクロ成形 外体部下端一回転ヘラケズリ調整 底部一回転糸切り後静止ヘラケズリ	褐～赤褐色	云母・ 白色多		略完形	
6	土器器 坏	12.9×8.40×3.50 ロクロ成形 底部一回転ヘラケズリ 一部欠損のため切り離し不明	橙褐色	云母・ 白色多 長石		略完形	
7	土器器 坏	(12.1)×7.60×3.30 ロクロ成形 底部一面全面回転ヘラケズリのため切り離し不明	褐 硬	云母多		1/2	
8	土器器 坏	19.0×—×(12.9) ロクロ成形 外面 口縁部ニヨコナデ 脊部一綫位ヘラナデ(後ナナデ?) 内面 ヘラナデ	褐・暗 赤褐色 橙褐色	云母石 英長石 白色多	口縁部 ～脇部		
9	土器器 小型甕	—×(6.00)×(6.00) 胴部一綫位ヘラケズリ後下部横位ヘラケズリ 底部一静止ヘラケズリ 一部欠損のため切り離し不明	暗褐色～ 黒褐色 褐	云母 石英 白色	胴部～ 底部	墨書 外側 「□」	
10	鉄器 鍤	(2.60)×12.3×厚み0.30 10.0g (6.60)×0.40～0.60×厚み0.20	—	—		片	
11	鉄器 鎌	(5.20)×2.20～2.50×厚み0.20 7.60g	—	—		片	孔数1
12	鉄器 鎌	(8.10)×0.40×厚み0.30 10.6g (4.90)×0.20～0.40×厚み0.20～0.40	—	—		完形	

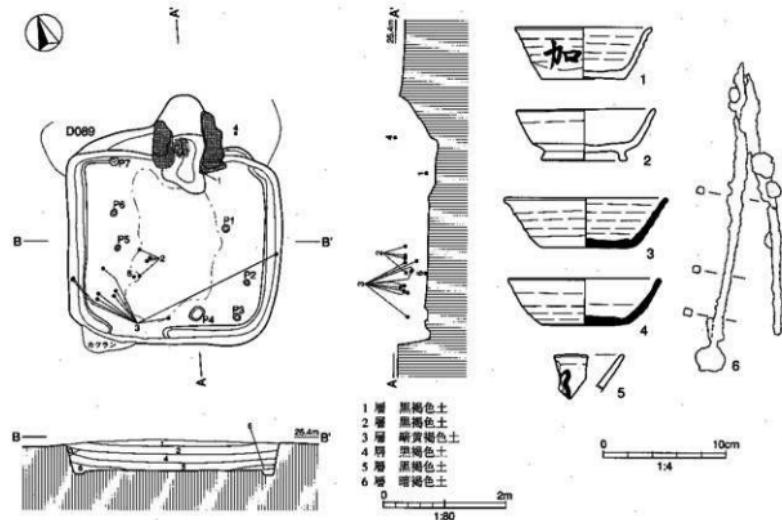


図178 A093

表21b A093遺物観察表

(単位cm)

No	種別 器形	法量 成形・調整等の特徴	調 色 焼	胎 土	遺存	備考
1	土師器 壺	(11.2)×6.80×4.30 ロクロ成形 外底部下端一回転ヘラケズリ調整 底部一回転糸切り後回転ヘラケズリ	橙褐色 硬	雲母 石英 白色	1/2	墨書 外体正位 「加」
2	土師器 高台付 壺	11.4×-×4.20 台部径7.00 ロクロ成形 外底部下端一回転ヘラケズリ調整 底部一全面回転ヘラケズリのため切り離し不明 高台部ーナデ	橙褐色 硬	雲母 石英 白色多	略完形	胎土 長石
3	須恵器 壺	(13.4)×7.60×4.10 ロクロ成形 外底部下端一回転ヘラケズリ調整 底部一全面帶停止ヘラケズリのため切り離し不明	硬	雲母石 英長石 白色多	略完形	
4	須恵器 壺	12.5×7.10×3.90 ロクロ成形 底部一回転糸切り後周縁回転ヘラケズリ	硬	雲母 砂粒 白色多	完形	
5	土師器 壺	-×-×- ロクロ成形	褐	-	口縁片	墨書 外体正位 「囲」
6	鉄器 鉄鉗子	(25.3)×0.40×厚み0.30 155.4g	-	-	完形	頭部サビひどく 断面とれず

A093

検出地区 K7-45-2・4g、K7-46-1・3gにわたって検出した。

遺構 長軸3.41m×短軸3.08m×壁高0.43m、主軸方位はN-21°-Eを示す。平面形は隅丸方形である。床は平坦でよく踏み固められており、竈前から出入口にかけて長方形状に硬化面を残している。床面に小さなピット6基、壁際に1基の計7基が検出されたが、規模・掘り込みが極めて浅く、柱穴とは考えにくいものであった。P4は出入口施設のピットと考えられる。周溝は竈壁コーナーから、南壁へ巡るが、南壁南西コーナー付近でそれぞれ途切れている。また、深くしっかりととした掘り込みであった。竈袖には、暗褐色土がやや多く含まれていた。覆土は黒褐色土を主体とした自然堆積であった。この他に、竈左から北西コーナーにかけて、遺構検出面より一段下がってD089が検出している。

遺物 本住居跡は、全体的に他の住居跡に比べて遺物出土は少ない住居跡である。しかも、覆土中層～上層にかけての出土が多かった。1の「加」の墨書き土器は竈右袖から出土し、4は竈壁上から出土した。5は土師器壺の口縁片だが、「得」が記された墨書き土器である。6の鉄鉗子は、床面上に横たわる状態で出土している。図示した遺物のうち、本住居跡に伴う遺物は1と6であった。

所見 本住居跡は、自然堆積による埋没と考えられるものである。重複するD089は縄文時代の所産であり、当然A093が新しくなる。しかし竈壁右側から出土した、遺物4を検討しなければなるまい。4が出土した位置はD089の中であるが、遺物出土地点の覆土状況は本住居跡に近似しており、セクション等は把握できなかったが、竈壁上右側は本住居跡に伴うものであったかも知れない。この場合、住居に伴う棚状遺構となるが、判断できなかった。上谷遺跡II地区に多い「得」の記された墨書き土器が出土していることは、本住居跡の集落のなかの位置付けに係わってくる資料と考えられる。

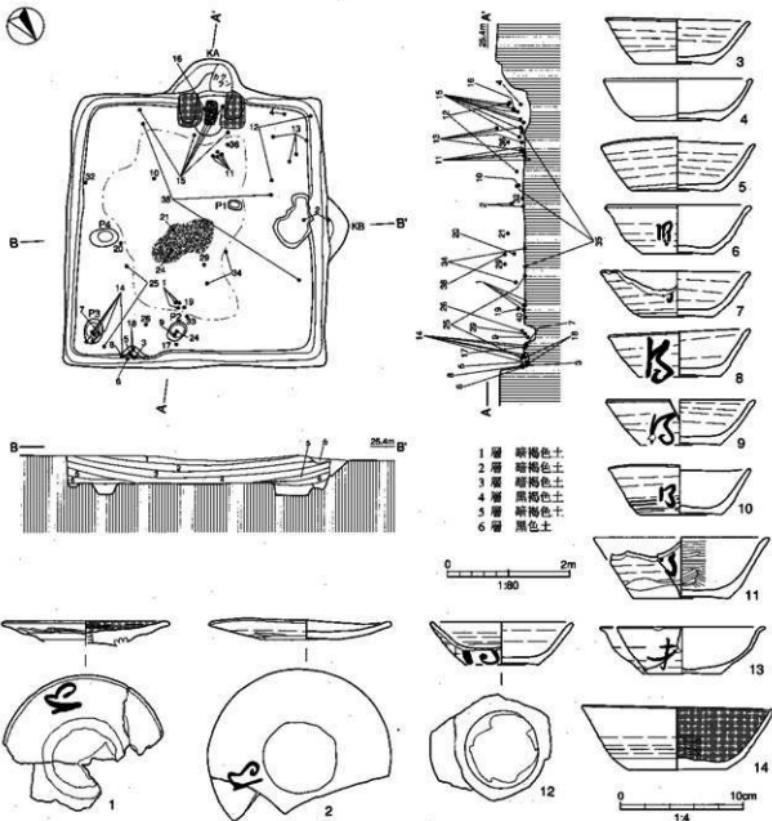


図179 A094

A094

検出地区 K7-45-3・4g、K7-55-1・2gにわたって検出された。

遺構 長軸4.46m×短軸4.23m×壁高0.42m、主軸方位はN-37°-Wを示す。平面形はやや角張った隅丸方形である。床面は中央がやや凹んでいるように見えるが、全体的に平坦であり、よく踏み固められた床で、竈前から出入口施設のピット前まで、住居跡中央部に硬化面がみられる。床面からはピットが全基検出されたが、主柱穴と捉えられるものはなかった。周溝は全周する。本住居跡は竈の造り替が行われた住居であり、当初、B竈が北西壁に築かれていたが、その後、南西壁に新しくA竈が築かれたものである。B竈は煙道部を残して壊されていたが、竈ピットは埋め戻されて床とされていた。火床はほとんど認められなかった。B竈下まで周溝が当初より巡らされていたかは不明であるが、A竈になってからは、全周する周溝とされていた。また、住居跡中央に焼土範囲が検出された。ピットではなく、淡く赤化した範囲となるものであり、長時間の火の使用とは考えられなかった。なお、本竈穴住居跡の覆土は、暗褐色土と黒褐色土を主体とした自然堆積であった。

遺物 出度量は多いが、覆土中層～上層が特に多い住居跡である。蛇尾17や鎌18は床に置かれたように出土し、蛇尾は逆位で出土している。また、北東壁際からは、床より浮いた状態で土師器壺を中心にもやや多く遺物が出土している。

所見 本住居跡の形状は比較的方形に近い竪穴住居跡であり、竪の再構築を行った住居である。しかし、竪の再構築に伴う住居自体の拡張等は、調査では認められなかった。A竪に伴う出入口施設のピットはP 2であり、B竪に伴うものはP 4であった。B竪は煙道部はほとんど壁を掘りこまず、立ち上がりが急であると捉えられた。このためB竪の煙道部の覆土堆積はほとんど残らず、壁の崩れを防ぐよう充填したような状態であった。

遺物は、本住居跡からは線刻を含めて墨書き土器が29点と多く出土し、このうち「得」が11点を占めるものである。II地区において、「得」が集落の特徴的な字となっていることが窺える出土状況であった。また、蛇尾の出土を考えあわせると、本住居跡はII地区的竪穴住居跡のなかでも、中心的な存在とも言えるかも知れない。

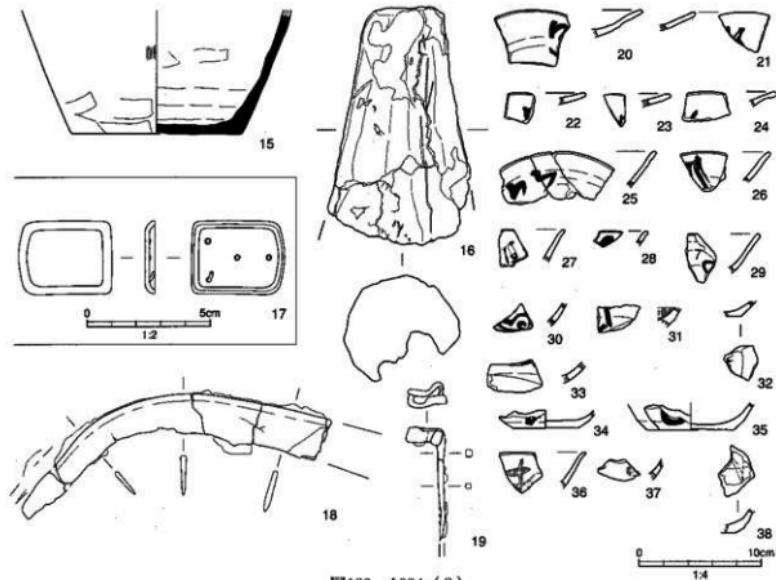


図180 A094 (2)

表22 A094遺物観察表

(単位cm)

No	種別 器形	法 量 成 形 ・ 調 整 等 の 特 徴	色 焼 成	調 成	胎 土	遺存	備 考
1	土師器 高台付 皿	(13.8)×-(2.10) ロクロ成形 外体部中位一回転ヘラケズリ 内体部一粗いミガキ 外底高台部一接合時ナダ 切り離し不明 高台欠損	褐 青	青 母	1/2	墨書 外体横位 「得」 内底	
2	土師器 皿	15.0×5.90×1.60 ロクロ成形 外体部下端一手持ヘラケズリ 外体部中位一ヘラケズリ	褐	青 母 赤色 白色	2/3	墨書 外体正位 「得」	

No	種別 器形	法量 成形・調整等の特徴	色焼成	胎土	遺存	備考
3	土師器 壺	11.8×6.10×3.70 ロクロ成形 外体部下端一回転ヘラケズリ 底部一全面回転ヘラケズリのため切り離し不明	橙褐色 硬	雲母多 白色	1/2	
4	土師器 壺	(12.2)×6.80×3.40 ロクロ成形 外体部下端一回転ヘラケズリ 底部一回転糸切り後回転ヘラケズリ	明褐色 硬	雲母	1/2	
5	土師器 壺	12.6×7.10×4.20 ロクロ成形 外体部下端一回転ヘラケズリ 底部一回転糸切り後回転ヘラケズリ	暗褐色 橙褐色 硬	雲母	略完形	墨書 外体正位「得」
6	土師器 壺	(12.0)×5.90×4.00 ロクロ成形 外体部下端一回転ヘラケズリ 底部一回転糸切り後回転ヘラケズリ	褐 硬	雲母	1/2	墨書 外体正位「得」
7	土師器 壺	12.2×5.80×3.80 ロクロ成形 外体部下端一回転ヘラケズリ 底部一回転糸切り後回転ヘラケズリ	橙褐色 硬	雲母多	略完形	墨書 外体「口」
8	土師器 壺	11.6×6.60×3.80 ロクロ成形 外体部下端一回転ヘラケズリ 底部一全面回転ヘラケズリのため切り離し不明	橙褐色 硬	雲母多	略完形	墨書 外体正位「得」
9	土師器 壺	(12.2)×6.50×3.80 ロクロ成形 外体部下端一回転ヘラケズリ 底部一回転ヘラケズリのため切り離し不明	橙褐色 硬	雲母多	1/2	墨書 外体正位「得」
10	土師器 壺	11.6×6.60×4.00 ロクロ成形 外体部下端一回転ヘラケズリ 底部一回転糸切り後回転ヘラケズリ	褐 橙褐色 硬	雲母多	略完形	墨書 外体正位「得」
11	土師器 壺	14.4×7.80×5.00 ロクロ成形 外体部下端一回転ヘラケズリ 内体部一密なミガキ 底部一回転ヘラケズリ 全面ヘラケズリのため切り離し不明	褐 硬	赤色	略完形	墨書 外体正位「得」
12	土師器 壺	(11.8)×6.00×3.50 ロクロ成形 外体部下端一回転ヘラケズリ 底部一全面回転ヘラケズリのため切り離し不明	橙褐色 硬	雲母	1/3	墨書 外体正位「皿」 外底 転用範
13	土師器 壺	(13.5)×(6.20)×3.90 ロクロ成形 外体部下端一回転ヘラケズリ 底部一回転ヘラケズリ 欠損のため切り離し不明	褐 橙褐色 硬	雲母	1/2	墨書 外体正位「才」
14	土師器 壺	15.6×8.20×5.10 ロクロ成形 外口縁下黒色 黒色研磨 外体部下端一回転ヘラケズリ 内体部一密なヘラミガキ 底部一回転ヘラケズリ 全面ヘラケズリのため切り離し不明	淡褐色 普	雲母 長石 白色	4/5	内黒
15	須恵器 甕	-×14.0×(10.2) ロクロ成形 外面 脊部一輛位平行タキ後横位ヘラケズリ 外面磨耗のためはつきりせず 内面 ナデ	暗灰褐色 硬	雲母 長石 白色多	胴部～ 胎土：石英・砂	
16	土製品 支脚	6.50×5.80 最大長 (19.7) 重量 900g	褐 軟	砂粒	1/2	
17	銅製品 鉈尾	3.60×2.70×0.40 11.6g	—	—	完形	
18	鐵器 鎌	(25.0)×2.30～3.40×0.35～0.50 140.7g	—	—	略完形	
19	鐵器 不明	(9.30)×0.50×0.60 18.8g 0.40×0.40	—	—	略完形	頭部が曲げられている
20	土師器 皿	-×-×- ロクロ成形 外体部下端一回転ヘラケズリ	褐	—	口縁片	墨書 外体正位「皿」

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色 焼成	胎土	遺存	備考
21	土師器皿	-×-×- ロクロ成形 外体部-静止ヘラケズリ	褐	-	口縁片	墨書 内体「口」
22	土師器皿	-×-×- ロクロ成形	褐	-	口縁片	墨書 外体「口」
23	土師器皿	-×-×- ロクロ成形	褐	-	口縁片	墨書 外体「口」
24	土師器皿	-×-×- ロクロ成形	褐	-	口縁片	墨書 外体「口」
25	土師器皿	-×-×- ロクロ成形 外体部下端-回転ヘラケズリ	褐	-	1/5 口縁片	墨書 外体正位 「竹」
26	土師器皿	-×-×- ロクロ成形 外体部下端-回転ヘラケズリ	褐	-	口縁片	墨書 外体「西」
27	土師器皿	-×-×- ロクロ成形	褐	-	口縁片	墨書 外体正位 「西」
28	土師器皿	-×-×- ロクロ成形	褐	-	口縁片	墨書 外体「口」
29	土師器皿	-×-×- ロクロ成形	褐	-	口縁片	墨書 外体「口」
30	土師器皿	-×-×- ロクロ成形	褐	-	体部片	墨書 外体横位 「得」
31	土師器皿	-×-×- ロクロ成形 外体部下端-回転ヘラケズリ 内体部-密なヘラミガキ	褐	-	体部片	墨書 外体 「口」 内黒
32	土師器皿	-×-×- ロクロ成形 外体部-ヘラケズリ 底部-静止ヘラケズリ 欠損のため切り離し不明	褐	-	底部片	墨書 外底 「口」
33	土師器皿	-×-×- ロクロ成形 外体部下端-回転ヘラケズリ	褐	-	体部片	墨書 外体 「口」
34	土師器皿	-×5.40×(1.50) ロクロ成形 外体部下端-回転ヘラケズリ 底部-回転未切り後回転ヘラケズリ	褐 暗褐色 硬	雲母多 白色	底部	墨書 外体 「口」
35	土師器皿	-×7.10×(2.30) ロクロ成形 外体部下端-回転ヘラケズリ 底部-回転未切り後回転ヘラケズリ	褐 硬	雲母多	底部	墨書 外体 「口」
36	土師器皿	-×-×- ロクロ成形	褐	-	口縁片	墨書 外体 「口」
37	土師器皿	-×-×- ロクロ成形	褐	-	体部片	墨書 外体 「口」
38	土師器皿	-×-×- ロクロ成形 外体部下端-回転ヘラケズリ 底部-回転ヘラケズリ 欠損のため切り離し不明	褐	-	底部片	線刻 内底 「口」

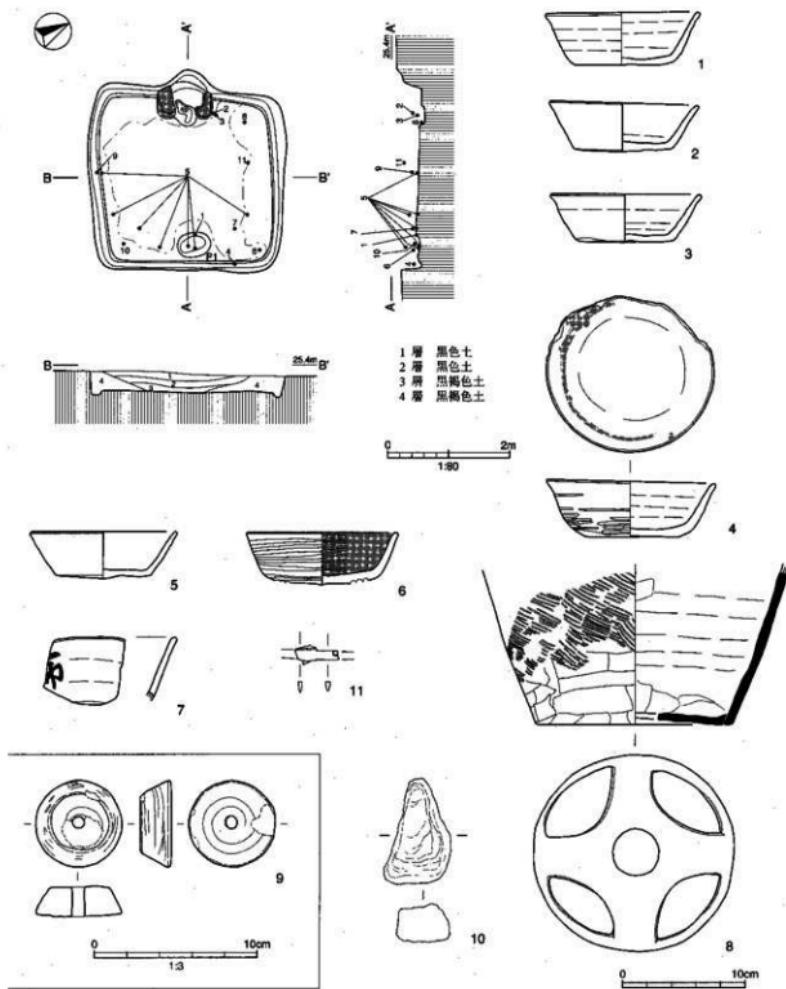


図181 A095

A095

検出地区 K7-45-4g、K7-46-3gにて検出した。

遺構 長軸3.15m×短軸2.98m×壁高0.31m、主軸方位はN-62°-Wを示す。平面形は隅丸方形である。床は平坦でよく踏み固められているが、北側にやや傾斜するものである。硬化面は住居跡全体に広がるが、壁際はやや軟弱である。床面には出入り口施設のピットを南東壁際中央に検出したが、柱穴は確認できなかった。また、掘り込みのしっかりした周溝は、窓下まで全周する。窓はやや小規模な窓であり、袖を抉るように内壁が焼土化しているが、火床はわずかに焼けている程度であった。煙道部

表23 A095遺物観察表

(単位cm)

No	種別 器 形	法量 成 形 口徑×底徑×器高 調整等の特徴	色 焼 成 土	胎 土	遺存	備考
1	土師器 壺	12.5×8.00×4.30 ロクロ成形 底部一回転へラ切り後中央をわずかに切り放しを残し一定方向静止 ヘラケズリ 底部から丸く立ち上がる 下端調整ケズリなし	褐～ 暗赤褐色 硬	雲母石 英長石 白色	完形	
2	土師器 壺	12.3×8.10×4.00 ロクロ成形 底部一回転へラ切り起こし 未調整 体底下端一調整ケズリなし	橙 硬	雲母 石英 白色多	完形	
3	土師器 壺	12.3×7.60×4.00 ロクロ成形 外体部下端一静止ヘラケズリ調整 底部一回転へラ切り後静止ヘラケズリ	橙褐色 硬	雲母石 英長石 白色	略完形	
4	土師器 壺	13.8×7.50×4.60 ロクロ成形 外体部下端一回転へラケズリ調整 相いミガキ 内体部ースス付着 底部一回転糸切り後回転へラケズリ	やや 赤褐色 硬	雲母 白色	4/5	赤味がかった褐 灯明皿？
5	土師器 壺	(12.0)×(7.80)×3.90 ロクロ成形 底部一回転へラ切り後回転へラケズリ	橙 硬	雲母石 英長石 白色多	1/2	
6	土師器 壺 高台付 壺	12.4×8.20×4.30 ロクロ成形 外体部一組いヘラミガキ 内体部一密なヘラミガキ 底部一回転へラ切り 高台部一接合時回転ナゲ	黒色 硬	雲母 長石	略完形	内黒 高台部きれいに 剥落
7	土師器 壺	-×-×- ロクロ成形 外体部下端一ヘラケズリ	褐	雲母	口縁片	墨書 外体正位 「□」
8	須恵器 瓶	-×16.2×(12.8) 胸外部一タキメ 剥下端一ヨコヘラケズリ 内筋一ヨコヘラケズリ 輪積痕有り 底部一多孔(5個)	橙褐色 硬	小石多	胴部～ 底部	
9	石器 紡錘車	上底3.60×下底5.20×高さ1.90 縫孔0.7 55.1g 黒色の付着物有り 石材一凝灰岩又は安山岩	—	—	完形	
10	石 用途 不明	8.70×5.50×3.20 169.7g 綠泥片岩？	—	—	片	
11	鉄器 不明 (刀子)	(3.70)×0.90～0.70×3.50～5.00 4.20g	—	—	片	

にも若干、焼土化したものが認められた。覆土は、壁際から黒褐色土を一気に投入した人為堆積であり、その後、再度、掘り込まれたものと捉えられた。再度の掘り込み後は、自然堆積にまかせたような状況であった。

遺 物 出土遺物は、住居跡としては少なかった。また、覆土中層～上層が出土層の主体となっていた。2は床より10cm程浮いた状態で、3に覆い被さるように出土していた。しかし出土状況は窓から落ちたような状態であり、本住居跡に伴うものと捉えた。また、本住居跡から層状に剥離しやすい砂岩片が出土している。砥石とも考えられず、用途不明の石器として報告した。

所 見 本住居跡も、住居廃絶後に一気に埋め戻された遺構である。その後、しばらくして再度掘り返されたものである。今まで報告したように上谷Ⅱ地区には、住居廃絶後、一気に埋戻した人為堆積の例と、人為的あるいは自然堆積後に再度掘り返す例がみられる。本住居跡もその一例として、捉えておきたい。

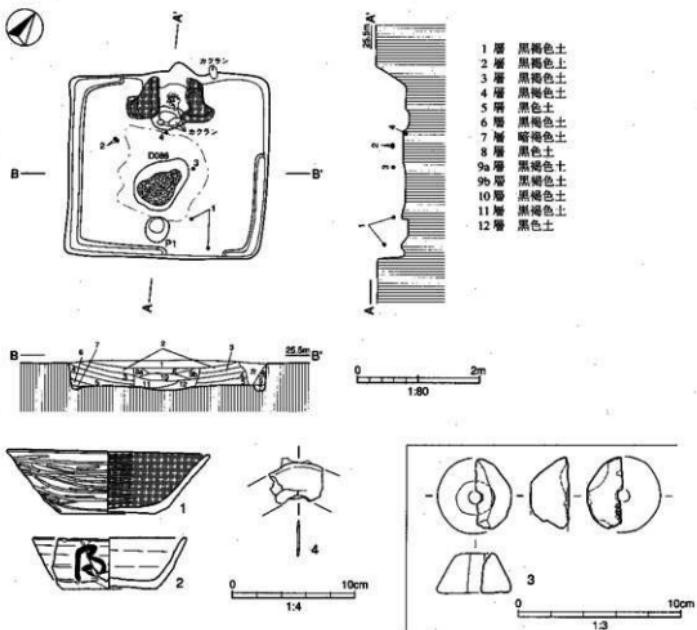


図182 A096

表24 A096遺物観察表

(単位cm)

No	種別 器形	法量 成形・調整等の特徴	色 調 成	胎 土	遺存	備考
1	土器 坏	16.6×7.80×5.10 ロクロ成形 外部下端一回転ヘラケズリ 外 体部全体に粗いヘラミガキ 内体部一密なヘラミガキ 底部一回転系 切り 回転ヘラケズリ後全体に粗いヘラミガキ	黒～ 深褐色 硬	雲母 石英 白色	略完形	内黒
2	土器 坏	(12.6)×7.80×4.10 ロクロ成形 外体部下半一回転ヘラケズリ 底端一回転糸切り後回転ヘラケズリ	褐 硬	雲母	1/2	墨書 外体正位 「得」
3	石器 紡錘車	上底椎定2.50×下底椎定4.40×高さ残存2.50 細孔0.70～0.80 21.8g 黒色の付着物有り	—	—	1/2	
4	鉄器 不明	(4.30)×2.90×0.20 9.8g	—	—	片	

A096

検出地区 K7-58-2・4gにて検出した。

遺構 長軸3.24m×短軸2.97m×壁高0.37m、主軸方位はN-34°-Wを示す。平面形は隅丸方形である。床はソフトローム中にハードロームブロックが混じったような床であり、全体として軟弱であった。柱穴は検出できず、出入口施設のピットが南壁際中央に検出したのみである。周溝は竈左側から南東壁の中央部にかけて巡り、また、南東コーナーあたりから南西壁中央までに分かれて掘り込まれている。竈は火床部が、床面とほぼ同じ高さであった。遺存状態はよく、天井部も一部確認できた。また、竈左袖は一段下がって、L字形に台状に突出していた。袖の内壁はよく赤化しており、使用期間の長さも窺えた。覆土は、黒色土の堆積後、黒褐色土が自然堆積したものであった。

住居中央の床面にD086の焼土化範囲が確認できた。火床は強い火熱を被ったもので、良好な火床となっていた。覆土から中世以降の新たに掘り込まれたものと捉えられたが、坑底の存在は不明瞭でやや凹んでいる程度であった。

遺物 住居跡の中央を後世のD086によって壊されているため、遺物出土状態も影響を被っていた。全体的に竈方向からの流れ込みのような印象を受ける遺物の出土状況であり、遺物は床面及び下層よりも、覆土中層～上層の出土が多い。2は「得」の墨書き器である。

所見 本住居跡は床面がやや凹凸のあるものであるが、全体としては平坦なものとして捉えることができた。遺物も床直上層のものが少なく、所属時期の決定に資料を欠く遺構である。竈ピットは竈内の手前的位置し、火床はそのピットから離れて煙道部の手前の平坦面に存在する、II地区では例外的なものであった。

A097

検出地区 K7-67-3・4g、K7-68-1・3gにわたって検出した。

遺構 長軸4.13m×短軸3.77m×壁高0.52m、主軸方位はN-45°-Wを示す。平面形はやや歪んだ隅丸方形である。床は竈前から出入口にかけてハードロームの地床で、壁際はソフトロームとハードロームが混じり合う床となっている。しかし全体としてはよく踏み固められており、住居跡中央に硬化面を残している。主柱穴はP1・2・4・6で、P5・7は壁柱穴と思われる。主柱穴のピット覆土から、柱は引き抜かれた住居跡であった。P3は出入口施設のピットである。周溝は竈袖下まで全周する。竈のピットの坑底は凹凸が激しいが、明らかな掘り込みにはならず床面と差のないものであった。壁は上面が崩れて斜めに立ち上がっており、住居廃絶後の時間的な経過が窺われた。袖の内壁はよく焼土化しており、火床もよく赤化していた。覆土は、下層は黒褐色土、中層～上層は黒色土主体の自然堆積である。

遺物 住居廃絶後、自然堆積によって埋没した住居跡であるが、廃絶時に本住居跡に伴う器形を窺う遺物はほとんどなかった。覆土下層の出土は少なく、上層に遺物がレンズ状に廃棄されたような住居跡である。

所見 床面及び直上層からの器形を窺える遺物の出土がなく、本住居跡に係る詳細な時期決定の資料を欠くものである。遺物出土の垂直分布を見る限り、覆土上層のレンズ状の堆積と同じように出土しており、しかも遺物も覆土上層内において接合しており、図示した遺物は一括して廃棄したように窺えるものである。

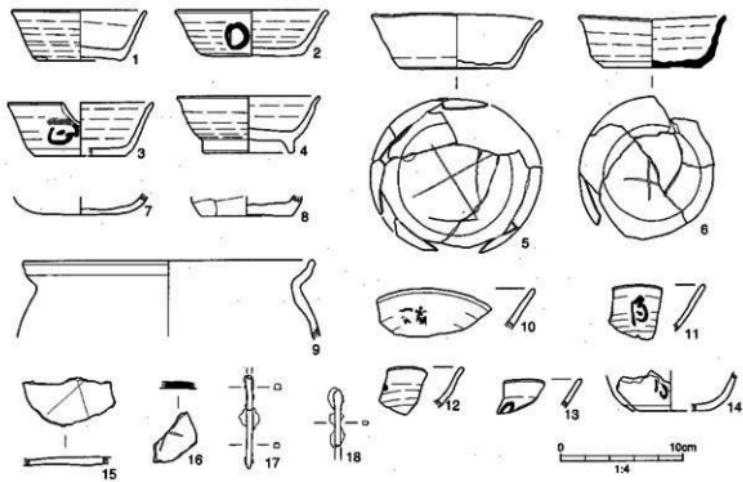
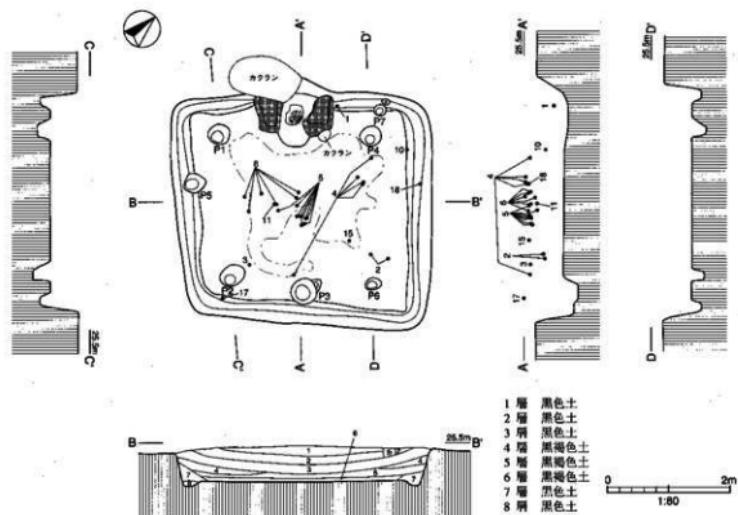


図183 A097

表25 A097遺物観察表

(単位cm)

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色 焼	調 成	胎 土	遺存	備考
1	土師器 壺	11.1×6.80×4.10 ロクロ成形 底部一回転条切り後未調整	褐 硬	雲母・ 白色多 石英	略完形		
2	土師器 壺	(12.6)×8.40×3.80 ロクロ成形 底部一回転ヘラ切り後中央部静止ヘラケズリ	硬	雲母 白色	1/2	墨書 外体 「〇」	
3	土師器 壺	(11.0)×(7.40)×4.40 ロクロ成形 外体部下端一回転ヘラケズリ 底部一回転ヘラケズリ 2/3位欠けているため切り離し不明	暗褐 褐 硬	雲母 白色	1/3	墨書 外体横位 「得」	
4	土師器 高台付 壺	(11.8)×-×4.70 台部径7.60 ロクロ成形 底部一切り離し不明 高台部一ナデ	明褐 硬	雲母	1/2		
5	土師器 壺	14.0×9.30×4.50 ロクロ成形 外体部下端一静止ヘラケズリ 底部一多方向からの静止ヘラケズリのため切り離し不明	黒褐 硬	赤色 白色	略完形	線刻 外底 「×」	
6	須恵器 壺	(12.0)×8.00×4.10 ロクロ成形 外体部下端一回転ヘラケズリ 底部一面回転ヘラケズリ 一部欠損のため切り離し不明	硬	雲母 白色多	1/2	ヘラ書 外底 「×」	
7	土師器 壺	-×(7.00)×- ロクロ成形 小破片のため実測せず 底部一内底面ヘラ当て 手持ヘラケズリ 内外共に丁寧なミガキ 全面手持ヘラケズリ調整痕	黑 褐	赤色	1/6 底部	内底面ヘラ痕あ るが実測不要	
8	土師器 甕	-×7.30×(1.70) ロクロ成形 底部一静止ヘラケズリ 漏泄が多いため不明	褐 (くすみ)	雲母	底部		
9	土師器 甕	ロクロ成形 内底面一回転調整 烟拂に使用痕 外表面部一ヘラナデ 内面一ヘラケズリ後ミガキ	褐	雲母・ 石英多 赤色	口縁片		
10	土師器 壺	-×-×- ロクロ成形	褐	-	口縁片	墨書 外体横位 「竹野」	
11	土師器 壺	-×-×- ロクロ成形 外体部下端一ヘラケズリ	褐	-	口縁片	墨書 外体正位 「得」	
12	土師器 壺	-×-×- ロクロ成形 外体部下端一ヘラケズリ	褐	-	口縁片	墨書 外体 「□」	
13	土師器 壺	-×-×- ロクロ成形	褐	-	口縁片	墨書 外体 「四」	
14	土師器 壺	-×(6.40)×(3.30) ロクロ成形 外体部下端一回転ヘラケズリ 底部一回転条切り後周縁回転ヘラケズリ	褐 硬	雲母多	1/6 底部	墨書 外体正位 「四」	
15	土師器 壺	-×-×- ロクロ成形 底部一回転ヘラ切り後回転ヘラケズリ	褐	-	底部片	線刻 内底 「四」	
16	須恵器 壺	-×-×-	褐	-	底部片	ヘラ書 外底 「□」	
17	鉄器 不明	(7.60)×0.50×厚み0.40~0.50 6.6g	-	-	片		
18	鉄器 不明	(5.50)×0.50×厚み0.30 4.4g	-	-	片		

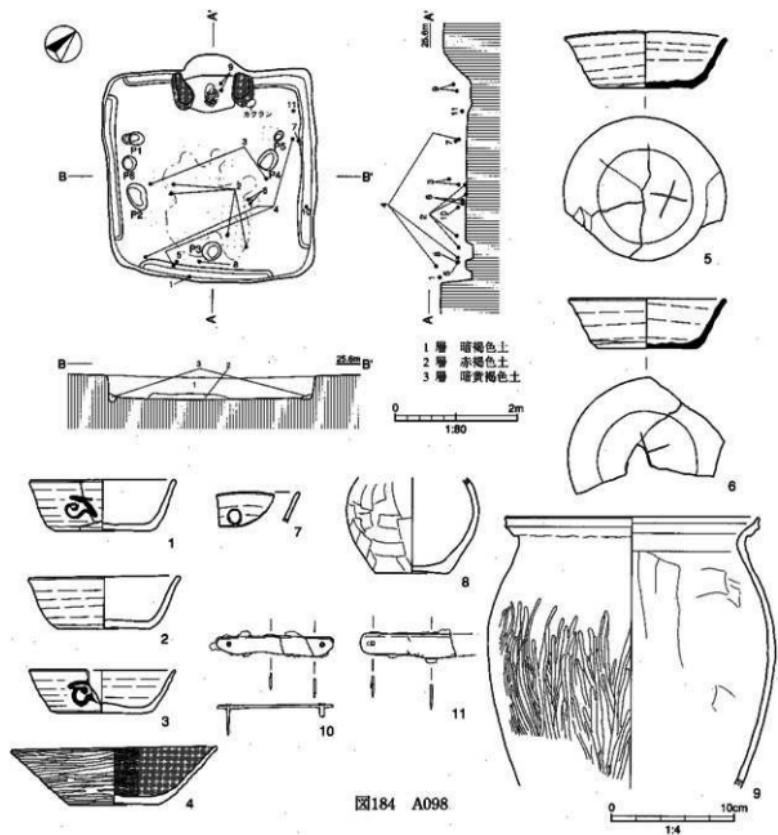


図184 A098

表25b A098遺物観察表

(単位cm)

No	種別 器形	法量 成形・溝 等の特 徴	色 焼 調 成	胎 土	遺 存	備 考
1	土師器 壺	12.0×7.80×4.20 ロクロ成形 外体部下端一回転ヘラケズリ 底部-全面回転ヘラケズリのため切り離し不明	褐～ 黒褐色 硬	雲母 白色	光形	墨書 外体模倣 「得」
2	土師器 壺	12.4×7.40×4.30 ロクロ成形 外体部下端一回転ヘラケズリ 底部-全面回転ヘラケズリのため切り離し不明	暗褐色 硬	雲母 白色多	暗光形	

No	種別 器形	法量 成形・調整等の特徴	色焼 調成	胎土	遺存	備考
3	土師器 壺	(12.0)×7.00×3.60 ロクロ成形 外体部下端一回転ヘラケズリ 底部一回転糸切り後周縁回転ヘラケズリ	褐硬	雲母・ 白色多	1/4	墨書 外体横位 「得」
4	土師器 壺	16.9×7.20×4.60 ロクロ成形 外体部下端一回転ヘラケズリ 色 いいヘラミガキ 内部・密なヘラミガキ 底部一回転糸切り後回転ヘラ ケズリ その後全体に粗いヘラケズリ	褐硬	雲母石 英赤色 白色多	1/2	内黒
5	須恵器 壺	13.4×7.80×4.60 ロクロ成形 外体部下端一回転ヘラケズリ 底部一回転ヘラケズリのため切り離し不明	黑色 硬	長石 白色	1/2	ヘラ書 外底 「×」
6	須恵器 壺	(13.0)×8.20×4.10 ロクロ成形 外体部下端一回転ヘラケズリ 底部一回転ヘラケズリ 中央部欠損のため切り離し不明	黑色 硬	長石 白色	1/3	ヘラ書 外底 「図」
7	土師器 壺	-×-×- ロクロ成形	-	-	口縁片	墨書 外体 「○」
8	土師器 小型甕	-×5.60×(7.90) 外面ヘラケズリ 内体部ヨコナデ	暗黃褐	砂粒	胴部～ 底部	
9	土師器 甕	21.0×-×(22.4) 最大径21.8 外面 口縁～胴上半ヨコナデ 胴中位一下ギータテヘラミガキ 内面 口縁～胴部ヨコナデ 刃 部ヘラケズリ 口縁～直に立ち上がる	暗黃褐 青	雲母 砂粒	口縁～ 胴部	
10	鉄器 被道具?	9.60×14.0～16.0×0.20 11.5g	-	-	略光形	
11	鉄器 被道具?	(7.80)×1.70～2.00×0.20 14.2g	-	-	1/2	

A098

検出地区 K7-67-4g、K7-77-2gにて検出した。

遺構 長軸3.46m×短軸3.40m×壁高0.39m、主軸方位はN44°Wを示す。平面形は長軸と短軸の差のない隅丸方形である。床は凹凸のある部分もあるが全体的に平坦であり、住居中央から出入りにかけて硬化面を残している。床面にピットを6基検出したが、主柱穴は不明である。P3は出入口施設に伴うピットである。周溝は北以外の各コーナーで途切れ、断続的に巡っている。南西壁下の溝は、他の3本に比べ浅い溝となっていた。壁は、ほぼ垂直に立ち上がっている。竈の火床は竈ピットの凹みに位置し、坑底は不明瞭である。火床は焼けた痕跡を認める程度であった。住居跡中央から南コーナーにかけて、覆土最下層から床面に炭化粒が少量混入した焼土が堆積していた。覆土は、床面から焼土を覆うように、暗褐色土が一気に埋戻されていた。

遺物 遺物の出土状況は、暗褐色土の投入と同じように廃棄されたものが主体であった。2は焼土の分布範囲及び層内からの出土であり、本住居跡に伴うものと捉えられた。8は床面より10cm程高く、横倒しの状態で出土している。9はまた、本住居跡からは「得」と記された墨書き器が出土している。

所見 竪穴住居の廃絶後、不用材を焼却し、一気に暗褐色土を投入して埋戻した住居跡である。この人為的な埋戻しは暗褐色土を一気に投入しており、覆土の分層もできないものであった。廃絶竪穴住居の凹みを残さずに埋戻し、平坦面をつくろうとする意識を窺わせる覆土の堆積状況である。

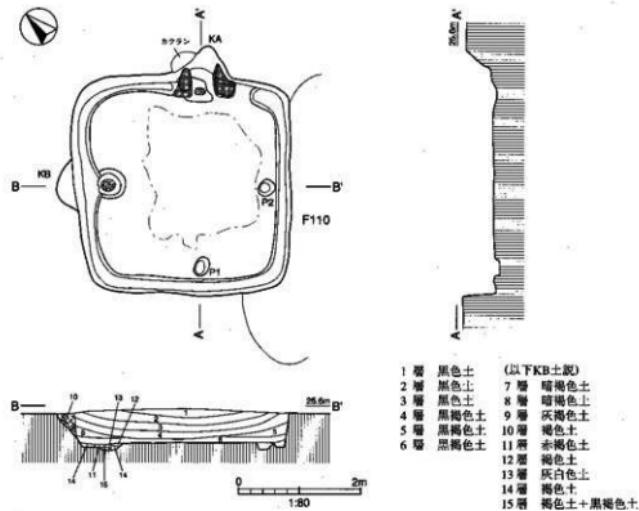


図185 A099

A099

検出位置 K7-88-2・4g, K7-89-1gにわたって検出した。

遺構 長軸3.62m×短軸3.51m×壁高0.48m、主軸方位はN-46°-Eを示す。平面形は隅丸方形である。窓の代替えが行われており、床面は硬化面と軟弱部分がはっきりと分かれるものであった。柱穴は検出されず、出入口施設のピットが新窓KAにはP1、旧窓KBにはP2として検出されたのみである。周溝は旧窓では全周せず、新窓で窓脇まで巡らせたものであった。覆土は、黒褐色土と黒色土の自然堆積であった。

遺物 窓周辺の床面を中心として多く出土しているが、土師器壺の出土が多かった。

所見 窓を再構築した住居であるが健替えや拡張は認められず、KBのピットは埋戻して床としていた。

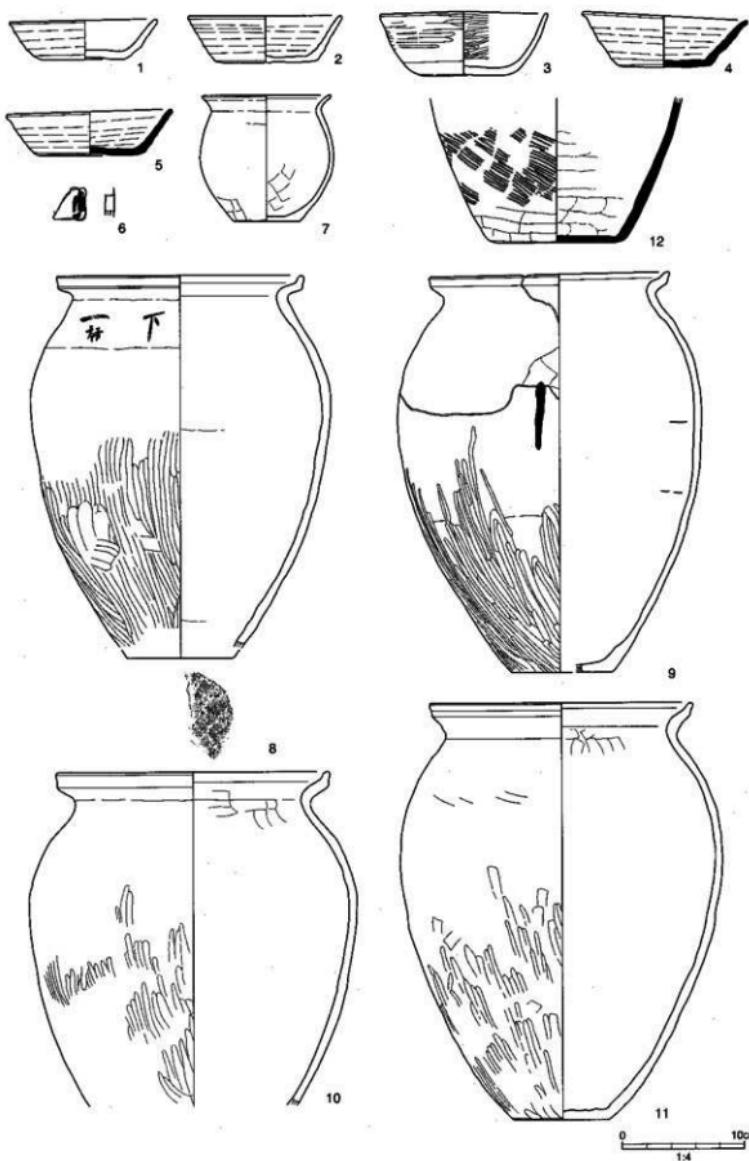


图186 A099 (2)

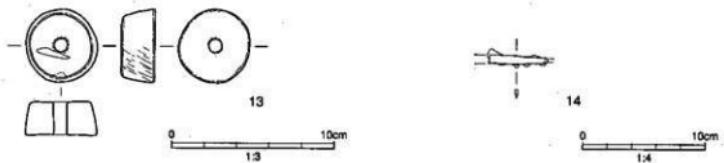


図187 A099 (3)

表26 A099遺物観察表

(単位cm)

No	種別 器形	法量 成形・調整等の特徴	色 焼 成	調 成	胎 土	遺 存	備 考
1	土師器 壺	12.0×6.60×3.20 ロクロ成形 外体部下端一回転ヘラケズリ 底部一回転糸切り後静止ヘラケズリ	赤褐色	雲母 長石 白色多	完形		
2	土師器 壺	12.6×8.40×3.90 ロクロ成形 底部一回転ヘラ切り 調整はなし 下端の調整ケズリ目なし	橙褐色	雲母 白色多	略完形		
3	土師器 壺	(13.8)×7.60×5.10 ロクロ成形 回転ヘラケズリ調整 外体部下端一回転ヘラケズリ 粗いヘラミガキ 内体部一帯なヘラミ ガキ 底部一回転ヘラケズリ 全面ヘラケズリのため切り離し不明	褐 黒褐色	雲母 赤色 白色	略完形	黒色研磨(内黒) だが2次火熱を 被り黒色が消失	
4	須恵器 壺	13.6×7.50×4.20 ロクロ成形 外体部下端一回転ヘラケズリ 底部一回転ヘラケズリ 全面静止ヘラケズリのため切り離し不明	灰 褐色	石英 石砂粒 白色多	1/2		
5	須恵器 壺	13.4×8.80×3.60 ロクロ成形 外体部下端一回転ヘラケズリ 底部一回転糸切り後回転ヘラケズリ	暗灰 褐色	雲母 白色多	1/2		
6	土師器 壺	-×-×-	褐	雲母 白色	胴部片	墨書 外面 「口」	
7	土師器 小型甌	10.6×5.50×10.4 最大径11.0 外面 口縁～胴部一ナデ 脇下端ニヨコヘラケズリ 内面 口縁～胴上半一ナデ 脇下半ニヘラミガキ	暗橙褐色 青	砂粒多	略完形		
8	土師器 甌	20.4×推定8.80×31.4 最大径24.6 外面 口縁～胴上半ニヨコナデ 脇下半ニヘラケズリ後タテヘラミガキ 内面 ヨコナデ 底部一木葉痕	暗褐色 青	砂粒・ 石英・ 雲母多	略完形	墨書 外面 「下/□□」	
9	土師器 甌	19.6×(8.50)×32.9 外面 脇部下半ニ横位のヘラケズリ 脇下半ニヘラミガキ 内面 横位のヘラナデ 底部一木葉痕	淡褐色 青	雲母石 長石 白色	略完形	墨書 外面 「」記号? 意味不明	
10	土師器 甌	22.6×-×(27.8) 外面 口縁～胴部ニヨコナデ 脇部一タテヘラミガキ 内面 口縁ニヨコナデ 脇上半ニヘラケズリ 脇下半ニナデ	暗橙褐色 青	砂粒・ 小石多	口縁～ 胴部		
11	土師器 甌	21.7×8.00×34.3 最大径26.5 外面 口縁～胴上半ニヨコナデ 脇下半ニヘラケズリ後タテヘラミガキ 内面 口縁ニヨコナデ 脇部一ヘラケズリ後ナデ 底部一木葉痕	明褐色 青	砂粒多	略完形		
12	須恵器 甌	-×15.0×(12.5) 外面 タタキ 下端ニヨコヘラケズリ 内面 ヨコヘラケズリ 軸積痕有	灰	砂粒多	脇部～ 底部		
13	石器 筋縫車	上底3.80×下底4.40×高さ2.10 軸D.80 57.4g 凝灰岩	—	—	完形		
14	鐵器 刀子	(4.90)×0.70×0.20 4.0g	—	—	片		

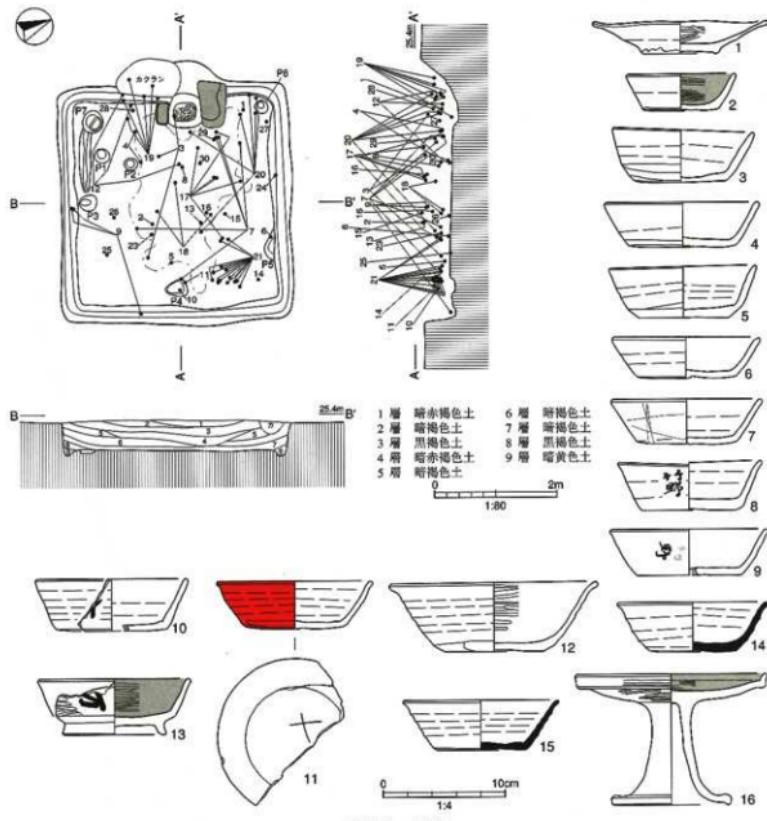


図188 A100

A100

検出地区 K7-85-2・4g、K7-86-1・3gにわたって検出した。

遺構 長軸3.91m×短軸3.71m×壁高0.47m、主軸方位はN-68°-Wを示す。平面形は隅丸方形である。床は竈前から出入口までハードロームの地床で硬化面として残り、壁側はハードロームとソフトロームが混合したような軟弱な床である。床面にピットは7基検出されたが、主柱穴は不明であった。P4は出入口施設のピットと捉えられた。周溝は、掘り込みは深く全周する。竈左側に搅乱があり遺存は悪いが、右袖はしっかりと構築されていた。火床の赤化は、使用期間の長さを窺わせるものであった。また、左袖は基礎部が痕跡として残るだけであった。覆土は、暗褐色土6・7層の自然堆積後に掘り返され、火の使用を伴った焼土混合層が覆土中層を構成していた。

遺物 遺物出土状態を水平分布からみると住居跡中央部分が多く、垂直分布からは全体的な出土であった。しかし完形土器や接合可能土器は、覆土中層からのもの多かった。25の温石は床面に置かれた状態で出土していた。

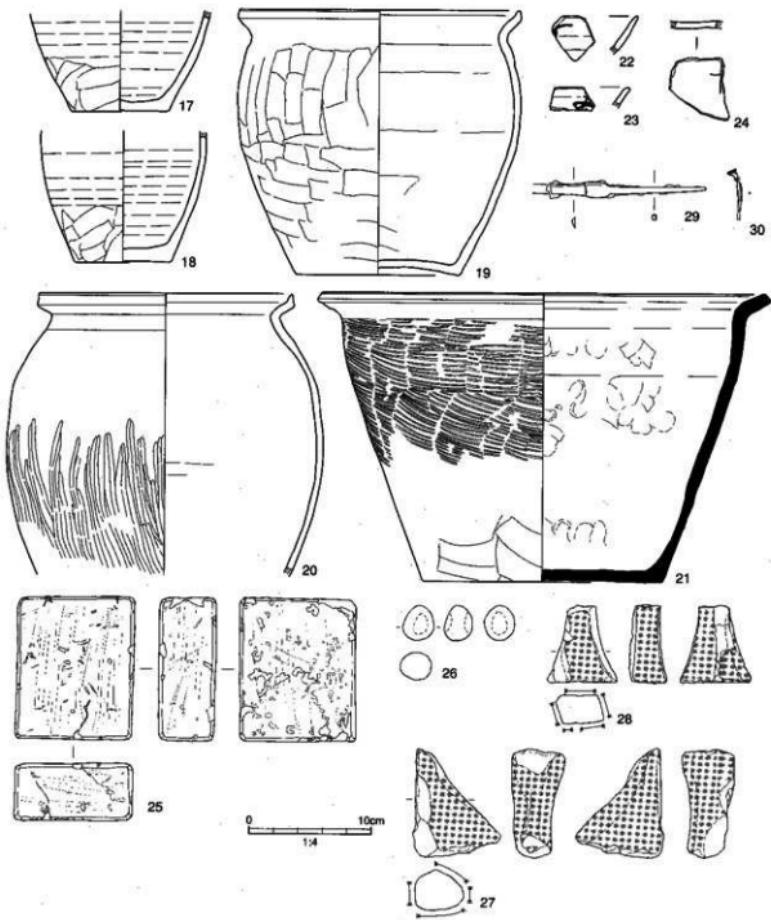


図189 A100 (2)

所見 南西壁周溝の内側のP 3～7にかけて溝が残り、それと対応するようにP 6が若干住居へ内向することから、竪穴住居内に古い小規模な住居がありその建替えかとも考えられた。しかし調査ではこの点について明確にはしえなかつたため、単独の竪穴住居跡と判断した。遺物としては、床面から温石が出土したが、上谷遺跡ではもう1例の出土をみており、温石の類例も少なく出土したことを報告するにとどめる。

また、本住居跡は住居の廃絶後に自然堆積により埋没後、再度掘り返されていた。4層には焼土が混合した褐色土が堆積しており、直接・間接を問わず火の使用を伴う利用がなされたと考えられる。そして人為的な4層の投入後に、自然堆積によって竪穴住居が埋没したものであると捉えた。

表27 A100遺物観察表

(単位cm)

No	種別 器形	法量 成形・調整等の特徴	色 焼 調成	胎 土	遺存	備考
1	土師器 皿	(14.4)×6.10×2.60 ロクロ成形 外体部下端一ナデ 内体部一粗いミガキ 底部一回転糸切り未調整	褐 明褐	雲母長 石砂粒 白色	1/2	
2	土師器 (小型)皿	9.00×6.20×3.00 ロクロ成形 外体部下端一回転ヘラケズリ 内体部一密なヘラミガキ 底部一回転ヘラ切り	褐～ 赤褐色 硬	雲母 白色	1/2	内黒
3	土師器 环	11.5×7.50×4.40 ロクロ成形 外体部下端一回転ヘラケズリ 底部一回転ヘラケズリのため切り離し不明	黒褐～ 橙褐色 硬	雲母 長石 白色	略完形	
4	土師器 环	12.7×8.80×3.70 ロクロ成形 外体部下端一回転ヘラケズリ 底部一回転ヘラ切り 未調整	橙褐色 硬	雲母石 英長石 砂白多	略完形	
5	土師器 环	12.1×7.30×4.20 ロクロ成形 外体部下端一四転ヘラケズリ 底部一全面回転ヘラケズリのため切り離し不明	赤褐色 硬	雲母多	略完形	
6	土師器 环	12.2×8.00×3.40 ロクロ成形 底部一回転ヘラ切りにナデが入る	橙褐色 硬	雲母石 英長石 砂粒	完形	胎土 白色多
7	土師器 环	12.4×8.20×3.70 ロクロ成形 底部一回転ヘラ切り	黒褐色～ 橙褐色 硬	雲母 石英 白色	略完形	線刻 外体 「匁」
8	土師器 环	11.8×7.70×3.80 ロクロ成形 外体部下端一回転ヘラケズリ 底部一回転糸切り後回転ヘラケズリ	褐 橙褐色 硬	雲母多 石英	1/2	墨書 外体正位 「竹野」
9	土師器 环	(13.0)×(8.50)×3.80 ロクロ成形 底部一回転ヘラ切り	暗橙褐色 硬	雲母 石英 白色	1/3	墨書 外体横位 「豊野」
10	土師器 环	(12.4)×(9.00)×4.30 ロクロ成形 底部一回転ヘラケズリ 欠損のため切り離し不明	暗褐色 橙褐色 硬	雲母 砂粒 白色	1/3	墨書 外体 「匁」
11	土師器 环	(12.8)×(8.00)×3.90 ロクロ成形 外体部下端一回転ヘラケズリ 底部一回転ヘラ切り後静止ヘラケズリ	暗赤褐色 褐 硬	雲母 石英 白色	1/2	ヘラ書 外底 「×」 外体一赤彩
12	土師器 环	17.1×8.00×5.70 ロクロ成形 外体部下端一回転ヘラケズリ 内体部一粗いヘラミガキ 底部一回転糸切り後回転ヘラケズリ	暗褐色～ 赤褐色 硬	雲母 白色多	略完形	
13	土師器 高台付 环	12.4×-×4.60 ロクロ成形 台部径8.40 付高台环底一回転ヘラケズリ後高台接合のため、回転ナデ 外体部・内体部とも密なヘラミガキ 底部一回転ヘラ切り	褐 黑色	長石 雲母	4/5	墨書 外体横位 「万」 内黒
14	須恵器 环	(12.4)×(7.00)×4.10 ロクロ成形 底部一回転糸切り後回転ヘラケズリ	暗灰 硬	長石 白色多	1/2	
15	須恵器 环	(12.8)×7.10×4.10 ロクロ成形 外体部下端一回転ヘラケズリ 底部一回転ヘラ切り、静止ヘラケズリ	暗灰 硬	長石 砂粒 白色多	1/2	
16	土師器 高环	(15.8)×-×10.8 ロクロ成形 台部径9.80 外体部一密なヘラミガキ 内体部一粗いヘラミガキ 底部一ナデにより切り離し不明	褐 硬	長石 雲母 白色	略完形	内黒
17	土師器 小型甕	-×8.00×(8.40) ロクロ成形 外体部下端一ヨコヘラケズリ	明橙褐色 普	砂粒 赤色	刷部～ 底部	

No	種別形	法基 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色 焼 成	胎 土	遺存	備考
18	土師器 小型甕	—×8.00×(10.8) ロクロ成形 外面下半—ナメのヘラケズリ	明赤褐色 昔	砂粒	胴部～ 底部	
19	土師器 甕	23.6×13.6×21.9 最大径23.4 輪積 外面 口縁～頸部—ヨコナデ 頸部—タテヘラケズリ、ヨコヘラケズリ 内面 頸部—ナデ、ヨコヘラケズリ 底部—糸切り	暗褐	砂粒	1/3	
20	土師器 甕	20.8×—×(23.3) 最大径26.0 外面 口縁～頸部—ヨコナデ 頸部—ヨコヘラケズリ後タテヘラミガキ 内面 ヨコナデ	暗黄褐色 砂粒多	口縁部 ～胴部	口縁部内面に スス付着	
21	須恵器 甕	37.4×20.0×24.0 タタキメはヨコ 内面—ヘラナデ	灰 軟	雲母 砂粒	1/2	
22	土師器 壺	—×—×— 外体部下端—ヘラケズリ	硬 褐	白色	口縁片	墨書 外体 「□」
23	土師器 壺	—×—×— ロクロ成形	褐	白色	口縁片	墨書 外体 「□」
24	土師器 壺	—×—×— 底部—回転ヘラ切り後禁止ヘラケズリ	褐	白色	底部片	ヘラ書 外底 「□」
25	石器 温石	11.8×9.70×4.70 1180g よく研磨され角は曲取りされる 下面から侧面にかけて劣化した部分が認められる	—	—	完形	蛇紋岩
26	石器 輕石	2.90×2.40	—	—	完形	砥石？
27	石器 砥石	8.80×4.00	—	—	片	
28	石器 砥石	6.30×2.50	—	—	片	
29	鉄器 刀子	(12.8)×0.90～0.40×0.25～0.3 16.8g	—	—	片	
30	鉄器 釘	(3.50)×0.80×— 1.9g	—	—	片	サビ及びバラバラのため断面取 れず

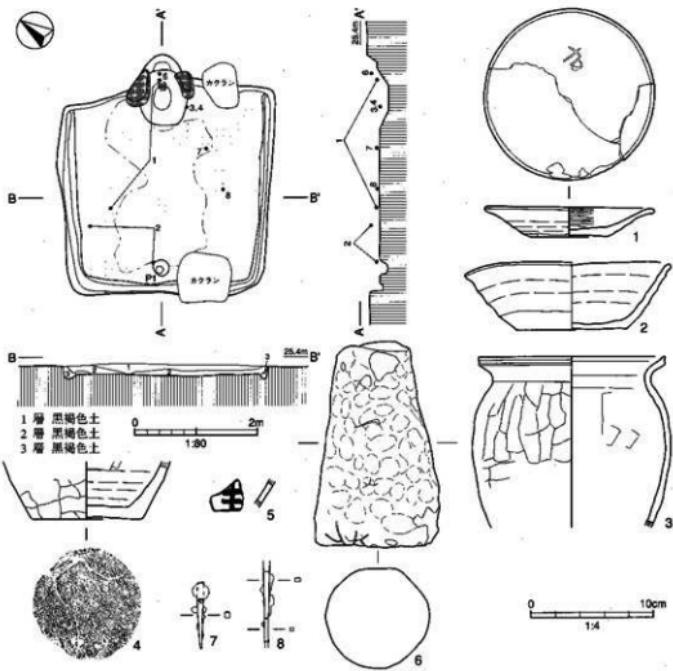


図190 A101

A101

検出地区 K7-96-1・3・4gにて検出した。

遺構 長軸3.42m×短軸3.33m×壁高0.17m、主軸方位はN-55°-Eを示す。平面形は長軸、短軸の差のない隣九方形であり、掘り込みの浅い竪穴住居跡である。床は竪から出入口にかけてハードロームの地床で硬化面を残し、壁際はソフトロームを主体とした床であった。柱穴は検出されず、出入口施設のピットが南西壁中央下に検出されている。周溝は竪壁のみ巡っていない。竪ピットの坑底はハードロームの上部にあり、煙道部にはテラス状に段差が残されている。竪袖の内壁は赤化していた。床面からは黒褐色土に混じるよう多く量の焼土が確認された。炭化粒も多く含むが、炭化材と呼べるものには検出できなかった。覆土は色調の違いで捉えたが、掘り込みが浅いため人為堆積か自然堆積かは明瞭にできなかった。

遺物 竪周辺および竪北東部からの、遺物出土が多い住居跡である。2は床よりやや浮いて出土しているが、ほぼ床面からの出土といえるもので、倒置の状態で出土している。竪内から出土した支脚は正置の状態で出土したが、支脚との間に若干の土が入るもの、支脚直下には粘土が貼付されるように検出されている。

所見 本住居跡の床面から散在して検出された黒褐色土は、多量の焼土を含み炭化粒が混入するが、これについては住居廃絶時の不用材の焼却として捉えた。掘り込みが浅く、2層が消火土砂の堆積かは捉えられなかったが、不用材の焼却となると人為堆積として把握することが必要かも知れない。また、周溝が竪を構築する壁に検出されなかったことは、上谷遺跡II地区では異例の竪穴住居跡となる。

表28 A101遺物観察表

(単位cm)

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色 焼成	胎 土	遺存	備考
1	土師器 皿	14.0×6.30×2.50 ロクロ成形 外体部下端・回転ヘラケズリ 内体部・密なミガキ 底部・回転糸切り後静止ヘラケズリ	橙褐色	雲母多 石英 白色	完形	縫刻 内体 「加」
2	土師器 壺	16.9×9.00×5.40 ロクロ成形 外体部下端・回転ヘラケズリ 底部・回転糸切り後回転ヘラケズリ	暗褐色～ 橙褐色 暗褐色	雲母 白色	1/2	大きく歪んでい る
3	土師器 甕	15.6×-×(13.6) 輪横 外面 口縁～胴部ヨコナダ 脇部～タテヘラケズリ 内面 口縁～胴部ヨコナダ 脇部～ヘラケズリ後ヨコナダ	暗赤褐色	砂粒多	1/2 口縁～ 脇部	
4	土師器 甕	-×9.20×(4.80) 外面 ヘラケズリ 内面 ヘラケズリ、回転ナダ 底部・回転糸切り 内・外面一部スス付着	暗赤褐色	砂粒多	底部	
5	土師器 壺	-×-×- ロクロ成形	褐色	-	体部片	墨書 外体正位 「生」
6	土製品 支脚	上部径5.90×5.40 1320g 下部径10.1×7.80 最大長17.0 外面 指痕痕	淡褐色	砂粒多	完形	指頭痕による成 形
7	鉄器 釘	(6.40)×0.40×0.50 3.9g	-	-	片	
8	鉄器 釘	(6.80)×0.50×0.30×0.30～0.25 4.0g	-	-	片	

A102a・b

検出地区 K7-64-4g、K7-65-3g、K7-74-1g、K7-75-1gにわたって検出した。2軒が重複した、規模のやや大きな竪穴住居跡である。

遺構 A102aは、長軸5.62m×短軸5.57m×壁高0.83m、主軸方位はN-75°-Eを示す。平面形は長軸と短軸の差のない隅丸方形である。竪穴住居跡としては規模はやや大きく、掘り込みも深く、竈を再構築する住居跡である。床は全体的には平坦であるが若干の凹凸があり、特に各竈の右側は高まりをもつ床面となる。硬化面はほぼ住居全体に及ぶが、柱穴外側にやや軟弱な面が認められた。竈は、旧竈KBと再構築された新竈KAの2基を検出した。KAは竈ピットから煙道部に立ち上がる袖下がテラス状になっており、袖の内壁はよく赤化していた。また、旧竈KBはKAの構築に伴い壊されており、KAの周溝がKBの粘土を切っていることが確認できた。煙道部の両脇の立ち上がりでは、ハードロームの上部でテラス状に段を有していた。床面にピットは10基検出されたが、主柱穴はKA・KBともP1～P4であり、拡張して使用している。出入口施設に伴うピットはKAはP6であり、KBはP7であった。主柱穴の覆土から、住居廃絶時に柱は引抜かれていたことが捉えられた。周溝は幅0.20～0.30mと広く、KA付近で0.15m程に狭くなっている。竈袖下まで溝を掘り込み全周している。住居跡中央に炉のような浅いピットが検出されているが、住居廃絶後の燃焼行為の結果ではないと覆土から捉えられ、本住居跡に伴う炉状のピットであった。ピット覆土は、焼土を混入した褐色土が1～5cmの厚さで堆積していた。貼床を剥がしたような凹凸のあるハードローム面を坑底として、火床範囲と捉えたものも赤味を帯びる程度であった。調査では、本ピットに係るような付帯遺構は検出できなかった。覆土は基本的には自然堆積であり、色調や包含物により分層した。1～4層、16層は旧竈KBの構築層であり、本住居跡に伴うものは5～15層、17層であった。

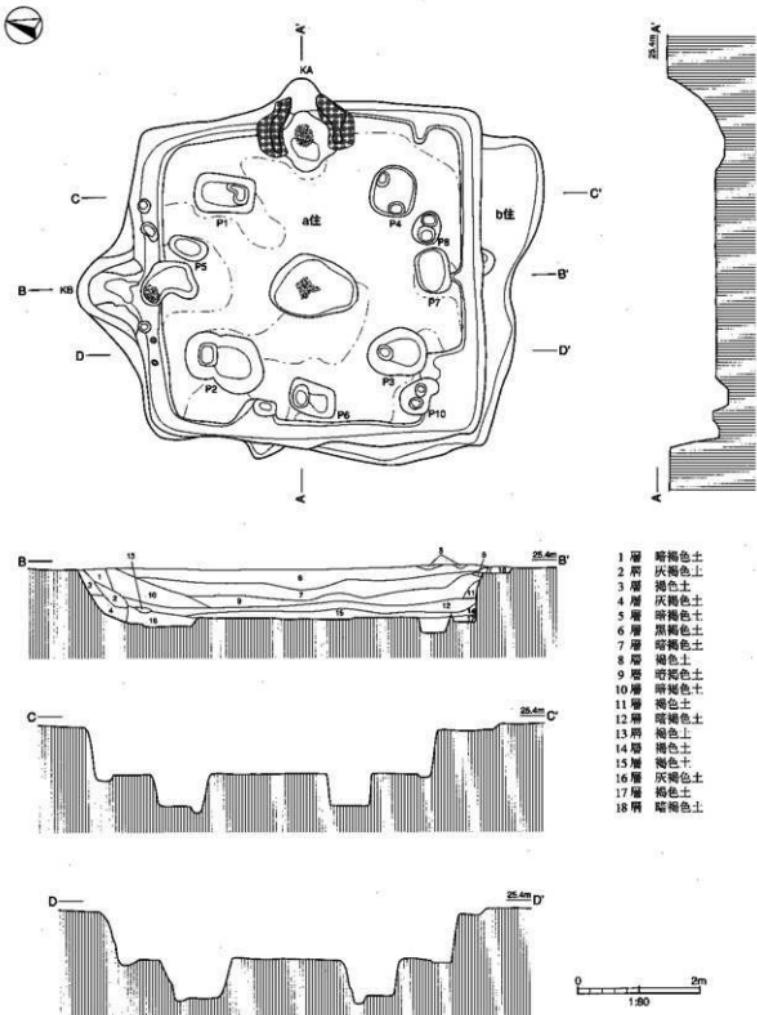


图191 A102a·b

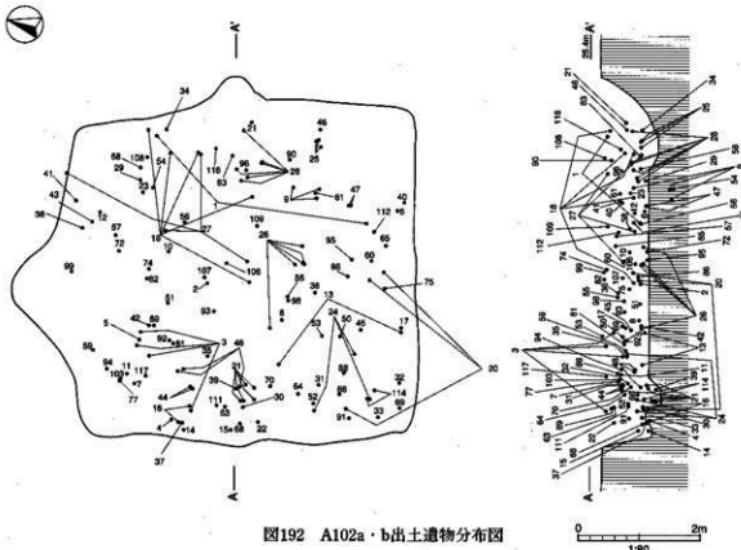


図192 A102a・b出土遺物分布図

A102 b は、推定長軸6.08m×推定短軸5.37m×壁高0.08m、主軸方位はN-15°-Wを示す。平面形は隅丸方形である。A102 a に比べて極めて掘り込みの浅い住居跡であるが、明瞭な床面は認められなかった。柱穴乃至出入口施設のピットと想定させるものを検出しているが、掘り込みが浅く明確には捉えられなかった。覆土は18層の暗褐色土のみ捉えられた。

遺 物 A102 a の出土遺物は極めて多く破片数は3,000点を越えるものであったが、A102 b の遺物の出土は少なかった。3,000点を超える遺物点数のため、全体的な平面及び垂直分布状況も、全域から出土しているものとなっている。しかし掲載した遺物は床面出土よりも覆土中層の遺物が多く、自然堆積によって住居跡が埋没する過程で、遺物の廃棄が行われていたことを示している。特に墨書き土器の出土が多く、87点に及んでいる。記された文字は「得」が最も多く、31点が出土している。また、「万」「大万」「仁」等も出土しており、II 地区の特徴的な文字の両者を出土する竪穴住居跡である。この他には鉄器の出土も多く、鉄錠3点、刀子3点、紡錘車2点等の12点を数える。紡錘車は石製も出土していた。繩の羽口片も出土しており、本住居跡ではその明瞭な形跡は認められなかったが、上谷遺跡における小鍛冶生産を想定できる資料といえよう。

所 見 2軒の竪穴住居跡が重複するものであるが、A102 b の覆土をA102 a が掘り込んでおり、A102 a が新しい造構と捉えられた。

A102 a は竪穴住居跡としてもやや規模が大きく、また、掘り込みも極めて深い造構である。竪は再構築を行っており、主柱穴の位置も柱穴を拡張して若干移動しているものであった。

A102 b は、現状からみた推定規模は大きくなるが、掘り込みが浅く、床面も捉えきれなかった造構である。A102 a との重複関係や規模等から竪穴住居跡としたが、竪穴状造構と捉えた方がよいかも知れない。

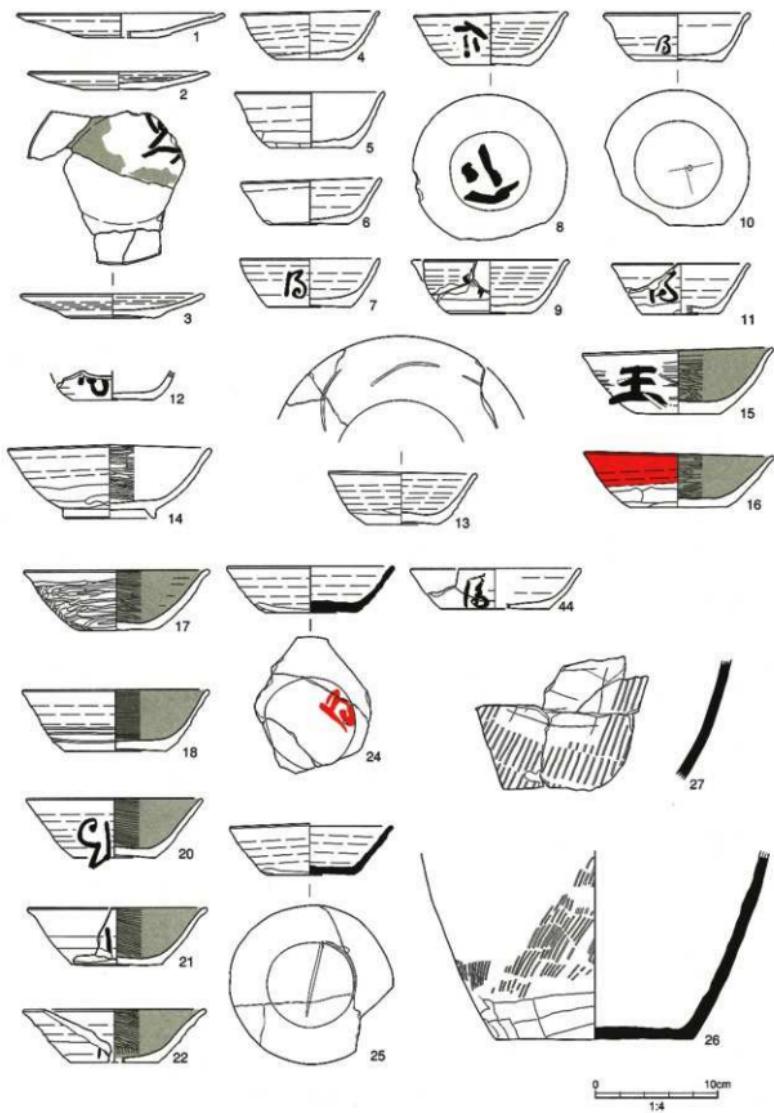


図193 A102a・b (2)

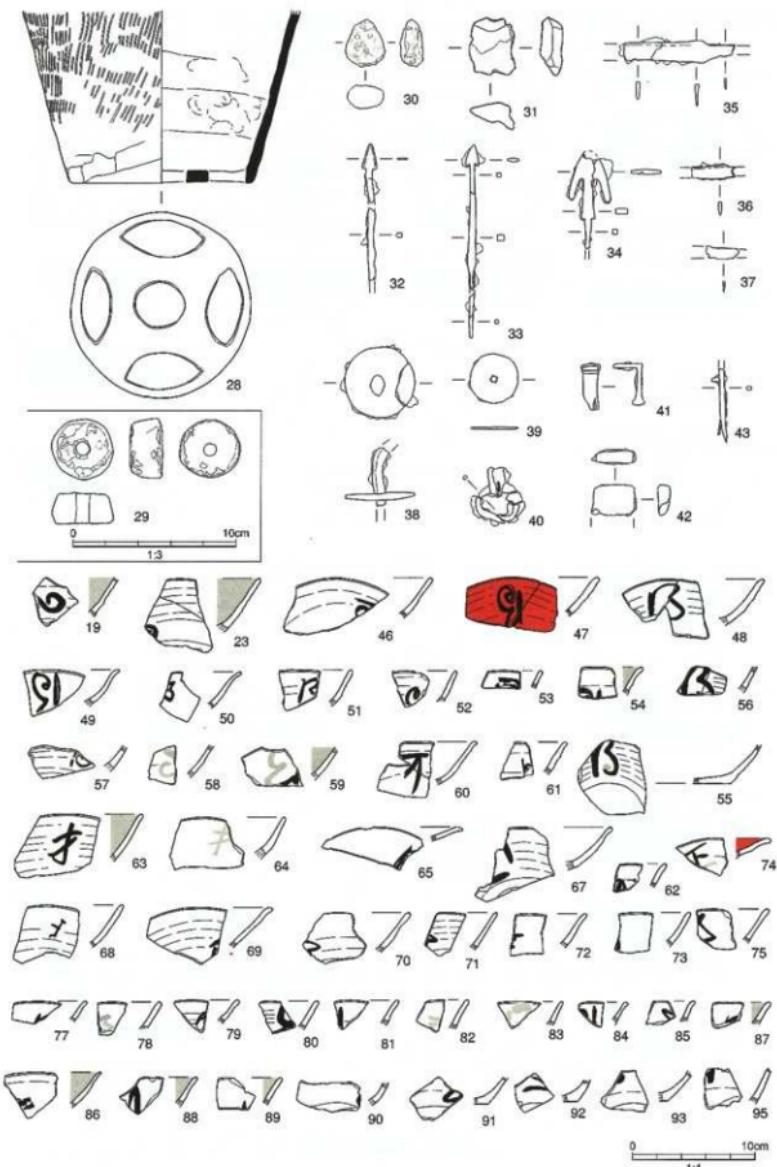


图194 A102a·b (3)

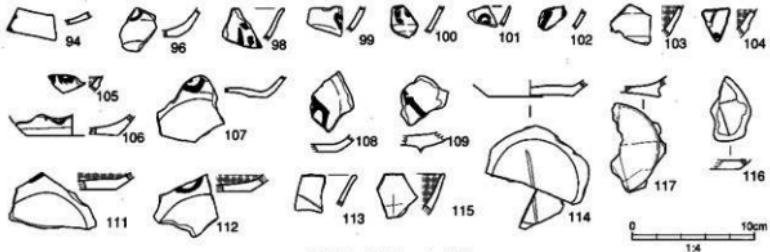


図195 A102a · b (4)

表29 A102遺物観察表

(単位cm)

No	種別 器形	法量 成形・調整等の特徴	色 調成	粘土	遺存	備考
1	土師器皿	17.0 × (6.00) × 2.00 ロクロ成形 外体部下端一回転ヘラケズリ 底部一回転糸切り後回転ヘラケズリ	褐 褐硬	雲母多 赤色 白色	1/4	
2	土師器皿	14.8 × 6.00 × 1.50 ロクロ成形 外体部下端一回転ヘラケズリ 底部一面静止ヘラケズリのため切り離し不明	橙褐 褐硬	雲母多 白色	1/6	
3	土師器皿	15.0 × 6.60 × 2.00 ロクロ成形 外体部下端一回転ヘラケズリ 内体部一ナデ 底部内面ースス痕 底部一回転ヘラケズリ 全面ケズリのため切り離し不明	淡褐 硬	長石赤 色黑色 白色	1/2	墨書 内底「刃」
4	土師器壺	11.4 × 5.40 × 3.90 ロクロ成形 外体部下端一回転ヘラケズリ 底部一回転糸切り調査なし	褐 硬	雲母多 石英砂 粒白色	略完形	
5	土師器壺	12.3 × 7.00 × 4.60 ロクロ成形 外体部下端一回転ヘラケズリ 底部一回転ヘラケズリ 磨滅(?)のため切り離し不明	暗褐 赤褐 硬	雲母多 白色	略完形	
6	土師器壺	11.5 × 6.60 × 3.70 ロクロ成形 外体部下端一回転ヘラケズリ 底部一回転糸切り後回転ヘラケズリ	明褐 ～ 橙褐 硬	雲母多	略完形	
7	土師器壺	(11.4) × 6.80 × 4.00 ロクロ成形 外体部下端一回転ヘラケズリ 底部一面全回転ヘラケズリのため切り離し不明	橙褐 褐硬	雲母多	1/2	墨書 外体正位「得」
8	土師器壺	12.6 × 6.50 × 4.20 ロクロ成形 外体部下端一回転ヘラケズリ 底部一回転糸切り後回転ヘラケズリ	褐 硬	雲母多 石英 白色	略完形	墨書 外体横位「丁」 外底「上」
9	土師器壺	13.0 × 6.60 × 4.40 ロクロ成形 外体部下端一回転ヘラケズリ 底部一回転糸切り後回転ヘラケズリ	橙褐 硬	雲母多 石英 白色	略完形	墨書 外体「口」
10	土師器壺	12.0 × 7.20 × 4.00 ロクロ成形 外体部下端一回転ヘラケズリ 外面に赤彩(?) 底部一回転糸切り後回転ヘラケズリ 線刻は不明瞭	褐 硬	雲母多 長石砂 粒白色	略完形	墨書 外体正位「得」 線刻 外底「口」
11	土師器壺	(11.4) × (6.40) × 4.20 ロクロ成形 外体部下端一回転ヘラケズリ 底部一回転糸切り後静止ヘラケズリ	明褐 硬	雲母多 白色	1/4	墨書 外体正位「得」
12	土師器壺	- × 6.60 × <2.40> ロクロ成形 外体部下端一回転ヘラケズリ 底部一回転糸切り後静止ヘラケズリ 内外面とも器面の磨滅が激しい	明褐 褐硬	雲母多 白色	1/2 底部	墨書 外体正位「皿」

No	種別形	法量　口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色焼成	胎土	遺存	備考
13	土師器 坏	12.2×5.80×4.30 ロクロ成形 外体部下端一回転ヘラケズリ 底部一面全面回転ヘラケズリのため切り離し不明	橙	雲母多 白色	略完形	ヘラ書 外体 「」
14	土師器 高台付 坏	(16.6)×—×6.10 ロクロ成形 台部径7.60 外体部下端一回転ヘラケズリ 内体部一面なヘラミガキ 底部一切り離し不明 高台部一ナデ	橙褐 硬	雲母多 赤色 白色	1/2	
15	土師器 坏	15.6×6.80×5.20 ロクロ成形 口縁墨黒 黑色研磨 外体部一面なヘラミガキ 内体部一面なヘラミガキ 回転ヘラ起こし 底部一面回転ヘラケズリ 全面ケズリのため切り離し不明	淡褐 やや 不良	黑色 白色	略完形	墨書 外体正位 「王か生か主」 内黒
16	土師器 坏	15.6×8.00×4.40 ロクロ成形 口縁黒色 黑色研磨 外体部下端一回転ヘラケズリ 内体部一面なヘラミガキ 底部一面全ヘラケズリのため切り離し不明	褐 硬	雲母 赤色 白色	略完形	内黒 外面赤彩
17	土師器 坏	(15.2)×6.40×5.00 ロクロ成形 口縁部下端墨黒 黑色研磨 外体部下端一回転ヘラケズリ 内体部一面なヘラミガキ 底部一面全ケズリのため切り離し不明	暗褐 硬	赤色 白色	1/3	内黒
18	土師器 坏	(15.2)×8.20×5.10 ロクロ成形 外体部下端一回転ヘラケズリ 内体部一面なヘラミガキ後振程いヘラ ミガキ 底部一回転糸切り、回転ヘラケズリ	褐色 黑 硬	雲母 赤色 白色	1/5	内黒
19	土師器 坏	—×—×— ロクロ成形 外体部下端一回転ヘラケズリ 内体部一面なヘラミガキ	褐	白色	体部片	墨書 外体 「」 内黒
20	土師器 坏	(14.4)×6.60×4.90 ロクロ成形 外体部下端一回転ヘラケズリ 内体部一面なヘラミガキ 底部一回転糸切り後回転ヘラケズリ	暗褐～ 褐 黑 硬	雲母 白色多	1/2	墨書 外体倒位 「得」 内黒
21	土師器 坏	(14.6)×7.40×4.70 ロクロ成形 外体部下端一回転ヘラケズリ 内体部一面なヘラミガキ 底部一回転糸切り後回転ヘラケズリ	明褐 黑 硬	雲母白 色多石 英赤色	1/3	墨書 外体 「」 内黒
22	土師器 坏	(14.9)×(7.20)×4.40 ロクロ成形 外体部下端一回転ヘラケズリ 内体部一面なヘラミガキ 底部一回転ヘラケズリ 欠損のため切り離し不明	褐 黑 硬	雲母多 赤色 白色	1/4	墨書 外体正位 「應」 内黒
23	土師器 坏	—×—×— ロクロ成形 外体部下端一回転ヘラケズリ 内体部一面なヘラミガキ	褐	白色	口縁片	墨書 外体 「」 内黒
24	須恵器 坏	(13.8)×7.40×3.80 ロクロ成形 外体部下端一回転ヘラケズリ 底部一静止ヘラケズリのため切り離し不明	褐	雲母石 英砂粒 白色	1/6	朱書 外底 「得」
25	須恵器 坏	13.4×7.20×4.10 ロクロ成形 外体部下端一静止ヘラケズリ 底部一平底	灰 硬	雲母 石类 白色	略完形	ヘラ書 外底 「」
26	須恵器 壺	—×16.4×(15.3) 輪樋 外面 廓部一タタキ 下端一ヘラケズリ 内面 ヘラケズリ 器面の剥離著しい 底部一平底	灰 普	粗砂多	胴～ 底部	
27	須恵器 壺	—×—×— 外面 植位平行タタキ 内面 ナデ	暗褐 硬	雲母 石类	胴部片	線刻 外面 「」
28	須恵器 瓶	—×15.0×(14.2) 輪樋 外面 脚部一タタキ 下端一ヘラケズリ 内面 ヘラケズリ 輪樋直、指頭圧痕有り 孔5箇 中央部円形透し孔を挟んで対象に木の葉形の透し孔4個	暗赤褐 硬	砂粒多	1/2 胴～ 底部	
29	石器 鍾乳	1.90×1.90×厚さ0.90	—	—	完形	
30	石器 絆石	3.90×3.30×厚さ1.90 5.4g	—	—	略完形	扁平な一面に溝 状の浅い抉りを有す

No	種別 器形	法量 成形・調整等の特徴 口径×底径×器高	色焼 調成	胎土	遺存	備考
31	土製品 輪	現存高(4.80) 内面 高温のため灰色化	—	—	羽口 部分	
32	鐵器 鑼	(4.80)×0.90×0.15 12.3g (5.95)×3.50×3.00	—	—	略完形	
33	鐵器 鑼	15.85×1.00～0.30×0.30～0.50 16.1g	—	—	略完形	
34	鐵器 鑼	(7.80)×2.45～0.40×0.40～0.45 19.5g	—	—	片	
35	鐵器 刀子	(8.90)×1.45×0.30 18.7g 1.75～0.95×0.35～0.15	—	—	片	
36	鐵器 刀子	(3.60)×1.10×0.25 4.7g	—	—	片	
37	鐵器 刀子	(2.70)×0.85×0.15 2.6g	—	—	片	
38	鐵器 紡錘車	(4.80)×5.70×0.60 39.4g	—	—	略完形	軸部一部残
39	鐵器 紡錘車	4.00×3.90×0.20 12.2g	—	—	略完形	
40	鐵器 不明	(4.60)×0.30×0.30 17.7g	—	—	片	裏食がひどく 断面取れず
41	鐵器 不明	(3.85)×2.40×0.40 13.6g	—	—	片	鉄斧片？
42	鐵器 不明	(2.50)×3.45×1.00 45.3g	—	—	片	
43	鐵器 不明	(6.00)×0.40×0.30 6.7g	—	—	片	
44	土師器 环	14.0×9.00×3.30 ロクロ成形 外体部下端一回転ヘラケズリ 底部一回転糸切り後回転ヘラケズリ	褐	雲母 長石	1/8	墨書 外体正位 「得」
45	土師器 环	—×7.20×— ロクロ成形 外体部下端一回転ヘラケズリ 底部一回転ヘラケズリ、切り離し欠損のため不明	褐	雲母 長石	1/8	墨書 外体正位 「得」
46	土師器 环	—×—×— ロクロ成形	褐	—	口縁片	墨書 外体横位 「得」
47	土師器 环	—×—×— ロクロ成形	褐	—	口縁片	墨書 外体側位 「得」 外体赤彩
48	土師器 环	—×—×— ロクロ成形 外体部下端一回転ヘラケズリ	褐	—	口縁片	墨書 外体正位 「得」
49	土師器 环	—×—×— ロクロ成形	褐	—	口縁片	墨書 外体側位 「得」
50	土師器 环	—×—×— ロクロ成形	褐	—	口縁片	墨書 外体正位 「得」

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色焼 調成	胎土	遺存	備考
51	土師器 坏	-×-×- ロクロ成形 外体部下端-回転ヘラケズリ	褐	-	口縁片	墨書 外体正位 「得」
52	上師器 坏	-×-×- ロクロ成形	褐	-	口縁片	墨書 外体側位 「腰」
53	土師器 坏	-×-×- ロクロ成形	褐	-	口縁片	墨書 外体 「口」
54	上師器 坏	-×-×- ロクロ成形 内体部-密なヘラミガキ	褐	-	口縁片	墨書 外体側位 「腰」 内黒
55	土師器 坏	-×-×- ロクロ成形 外体部下端-回転ヘラケズリ 底部-回転糸切り後静止ヘラケズリ	褐	-	体部片	墨書 外体正位 「得」
56	土師器 坏	-×-×- ロクロ成形	褐	-	体部片	墨書 外体正位 「得」
57	土師器 坏	-×-×- ロクロ成形 外体部下端-回転ヘラケズリ	褐	-	体部片	墨書 外体正位 「腰」
58	土師器 坏	-×-×- ロクロ成形 外体部下端-回転ヘラケズリ	褐	-	体部片	墨書 外体側位 「腰」
59	上師器 坏	-×-×- ロクロ成形 内体部-密なヘラミガキ	褐	-	体部片	墨書 外体側位 「得」 内黒
60	土師器 坏	-×-×- ロクロ成形	褐	-	口縁片	墨書 外体正位 「万」
61	上師器 坏	-×-×- ロクロ成形 外体部下端-回転ヘラケズリ	褐	-	口縁片	墨書 外体横位 「万」
62	土師器 坏	-×-×- ロクロ成形	褐	-	口縁片	墨書 外体正位 「万」
63	土師器 坏	-×-×- ロクロ成形 内体部-密なヘラミガキ	褐	-	口縁片	墨書 外体正位 「才」 内黒
64	土師器 坏	-×-×- ロクロ成形	褐	-	口縁片	墨書 外体正位 「口」
65	土師器 皿	-×-×- ロクロ成形	褐	-	口縁片	墨書 外体 「口」
67	土師器 坏	-×-×- ロクロ成形 外体部下端-回転ヘラケズリ 底部-ほとんどの部分が欠損しているため切り離し不明	褐	-	口縁~ 底部片	墨書 外体 「口」
68	土師器 坏	-×-×- ロクロ成形	暗淡褐	長石 赤色 白色	口縁~ 体部片	墨書 外体横位 「皿」
69	土師器 坏	-×-×- ロクロ成形 内体部-密なヘラミガキ	褐	-	口縁~ 体部片	墨書 外体横位 「腰」
70	土師器 坏	-×-×- ロクロ成形	褐	-	口縁片	墨書 外体正位 「腰」
71	土師器 坏	-×-×- ロクロ成形 外体部下端-回転ヘラケズリ	褐	-	口縁片	墨書 外体正位 「腰」

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色焼 調成	胎土	遺存	備考
72	土師器 坏	-×-×- ロクロ成形	褐	-	口縁片	墨書 外体 「□」
73	土師器 坏	-×-×- ロクロ成形	褐	-	口縁片	墨書 外体 「□」
74	土師器 皿	-×-×- ロクロ成形	褐	-	口縁片	墨書 外体 「□」 内面赤彩
75	土師器 坏	-×-×- ロクロ成形	褐	-	口縁片	墨書 外体横位 「囲」
77	土師器 坏	-×-×- ロクロ成形	褐	-	口縁片	墨書 外体 「□」
78	土師器 坏	-×-×- ロクロ成形	褐	-	口縁片	墨書 外体正位 「囲」
79	土師器 坏	-×-×- ロクロ成形	褐	-	口縁片	墨書 外体横位 「囲」
80	土師器 坏	-×-×- ロクロ成形	褐	-	口縁片	墨書 外体 「□」
81	土師器 坏	-×-×- ロクロ成形	褐	-	口縁片	墨書 外体 「□」
82	土師器 坏	-×-×- ロクロ成形	褐	-	口縁片	墨書 外体 「□」
83	土師器 坏	-×-×- ロクロ成形	褐	-	口縁片	墨書 外体 「□」
84	土師器 坏	-×-×- ロクロ成形	褐	-	口縁片	墨書 外体側位 「囲」
85	土師器 坏	-×-×- ロクロ成形	褐	-	口縁片	墨書 外体 「□」
86	土師器 坏	-×-×- ロクロ成形 内面 ミガキ	褐	-	口縁～ 体部片	墨書 外体 「□」 内黒
87	土師器 坏	-×-×- ロクロ成形 内体部-密なヘラミガキ	褐	-	口縁～ 体部片	墨書 外体 「□」 内黒
88	土師器 坏	-×-×- ロクロ成形 内体部-密なヘラミガキ	褐	-	口縁片	墨書 外体 「□」 内黒
89	土師器 坏	-×-×- ロクロ成形 内体部-密なヘラミガキ	褐	-	口縁片	墨書 外体 「□」 内黒
90	土師器 坏	-×-×- ロクロ成形 外体部下端-回転ヘラケズリ	褐	-	体部片	墨書 「□」
91	土師器 坏	-×-×- ロクロ成形 外体部下端-回転ヘラケズリ 底部-回転ヘラケズリ 切り離し不明	褐	-	底部片	墨書 外体側位 「囲」
92	土師器 坏	-×-×- ロクロ成形 外体部下端-回転ヘラケズリ 底部-静止ヘラケズリ	褐	-	底部片	墨書 外体 「□」

No	種別 器形	法量、口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色 焼成	胎土	遺存	備考
93	土師器 壺	-×-×- ロクロ成形 外体部下端-回転ヘラケズリ 底部-回転ヘラケズリ	褐	-	底部片	墨書 外体「□」
94	土師器 皿	-×-×- ロクロ成形 外体部下端-回転ヘラケズリ	褐	-	体部片	墨書 外体「□」
95	土師器 壺	-×-×- ロクロ成形	褐	-	体部片	墨書 外体「□」
96	土師器 壺	-×-×- ロクロ成形 外体部下端-回転ヘラケズリ 底部-回転ヘラケズリ 切り離し不明	褐	-	底部片	墨書 外体「□」
98	土師器 壺	-×-×- ロクロ成形	褐	-	口縁片	墨書 外体「□」
99	土師器 壺	-×-×- ロクロ成形 外体部下端-回転ヘラケズリ	褐	-	体部片	墨書 外体「□」
100	土師器 壺	-×-×- ロクロ成形	褐	-	体部片	墨書 外体「□」
101	土師器 壺	-×-×- ロクロ成形	褐	-	口縁片	墨書 外体「□」
102	土師器 壺	-×-×- ロクロ成形	褐	-	体部片	墨書 外体「□」
103	土師器 壺	-×-×- ロクロ成形 外体部下端-回転ヘラケズリ 内体部-密なヘラミガキ	褐	-	体部片	墨書 外体「□」 内黒
104	土師器 壺	-×-×- ロクロ成形 外体部下端-回転ヘラケズリ	褐	-	体部片	墨書 外体「□」 内黒
105	土師器 壺	-×-×- ロクロ成形 外体部下端-回転ヘラケズリ 内体部-密なヘラミガキ	褐	-	体部片	墨書 外体「□」 内黒
106	土師器 壺	-×(7.0)×(1.80) ロクロ成形 外体部下端-回転ヘラケズリ 底部-回転ヘラケズリ 欠損のため切り離し不明	褐	雲母多	1/3 底部片	墨書 外体正位 「団」
107	土師器 壺	-×-×- ロクロ成形 外体部下端-回転ヘラケズリ 底部-回転系切り後回転ヘラケズリ	褐	-	底部片	墨書 外体「□」
108	土師器 皿	-×-×- ロクロ成形 外体部下端-回転ヘラケズリ 底部-回転ヘラケズリ	褐	-	底船片	墨書 内底 「□」
109	土師器 高台付 壺	-×-×- ロクロ成形 外体部下端-回転ヘラケズリ 底部-回転ヘラケズリ 破片のため切り離し不明 高台部-ナデ	褐	-	底部片	墨書 内底 「□」
111	土師器 壺	-×-×- ロクロ成形 外体部下端-回転ヘラケズリ 内体部-密なヘラミガキ 底部-回転ヘラケズリ	褐	-	底部片	墨書 外体 「□」 内黒
112	土師器 壺	-×-×- ロクロ成形 外体部下端-回転ヘラケズリ 内体部-密なヘラミガキ 底部-回転系切り後回転ヘラケズリ	褐	-	底部片	墨書 外体 「□」 内黒
113	土師器 壺	-×-×- ロクロ成形	褐	-	口縁片	ヘラ書 外体 「□」
114	土師器 壺	-×(7.0)×(1.3) ロクロ成形 外体部下端-回転ヘラケズリ 内体部-密なヘラミガキ 底部-全面回転ヘラケズリのため切り離し不明	褐 棕褐色 雲母多	1/2 底部		ヘラ書 外底 「-」

No	種別 器形	法量 口徑×底徑×器高 成形・調整等の特徴	色焼 調成	胎土	遺存	備考
115	土器器 坏	-×-×- ロクロ成形 内体部-密なヘラミガキ	褐	-	口縁片	線刻 外体「×」 内黒
116	土器器 坏	-×-×- ロクロ成形 底部-回転糸切り後回転ヘラケズリ	褐	-	底部片	線刻 内底 [図]
117	土器器 高台付 坏	-×-×- ロクロ成形 底部-回転糸切り後回転ヘラケズリ 高台部-ロクロ、ナデ	褐	-	底部片	線刻 外底 [図]

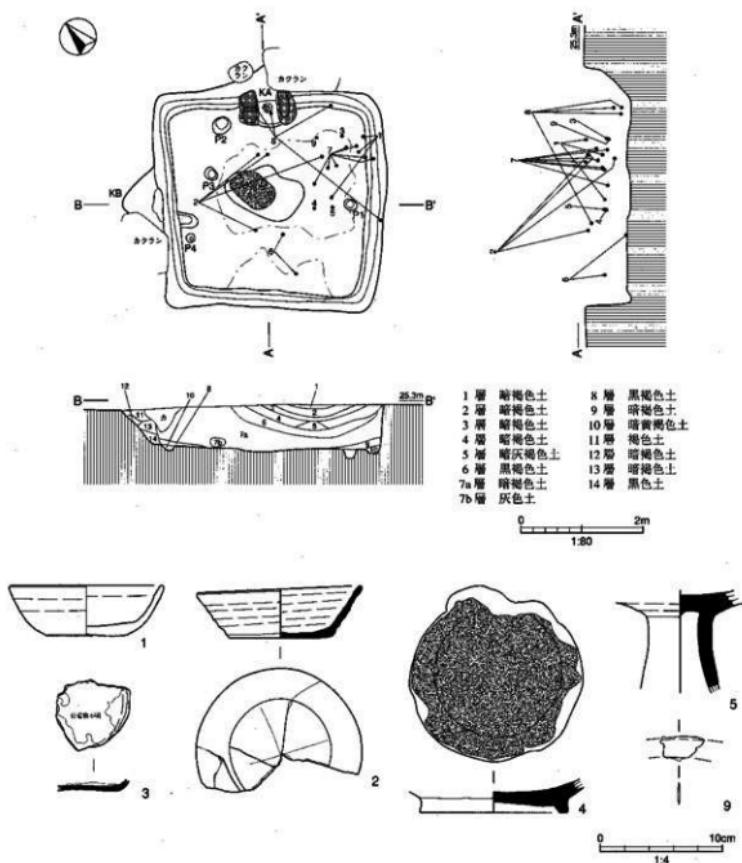


図196 A103

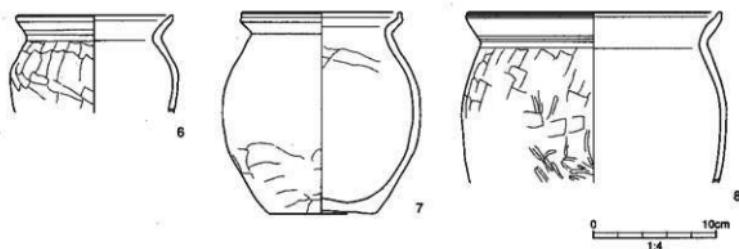


図197 A103 (2)

表30 A103遺物観察表

(単位cm)

No	種別 器形	法量 成形・調整等の特徴	色 焼	調成	胎土	遺存	備考
1	土師器 坏	(12.6)×(6.80)×4.20 ロクロ成形 底部一回転ヘラケズリ 全面ヘラケズリのため切り離し不明	暗褐色	雪母・ 石英多 白色		1/2	
2	須恵器 坏	13.6×8.40×4.00 ロクロ成形 外体部下端ヘラケズリ 底部一回転ヘラ切り、静止ヘラケズリ	暗灰 硬	白色多 長石		1/2	練剤 外底 [団]
3	須恵器 坏	-×-×- ロクロ成形 外体部一回転ヘラケズリ 底部-静止未切り、静止ヘラケズリ	灰 硬	白色多 長石	底部分		付着物有り 内底
4	須恵器 高台付 坏	-×12.0×(2.80) ロクロ成形 底部一回転ヘラケズリ 全面ヘラケズリのため切り離し不明	硬	長石 白色	底部		転用疑?
5	須恵器 高坏	-×-×(8.40) ロクロ成形	硬	白色多 長石	坏底部～脚部 (上部)		
6	土師器 小型甕	(12.8)×-×(8.00) 輪積 外面 口縁部ヨコナデ 脚上半ナデ 脚下半ヘラケズリ 脚部ヘラケズリ	暗赤褐色 普	砂粒多	1/4 口縁部～脚部		内外面スス付着
7	土師器 小型甕	(13.2)×8.80×16.6 輪積 外面 口縁部ヨコナデ 脚上半ナデ 脚下半ヘラケズリ 内面 口縁部ヨコナデ 脚部ヘラケズリ後ナデ	暗赤褐色 普	粗砂・ 石英・ 雲母多	1/5		外面にスス付着 底部に木葉痕
8	土師器 甕	21.0×-×(14.1) 輪積 外面 口縁部ヨコナデ 脚部ヘラケズリ後ヘラミガキ 内面 ヨコナデ	普	砂粒多	1/4 口縁部～脚部		黒斑有り
9	鉄器 穂張具	(3.60)×1.65×厚み0.15 3.1g	-	-	片		

A103

検出地区 K7-40-1・2・4gにわたって検出した。

遺構 長軸3.58m×短軸3.49m×壁高0.69m、主軸方位はN-42°-Eを示す。平面形は隅丸方形で、竈が再構築された住居跡である。床面を立川ロームのクラック帯とし、硬化面は住居跡中央と出入口付近に分かれて認められた。ピットは4基検出されたが、柱穴はP2のみであり、P1は旧竈KBに伴う出入口施設のピットである。周溝は竈下まで全周する。竈は、KBを壊した後に新竈KAを再構築している。KBでは竈ピットは検出されず、火床も失われていたが、帯状の凹みが確認された。KAは竈前庭部から火床にかけて床面との差はほとんどなく凹む程度であり、内壁はわずかに焼けた程度であった。住居跡中央に坑底を意識して掘り込んだとは思えないが、被熱のため淡く赤化しているやや凹んだ炉跡状のものが検出された。覆土は住居廃絶後、一気に暗褐色土を埋戻したものであった。

遺物 床面及び直上層からの出土は少なく、覆土上層の遺物が多かった。掘り返してつくられた土坑の覆土が、遺物出土の主体層となっていた。

所見 本住居跡は、人為的な埋戻しによって埋没したものであり、再度、掘り返され、この掘られた土坑を利用したものであった。

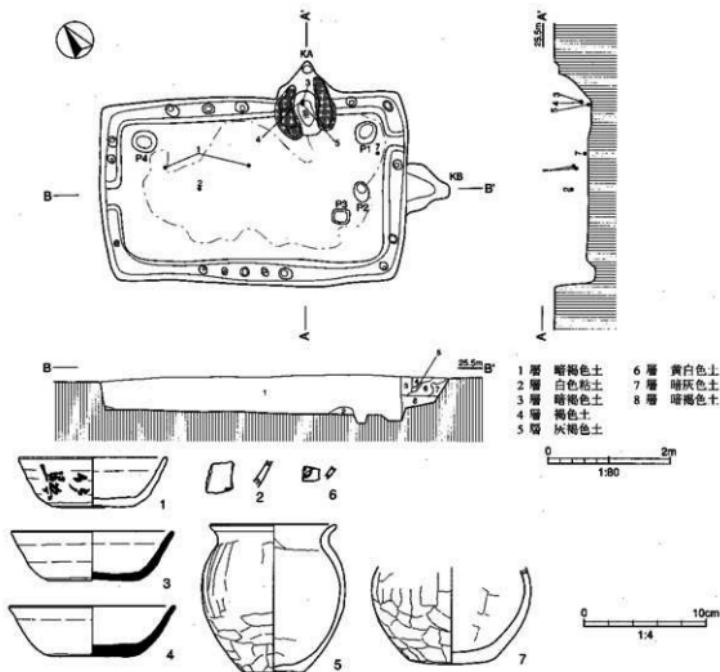


図198 A103

A104

検出地区 K7-40-4g、K7-50-2g、L7-31-3g、L7-41-1gにわたって検出した。

遺構 長軸4.93m×短軸3.09m×壁高0.54m、主軸方位はN-38°-Eを示す。平面形は竈平行方向に横長の隅丸長方形であり、竈を再築した住居である。床は新竈KA前がやや凹み、南西隅でやや高くなるが、全体的に平坦なハードロームの床である。壁付近以外は、硬化面を残している。柱穴はKAに伴うものはP1~4であり、KBに伴うものはP1~4と考えられたが、P1~2は置柱のように浅いものである。周溝内に壁柱穴が16本検出された。周溝は南東壁と北西壁で一部途切れるが、幅のある、掘り込みも深いものである。旧竈KBの煙道を掘り込んでいることから、KAの構築時に再度掘り込まれたと考えられる。KBはKA構築時に壊されているが、壊された天井部の粘土の住居内への流入を防ぐよう、新たに壁際に褐色土等が充填されていた。竈ピットは検出できず、火床も確認できなかった。KAは崩落した天井部の粘土がよく残り、煙道部には焼土や灰がかなり堆積していた。また、覆土は基本的に、1層のみの把握しかできなかった。

遺物 全体的に、人為的埋戻しの投入半ばで廃棄したような出土状態である。3~5は煙道部の坑底に接して、5を最も下にして、底部にかぶせられたように3~4が、倒置の状態で重なって出土した。

所見 住居廃絶後、一気に暗褐色土を投入し、埋戻した竪穴住居跡である。

表31 A104遺物観察表

(単位cm)

No	種別 器形	法量 成形・調整等の特徴	色 焼成	調 胎土	造存	備考
1	土師器 壺	12.0×6.90×4.20 ロクロ成形 外体部下端-ヘラケズリ 底部-回転糸切り、回転ヘラケズリ	淡褐 硬	赤色 白色	略完形	墨書 外体横位 「竹野」
2	土師器 壺	-×-×- ロクロ成形	褐	—	体部片	墨書 外体 「□」
3	須恵器 壺	13.2×7.20×4.10 ロクロ成形 外体部下端-回転ヘラケズリ 底部-回転糸切り、回転ヘラケズリ	硬	雲母 白色	完形	
4	須恵器 壺	13.6×6.60×4.20 ロクロ成形 外体部下端-回転ヘラケズリ 底部-回転ヘラケズリ 全面ヘラケズリのため切り離し不明	硬	白色多 石英 長石	完形	
5	土師器 小型甕	(10.4)×5.10×12.1 輪積 外面 口縁部-ヨコナデ 脇部-ヘラケズリ後一部ナデ 内面 ヨコナデ 底面-ヘラナデ	明赤褐 軟	砂粒多	1/2	
6	土師器 壺	-×-×- ロクロ成形	褐	—	体部片	墨書 外体 「□」
7	土師器 小型甕	-×7.00×(7.60) 輪積 外面 ヘラケズリ 脇部-球剥状? 内面 ナデ 底部-やや丸みをおびる	暗赤褐	砂粒多	1/2 脇部～ 底部	底面 黒斑有り

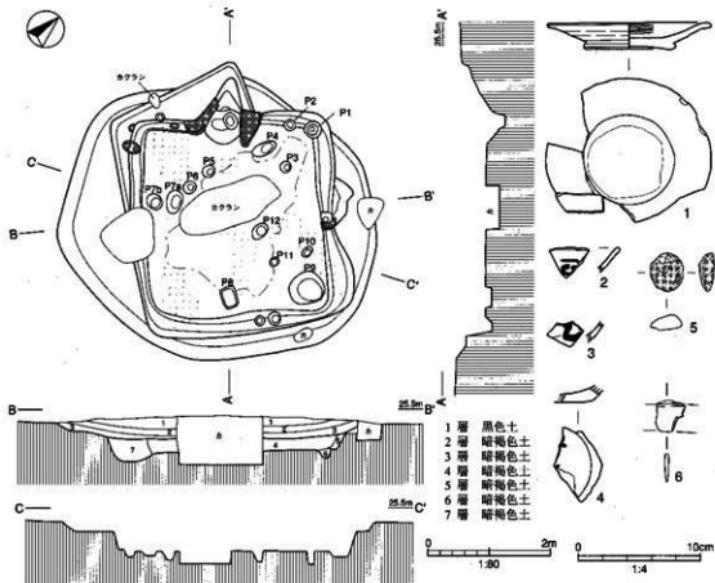


図199 A105

A105a・b

検出地区 K7-39-3g、K7-49-1・2gにて検出した。

遺構 A105 aは長軸3.61m×短軸3.25m×壁高0.44m、主軸方位はN-36°-Wを示す。平面形は隅丸方形である。床面はハードロームであり、壁よりはハードロームとブロックとソフトロームが混じた床。全体的には平坦であり、床中央に硬化面。柱穴は不明であるが、新竈KAの出入口施設のビットはP 2、旧竈KBはP 7 bである。KAは竈ビット内に、さらに竈底面から0.45mビットが掘り込まれていた。崩落した天井部の粘土は極めて少なかった。竈ビットをやや深く掘り込んだ跡、火床部を上にとるために再度充填したような暗褐色土の堆積を認める。KBはKAの再構築時に壊され、竈袖の粘土の一部が残っているだけであった。

床面には炭化粒を含む焼土が分布していた。炭化材も床に横倒しの状態で、しかも張り付くように認められた。だが、何れも小破片であり、柱などの原形は留めていない。炭化粒は少なかった。新竈右壁には、白色粘土と暗褐色土が混合したような粘土が、床と壁にへばりつくように広がる。周溝は竈下まで巡っていた。覆土は人為的に一気に埋め戻されたものである。

なお、A105 bはA105 aによる損壊が著しく、長軸・短軸・主軸方位は不明であるが、壁高は0.15mであった。平面形は隅丸方形と推定される。

表32 A105遺物觀察表

(単位cm)

No	種別 器形	法量 成形・調整等の特徴	色 焼	調成	胎 土	遺存	備考
1	土師器 高台付皿	13.5××2.20 台部径7.50 ロクロ成形 外体部下端一ナデ 内体部一密なヘラミガキ 底部一回転糸切り	褐 褐	多 —	白 —	1/2 片	外底に墨痕有り 転用現
2	土師器 坏	-×-×- ロクロ成形	褐	—	口縁部 片	墨書	外体倒位 「得」
3	土師器 坏	-×-×- ロクロ成形 外体部一ヘラケズリ	褐	—	体部片	墨書	外体倒位 「得」
4	土師器 坏	-×-×- ロクロ成形 外体部一回転ヘラケズリ 底部一回転糸切り、回転ヘラケズリ	褐	—	底部片	墨書	外底 「口」
5	石器 輕石	3.60×2.20×厚さ1.30 3.2g	—	—	片	片面欠損 用途不明	
6	鐵器 鎌	(2.30)×2.30×厚さ0.30 4.5g	—	—	片		

A106

検出地区 K7-59-2g、K7-60-1gにて検出した。

遺構 長軸2.94m×短軸2.84m×壁高0.12m、主軸方位はN-63°-Eを示す。平面形は隅丸方形である。床は全体に硬化するが、特に、竈前から出入口にかけて良好な硬化面を残している。主柱穴は検出されなかったがP4は壁柱穴として、P2は出入口施設に伴うピットと捉えられた。P1・P3は柱を建てた痕跡が覆土から確認できず、貯藏穴とも考えられた。周溝は各コーナー付近で途切れるもので、竈壁にはほとんど巡っていなかった。ハードロームの上部を底面とする竈のピットは、若干焼けている程度であった。底面には褐色土が堆積し、その上に焼土と白色粘土が混合した層が堆積したように捉えられた。覆土は掘り込みが浅く、暗褐色土の1層としか捉えられなかった。

遺物 掘り込みが浅く、全ての遺物が床面乃至床直上層の出土と捉えられる状態である。3は床からやや浮いて斜めに、4は床面にてやや斜めに、5は床に置かれたように出土した。また、7の支脚は、竈の煙道部底に直立して出土したものである。

所見 壁高のない竪穴住居跡であるため、覆土が自然堆積か人為堆積かの判断はできなかった。

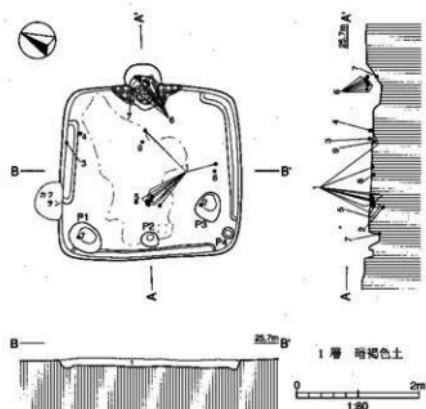


図200 A106

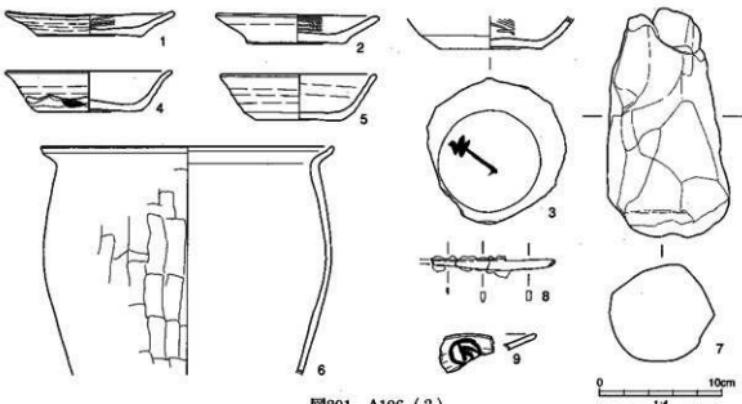


图201 A106 (2)

表33 A106遺物観察表

(単位cm)

No	種別 器形	法量 成形・調整等の特徴	色 焼	調成	胎土	遺存	備考
1	土器 重	13.8×8.20×1.80 ロクロ成形 外体部下端一ナデ 内体部一粗いヘラミガキ 底部一回転糸切り 未調整	暗褐 ～ 橙硬		雲母 長石 白色	1/2	
2	土器 皿	13.4×8.10×2.40 ロクロ成形 外体部下端一ナデ 内体部一密なヘラミガキ 底部一回転糸切り、静止ヘラケズリ	褐 褐硬		雲母多 白色	略完形	
3	土器 壊	—×8.40×(2.70) ロクロ成形 外体部下端一回転ヘラケズリ 内体部一粗いヘラミガキ 底部一回転糸切り、静止ヘラケズリ	橙 硬		白色 雲母 砂粒	底部	墨書 外底 「牛」
4	土器 壊	(13.6)×8.50×3.40 ロクロ成形 外体部下端一回転ヘラケズリ 底部一回転ヘラ切り、回転ヘラケズリ	褐 硬		雲母白 色長石 砂粒	1/3	墨書 外体 「口」
5	土器 壺	12.8×7.00×3.80 ロクロ成形 外体部下端一回転ヘラケズリ 底部一回転糸切り、回転ヘラケズリ	黑褐 ～ 褐 暗褐硬		白色多 雲母 長石	完形	
6	土器 壺	(24.0)×—×(18.2) 輪積 外面 口縁部一ヨコナデ 胴部一タテヘラケズリ 内面 ヨコナデ	明褐		砂粒多	1/6 口縁～ 胴部	口縁一受け口状 胴部一「く」の字状 長胴
7	土製品 支柱	径8.6 残存長18.9	棕褐 晉		砂粒多	2/3	
8	鉄器 刀子	(10.0)×0.50～0.85×厚み0.15～0.40 10.0g	—	—	—	1/2	刃部一茎残
9	土器 壊	—×—×— ロクロ成形	—	—	口縁 部片	墨書 外体横位 「圓」	

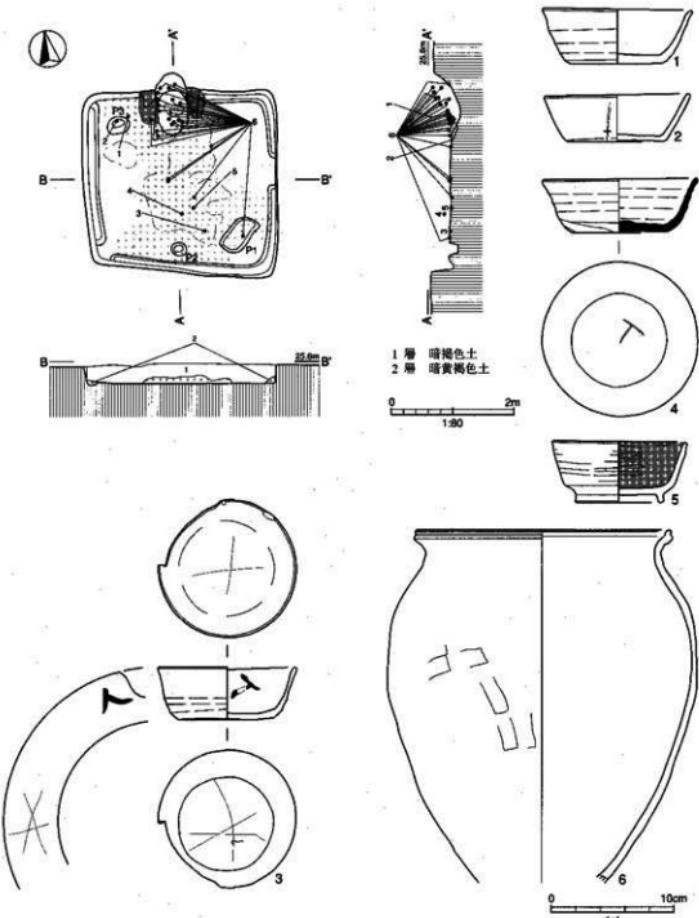


図202 A107

A107

検出位置 L7-51-3g、L7-61-1gにて検出した。

遺構 長軸3.17m×短軸2.96m×壁高0.29m、主軸方位はN-8°-Eを示す。平面形は隅丸方形である。ハードロームの床で、住居中央に硬化面を残す。柱穴の配置としてはP 1・2であるが、主柱穴とは捉えられず、P 3は出入口施設に伴うピットである。周溝は幅は狭いが、やや深く掘り込まれ、途切れながら断続的に巡っている。竈は袖内壁が赤化しており、その内壁に密着して土師器壺が出土している。また、炭化材が竈底面にむかって、倒れ込むように出土している。壁際の覆土上層から住居中央の床面にかけて、丸太と判別できる多量の炭化材が検出された。

遺物 遺物は覆土上層が多かった。床面出土の遺物は、床に置かれたような状態で出土した。

所見 住居廃絶後、不用材の焼却を行い、一気に人為的に埋戻したものである。

表34 A107遺物観察表

(単位cm)

No	種別 器 形	法 量 成 形・調 整等の特 徴	口 径×底 径×器 高	色 焼 調 成	胎 土	遺 存	備 考
1	土器器 坏	12.2×7.40×4.50 ロクロ成形 外体部下端一回転ヘラケズリ 底部一回転ヘラケズリ 全面ヘラケズリのため切り離し不明		褐 硬	雲母 白色	略完形	
2	土器器 坏	12.0×7.60×3.90 ロクロ成形 外体部下端一回転ヘラケズリ 底部一静止ヘラケズリ		橙 褐～橙 硬	白色多 雲母 砂粒	完形	線刻 外体 「U」
3	土器器 坏	10.4×7.80×4.30 ロクロ成形 底部一静止ヘラケズリ 全面ヘラケズリのため切り離し不明 墨書 外・内体正位「人」 線刻 外底「団」 外体「×」「団」		暗 褐～ 暗赤褐 硬	白色多 雲母	略完形	線刻 内底「X」
4	須恵器 坏	12.7×7.80×4.40 ロクロ成形 外体部一静止ヘラケズリ 底部一静止ヘラケズリ 全面ヘラケズリのため切り離し不明		硬	白色多 雲母	完形	ヘラ書 外底 「T」
5	土器器 高台付 坏	11.1×7.10×5.00 ロクロ成形 黒色研磨 外体部一密なヘラミガキ 内体部一密なヘラミガキ 底部一高台部接合前の回転ナデのため不明		黑褐 昔	雲母多 白色	略完形	外面 くすんだ 赤味
6	土器器 臺	21.0××(29.0) 最大径25.4 軸積 外面 口縁部-ヨコナデ 胴部-ヘラケズリ後ナデ 内面 ヨコナデ 内外とも器面の磨耗が 著しい 口唇下に凹状の調整有り 受け口状 頂部-「X」の字状		明橙褐 軟	雲母 長石	2/3 口縁部 ～胴部	胴長

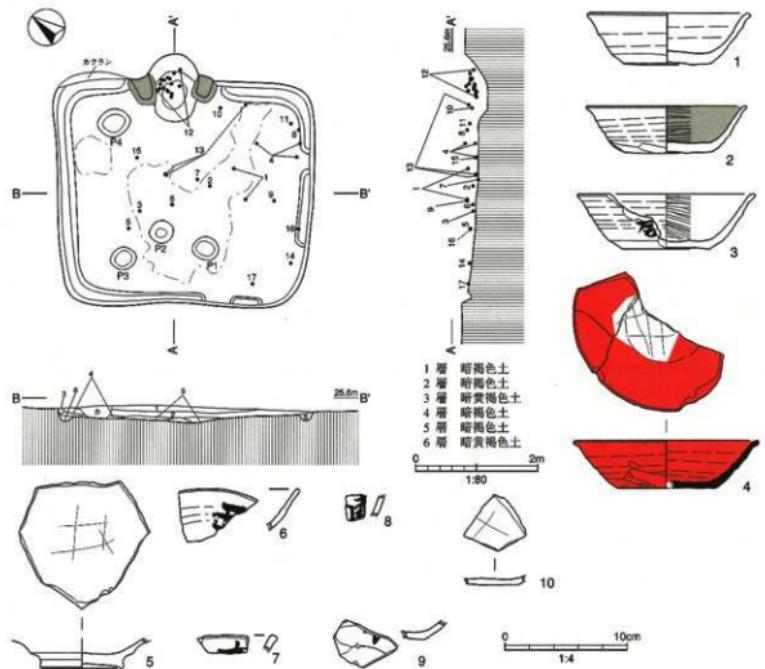


図203 A108

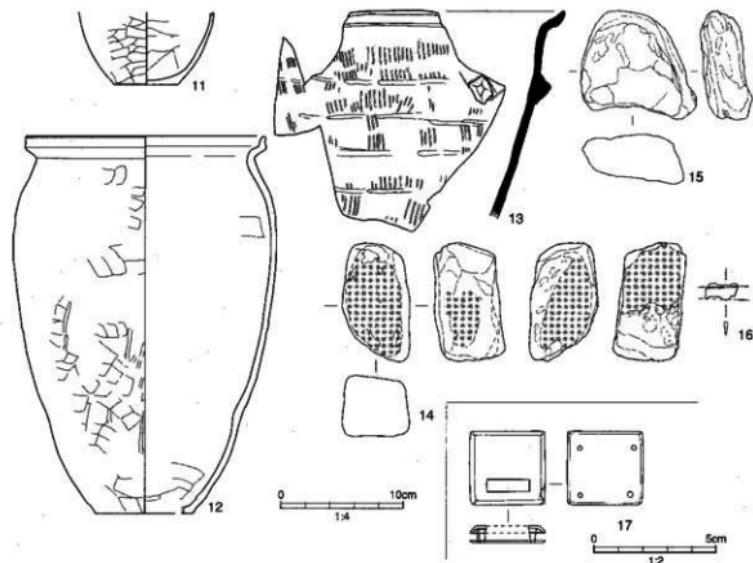


図204 A108 (2)

表35 A108遺物観察表

(単位cm)

No	種別 器形	法量 成形・調整等の特徴	色 焼	調成	胎土	遺存	備考
1	土師器 環	13.3×7.10×4.20 ロクロ成形 外体部下端一へラケズリ 底部一回転糸切り、回転へラケズリ	暗褐	雲母・ 白色多 石英	略光形		
2	土師器 環	13.2×7.10×3.90 ロクロ成形 外体部下端一静止へラケズリ 内体部一全体に密なへラミガキ 底部一回転糸切り、回転へラケズリ	褐 黒 硬	雲母・ 白色多 砂粒	略光形		内黒
3	土師器 環	(14.6)×7.10×4.50 ロクロ成形 外体部下端一回転へラケズリ 内体部一全体に密なへラミガキ 底部一回転糸切り、回転へラケズリ	明褐～ 赤褐 明褐 硬	雲母多 白色	1/2	墨書 外体正位 「□」	
4	土師器 環	(15.2)×8.00×3.90 ロクロ成形 外体部下端一へラケズリ 底部一静止へラケズリ 全面へラケズリのため切り離し不明	硬	雲母多 砂粒	1/2	線刻 内底 「#」 外・内体正彩?	
5	土師器 高台付 皿	—×—×2.50 ロクロ成形 外体部下端一ナデ 底部一回転糸切り 底部内面一密なへラミガキ	褐 硬	雲母多 白色	底部	線刻 内底 「#」	
6	土師器 環	—×—×— ロクロ成形	明褐	雲母多 白色	口縁 部片	墨書 外体正位 「西」	

No	種別 器形	法量 成形・調整等の特徴	色焼 調成	胎土	遺存	備考
7	土師器 壺	—×—×— ロクロ成形	—	—	口縁部片	墨書 外体正位 「□」
8	土師器 壺	—×—×— ロクロ成形	—	—	体部片	墨書 外体 「□」
9	土師器 壺	—×—×— ロクロ成形 外体部下端へラケズリ 底部へ回転余切り、回転ヘラケズリ	—	—	底部片	墨書 外体 「□」
10	土師器 壺	—×—×— ロクロ成形 外体部下端へラケズリ 底部へ回転ヘラケズリ 欠損のため切り離し不明	—	—	底部片	線刻 内底 「×」
11	土師器 小型甌	—×5.20×(6.00) 輪積 外面 ヘラケズリ 内面 ヘラケズリ 少量のスス付着	暗褐色 普	砂粒多	1/4	
12	土師器 甌	(5.00)×31.1×21.0 輪積 外面 口縁～頸部ヨコナデ 頸部へラケズリ後一部タテヘラミガキ 内面 ヨコナデ 下端へラケズリ 口縁へ凹凸状の調整を施す 受け口状 頸部「く」の字状	暗褐色 普	長石 雲母	胴下半	
13	須恵器 瓶	(30.0)×—×(16.9) 輪積 外面 口縁～頸部ヨコナデ 頸部タタキ 内面 ヨコナデ 指頭圧痕有り	明褐色 硬	砂粒多	1/4	突起1箇残存
14	石器 砥石	(9.60)×(5.20)×5.30	—	—	1/2	
15	石器 不明	8.90×9.50×厚さ4.00 414.5g 両面に弱い敲打痕状の痕跡が見られるが、全体として明瞭な加工痕は認められず、用途・器種は不明	—	—	—	ホルンフェルス
16	鐵器 刀子	(2.70)×1.10×厚み0.20 2.0g	—	—	片	
17	銅製品 巡方	3.10×3.00×厚み0.90 14.6g	—	—	完形	帶金具

A108

検出地区 L7-69-1・2・3・4gにわたって検出した。

造構 長軸4.14m×短軸3.61m×壁高0.21m、主軸方位はN-54°-Eを示す。平面形は隅丸方形である。ハードロームを床として住居中央に硬化面を残すが、傾斜をもつ床である。主柱穴はP 3・4であり、出入口施設のピットはP 1となる。P 2の性格は捉えられなかった。いずれも浅く、柱穴としても置柱のような印象である。周溝は寸断されるが、竈付近まで巡るものである。竈は全体的によく粘土が残り、袖内壁が若干赤化していた。範囲を押さえることはできなかったが、床面に横たわるように炭化材と焼土が散見できた。覆土は、焼却に伴う人為堆積として捉えられ、また、竈方向から焼土が投入したように散布していた。

造物 覆土が浅いため、本住居跡に伴うのか人為堆積とともに廃棄されたものは不明瞭であるが、遺物の多くは床より少し高い位置で出土している。17の帶金具は、床より7~8cm高く、斜めの状態で出土した。流れ込みの可能性が高いものである。

所見 住居廃絶時に不用材を焼却した住居跡であり、覆土は人為的投入層である。床面が傾斜をもつ本遺跡では例外的な竈穴住居である。

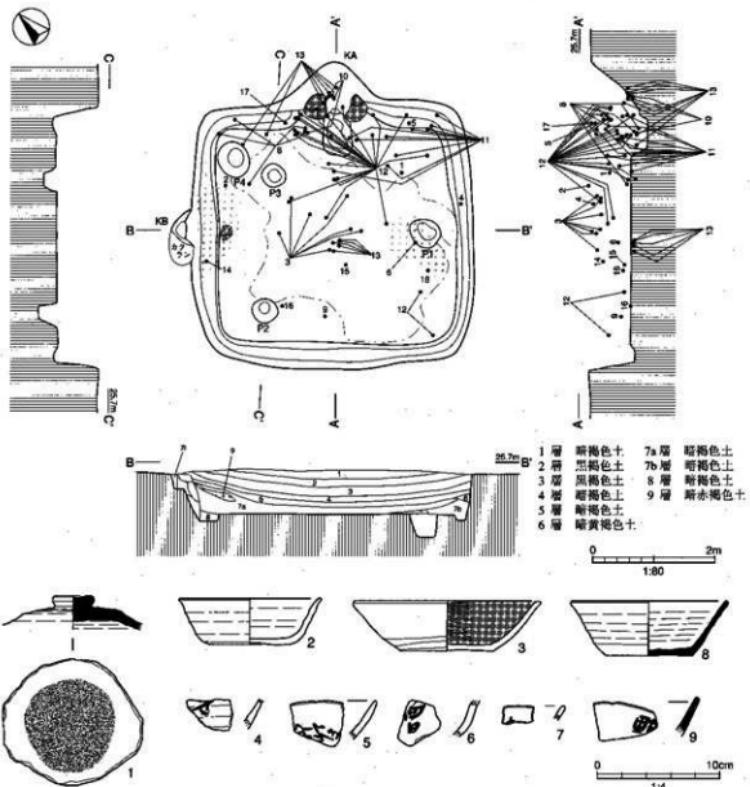


図205 A109

A109

検出地区 K7-80-3・4g, L7-71-1・3gにわたって検出した。

遺構 長軸4.55m×短軸4.36m×壁高0.64m、主軸方位はN-43°-Eを示す。平面形は隅丸方形であり、竈の再構築を行っている住居跡である。床は各コーナー付近は軟弱であるが、他は硬化面となっている。掘り込みが深いが、柱穴は不明確である。P 2・3は、新竈KA・旧竈KB共通と考えられる。P 4は用途不明のピットで、P 1はKBに対応する出入口施設のピットである。KAに対応する出入口施設のピットは不明確であった。周溝は新竈KAに対して竈付近まで巡るが、東壁側は浅くなっていた。KBの周溝の再利用と考えられる。竈は、KBは煙道部の壁への掘り込みは浅く、急激にあがっている。竈ピットは火床のみが残っているものであり、竈袖の粘土はほとんど残っていなかった。KAは天井部の粘土が崩



図206 A109 (2)

落したように残り、竈袖内壁は赤化していた。竈ピットから煙道部にかけて小さくテラス状の段差があり、煙道部中位のハードローム上部直下にも存在する。焼土はP1付近においては床面に密着して、KB付近では竈上から流れ込んだように検出した。

覆土は、住居廃絶時に暗褐色土を一気に投入した堆積であり、その後は、自然堆積となっている。

遺物 遺構規模からみると、遺物出土はやや少ない竪穴住居跡である。平面的な遺物分布は南コーナー付近から住居跡中央が多いが、床から比すると自然堆積の覆土中層～上層が多くなっている。13は、KAの煙道底面にかけて破碎された状態で出土している。5は土師器坏片であるが、「□神郷丈□」と記された墨書き土器である。

所見 竈の再構築を行っているが、竪穴住居としての拡張は確認できなかった。ただ、KBの竈ピットが検出されず火床のみであることから、床面をKA構築時に下げたことも考えられたが、覆土等からは捉えられなかつた。壁高のある竪穴住居であるので、柱穴は検出されるものと当初考えていたが、柱穴は明確にすることはできなかつた。本住居跡も、住居廃絶後に人為的な土砂投入による埋戻しを行っているものであるが、炭化粒がほとんど検出されず、本住居で不用材の焼却を行ったか疑問が残るものである。P1付近の焼土は床に密着して広がっていたが、はっきりとした焼土も焼土ブロックも検出されなかつた。KB付近の焼土も竈上から流れ込み乃至は投入したような状態であり、これらの焼土は他の場所での火の使用に係る焼土の廃棄の可能性も否定できないものであつた。

また、「□神郷丈□」の墨書き土器は、本来、「村神郷丈部」と記されたもので、さらに部姓の下に名前も続けられたと考えられるものである。所謂、「延命長寿祈願」の土器と捉えられよう。

表36 A109遺物観察表

(単位cm)

No	種別 器形	法量 成形・調整等の特徴	色 焼	調 成	胎 土	遺存	備考
1	土師器 蓋	-×-×- ロクロ成形	灰 硬	白色多 長石雲 母石英	天井部	内面 磨耗痕有	
2	土師器 坏	(11.6)×(6.60)×3.85 ロクロ成形 外体部下端-回転ヘラケズリ 内体部-剥離目立つ 底部-回転糸切り、回転ヘラケズリ	暗褐色 硬	雲母 白色	1/3		
3	土師器 坏	15.4×7.60×4.10 ロクロ成形 外体部下端-回転ヘラケズリ 外体部下端・底部-調整極めて丁寧 底部-回転糸切り、回転ヘラケズリ 調整糸切り痕細かい	褐 硬	雲母 白色	1/2	内黒	
4	土師器 坏	-×-×- ロクロ成形 外体部下端-ヘラケズリ	-	-	体部片	墨書 外体正位 「□」	
5	土師器 坏	-×-×- ロクロ成形	淡褐色 硬	赤色 黑色	体部片	墨書 外体横位 「■」	
6	土師器 坏	-×-×- ロクロ成形	褐	-	体部片	墨書 外体正位 「四日」	
7	土師器 坏	-×-×- ロクロ成形	-	-	口縁 部片	墨書 外体 「□」	
8	須恵器 坏	12.8×7.20×4.50 ロクロ成形 外体部下端-回転ヘラケズリ 底部-静止ヘラケズリ 全面ケズリのため切り離し不明	硬	石英長 石膏白色 多雲母	略完形		
9	須恵器 坏	-×-×- ロクロ成形	-	-	口縁 部片	墨書 外体 「□」	
10	土師器 小型壺	12.0×-×(12.1) ロクロ成形 外体部下端-ヘラケズリ 口縁やや受け口状 壺部-「く」の字状 肩部が張る	明褐色 硬	石英	口縁部 ~肩部	底部欠損	
11	土師器 壺	20.0×-×(29.8) 最大径23.0 輪積 凹線状の調整を施す 外面 口縁-頸部-ヨコナデ 脊部-ヘラケズリ後タテヘラミガキ 内面 口縁部-ヨコナデ 脊部-ヘラケズリ? 器面の剥離が著しい	暗褐色 軟	粗砂- 雲母- 石英多	略完形	受け口状 長胴	
12	土師器 壺	(21.4)×(8.00)×31.4 最大径24.4 輪積 外面 ヨコナデ後頸部タテヘラミガキ 口縁-凹線状の調整を施される 内面 ヨコナデ 下端-ヘラケズリ 底部-水滲痕? スス付着	明褐色 普	粗砂- 雲母多	1/2	受け口状 黒斑有り	
13	土師器 壺	-×-×(23.1) 輪積 外面 ナデ後タテヘラミガキ 内面 ヨコナデ 下端-ヘラケズリ 脊部-長脚	褐 硬	雲母- 長石多	1/2 肩部	外面下端に黒斑 有り	
14	石器 鉛石	3.20×2.60×厚さ1.80 4.1g 欠損が甚だしく加工も不明瞭 用途不明	-	-	片		
15	石器 鉛石	2.80×2.30×厚さ2.30 5.0g 全体的に被損 用途不明	-	-	片		
16	石器 鉛石	3.70×2.60×厚さ2.50 4.6g 欠損が甚だしく加工も不明瞭 用途不明	-	-	片		
17	鉄器 釘	(4.25)×0.40×厚み0.40 4.2g	-	-	片		
18	鉄器 刀子	(20.0)×7.50×厚み3.00 1.9g	-	-	片		

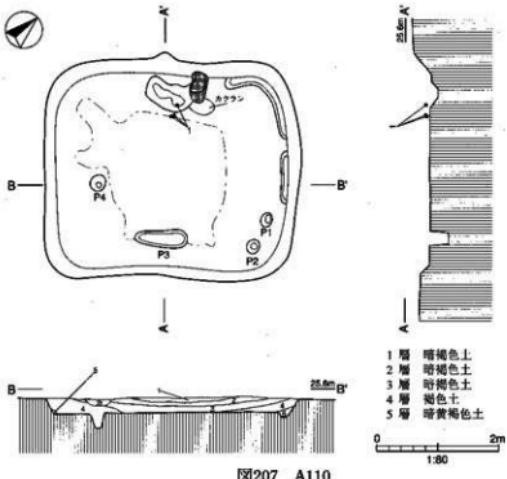


図207 A110

不明であるが、P1・2・4は支柱穴かも知れない。P3は出入口施設のピットと捉えた。周溝は浅いもので、北東壁中央から北西壁の竪付近まで断続して巡っている。竪は住居廃絶時に壊されたと考えられ、右袖は一部が残るもの、左袖は床面に、また、煙道底面に粘土がこびりつくように残るだけであった。覆土は、暗褐色土を主体とした自然堆積である。

遺物 散在している程度の遺物であり、床面からの出土は稀であった。

所見 住居中央は地床とし壁際を掘り込み貼床とする例はあるが、中央部と壁際を地床としてその間を柱状に掘り込み貼床状にした例は上谷遺跡では少ない。本来は、前者のような小規模な住居があり、ロームを地床として拡張した竪穴住居跡かも知れないが、その把握は調査ではできなかった。

表37 A110遺物観察表

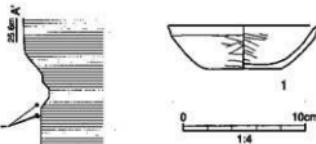
(単位cm)

No	種別 器形	法 蓋 成 形・調 整等の特 徴	色 焼 成	胎 土	遺存	備 考
1	土器 杯	(12.4)×(5.00)×3.60 ロクロ成形 外体部—ヘラケズリ後口縁部ナダ 内体部—ヘラミガキ? 底部—静止ヘラケズリ 欠損のため切り離し不明	暗褐色	白色多 雲母 石英	1/5	

A111

検出地区 L7-81-3g、L7-91-1gにて検出した。

遺構 長軸2.88m×短軸2.85m×壁高0.33m、主軸方位はN-19°-Wを示す。平面形はやや台形状の隅丸方形である。床はハードロームの地床であり、竪前から出入口の住居中央部に硬化面が残されていた。P3が主柱穴と捉えられ、P2は出入口施設のピットであった。P1は柱穴としては浅く、用途不明である。周溝は南東コーナーでは途切れるが、他は竪袖下まで巡っている。竪は右袖前に焼土が堆積しており、火床から搔きだしたと想定されるものであった。竪ピットの底面はやや凹凸があり、火床は若干焼けた痕跡が認められるものであった。右袖脇から壁際にかけて床面が少し高くなっていた。



A110
検出地区 K7-89-2g、
K7-90-1・3gで検出。

遺構 長軸4.15m×短軸3.53m×壁高0.22m、主軸方位は、N-47°-Wを示す。平面形は隅丸方形である。住居中央と壁際はハードロームの地床であったが、その間に柱状にロームと暗褐色土が混合した貼床を認めた。主柱穴は

- 1層 暗褐色土
- 2層 暗褐色土
- 3層 暗褐色土
- 4層 暗褐色土
- 5層 暗褐色土

0 1:80 2m

床面には、住居廃絶時における不用材等の焼却が認められ、炭化粒混合の焼土が検出された。しかし焼土は純層ではなく、暗褐色土と混合したものであった。覆土は黒色土や褐色土の複雑な堆積を示しているが、住居廃絶時の不用材焼却の消火土と人為的な投入による埋戻しであった。

遺物 堪穴住居跡としては少なく、ほとんどが焼土より上層の出土であった。1は置かれた状態で、11は横倒しの状態で、それぞれ床面から出土している。6は竈袖の内側から出土しており、直下に炭化物が認められている。

所見 本住居跡のように人為的な土砂投入による埋戻しでも、このように複雑な堆積をする例は上谷遺跡でも少ないものである。他の瞬時における埋戻し住居の覆土は、覆土が色調的にも、包含物においても極めて分層にくかったのに対して、本住居跡は色調において分層でき乱雑な埋戻しを想定できるものとなっている。おもに西壁方向からの投入を窺わせるが、さまざまな色調の土砂が投入されており慎重に埋戻したとは考えられないものであった。本住居跡に伴う遺物として、1・6・11を捉えたが、このような覆土堆積からみると、本住居に伴うものか判断が揺れるものである。

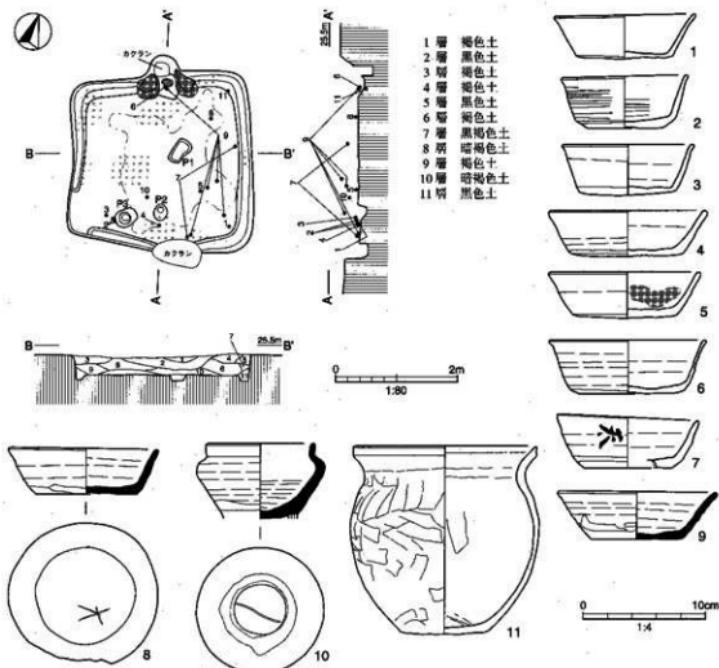


図208 A111

表38 A111遺物觀察表

(単位cm)

No	種別 器形	法量 口径×底径×厚高 底形・調整等の特徴	色 調成	胎土	遺存	備考
1	土師器 坏	11.6×8.00×3.60 ロクロ成形 底部一回転ヘラ切り	黒褐色 ～黒褐色	白色・ 長石多 雲母	完形	
2	土師器 坏	10.4×6.20×4.30 ロクロ成形 外体部一密なヘラミガキ 内体部一密なヘラミガキ 底部一回転ヘラケズリ、四輪ヘラ切り 粗いミガキ	明褐色	雲母黑色 及白色	略完形	
3	土師器 坏	10.8×8.00×4.20 ロクロ成形 外体部下端一回転ヘラケズリ 底部一回転ヘラ切り→静止ヘラケズリ	硬	白色多 赤色	略完形	
4	土師器 坏	13.0×9.10×3.80 ロクロ成形 外体部下端一回転ヘラケズリ 底部一回転ヘラ切り→静止ヘラケズリ	硬	雲母 白色	略完形	
5	土師器 坏	12.5×8.50×3.80 ロクロ成形 底部一回転ヘラ切り	暗褐色 ～赤褐色	雲母 砂粒 白色	完形	体部内面スス有 灯明具？
6	土師器 坏	12.9×8.00×4.50 ロクロ成形 外体部下端一回転ヘラケズリ 底部一全面回転ヘラケズリ	硬	雲母 白色多	略完形	
7	土師器 坏	11.6×7.00×4.20 ロクロ成形 外体部下端一回転ヘラケズリ 底部一回転ヘラケズリ 切り離し不明	硬	雲母 白色	1/2	墨書 外体横位 「一太」
8	須恵器 坏	12.3×8.20×3.80 ロクロ成形 外体部下端一回転ヘラケズリ 底部一回転ヘラ切り→静止ヘラケズリ	硬	白色多 雲母	略完形	ヘラ書 外底 「大」
9	須恵器 坏	13.1×7.40×4.00 ロクロ成形 外体部下端一回転ヘラケズリ 底部一全面静止ヘラケズリ	硬	白色・ 長石多	略完形	
10	須恵器 高台付 小壺	8.90×—×(6.20) 台部径8.7 ロクロ成形 外面 下端一回転ヘラケズリ 底部一回転ヘラ切り 口縁外面へ高台部外側にかけて器面が削減している 高台部一ナデ	硬	雲母白 色多石 英長石	略完形	ヘラ書 外底 「」
11	土師器 小壺	15.0×7.00×15.6 頸部に輪積痕 外面 U縁一ヨコナデ 前部一タテヘラケズリ 中一下位一ヨコヘラ ケズリ 内面 ヘラナデ 底部一全面静止ヘラケズリ	黒～ 橙褐色 硬	長石多 雲母	完形	スス付着

A112

検出地区 K7-100-4g、L7-91-3gにて検出した。

遺構 長軸3.6m×短軸3.53m×壁高0.45m、主軸方位はN-56°-Wを示す。平面形は隅丸方形で、竪を再構築した堅穴住居跡である。床はハードロームと暗褐色土が混じった床であり、新竪KAから出入口にかけて硬化面を残している。竪は旧竪KBを壊してKAを構築するが、住居の拡張などは認められなかった。KBの損壊後、竪ピットを掘り込んで周溝を巡らすが、東コーナーにて途切れるだけで、KAの袖下まで巡っていた。KAに対応する柱穴はP1・2・5と考えられるが、いずれも浅いものであった。出入口施設に伴うピットはP3と捉えられた。KAは天井部は崩落していたが、袖と共に白色粘土でしっかりと構築されており、煙道の壁への掘り込みがやや深いものであった。火床及び煙道底面に強い赤化が認められた。KBの段階でも周溝は存在したと考えられるが、竪ピット内まで巡るかは明確にできなかつた。配置から柱穴は検出されず、出入口施設に伴うピットはP4であった。KBの竪ピットのハードロームの底面は凹凸があり、煙道の壁への掘り込みは弱かつた。火床や粘土の住居内の遺存はなく、竪ピット内に焼土層の堆積と、煙道部に天井部の粘土が、それぞれ一部が確認された。覆土は暗褐色土を主

体とした、自然堆積であった。

遺物 遺物の出土は多いが、覆土中層から上層が主体であった。しかし、本住居跡からは「延命長寿祈願」の墨書き土器が4点出土している。いずれも住居跡の南コーナーの壁際から、2・3は倒置で、4・5は正置で、床面より少し高かったが、それぞれが2枚重なって出土した。

所見 「延命長寿祈願」の土器は、「部姓+名前+目的+月(日)」がそれぞれ記されたものであり、「身召代」の文字は祈願の主体者をさしていると考えられるものである。また、2・3・5はその使用目的が済んだ後に、意識的に墨書きを淡くしている状態が覗えた。特に2・4は淡くした後に、「西」を他の部位などに書き込み、墨の濃淡がはっきりしたものである。本竪穴住居跡は他の住居に比べ特別な構造を持つものではないが、2枚ずつが重なって出土したことは、何らかの祭祀の場であった可能性もあると言えよう。

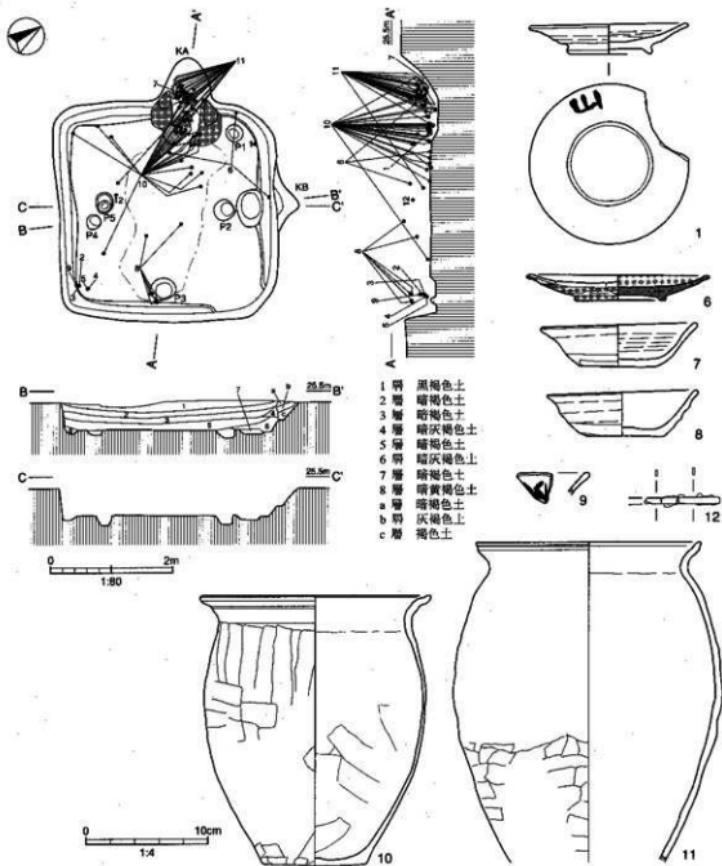
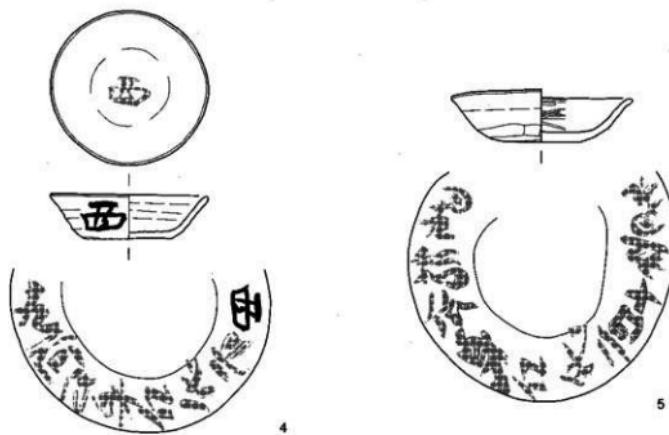
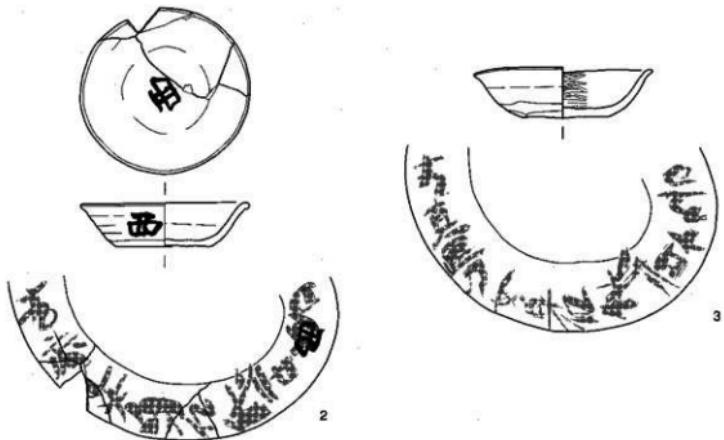


図209 A112



0 10cm
1:4

図210 A112 (2)

表39 A112遺物観察表

(単位cm)

No	種別 器形	法量 成形・調整等の特徴 口径×底径×器高	色焼 調成	胎土	遺存	備考
1	土師器 高台付 皿	13.0×-×2.50 台部径7.0 ロクロ成形 外高台部-ナデ 底部-回転ヘラ切り、回転ヘラケズリ・高台部-ナデ	褐 硬	雲母 赤色 黒色	略完形	墨書 外体正面 「山」
2	土師器 环	13.8×7.80×3.60 ロクロ成形 外体部下端-回転ヘラケズリ 底部-回転ヘラ切り後回転ヘラケズリ 墨書 外体「支マ麻口女身召代二月□西」	褐 硬	雲母 赤色 白色希	略完形	墨書 外底 「西」
3	土師器 坏	14.6×7.00×4.20 ロクロ成形 内体部-全体に密なヘラミガキ 底部-回転ヘラ切り 墨書 外体横位「支マ真里刀女身召代二月十五日」	褐 硬	雲母希 赤色	完形	
4	土師器 环	12.8×7.00×3.60 ロクロ成形 外体部下端-回転ヘラケズリ 底部-回転ヘラケズリ 墨書 外体「支マ阿□口身召代二月」「西」	褐 硬	雲母 黑色 白色	完形	墨書 内底 「西」
5	土師器 环	14.3×6.20×4.00 ロクロ成形 外体部下端-回転ヘラケズリ 内体部-粗いヘラミガキ 底部-静止ヘラ切り後静止ヘラケズリ 墨書 外体横位「支マ福依身召代二月十五日」	褐 硬	雲母希 赤色	完形	
6	灰輪 高台付 皿	15.0×-×2.10×7.40 ロクロ成形 底部-全面回転ヘラケズリ 高台部-ナデ	灰 硬	石英 黑色	1/3	釉 内面全て 外面の一部
7	土師器 环	12.9×6.00×3.50 ロクロ成形 外体部下端-回転ヘラケズリ 底部-全面回転ヘラケズリ	暗褐色～ 暗赤褐色	包含物 多し	略完形	雲母石英紗白色 長石多
8	土師器 环	12.3×6.20×3.60 ロクロ成形 外体部下端-回転ヘラケズリ 底部-回転系切り-回転ヘラケズリ	暗赤褐色 硬	雲母 石英	略完形	
9	土師器 坏	-×-×- ロクロ成形	-	-	口縁片	墨書 外体 「口」
10	土師器 甕	19.0×8.40×22.3 最大径16.2 輪積 外函 口縁部-ヨコナデ 脚部-ヘラケズリ 内面 ヘラナデ	暗褐色 青	砂粒多	略完形	内外面スス付着
11	土師器 甕	(18.4)×-×(25.7) 最大径(22.0) 輪積 外面 口縁部-ヨコナデ 脚上半-ナデ 脚下半-ヘラケズリ 内面 ヨコナデ	暗褐色 青	粗砂粒	口縁 脚部	
12	鉄器 鑑?	(6.00)×0.50×厚み0.15 2.4g 0.55×厚み0.15	-	-	基片	

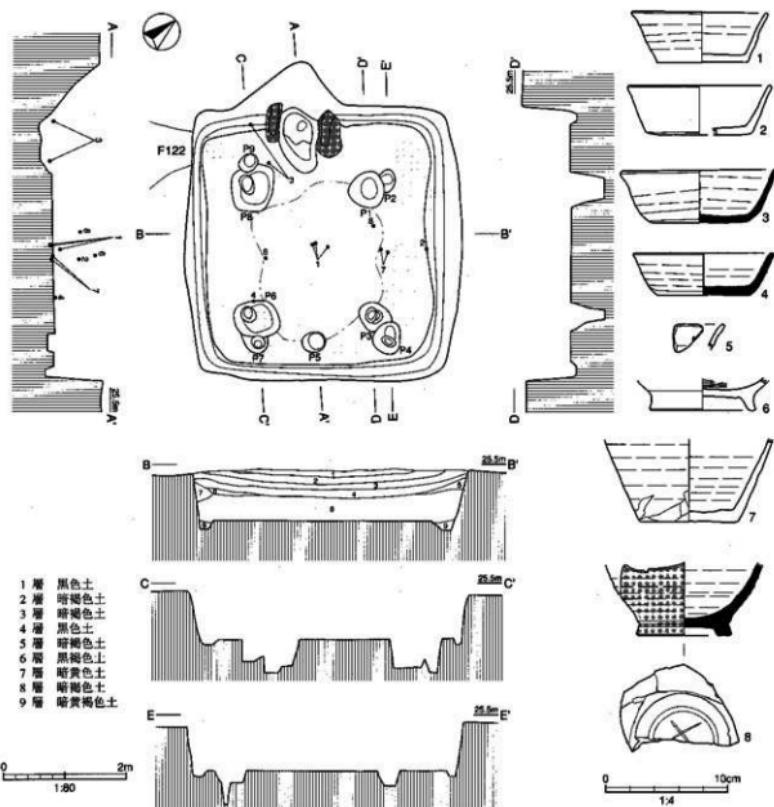


図211 A113

A113

検出地区 K7-99-4g, K7-100-3g, K8-9-2gにて検出した。

遺構 長軸4.50m×短軸4.45m×壁高0.79m、主軸方位はN-50°-Wを示す。隅丸方形の住居である。柱は配置換えが行われ、覆土から新柱穴P 1・3・6・8は立ち腐れ、旧柱穴P 2・4・7・9は掘り返しと捉えた。竈火床は明瞭には認められないが、袖の内壁は赤化している。右袖脇に床から5cm程、壁と床に粘土が貼り付けられて平坦にされた高まりを検出した。覆土は中層までが埋戻しである。

遺物 3は竈の左前にてやや傾いた正置で床面より、7は底部を床面に置いて出土している。

所見 壁際の床面に覆土と混合した焼土が確認され、住居廃絶後に不用材の焼却を行い、埋戻しを行ったと捉えられた。消火層も認められるが住居の深さから、全てが消火層と捉えにくいものである。

表40 A113遺物観察表

(単位cm)

No	種別 器形	法量 成形・調整等の特徴	色 焼	調成	胎 土	遺存	備考
1	土器 壺	(11.2)×7.50×4.20 ロクロ成形 底部一全面回転ヘラケズリ	暗褐色 ～明褐色	硬	雲母多 白色 石英	略完形	
2	土器 壺	(11.8)×(8.80)×4.10 ロクロ成形 底部一回転ヘラ切り一回転ヘラケズリ	灰褐色 ～橙	白色多 雲母 砂粒	1/3		
3	須恵器 壺	12.1×7.80×4.40 ロクロ成形 外体部下端一回転ヘラケズリ 底部一全面回転ヘラケズリ	硬	白色多 雲母 石英	略完形		
4	須恵器 壺	(11.6)×7.40×3.50 ロクロ成形 外体部下端一回転ヘラケズリ 底部一回転系切り一回転ヘラケズリ	明灰 硬	雲母 白色	1/3		
5	土器 壺	-×-×- ロクロ成形	-	-	口縁 部片	墨書 外体 「□」	
6	土器 高台付 壺	-×-(2.70) 台部径(8.70) ロクロ成形 内体部一密なラミガキ 底部一回転系切り 高台部一ナデ	橙褐色 ～赤褐色 硬	雲母 白色	1/4 底部		
7	土器 小型壺	-×8.00×(6.80) ロクロ(左回) 外面 ヘラケズリ	明褐色 硬	砂粒多	底部	静止ヘラ切り?	
8	須恵器 長頸壺	-×-(6.00) 台部径7.80 ロクロ成形 底部一静止系切り 高台部一ナデ	灰 硬	白色 褐色	1/3 肩部～ 底部	ヘラ書 外底 「×」 一部自然輪	

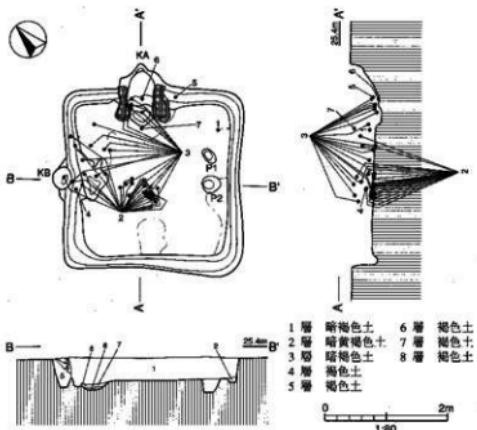


図212 A114

A114

検出地区 K8-9-1・4gにて検出した。

造構 長軸2.91m×短軸2.79m×壁高0.36m、主軸方位はN-42°-Eを示す。平面形は隅丸方形に近い。床は竈前から出入口に、硬化面を残している。壁際は軟弱ではないが、やや柔らかい床である。柱穴は検出できず、新竈KAの出入口ピットも検出できなかった。旧竈KBに対する、出入口施設のピットはP2である。KBを壊してKAを再構築しており、火床は赤化していないかった。また、袖の内壁も少量の焼土が見える程度であった。KBの煙道の壁への掘り込みは浅く、粘土も少し遺存する程度に壊され



図213 A114 (2)

所見 本住居跡は、住居廃絶時に一気に暗褐色土を投入して埋戻した竪穴住居跡である。この時、KAも壊しており、床面に散在する粘土ブロックはこの時のものと捉えた。しかし、床面にこびりつくような状態になるには、土砂の投入だけとは考えられず、投入土砂の踏み固めが行われたことも想定できるものであった。また、掲載した遺物のうち、土器の接合片の分布が広がりすぎ、本住居に伴うというより、投げ込んだような状態であることを付け加えておきたい。

表41 A114遺物観察表

(単位cm)

No	種別 器形	法量 成形・調整等の特徴	色焼 調成	胎土	遺存	備考
1	土師器 环	12.4×7.70×4.20 ロクロ成形 外面 全面手持ヘラケズリ 内面 粗いハミガキ	褐	赤色・ 白色少	完形	墨書 底部外面 「田」
2	須恵器 甌	20.7×-(25.2) 條横 外面 口縁～頸部-ヨコナデ 口縁～口 唇一ハケでヨコナデ 脣部-タタキ 頸部-指押痕 内面 口縁-肩部ヨコナデ 脣部-ヘラケズリ 指頭圧痕有 口縁-外反 肩部-継ぐや 器底-タタキメ後残くナデ このためタタキメが浅くなる タタキメが一部消失している部分あり	灰 硬	砂粒多 密	2/3	
3	須恵器 瓶	35.4×16.0×29.4 縦發 口縁-ヨコナデ 脣部-タタキ 下端-ヘ ラケズリ 内面 口縁-ヨコナデ 脣部-ヘラケズリ 指頭圧痕有 底部-中央の円形の透し孔をはさんで対称に4個の木の葉形の透し孔	灰 硬	砂粒多 密	1/2	
4	石器 砾石	2.10×2.20×1.30 4.8g 半丸。非常に薄手かつ小形 両面ともよく研磨され平滑である 砾石? (二底面)	-	-	片	母石 磨灰岩
5	鐵器 刀子	(3.40)×1.40×0.25 4.8g	-	-	片	
6	銅製品 遙方	2.80×2.40×0.70 10.4g	-	-	完形	青銅 帯金具
7	石 蛭石	2.30×1.90×1.40 4.8g	-	-	片	明瞭な加工は見 られず用途不明

A115

検出地区 J7-10-4g、J7-20-2g、K7-1-3g、K7-11-1gにわたって検出した。

遺構 長軸3.94m×短軸3.92m×壁高0.56m、主軸方位はN-1°-Eを示す。平面形は隅丸正方形と言え、竈を再構築した住居跡である。床は住居中央部がやや凹むが、全体的に平坦であり、竈前から出入口部は良好な硬化面を残している。KAは左袖のみ遺存している。竈前部は竈ピットを掘り込んだ後に、貼床としている。火床は底面中央に確認されたが、小さな範囲であった。煙道部中位には、テラス状の平坦面が残されていた。KBも煙道部にテラス状に平坦部が一部造られていた。竈ピットは検出できず、床面との段差がほとんどない火床である。火床はKA構築の際にKBの竈ピットを掘り込み、周溝が巡らされたため半分程度残るだけであった。袖等の粘土は確認できず、KA構築の際に壊されたものである。また、本来あった竈右袖下あたりで、周溝が二重となっている。周溝間には狭いが平坦面があり、壁際の周溝がKBに伴うものであると捉えた。柱穴はKBではP 3・14・10・6、出入口施設のピットをP 9、KAはP 11・6・1・13、出入口施設のピットはP 4と捉えたが、柱穴はいずれも引き抜かれたものである。周溝は竈の再構築の際に、KBの左袖から一部掘り直され全周するものである。KBにおいては竈袖下から、住居を全周していたと捉えられた。住居中央に、炉跡状の坑底の判然としない浅い凹み状の火床が検出された。火床は赤化はしていない。覆土は、若干の自然堆積後、覆土上層までの暗褐色土の人为的な投入であり、その後は、黒褐色土を主体とした自然堆積であった。

遺物 出土遺物は多かったが、ほとんどが人為堆積層中であり、床面からの出土は少ない。墨書き土器が多く、「得」と記されたものが多い。また、「万」も出土している。

所見 若干の自然堆積後、人为的な暗褐色土の投入によりある程度まで埋戻された堅穴住居であった。床面には炭化材が横たわるように出土していたが、細片ばかりであった。不用材の焼却を行つたものと捉えた。また、KB右手の二重周溝は、KA構築時に堅穴住居の一部の拡張を示していると捉えた。

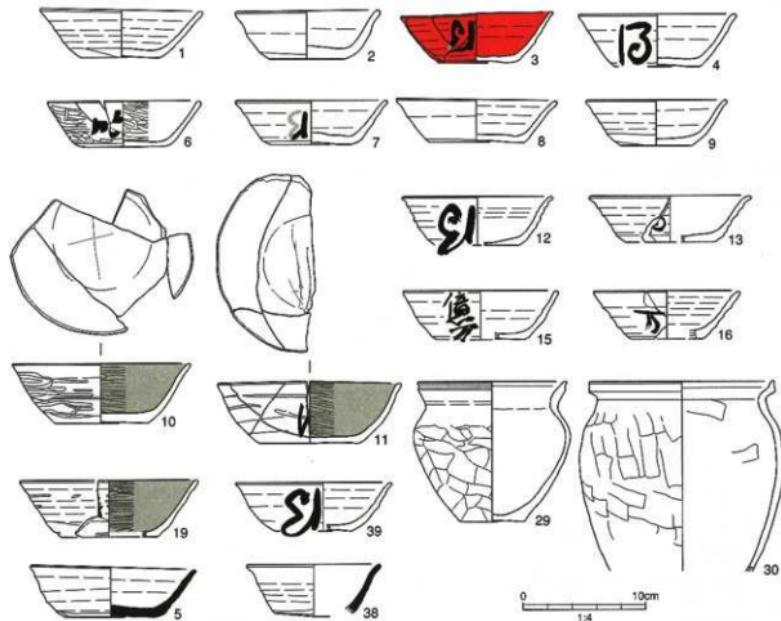
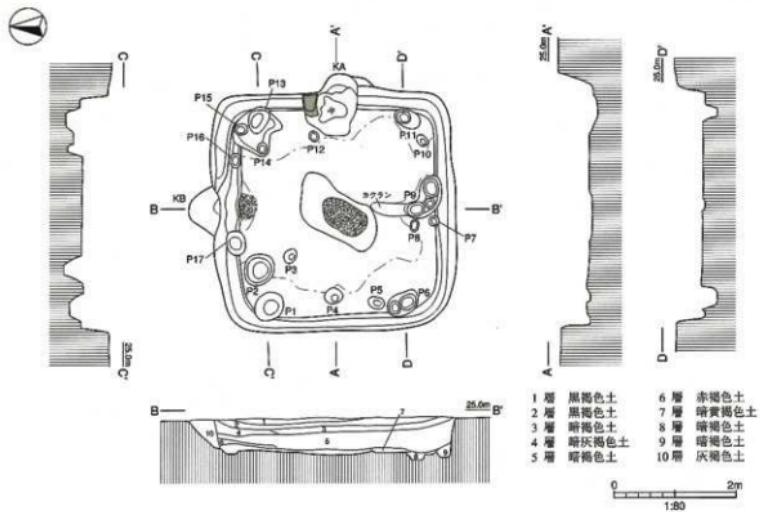


図214 A115

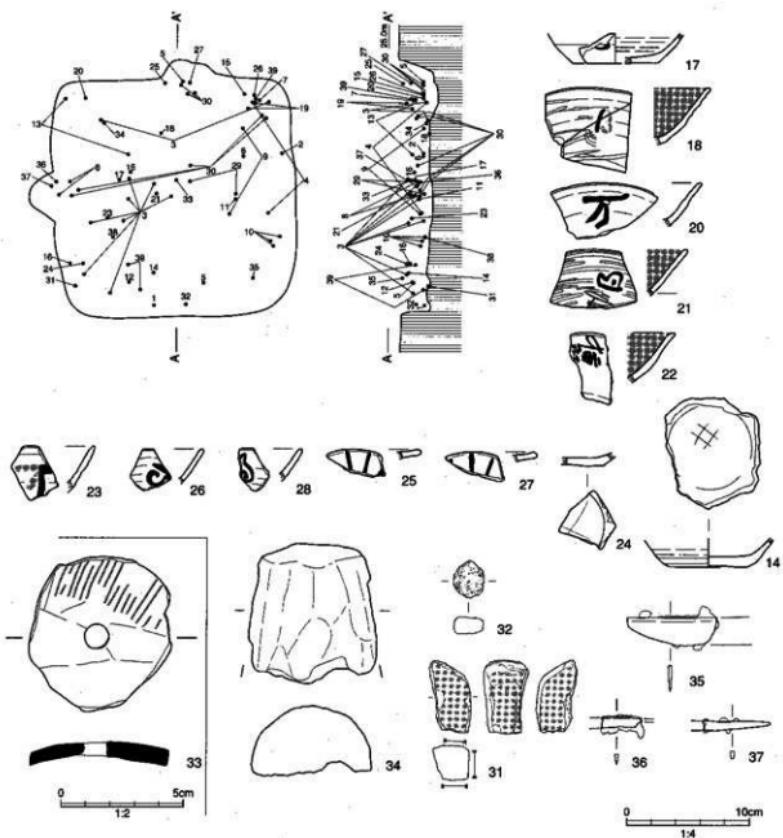


図215 A115 (2)

表42 A115遺物観察表

(単位cm)

No	種別 器形	法量 成形・調整等の特徴	色 調 燒 或	胎 土	遺存	備考
1	土師器 壺	13.2×6.60×3.90 ロクロ成形 外体部下端→ヘラケズリ 底部→回転糸切り、回転ヘラケズリ	暗褐 硬	雲母 白色 砂粒	完形	
2	土師器 壺	11.9×6.20×4.00 ロクロ成形 外体部下端→ヘラケズリ 底部→回転糸切り、回転ヘラケズリ	暗赤褐 硬	雲母多 長石	略完形 スス付着 灯明具ではない と思われる	
3	土師器 壺	12.5×6.40×4.10 ロクロ成形 外体部下端→ヘラケズリ 底部→回転糸切り、回転ヘラケズリ	赤褐 橙褐～ 赤褐色	雲母 白色	略完形 墨書	外体側位 「得」 赤影
4	土師器 壺	13.0×7.00×4.30 ロクロ成形 外体部下端→ヘラケズリ 底部→回転糸切り→回転ヘラケズリ	明褐 硬	雲母多	1/2	墨書 外体正位 「疊」

No	種別 器形	法量 底径×器高 成形・調整等の特徴	色 焼 調成	胎土	遺存	備考
5	須恵器 壺	13.5×7.30×4.10 ロクロ成形 外体部下端-静止ヘラケズリ 底部-全面静止ヘラケズリ	黒褐 硬	長石・ 白色多	1/2	2次火熱有り 色調劣化する
6	土師器 壺	12.4×7.00×3.80 ロクロ成形 外体部下端-回転ヘラケズリ 体部-ヘラミガキ 内体部-全体に密なヘラミガキ 底部-回転糸切り後回転ヘラケズリ	淡褐 黒褐 硬	雲母 長石 白色	2/3	墨書 外体正位 「四」
7	土師器 壺	(12.4)×6.60×3.60 ロクロ成形 外体部下端-回転ヘラケズリ 底部-回転糸切り→回転ヘラケズリ	暗褐 暗褐 暗褐硬	雲母 白色	1/2	墨書 外体側位 「四」
8	土師器 壺	13.3×7.70×3.50 ロクロ成形 外体部下端-回転ヘラケズリ 底部-回転糸切り→回転ヘラケズリ	褐褐 暗褐 暗褐硬	雲母多 石英 長石	1/2	
9	土師器 壺	(11.6)×5.90×3.80 ロクロ成形 外体部下端-回転ヘラケズリ 底部-回転ヘラケズリ	褐褐 硬	雲母 白色	1/3	
10	土師器 壺	(14.5)×7.50×4.80 ロクロ成形 外体部下端-回転ヘラケズリ 粗いミガキ 内体部-全体に密なヘラミガキ 底部-回転糸切り、回転ヘラケズリ 粗いヘラミガキ	褐 硬	白色	1/2	線刻 内底 「×」 内黒
11	土師器 壺	(15.0)×(8.30)×5.00 ロクロ成形 黒色研磨 外体部下端-回転ヘラケズリ ヘラミガキ 内体部-全体にヘラミガキ 内底部-縦線部-回転糸切り、回転ヘラケズリ	褐 普	雲母赤 色黒色 白色	1/2	墨書 外体「應」 線刻 内底「△」 内黒
12	土師器 壺	(12.4)×(7.00)×4.00 ロクロ成形 外体部下端-回転ヘラケズリ 底部-回転糸切り、回転ヘラケズリ	褐 硬	雲母多 長石	1/2	墨書 外体側位 「四」
13	土師器 壺	(13.4)×(7.80)×3.80 ロクロ成形 外体部下端-回転ヘラケズリ 底部-回転糸切り、回転ヘラケズリ	褐 褐 硬	白色 黑色	1/3	墨書 外体正位 「四」
14	土師器 壺	-×6.30×(2.40) ロクロ成形 外体部下端-回転ヘラケズリ 底部-回転糸切り	褐 硬	-	底部	線刻 内底 「井」
15	土師器 壺	(12.8)×(7.20)×4.00 ロクロ成形 外体部下端-回転ヘラケズリ 底部-回転糸切り→回転ヘラケズリ	褐 硬	雲母 白色 赤色	1/3	墨書 外体正位 「億万」
16	土師器 壺	(12.0)×(6.00)×4.00 ロクロ成形 外体部下端-回転ヘラケズリ 底部-回転ヘラケズリ 底部欠損のため切り離し不明	褐	雲母 白色	1/5	墨書 外体正位 「万」
17	土師器 壺	-×(7.00)×(2.50) ロクロ成形 外体部下端-ヘラケズリ 底部-回転ヘラケズリ 欠損のため切り離し不明	褐 硬	雲母多 長石	1/4 底部	墨書 外体 「口」
18	土師器 壺	-×-×- ロクロ成形 外体部下半-回転ヘラミガキ 体部全体-粗いヘラミガキ 内体部-全体に密なヘラミガキ	-	-	口縁 部片	墨書 外体正位 「得」 内黒
19	土師器 壺	(14.6)×(7.60)×4.70 ロクロ成形 外体部下端-回転ヘラケズリ→粗いヘラミガキ 内体部-密なヘラミガキ	褐褐 黑 硬	雲母多	1/6	墨書 外体 「□」 内黒
20	土師器 壺	-×-×- ロクロ成形	-	-	口縁片	墨書 外体正位 「万」
21	土師器 壺	-×-×- ロクロ成形 外体部下端-回転ヘラケズリ 粗いヘラミガキ 内体部-密なヘラミガキ	-	-	口縁片	墨書 外体側位 「得」 内黒

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色 焼成	胎土	遺存	備考
22	土師器 壺	-×-×- ロクロ成形	-	-	口縁～ 体部 片	墨書 外体横位 「□輪■」 内黒
23	土師器 壺	-×-×- ロクロ成形	-	-	口縁片	墨書 外体正位 「□」
24	土師器 壺	-×-×- ロクロ成形 底部一回転条切り、回転ヘラケズリ	-	-	底部片	雜刻 外底 「図」
25	土師器 皿	-×-×- ロクロ成形 No27と同一個体の可能性有(墨書き類似)	-	-	口縁片	墨書 外体 「□」
26	土師器 壺	-×-×- ロクロ成形	-	-	口縁片	墨書 外体横位 「図」
27	土師器 皿	-×-×- ロクロ成形 No25と同一個体の可能性有	-	-	口縁片	墨書 外体 「□」
28	土師器 壺	-×-×- ロクロ成形	-	-	口縁片	墨書 外体正位 「得」
29	土師器 小型甕	12.4×5.60×11.5 外面 口縁～頸部-ヨコナデ 脇部-ヨコヘラケズリ 内面 ヨコナデ 底部-木葉痕	暗褐色 普	砂粒	略完形	
30	土師器 小筒甕	15.6×-×(15.8) 外面 口縁～頸部-ヨコナデ 脇部上半-ヘラケズリ後ヘラナデ 下半-ヨコヘラケズリ 内面 ヨコナデ	暗褐色 普	雲母 砂粒	口縁～ 脇部	
31	石器 砥石	(6.10)×(2.90)×2.90 3方向使用	-	-	片	
32	石器 軽石	3.10×2.50×厚さ1.40 2.8g	-	-		一部のみ残存 用途不明
33	土製品 紡錘車	長径6.30×短径5.70×孔径1.0 28.5g 外面 平行タタキ後ヘラケズリ 内面 ナデ	暗褐色 硬	雲母・ 長石多 石英	完形	須恵器要部片 転用
34	土製品 支脚	上部径8.00×(5.50) 最大長(11.5) 450g	褐 硬	砂粒	1/3	
35	鉄器 鎌?	(7.30)×2.10×厚み0.30 15.2g	-	-	片	
36	鉄器 刀子	(3.20)×0.80×厚み0.30 4.4g	-	-	片	
37	鉄器 刀子? 釘?	(5.50)×0.50×厚み0.30 4.4g	-	-	片	
38	須恵器 壺	11.0×(6.40)×4.30 ロクロ成形 外体部下端一回転ヘラケズリ 内面口唇部-のぞき 全面付着物有り 底部一回転ヘラケズリ	灰 硬	雲母	1/3	内面全面 スス付着
39	土師器 壺	(12.8)×(6.20)×4.00 ロクロ成形 外体部下端一回転ヘラケズリ 底部一回転ヘラケズリ 全面ヘラケズリのため切り離し不明	硬	雲母多 長石少	1/2	墨書 外体倒位 「得」

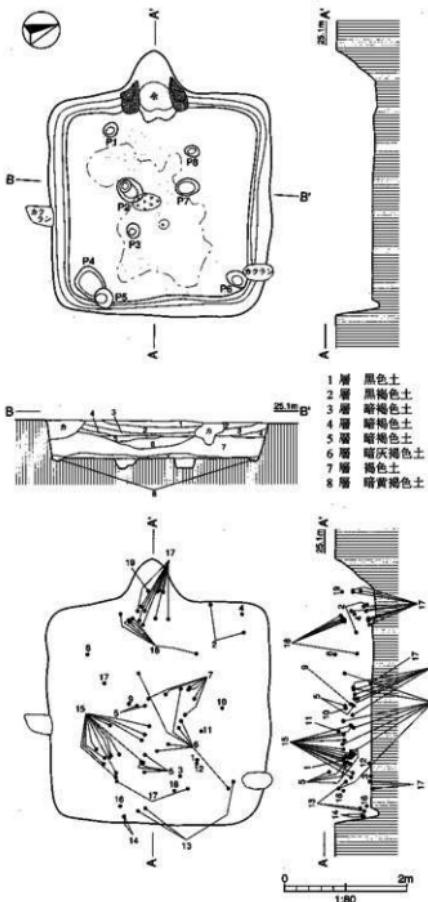


図216 A116

A116

検出地区 K7-31-2・4g、K7-32-1・3g
にわたって検出した。

遺構 長軸3.92m×短軸3.85m×壁高0.57m、主軸方位はN-70°-Wを示す。平面形は隅丸方形である。床は全体的にハードロームの土床で、壁際はソフトロームとの混合した床が見られる。竈前から出入口にかけて良好な硬化面を残している。柱穴P1・5・6と考えられるが、明瞭にはできなかった。P2・7は主柱穴とも考えられたが、周溝は竈袖下まで全周する。竈は竈ビットに小範囲の火床が検出された。煙道は急に立ち上っている。薄くにじむような焼土が、床面か床面からやや高い位置で検出し、また、併せて細い炭化材が床面に横たわる状態で出土している。また、壁際では壁に立てかかるように認められた。覆土は褐色土の人の為的な投入によって埋戻されていた。その後、再度、掘り込まれ、貝ブロックの投入が行われていた。

遺物 覆土中層～上層の出土が多く、本住居跡に伴う遺物は少なかった。2は人名と紀年銘の墨書き土器である。「物部真依□」「延暦十年十一月□」と部姓+名前、紀年銘を記したものであり、「延命長寿祈願」の土器と捉えられた。出土は竈右側であり、床より高く、本住居跡には直接伴わないものと考えている。

貝は、灌水性のハマグリを主体として、廃棄されたものである。いずれも浅海砂底に生息するものであった。

所見 住居廃絶後に、不用材の焼却と消火、そして埋戻しによって平坦な面を造ろうとしているかのように、人の為的な埋戻しが行われた堅穴住居である。また、「延命長寿」祈願の墨書き土器が出土しているが、部姓が「物部」と記された点で、八千代市城出土のこの種の土器と異なっていた。市内ではこの種の土器にはいずれも「丈部」と記されており、初めての部姓が記された土器である。

一方、この土器類の器形はやや古いタイプとして扱われており、延暦10年（西暦791年）までこの器形が下るのか疑問が残るものである。ここでは8世紀末にはこの器形の製作量は少くなりながらも、なお、残ってきたものとして捉えることとした。

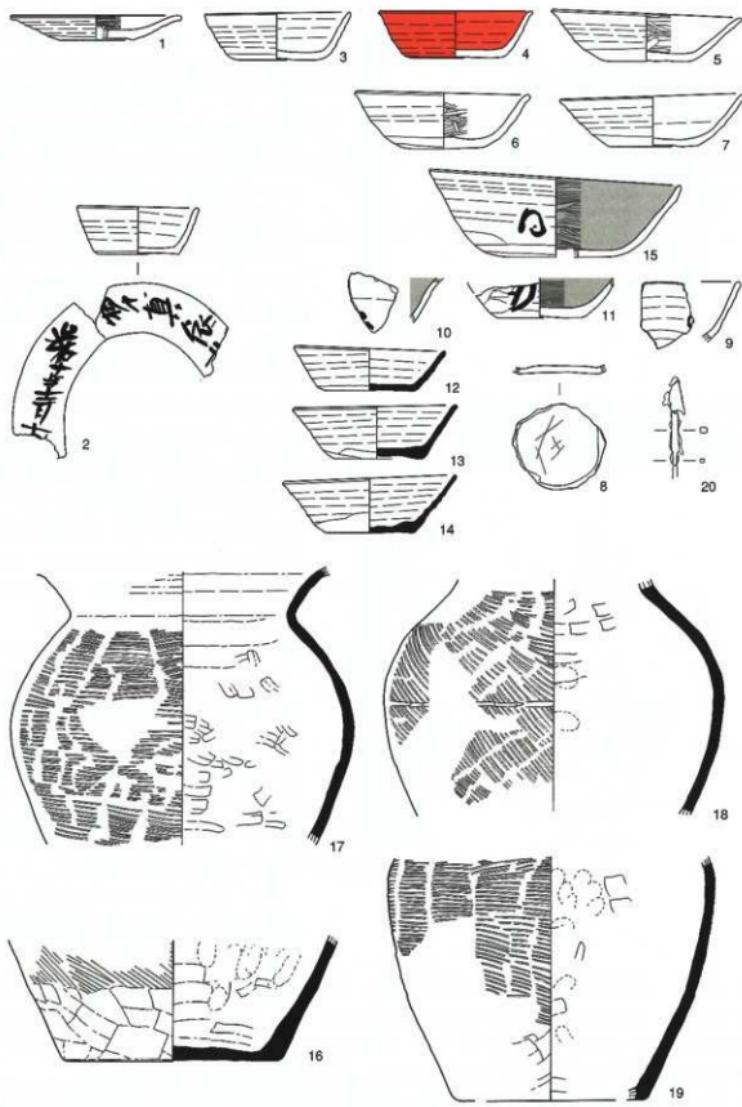


図217 A116 (2)

0 1:4 10cm

表43 A116遺物観察表

(単位cm)

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 底形・調整等の特徴	色 焼	胎土	遺存	備考
1	土師器 皿	(14.0)×(6.00)×2.00 ロクロ成形 外体部下端一回転ヘラケズリ 内面一密なヘラミガキ 底部一回転ヘラケズリ	褐～暗褐色 硬	雲母	1/5	
2	土師器 壺	10.0×6.70×3.90 ロクロ成形 外体部下端一部ヘラケズリ 墨書 外体横位 「物部真依」 「延暦十年十一月七」	褐	赤色希	略完形	
3	土師器 壺	11.9×6.80×3.90 ロクロ成形 底部一回転糸切り	黒褐色 暗褐色 硬	雲母 石英 長石多	略完形	
4	土師器 壺	12.6×7.80×3.90 ロクロ成形 外体部下端一回転ヘラケズリ 底部一回転糸切り一回転ヘラケズリ	硬	雲母 石英 長石	1/2	赤彩
5	土師器 壺	(15.6)×7.20×4.00 ロクロ成形 外体部下端一回転ヘラケズリ 底部一全面回転ヘラケズリ	褐～褐 硬	雲母 長石	1/2	
6	土師器 壺	(14.4)×6.40×4.70 ロクロ成形 外体部下端一ヘラケズリ 内面一密なヘラミガキ 底部一回転ヘラ切り一回転ヘラケズリ	暗褐色 暗褐色 硬	雲母 長石	1/2	
7	土師器 壺	15.2×7.30×4.10 ロクロ成形 外体部下端一回転ヘラケズリ 底部一回転糸切り一回転ヘラケズリ	暗褐色 暗褐色 硬	雲母多 白色	1/2	
8	土師器 壺	—×—×— ロクロ成形 内底一粗いヘラミガキ 底部一回転糸切り一静止ヘラケズリ	—	—	底部片	線刻 外底 「在」
9	土師器 壺	—×—×— ロクロ成形 外体部下端一回転ヘラケズリ 底部一回転ヘラケズリ	—	—	口縁片	墨書 外体 「口」
10	土師器 壺	—×—×— ロクロ成形 外体部下端一回転ヘラケズリ 粗いヘラミガキ 内面一粗いヘラミガキ	—	—	体部片	墨書 外体 内黒
11	土師器 壺	—×7.00×(3.30) ロクロ成形 黒色研磨 外体部下端一回転ヘラケズリ 内体部一粗いヘラミガキ(光沢はない)	褐 硬	雲母赤 色黑色 白色		墨書 外体 「墨」 内黒
12	須恵器 壺	12.5×7.40×3.50 ロクロ成形 外体部下端一ヘラケズリ 底部一回転ヘラ切り一回転ヘラケズリ	灰 硬	長石	略完形	
13	須恵器 壺	13.4×7.20×4.30 ロクロ成形 外体部一ヘラケズリ 底部一回転ヘラ切り一静止ヘラケズリ	灰 硬	長石多 砂粒	略完形	
14	須恵器 壺	14.1×7.20×4.50 ロクロ成形 外体部下端一ヘラケズリ 底部一全面静止ヘラケズリ	灰 硬	長石多 雲母石 英砂粒	略完形	
15	土師器 鉢?	20.6×9.80×7.30 ロクロ成形 黑色研磨 外体部下端一回転ヘラケズリ 粗いヘラミガキ 内体部一密なヘラミ ガキ 底部一回転ヘラケズリ	暗褐色 硬	雲母 白色	略完形	墨書 外体正位 「押」 内黒
16	須恵器 壺	—×17.4×(10.0) 輪預 外面 タタキ一端ヨコヘラケズリ 内面 ヨコヘラケズリ 指頭痕有り	灰 硬	雲母 石英多	底部～ 胴部	
17	須恵器 壺	—×—×(22.4) 最大径(28.0) 輪預 外面 頸部一ヨコナデ 胸部一タタキ 内面 頸部一ヨコナデ 胸部一ヨコヘラケズリ 輪積痕有り	灰 普	小石多	1/4 口縁～ 胴部	

No	種別 器形	法量 成形・調整等の特徴	色焼	調成	胎土	遺存	備考
18	須恵器 甕	—×—×(19.5) 最大径28.0 輪積 外面 タタキ 創中央部にヨコナデ有り 内面 ヨコヘラケズリ 指頭痕有り 輪積痕有り	灰 軟		小石多	1/4 胴部	
19	須恵器 瓶	—×—×(20.1) 最大径基定26.6 輪積 外面 タタキ→下端ヨコヘラケズリ 内面 ヘラケズリ 指頭痕有り	普		砂粒多	1/2 胴部	
20	鉄器 鉄瓶	(2.80)×(1.30)×厚み— 7.2g (4.40)×0.50×厚み0.45 —×0.30×厚み0.30				略完形	

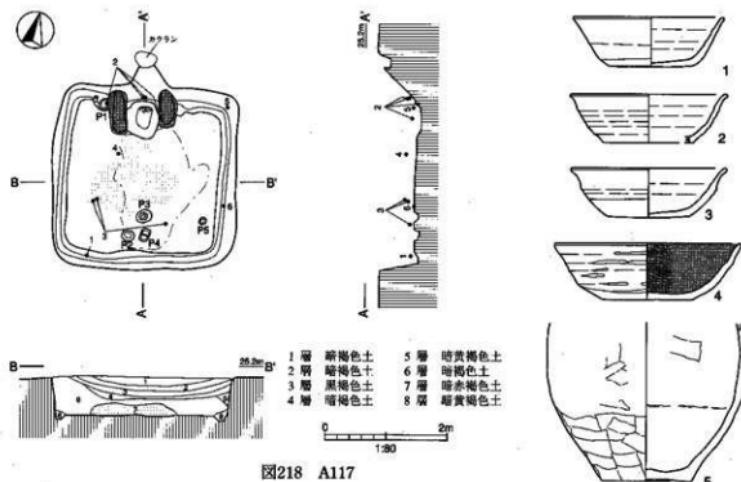


図218 A117

A117

検出地区 K7-13-2・4gにて検出された。

遺構 長軸3.00m×短軸2.98m×壁高0.62m、主軸方位はN-13°-Wを示す。平面形は隅丸方形である。床はハードロームの地床で、竈から出入口にかけて硬化面を残している。柱穴は検出されず、出入口ピットはP2・4の差し替えである。周溝は竈下まで巡り、周全する。竈の火床範囲は狭いが、袖の内壁は赤化し、使用期間の長さが窺えた。覆土は、暗褐色土の人為投入後、黒褐色土・暗褐色土の自然堆積である。

遺物 住居跡としては少なく、埋戻しと共に廃棄されたような出土が多かった。

所見 人為的な投入土内で火の使用が認められ、暗褐色土と混合した焼土層が検出されている。カヤの炭化物も認められた。

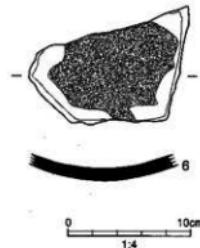


表44 A117遺物観察表

(単位cm)

No.	種別 器形	法量 成形・調整等の特徴	色 焼成	胎 土	遺存	備考
1	土師器 壺	12.5×7.00×4.00 ロクロ成形 外体部下端→回転ヘラケズリ 底部→回転糸切り→回転ヘラケズリ	暗褐色～ 橙褐色	雲母多	略完形	
2	土師器 壺	13.0×(7.40)×4.00 ロクロ成形 底部→回転ヘラケズリ	赤褐色 暗褐色～ 暗赤褐色	雲母多 石英 長石	1/2	
3	土師器 壺	(12.8)×6.80×4.10 ロクロ成形 外体部下端→回転ヘラケズリ 底部→回転糸切り→回転ヘラケズリ	橙褐色 暗褐色	褐色	1/3	
4	土師器 (大型) 壺	15.4×7.40×4.60 ロクロ成形 黒色研磨 外体部下端→回転ヘラケズリ 内体部→密なヘラミガキ 底部→回転ヘラケズリ調整	赤褐色	長石 雲母 黑色	1/2	内黒
5	土師器 小型壺	—×7.40×(13.2) 輪積 外面 ヘラナデ→下端ヨコヘラケズリ 内面 輪積痕有り 木葉痕	暗褐色	小石多	胸縦～ 底部	外面一筋スス 付着
6	土製品 転用鏡	外面 タタキ 内面 ナデ 墨痕有り	灰 軟	雲母 石英希	崩部片	須恵器壺胴部片 転用 断面にも墨痕有

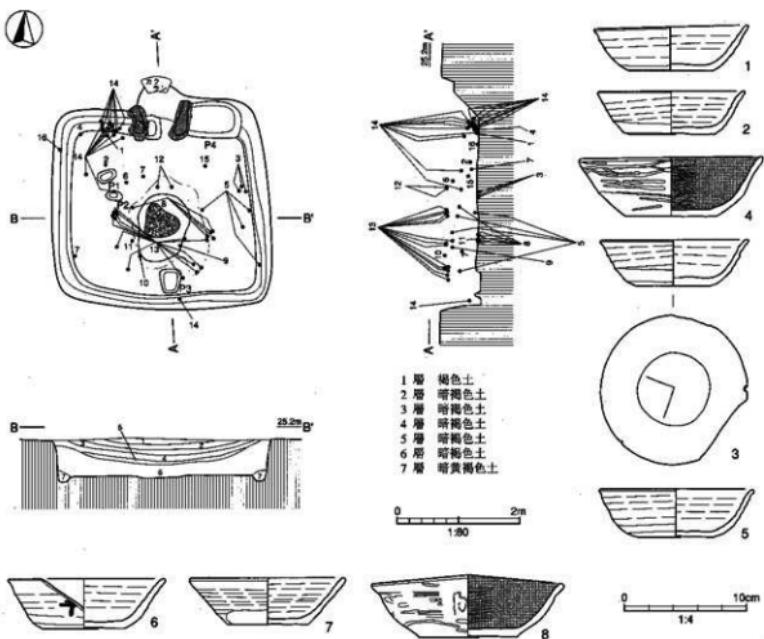


図219 A118

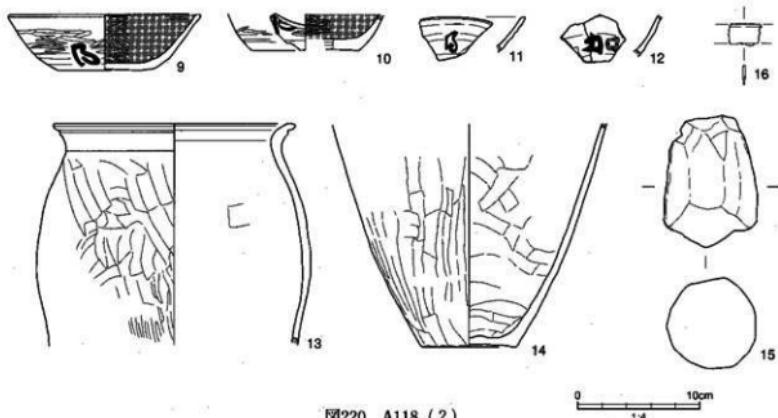


図220 A118 (2)

A118

検出地区 K7-13-4g、K7-14-3g、K7-23-2g、K7-24-1gにわたって検出した。

遺構 長軸3.51m×短軸3.32m×竪高0.56m、主輪方位はN-6°-Wを示す。平面形は隅丸方形である。中央部分がいくぶん凹む感じを与える床で、硬化面を残す床と軟弱な床がはっきりと分かれる住居跡である。主柱穴は検出されず、P 1は規模は小さいがかろうじて柱穴と判断されるものである。P 3は出入口施設のピットであった。P 4は竪右袖下から壁を掘り込んだものであるが、貯蔵穴とは判断できなかった。周溝は竪左袖下からほぼ一周するが、竪右側はP 4のために途切れるものである。竪のピットの底面は凹凸が激しく、火床は左袖下に検出された。竪前部は竪ピットを埋めた貼床であった。袖は壁際から焚口にむかって次第に傾斜をもって下る状態であった。また、竪周辺部から住居跡中央にかけて、住居跡中央の床面から、かなり強い火熱を被ったことが窺える赤化した床面が捉えられた。赤化部分では意識的に凹みを認めることはできるが、底面は捉えきれないほど不明瞭であった。覆土は埋戻しによる人為堆積後、暗褐色土を主体とした自然堆積である。

遺物 竪穴住居跡としては遺物の出土は少なく、住居跡中央付近の覆土中層～上層にかけてやまとまって出土しているが、覆土下層及び床面からの出土は少なかった。

所見 竪周辺から住居跡中央にかけての粘土の分布は、白色粘土粒子と暗褐色土が均一に混合したものであり、竪天井部の自然崩壊と捉えられるものであった。また、本住居跡も人為的に土砂を投入して埋戻したものであった。

表45 A118遺物觀察表

(単位cm)

No	種別 器形	法量 口徑×底径×器高 成形・調整等の特徴	色 焼	調成	胎土	遺存	備考
1	土師器 壺	12.6×6.60×3.60 ロクロ成形 外体部下端一回転ヘラケズリ 底部一回転糸切り、回転ヘラケズリ	橙褐色 ～暗褐色 ～橙褐色	雲母多	略完形		
2	土師器 壺	12.0×6.70×3.60 ロクロ成形 外体部下端一回転ヘラケズリ 底部一回転糸切り、回転ヘラケズリ	黒褐色 暗褐色 硬	雲母長石	完形		
3	土師器 壺	15.0×7.50×4.90 ロクロ成形 外体下半一回転ヘラケズリ後体部全体に粗いヘラミガキ 内部部一密なヘラミガキ 底部一回転糸切り、回転ヘラケズリ	黒褐色 硬	雲母・ 白色少	完形		
4	土師器 壺	12.3×6.00×3.70 ロクロ成形 外体部下端一回転ヘラケズリ 底部一回転糸切り一回転ヘラケズリ	橙褐色 暗褐色 硬	雲母	略完形	縦刻 底部外面 「L」	
5	土師器 壺	12.7×6.00×4.00 ロクロ成形 外体部下端一回転ヘラケズリ 底部一回転糸切り一回転ヘラケズリ	黒褐色 ～褐褐色 硬	雲母多 長石	略完形		
6	土師器 壺	12.4×6.60×4.10 ロクロ成形 外体下半一回転ヘラケズリ 底部一回転糸切り一回転ヘラケズリ	暗褐色 硬	雲母 白色多	1/2	墨書 外体正位 「田」	
7	土師器 壺	12.8×6.60×3.80 ロクロ成形 外体部下端一回転ヘラケズリ 底部一回転糸切り一回転ヘラケズリ	赤褐色 暗褐色 ～赤褐色	雲母多 長石少	1/2		
8	土師器 壺	15.7×8.10×4.50 ロクロ成形 底部一回転ヘラ切り一回転ヘラケズリ 半分内黒 外体赤色（約1/2火熱のため内黒が失われる）	淡褐色 黑色 昔	雲母 赤色 白色	1/2	縦刻 外体正位 「得」	
9	土師器 壺	(15.8)×7.80×4.60 ロクロ成形 黑色研磨 外体部下端一回転ヘラケズリ ヘラミガキ 内体部一密なヘラミガキ 底部一回転糸切り一回転ヘラケズリ	褐 昔	赤色	1/2	墨書 外体正位 「得」	
10	土師器 壺	—×(8.80)×(3.00) ロクロ成形 外体部下端一回転ヘラケズリ 粗いヘラミガキ 内体部一密なヘラミガキ 底部一回転糸切り一回転ヘラケズリ	暗褐色 黑色 硬	雲母多	1/3 底部	墨書 外体正位 「得」 内黒	
11	土師器 壺	—×—×— ロクロ成形 外体部下端一回転ヘラケズリ	—	—	口縁片	墨書 外体正位 「得」	
12	土師器 壺	—×—×— ロクロ成形 外体部下端一回転ヘラケズリ	明褐色	—	体部片	墨書 外体正位 「加」	
13	土師器 壺	20.0×—×(18.5) 最大径22.4 外面 口縁～頸部ニヨコナデ 脚部ニタテヘラケズリニタテヘラミガキ 内面 口縁部ニヨコナデ 脚部ニヘラケズリ	明褐色	砂粒多	1/4	「K」の字状	
14	土師器 壺	—×8.00×(18.4) 外面 縦位ヘラナデ 内面 ヘラナデ 底部一木葉痕	暗褐色 ～黑色 赤褐色 硬	雲母石 英長石 白色多	脚部～ 底部		
15	土製品 支脚	(5.30)×(4.60)×高さ(10.9) 4.45g	褐色	砂粒	1/2		
16	鐵器 刀子	(2.70)×1.60×厚み0.20 2.5g	—	—	片		

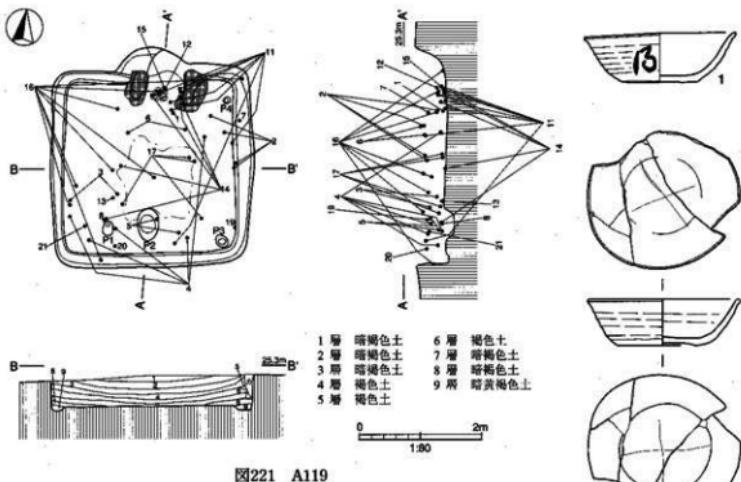


図221 A119

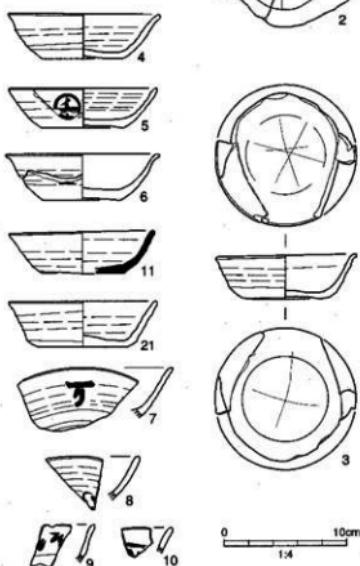
A119

検出地区 K7-25-2・4g、K7-26-1・3gにわたって検出した。

遺構 長軸3.31m×短軸3.24m×壁高0.47m、主軸方位はN-6°-Wを示す。平面形は隅丸方形である。床はハードロームを掘り込んだ地床で全体的に硬く、特に住居跡中央部に硬化面を残している。周溝は竈袖下から巡り、全周する。柱穴は、規模が小さいがピットの配置からP 1・3・4であり、P 2は出入口施設に伴うピットと捉えた。竈は竈ピットを検出することはできず、火床へと床面の差のないものとなっているが、火床下に掘り込みが認められた。火床は火熱をかなり被ったと思われ、強く赤化している。覆土は、暗褐色土を主体とした自然堆積であった。

遺物 遺物の出土はやや多いが、全体的には散在して出土していた。竈火床から口縁部が欠損した小型壺が伏せた状態で出土し、壺の中には焼土と灰が混じった土が詰まっていた。また、底部には高さ調節のためか土器片が4枚重ねてあった。竈の支脚として使用したと考えられた。

所見 自然堆積によって埋没した竪穴住居跡であるが、遺物の出土は覆土中層～上層に多く、接合遺物の接合範囲が広く散在したものであった。



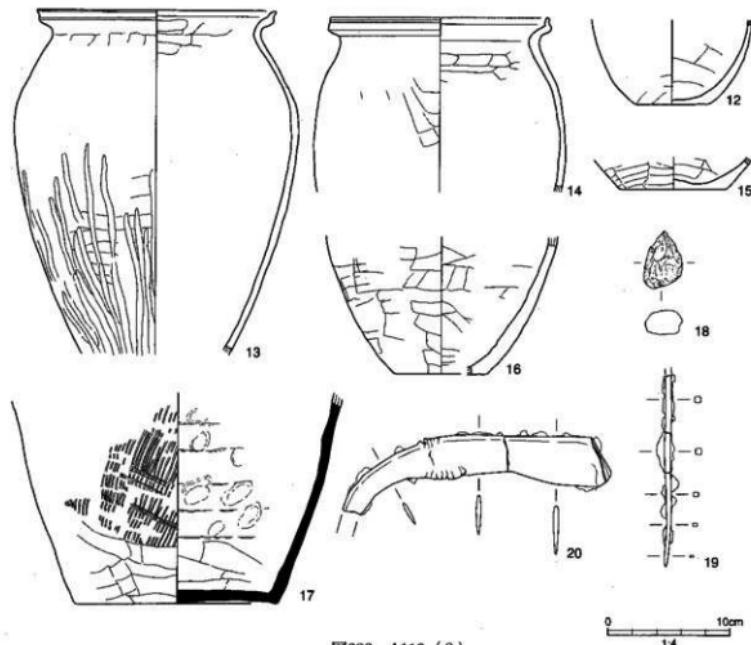


図222 A119 (2)

表46 A119遺物観察表

(単位:cm)

No	種別 器形	法量 成形・調整等の特徴	色 焼	調成	胎土	遺存	備考
1	土師器 坏	12.4×6.40×4.10 ロクロ成形 外体部下部→回転ヘラケズリ 底部→回転糸切り→回転ヘラケズリ	明褐 褐硬	雲母多 白色	光形	墨青	外体正位 「得」
2	土師器 坏	(12.4)×7.40×3.80 ロクロ成形 外体部下端→回転ヘラケズリ 底部→回転糸切り→回転ヘラケズリ	暗褐～ 橙褐 暗褐硬	赤色	略完形	縦刻 底部外面「×」 底部内面「+」	
3	土師器 坏	(11.5)×7.10×3.60 ロクロ成形 外体下半→回転ヘラケズリ 底部→回転糸切り→回転ヘラケズリ	褐 褐硬	雲母多	略完形	縦刻 底部外面「×」 底部内面「×」	
4	土師器 坏	(12.5)×6.80×3.80 ロクロ成形 外体下半→回転ヘラケズリ 底部→回転糸切り→回転ヘラケズリ	暗褐～ 橙褐	雲母 石英 長石	略完形		
5	土師器 坏	(12.2)×6.70×3.30 ロクロ成形 外体下半→回転ヘラケズリ 底部→回転糸切り→回転ヘラケズリ	褐 硬	雲母多 長石	1/2	墨青	外体正位
6	上部器 坏	(12.6)×6.40×3.80 ロクロ成形 外体下半→回転ヘラケズリ 底部→回転糸切り→回転ヘラケズリ	褐 暗褐 硬	雲母	1/3	墨青	外体 「□」

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色焼 調成	胎土	遺存	備考
7	土師器 壺	-×-×- ロクロ成形 外体部下端-回転ヘラケズリ	橙褐 暗褐 硬	雲母	口縁片	墨書 外体正位 「万」
8	土師器 壺	-×-×- ロクロ成形 外体部下端-回転ヘラケズリ	-	-	口縁片	墨書 外体 「得」
9	土師器 壺	-×-×- ロクロ成形 外体下半-回転ヘラケズリ	-	-	口縁片	墨書 外体正位 「竹」
10	土師器 壺	-×-×- ロクロ成形	-	-	口縁片	墨書 外体横位 「得」
11	頬窓器	(11.9)×(6.60)×3.50 ロクロ成形 底部-回転糸切り 未調整	暗灰 硬	雲母 長石 砂粒多	略完形	
12	土師器 小型壺	-×6.0×(6.60) 外面 ヨコヘラケズリ後ナデ 内面 ヨコヘラケズリ後ナデ	明橙褐 普	砂粒多	胴部～ 底部	支脚として使用
13	土師器 壺	19.6×-×(28.5) 外面 口縁部-ヨコナデ 頬部-ヘラケズリ後ナデ 胴部-ヨコヘラケズリ後タテヘラミガキ 内面 口縁部-ヨコナデ 胴部-ヨコヘラケズリ 脇部-ヘラケズリ後ナデ	暗褐 普	小石多	口縁部～ 胴部	内面スス付着
14	土師器 壺	18.2×-×(14.4) 外面 口縁部-頬部-ヨコナデ 脇部-タテヘラケズリ後ナデ 内面 口縁部-ヨコナデ 脇部-ヘラケズリ後ナデ	明橙褐 普	砂粒多	口縁部～ 胴部	外面少量スス 付着
15	土師器 壺	-×8.80×(2.50) 外面 ヨコヘラケズリ 内面 ヨコヘラケズリ	赤褐 普	砂粒多	1/4 底部	
16	土師器 壺	-×(7.60)×(11.5) 外面 ヨコヘラケズリ 内面 ヨコヘラケズリ	暗橙褐 普	砂粒多	1/4 胴～ 底部	
17	土師器 壺	-×16.6×(16.9) 外面 脇部-タタキ 脇下端-ヨコヘラケズリ 内面 ヨコヘラケズリ 輪積痕、指痕有り	暗褐 硬	砂粒多	胴～ 底部	
18	石器 磐石	4.80×3.20×2.00 7.8g	-	-	略完形	一部欠損
19	鉄器 鍔	(15.7)×0.30～0.50×厚み0.25～0.40 19.6g	-	-	軸部	
20	鉄器 鎧	20.1×2.00～3.90×0.25～0.40 104.7g	-	-	完形	
21	土師器 壺	12.2×7.20×3.90 ロクロ成形 外体部下端-回転ヘラケズリ 底部-回転糸切り、回転ヘラケズリ	赤褐 硬	長石 雲母	略完形	

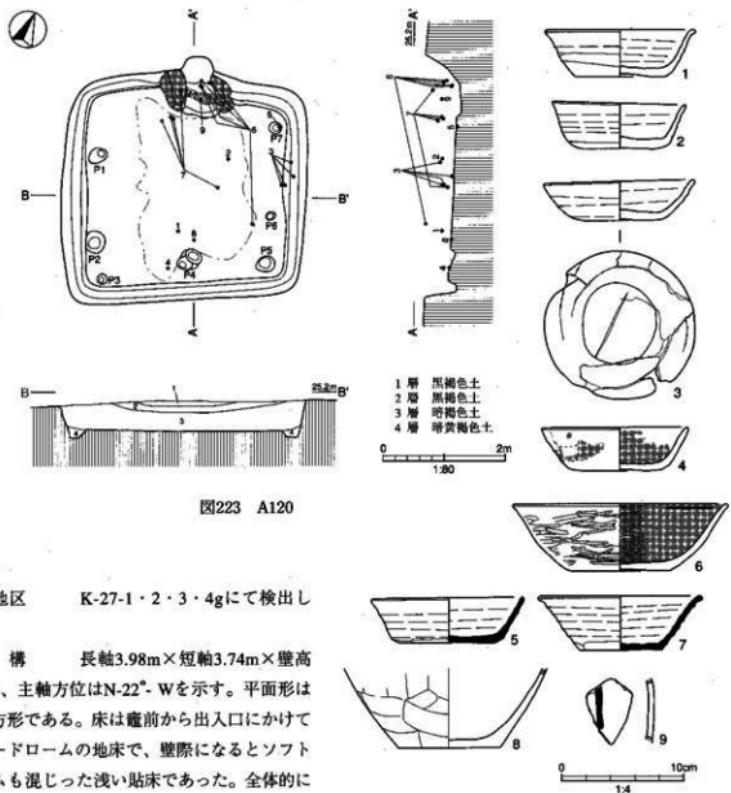


図223 A120

A120

検出地区 K-27-1・2・3・4gにて検出した。

遺構 長軸3.98m×短軸3.74m×壁高0.48m、主軸方位はN-22°-Wを示す。平面形は隅丸方形である。床は竈前から出入口にかけてはハードロームの地床で、壁際になるとソフトロームも混じった浅い貼床であった。全体的によく踏み固められ、軟弱な床ではなかった。柱穴はP 1・2・5・7と考えられ、P 3・6は支柱穴と捉えた。出入口施設に伴うピットはP 4であるが、底面が2ヵ所あることから、ピット内で再設置したものと捉えた。周溝は竈袖下から巡り、全周する。竈の袖は暗褐色土が多くなる袖であり、竈周辺は貼床となっていた。覆土は、住居廃絶後に、ほぼ一気に暗褐色土をもって人為的に埋戻したものであった。

遺物 出土遺物は多くなく、散在しているという感じであった。床面では小破片が出土する程度であった。

所見 本堅穴住居跡も一気に人為的に埋戻されたものであり、床面の遺物も埋戻しに伴うのか、本住居跡に伴うのか判然としないところがあった。柱穴は平面規模から主柱穴4本と支柱穴2本に分けて捉えたが、本来は6本柱穴であったかも知れない。

表47 A120遺物観察表

(単位cm)

No	種別 器形	法 畳 成 形・調 整 等 の 特 徴	色 晃 調 成	胎 土	遺 存	備 考
1	土師器 坏	12.4×7.20×3.90 ロクロ成形 外体部下端一回転ヘラケズリ 底部一回転糸切り、回転ヘラケズリ	橙褐色 硬	云母	完形	
2	土師器 坏	11.0×6.00×3.80 ロクロ成形 外体部下端一回転ヘラケズリ 底部一回転糸切り、回転ヘラケズリ	橙褐色 硬	云母	略完形	
3	土師器 坏	12.5×6.00×3.20 ロクロ成形 底部一回転糸切り、回転ヘラケズリ	橙褐色 ～赤褐色 硬	云母多	略完形	ヘラ書 外底 「-」
4	土師器 坏	12.0×7.70×3.60 ロクロ成形 斑状の剥離多い火明	暗褐色 普	長石 赤色 白色	2/3	外内共スス痕
5	須恵器 坏	12.6×7.80×3.70 ロクロ成形 外体部下端一静止ヘラケズリ 底部一静止ヘラケズリ 全面ヘラケズリのため切り離し不明	黑灰褐色 硬	白色多 砂粒	略完形	
6	土師器 坏	(17.6)×8.00×5.50 ロクロ成形 外体部下端一回転ヘラケズリ ヘラミガキ 内体部一粗いヘラミガキ 底部一回転ヘラカツリ、静止ヘ ラケズリ 外体粗なミガキが付いためスス痕残る	淡褐色 普	云母 白色	3/5	2次火熱のため 内黒焼失 内黒
7	須恵器 坏	(13.6)×6.80×4.50 ロクロ成形 外体部下端一回転ヘラケズリ 底部一回転ヘラカツリ、静止ヘラケズリ	硬	云母 長石多 石英白	1/2	
8	土師器 甕	-×8.50×4.50 外面 脊部一假付ヘラケズリ後下端横位ヘラケズリ 内面 ヘラナア 底部一静止ヘラケズリ	黑～ 赤褐色 硬	白色多	底部	
9	土師器 甕	-×-×- 外面 ナデ 内面 ナデ	-	-	胴部片	墨書き 外面 「□」

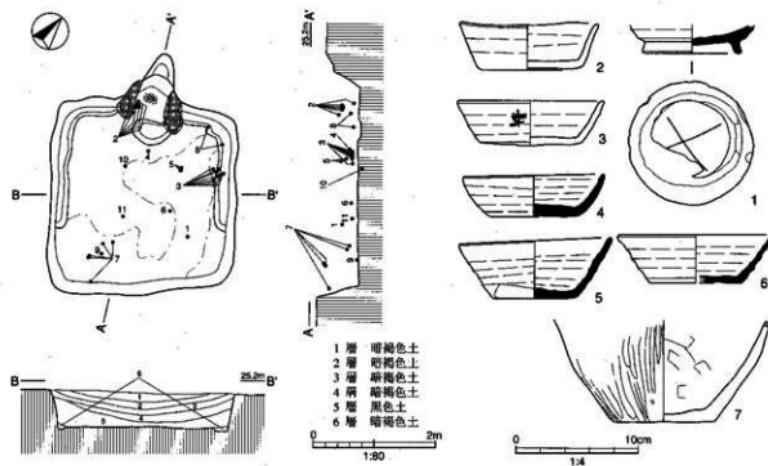


図224 A121

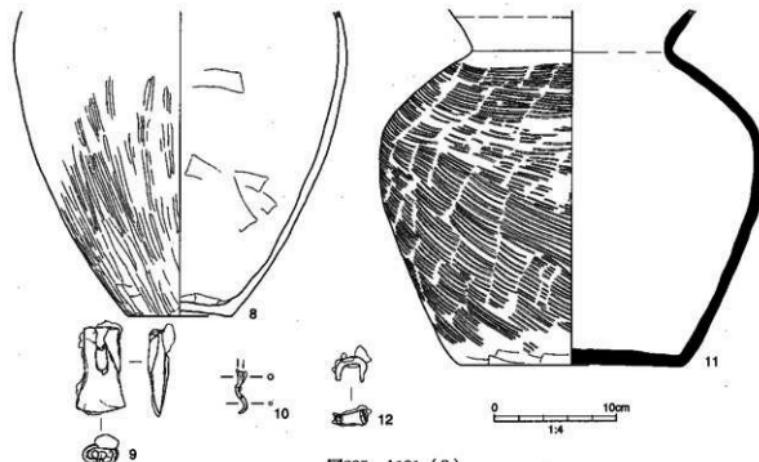


図225 A121 (2)

A121

検出地区 L7-21-1・3gにて検出した。

遺構 長軸3.20m×短軸3.01m×壁高0.58m、主軸方位はN-31°-Wを示す。平面形は隅丸方形である。床は多少の凸凹がみられたが全体としては平坦である。南東コーナー付近はハードロームの地床で、他は貼床と捉えられた。周溝は竈袖下からそれぞれ南西壁・北東壁の中央まで掘り込まれ半周するのみで、柱穴及び出入口施設のピットは確認できなかった。竈は右袖の下部にロームを主体とする袖の基礎が認められ、その上に白色粘土を主体とした袖が築かれていた。火床は煙道立ち上がり付近にあり、煙道部上部にはテラス状に平坦面が残っていた。覆土下層は黒色土の人为的な投入が行われ、その後、暗褐色土が自然堆積したものである。

遺物 竪穴住居跡としては極めて少なく、破片数は100点を切るものである。

所見 本住居跡も住居廃絶後、埋戻しによる人为堆積であった。しかし完全には埋戻さず、凹地として残したように捉えられた。なお、2の竈内出土遺物以外は埋戻しのため、床面及び直上層にあっても本住居跡に伴うものか判然としなかった。

表48 A121遺物観察表

(単位cm)

No	種別 器形	法量 成形・調整等の特徴	色 焼成	胎土	遺存	備考
1	須恵器 高台付 壺	一×一×(2.30) 台部径(8.20) ロクロ成形 底部一回転ヘラケズリ 全面ヘラケズリのため切り離し不明 高台部-ナデ	褐	雲母多 白色	底部	ヘラ書 底部外面 「×」
2	土師器 壺	11.4×8.00×3.80 ロクロ成形 底部一回転糸切り、回転ヘラケズリ	明褐 硬	雲母 白色	略定形	
3	土師器 壺	12.0×8.40×3.70 ロクロ成形 内部-剥離している部分多い	暗橙褐 褐硬	雲母 白色	4/5	墨書 外体横位 「新」

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色焼 調成	胎土	遺存	備考
4	須恵器 壺	11.6×7.10×3.50 ロクロ成形 底部一回転余切り 未調整	灰 硬	長石	略完形	
5	須恵器 壺	12.6×6.70×4.80 ロクロ成形 外体部下端一静止ヘラケズリ 底部一静止ヘラケズリ 全面ヘラケズリのため切り離し不明	硬	雲母 石英 長石	略完形	
6	須恵器 壺	(13.6)×(8.00)×4.00 ロクロ成形 外体部下端一回転ヘラケズリ 底部一静止ヘラ切り、静止ヘラケズリ	硬	長石多 雲母 石英	2/5	
7	土師器 壺	—×8.20×(8.30) 外面 ヨコヘラケズリ後タテヘラミガキ 内面 ヘラナダ 底部一本業痕	暗赤褐色	石英・ 長石多	胴～ 底部	外面スス付着
8	土師器 壺	—×8.80×(24.4) 黒斑有 外面 ヨコヘラケズリ後タテヘラミガキ 内面 ヨコヘラケズリナダ 底部一本業痕	暗赤褐色	砂粒多	胴～ 底部	
9	鉄器 斧	7.00×3.90×厚み2.00 87.1g	—	—	略完形	
10	鉄器 釘	(3.40)×0.45×厚み0.45 2.1g 0.30×厚み0.30	—	—	略完形	
11	須恵器 壺	—×19.0×(29.6) 外面 頸部一ヨコナダ 脇部一タタキ 脇下端一ヨコヘラケズリ 内面 ヨコナダ	灰 軟	砂粒多	略完形 口縁部 欠損	
12	鉄器 不明	(2.00)×2.60×厚み0.60 8.3g	—	—	不明	

A122

検出地区 K7-30-2g、L7-11-3g、L7-21-1gにて検出した。

遺構 長軸3.30m×短軸2.99m×壁高0.52m、主軸方位はN47°Eを示す。平面形は隅丸方形である。床は竈から出入口にかけて帯状にハードロームの地床であり、壁際はハードロームとソフトロームが混合した貼床状のものであった。柱穴は竈右の壁際にP4が、南西壁際にP1・3の3本が検出されたが、住居全体から見ると竈が北東コーナーに寄っているため、柱穴も南東壁側に寄ったものと捉えられた。出入口施設のピットはP2である。柱はいずれも引き抜かれていた。竈前に設けられたP5は柱穴とも考えられたが、焚口に近すぎ、柱穴とは捉えなかった。周溝は全周せず、各壁で断続的になっている。竈は北西壁に築かれているが、南東壁に極めて近くになっており、北東コーナーに床としての余裕がない造りとなつた住居である。竈ピットはやや大きく掘り込まれ、竈前部は貼床となっている。火床は不明瞭であったが、袖の内壁の赤化は強く、使用期間の長さが窺えた。覆土は一気に黒色土のみの埋戻しが行われており、包含物等でも分層することができなかつた。また、床面や覆土中に焼土や炭化粒は認められず、不用材の焼却も行われていないことが捉えられた。

遺物 遺物は140点弱と少ないが大半が床面からの出土であり、また、出土範囲は床面の2カ所に集中する傾向がみられた。図示した1～4の接合破片の多くは床面から出土しているが、撒いたように出土しており、いずれも投入土とともに本住居跡内に廃棄されたものと捉えた。なお、壺の大型の破片が多く、所謂、常総式の壺形土器の接合片が多く出土している。

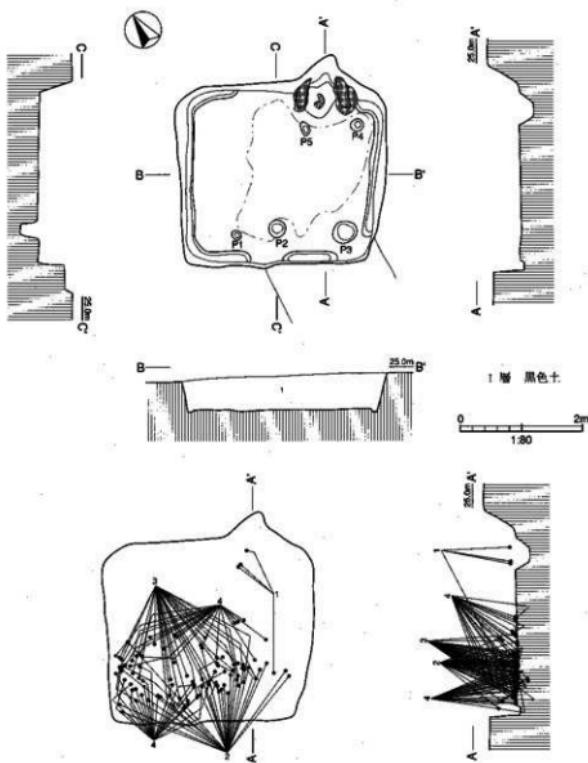


図226 A122

所見 本住居跡も、住居廃絶時に一気に埋戻したものである。他の例では人為的埋戻しの土砂は暗褐色土が主体であるが、本住居跡は黒色土となっており、上谷遺跡II地区においての人為的堆積の住居跡としては珍しい例となっている。また、焼土や炭化粒が認められなかったことは、住居廃絶後に不用材の焼却は行っていないこととなり、この例も少ないものであり、本住居跡は埋戻しの住居跡としても例外かも知れない。

黒色土の埋戻しはおそらく竪穴住居跡周辺の腐食土層の搔き集めと投入が想定されるが、調査が重機による表土及び腐食土層の除去のため、どのように集められたのかまでは把握できなかった。人為的な埋戻しに使われた土砂の主体が暗褐色土であることは、新しい竪穴住居の構築の排土処理、または竪穴住居の周囲に設けたとされる周堤帯からの土砂利用を検討すべきと考えられるが、本住居跡の例から上谷II地区では人為的堆積にかかる土砂の利用に最低2通りの方法があったと想定できるものと考えている。

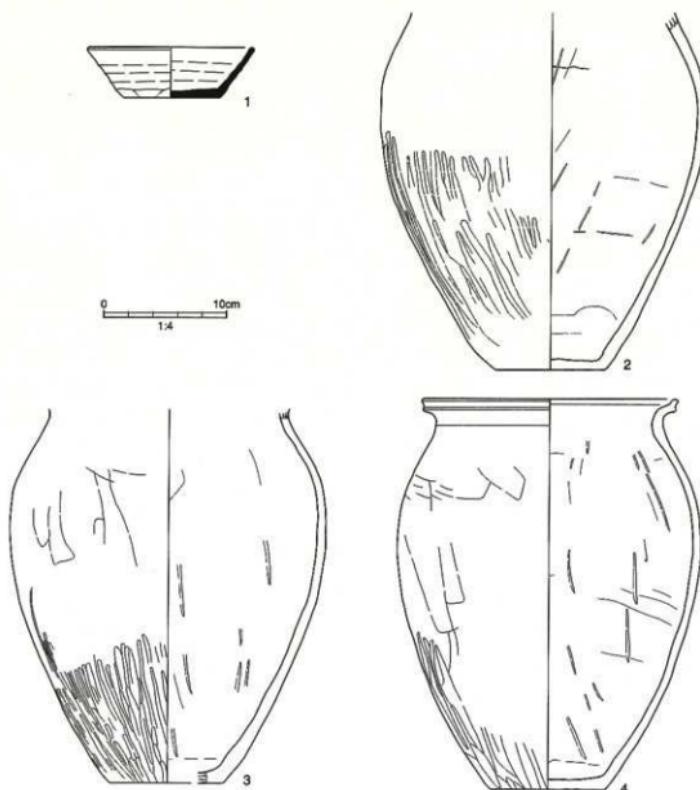


図227 A122(2)

表49 A122遺物観察表

(単位cm)

No.	種別 器形	法量 成形・調整等の特徴 口径×底径×器高	色 調 焼成	胎 土	造存	備考
1	須恵器 壺	13.6×7.70×4.20 ロクロ成形 外体部下端一帯止ヘラケズリ 底部一全面静止ヘラケズリ	硬	雲母・ 石英・ 白色多	略完形	胎土 長石・砂
2	土師器 甕	—×8.80×(29.4) ロクロ成形 外面 下端～胴部一ヘラケズリ 内体部下端一ヨコナデ 縦・横方向ヘラケズリ 底部一静止ヘラケズリ 木葉痕 外面ふきこぼれによるスス痕大きい	褐 硬	雲母石 英赤色 白色	胴～ 底部	サンドイッチ状 に焼ける
3	土師器 甕	—×(9.20)×(30.8) ロクロ成形 外面 下端～胴部一ヘラケズリ 肩付近に横方向のナデ 内面一縱方向にヘラケズリ(横方向にも有り) 脇部一ナデ	暗褐 硬	雲母多 長石	1/2 胴～ 底部	スス痕
4	土師器 甕	(21.0)×9.40×32.2 ロクロ成形 外面 下端～胴部一ヘラケズリ 肩のあたりはヘラナデ 内面一横方向にヘラナデ、縱方向へラケズリ 底部一木葉痕	硬	雲母石 英長石 赤色白	略完形	胴部中位 スス 痕有り

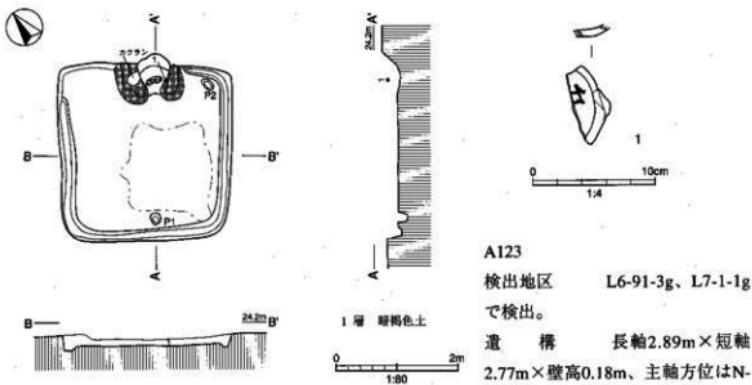


図228 A123

居である。床面は住居中央はハードロームを地床とし、壁際はソフトロームと混合した貼床状となっている。主柱穴は検出されなかったが、P2が柱穴の1本かも知れない。P1は出入口施設のピットである。周溝は竈右袖脇から北西壁まで巡るが、全周はしなかった。竈の天部は崩落していたが、袖の遺存はよく、焚口を一部取り囲むように残っていた。覆土は、住居廃絶時における暗褐色土の一気の投入であった。

遺物 破片25点のみの出土であり、きわめて少なかった。ほとんど全てが床面から出土しているが、人為的な投土であり、また、掘り込みも浅く、本住居跡に伴うものなのは捉えきれなかった。

所見 規模も掘り込みも浅い住居跡であるが、このような堅穴住居跡も自然堆積による埋没にまかせず、人為的に埋戻しているものであった。

表50 A123遺物観察表

(単位cm)

No	種別 器形	法量 成形・調整等の特徴	色 焼成	胎 土	遺存	備考
1	土師器 壺	—×—×— ロクロ成形 外側部—横位ヘラケズリ後口縁ナデ 全体に粗いヘラケズリ 内側部—密なヘラミガキ 底部—静止ヘラケズリ			底部片	墨書 外底 「竹」

A124

検出地区 J7-19-4g、J7-29-1g、J7-30-1gにて検出した。

遺構 本堅穴住居跡は2軒の重複であり、全体の平面形は不整形となっている。このため個別に報告することにした。

A124 a

遺構 長軸3.30m×短軸3.19m×壁高0.51m、主軸方位はN-41°-Wを示す。平面形は隅丸方形である。床はハードローム地床であり、軟弱な部分はみられなかった。周溝は全周せず、断続的に巡るものである。床面にピットは3基検出したが、柱穴は確認できなかった。P2は出入口施設に伴うピットで

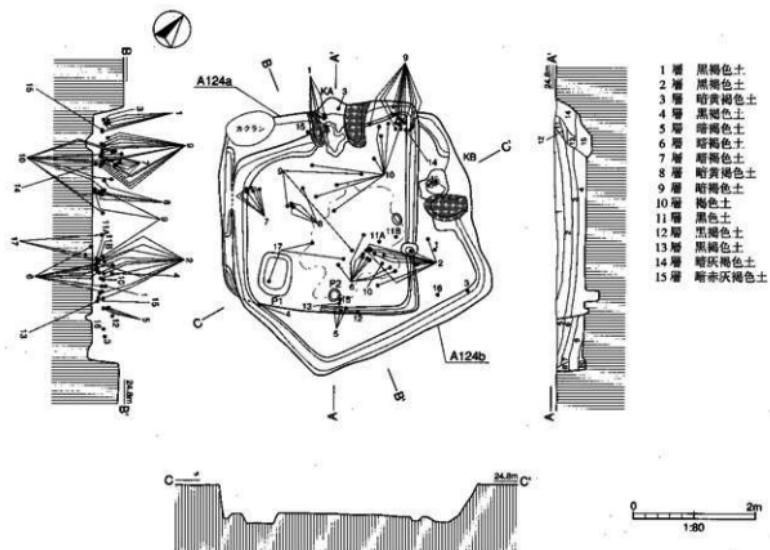


図229 A124a・b

ある。P1は住居跡の覆土で一気に埋戻したものであるが、住居内の配置から貯蔵穴と捉えることとした。周溝は竈右袖下から竈が対面する南東壁中央まで巡り、北東壁は断続的に掘り込まれるが全周ではない。竈は竈ビットから煙道部立ち上がりにかけてテラス状に平坦面を残している。竈袖内壁の中央から先端に赤化した所があり、竈ビットも袖からはみ出したような状況から、袖を含めてかなり壊されているものと判断した。覆土は、覆土中層の3層に暗黄褐色土が堆積し、堆積土から自然堆積とは捉えられず、3・4層は人為的に埋戻したものと捉えた。1・2層は黒褐色土の自然堆積である。

遺物 遺物は覆土中層～上層に、特に、東コーナー付近に多く出土する傾向があった。3は竈天井部の崩落土の上に、やや斜めになって置かれたように出土している。17は土師器小型甕の破片だが、口縁部から胴部にかけて人面が墨書きされたものであった。4層上位で出土しており、本住居跡には直接伴わないと考えられる。4はA124bとの切合部で出土しているので、本住居跡のものであるか判断に迷うものであった。しかし出土位置としては迷うが、A124bにおいても、「在」の線刻土器が出土していることから、A124aで報告するがA124bの土器として捉えることが妥当であると考えている。

所見 本住居跡はA124bと重複する遺構であるが、覆土の堆積状況より、本住居跡がA124bより新しい遺構と捉えられた。小型甕の人面墨書き土器は、萱田遺跡群等の例から、「延命長寿祈願」の土器と捉えることができると考えている。ただ、人面の他に人名等の文字が記されていたかは、破片であり不明と言わざるを得ない。

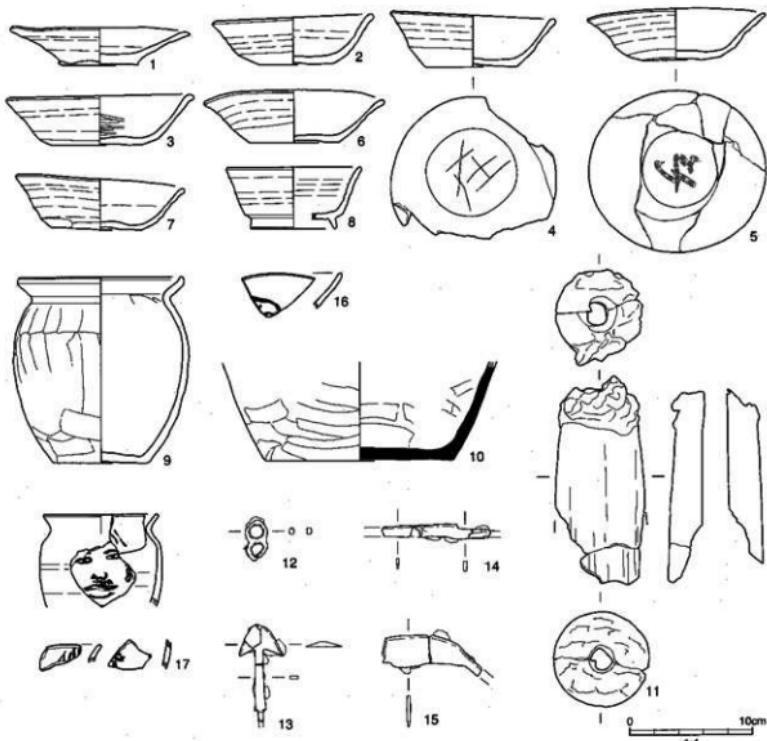


図230 A124a

表51 A124a遺物観察表

(単位cm)

No	種別 器形	法量 成形・調整等の特徴	色調 成形	胎土	遺存	備考
1	土師器皿	14.7×6.50×3.00 ロクロ成形 底部一回転糸切り、回転ヘラケズリ	棕褐色 硬	雲母 白色	略完形	
2	土師器壊	13.2×6.00×3.90 ロクロ成形 外体部下端一回転ヘラケズリ 底部一回転糸切り、回転ヘラケズリ	黒褐色 硬	雲母 白色 長石	略完形	
3	土師器壊	15.4×7.40×4.10 ロクロ成形 外体部下端一回転ヘラケズリ 内体部一粗いミガキ 底部一回転糸切り、回転ヘラケズリ	暗褐色 硬	雲母・ 白色多 石类	1/2	
4	土師器壊	13.6×7.50×4.30 ロクロ成形 外体部下端一回転ヘラケズリ 底部一回転糸切り、回転ヘラケズリ	棕褐色 硬	雲母 白色	1/2	線刻 外底 「在」
5	土師器壊	14.6×6.40×4.30 ロクロ成形 大きく歪んでいる 外体部下端一回転ヘラケズリ 底部一回転糸切り、回転ヘラケズリ	明褐色～ 暗赤褐色 硬	白色雲 母石类 砂粒	略完形	墨書き 外底 「竹」不明瞭

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整 等の特徴	色 焼成	胎土	遺存	備考
6	土師器 壺	14.8×7.30×4.40 ロクロ成形 外体部下端一回転ヘラケズリ 底部一回転糸切り、回転ヘラケズリ	褐 硬	雲母多 白色	略完形	大きく歪んでい る
7	土師器 壺	13.8×7.40×4.20 ロクロ成形 外体部下端一回転ヘラケズリ 底部一回転糸切り、回転ヘラケズリ	茶褐色 硬	白色 雲母	1/2	
8	土師器 高台付 壺	11.0×—×5.10 ロクロ成形 底部一回転ヘラケズリ 欠損のため切り離し不明 高台部—ナデ	黒褐 硬	白色多 雲母	1/2	
9	土師器 小型壺	14.0×8.00×15.3 外面 口縁～頸部—ヨコナデ 胎部—タテヘラケズリ 下端—ヨコヘ ラケズリ 内面 口縁部—ヨコナデ 胎部—ヘラケズリ後ナデ	暗赤褐色 軟	砂粒多	略完形	
10	須恵器 壺	—×15.6×(8.10) 外面 胎部—平行タキ後下位横位ヘラケズリ 内面 ヘラナデ	暗褐 軟	雲母石 英長石 白色	底部	磨耗のためタク キがはっきりし ない
11	土師器 輪羽口	口径7.00×7.20×長さ(15.7) 外面 成形後でいねいなヘラミガキ	褐	砂粒 白色	略完形	
12	鉄器 不明	(3.30)×0.40×厚み0.50 13.3g 0.40×0.50	—	—	片	塊状の掛け金具 の一部か?
13	鉄器 鉄鎌	(3.30)×3.00×厚み0.40 10.6g+6.1g 0.65×0.30	—	—	片	
14	鉄器 刀子	(2.50)×0.85×厚み0.20 13.4g (6.30)×0.80×0.30	—	—	片	
15	鉄器 鎌	(8.10)×2.55×厚み0.30 16.1g	—	—	片	
16	土師器 壺	—×—×— ロクロ成形 外体部下端—ヘラケズリ	—	—	口縁片	墨書 外体 「得」 A126b
17	土師器 小型壺	(4.70)×—×(7.60) ロクロ成形 残存部—ヨコナデ	褐普	雲母希 白色	口縁～ 胎部	墨書 胎部外面 「人面土器」

A124b

造構 長軸4.01m×短軸3.60m×壁高0.42m、主軸方位はN-36°-Eを示す。平面形はA124aと重複するため全形が確認できなかったが、五角形状と想定されるものである。床はハードロームの地床で、よく踏み固められている。周溝は、竈袖下から全周するものと想定された。柱穴は重複のためか検出されず、出入口施設のピットは、当初、P 1が想定されたが確認できなかった。竈は右袖が遺存するのみで、左袖は床に痕跡が残っているだけであった。おそらくA124aが建てられた時点で、大きく壊されたものと思われる。竈ピットはやや広く掘られているが、周辺は貼床状になっていた。底面は平坦であるが、坑底プランは複雑な形状となっている。火床は、やや左袖寄りに検出されている。

なお、住居跡の覆土は、暗褐色土を主体とした自然堆積であった。

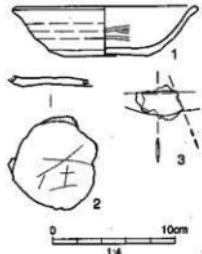


図231 A124b

A124aが建てられていることから、A124bからの住居の拡張や壁替えではないと捉えた。

しかしそれぞれ単独に建てられた竪穴住居にも係わらず、床面の高低差がないことは、A124aが竪穴を掘り込んでいくなかでA124bの床面の深さを意識したものであったかも知れない。

表52 A124b遺物観察表

(単位cm)

No	種別 器形	法量 成形・調整等の特徴	色焼	調成	胎土	遺存	備考
1	土師器 壺	(15.2)×(6.80)×4.10 ロクロ成形 外体部下端一回転ヘラケズリ 内体部一粗いミガキ 底部一回転糸切り一回転ヘラケズリ	褐 硬	白色 黒色	1/3		
2	土師器 壺	-×-×- ロクロ成形 外体部下端一静止ヘラケズリ 底部一回転糸切り一回転ヘラケズリ	暗褐 黒褐 硬	白色多 露母	底部	縞刻 外底 「在」	
3	鉄器 不明	(3.90)×1.90×厚み0.20 5.1g 1.60×0.10			片	孔数1	

第2項 掘立柱建物跡

上谷遺跡Ⅱ地区における掘立柱建物跡は57棟が検出されており、そのうち奈良・平安時代に属するものは56棟であった。建直しや重複も多く、柱穴から掘立柱建物跡を全てとらえることはできず、覆土等からは掘立柱建物跡の柱穴と考えられるが、いずれの遺構にも属さないものもあった。

Ⅱ地区における掘立柱建物跡は調査区の北東部である21・22・17地区に集中し、掘立柱建物群を構成するように建てられていた。しかもⅠ地区と区分される小さな谷頭付近にある22地区に所在する東側のグループと、台地平坦部の21・17地区に所在する西側のグループの2群に分かれるように、掘立柱建物跡の間には、建物跡の空白帯が展開していた。上谷遺跡Ⅰ地区や今後報告するⅢ地区、また、栗谷遺跡でも掘立柱建物跡は検出されているが、各調査地区ごとに4~5棟前後の所在であり、明らかに上谷遺跡Ⅱ地区的遺構群は異なる様相を示している。しかし上谷遺跡にはⅣ~V地区に、本地区より棟数の多い掘立柱建物跡群が検出されており、それとの関わりがあるかも知れない。

また、本地区では2間×2間の掘立柱建物跡が多く、その割合はきわめて高かった。この2間×2間の建物跡が、上谷遺跡の特徴となるのかは即断できないが、本地区的特徴ではあるといえよう。このため、梁行と桁行が把握しにくいものである。なお、掘立柱建物跡からの出土遺物は遺構の性格上少なかったが、「得」や「万」の墨書き土器なども出土しており、竪穴住居との関係が捉えられるかも知れない資料として重要度を増していくと考えられる。

遺物 A124aによって住居跡の大半が損なわれているため、出土遺物は量的に少なくなっている。また、切合部付近では両住居跡から混在して出土している。また、2は「在」と記された線刻土器であるが、床から浮いて竪前で出土している。

なお、この文字の土器はA124aでも出土している。先述したA124a-4の土師器壺であるが、A124b-2の出土状況から本住居跡出土と捉えた方が妥当であると判断している。

所見 2軒の重複した竪穴住居であるが、覆土の切り合いでA124bが古く、A124aが新しい竪穴住居であると捉えられた。A124bは自然堆積によって埋没した住居跡であり、そこを掘り返して

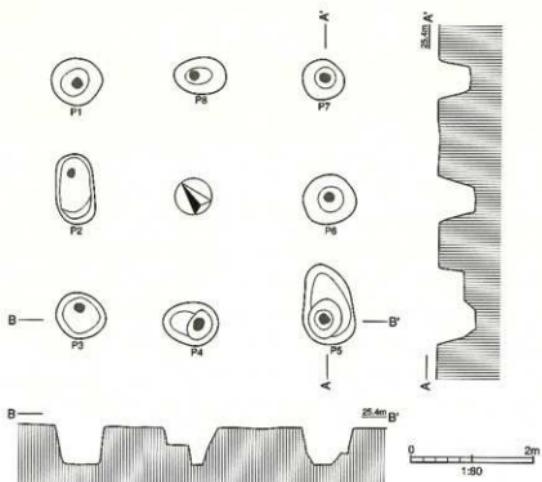


図232 B006

所見 覆土の白色粘土粒子は、柱を建てる際に意識的に混入したものと捉えた。また、長軸・短軸の差のない掘立柱建物跡であり、桁と梁を捉えることができなかった。

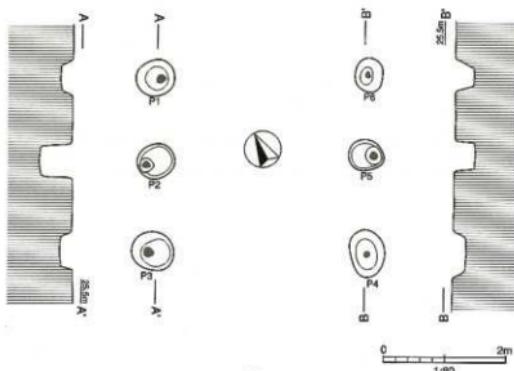


図233 B007

ない。柱のアタリは全柱穴で確認された。

所見 本遺構は1間×2間とやや不規則な掘立柱建物跡であるが、1間方向を平行と捉えた。

B006
検出地区 K7-74-3・4g、K7-84-2gにて検出した。
遺構 2間×2間の小規模な掘立柱建物跡である。長軸3.98m×短軸3.94m、方位はN-49°-Wを示している。各柱穴の深さは0.60m程度であり、垂直に掘り込んでいた。各柱穴の平面形に統一性は認められなかった。P 4・5はやや広めに掘り込み、その坑底をさらに一段小ピットを掘り下げて、柱を埋め込んだような状態であった。覆土は、白色粘土粒子を多く含んでいた。また、柱は引き抜かれたものと判断できた。遺物は出土していない。

B007
検出地区 K7-73-1・2・4gにて検出した。
遺構 1間×2間の掘立柱建物跡である。長軸3.43m×短軸2.88m、方位はN-61°-Wを示す。本遺構の柱穴の規模は、全体的に小さいものであった。覆土は突き固められた一部が残っていたが、柱痕は確認できなかった。各柱穴の深さは、0.20~0.50mと平面規模に比べやや深くなっていた。遺物は出土していない。

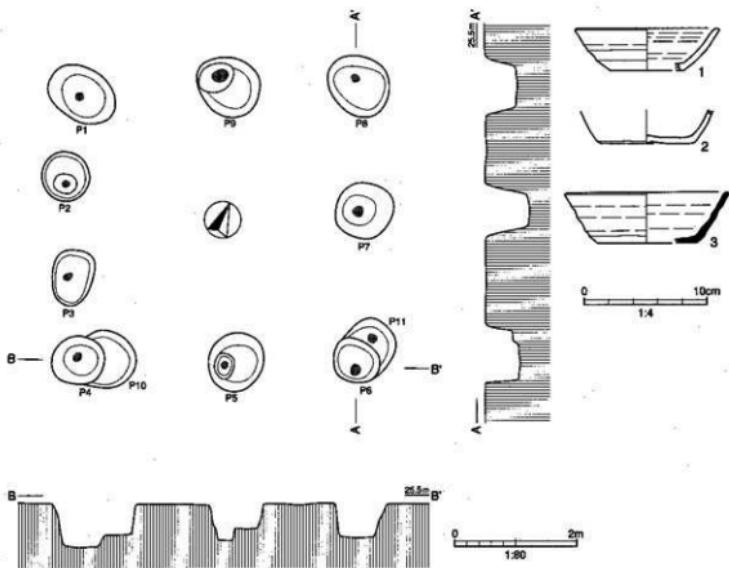


図234 B008

B008

検出地区 K7-72-4g、K7-73-3g、K7-82-2g、K7-83-1gにて検出した。

遺構 基本形は2間×2間の掘立柱建物跡である。しかし西側の柱列は柱が4本となり、3間となっている。長軸4.57m×短軸4.33m、方位はN-68°-Wを示す。柱穴の深さは平均0.50~0.60mであり、しっかりととした掘り込みをもつ遺構である。覆土はよく突き固められたもので、P2・4・8・9において柱痕を検出し、柱の立腐れが確認できた。また、柱のアタリはP10以外において捉えることができた。遺物は、土師器片が混入したものである。

所見 P4・10・6・11は柱の配置替えと捉えられたが、重複の新旧関係は明らかにできなかった。

表53 B008遺物観察表

(単位cm)

No	種別 器形	法 量 寸 径 成 形 調 整 等 の 特 徴	色 焼 成 形	胎 土	遺存	備 考
1	土師器 壊	11.7×(5.90)×3.50 ロクロ成形 外体部下半一回転ヘラケズリ 底部一回転ヘラケズリ 欠損のため切り離し不明	暗褐 ～褐 褐色	雲母 長石	1/2	
2	土師器 壊	—×(7.40)×(2.80) ロクロ成形 外体部下端一静止ヘラケズリ 底部一回転ヘラカツリ→静止ヘラケズリ	橙 硬	雲母 長石 砂粒	1/2 底部	
3	須恵器 壊	(13.4)×(8.00)×4.20 ロクロ成形 外体部下端一回転ヘラケズリ 底部一回転ヘラケズリ	暗黒 褐色 (くすべ)	雲母 長石	1/6	

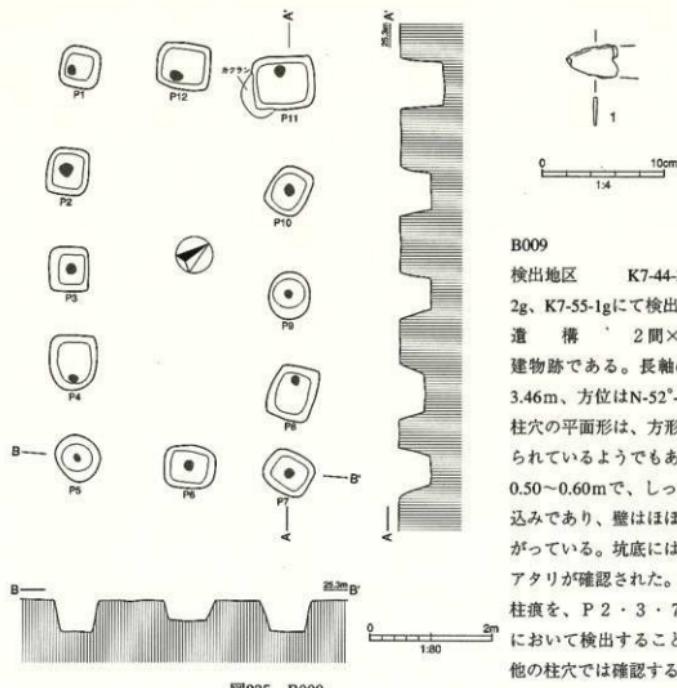


図235 B009

B009

検出地区 K7-44-3・4g、K7-54-2g、K7-55-1gにて検出した。

遺構 2間×4間の掘立柱建物跡である。長軸6.35m×短軸3.46m、方位はN-52°-Wを示す。各柱穴の平面形は、方形を意識して掘られているようでもあった。深さは0.50～0.60mで、しっかりした掘り込みであり、壁はほぼ垂直に立ち上がっている。坑底には全柱穴に柱のアタリが確認された。覆土によって柱痕を、P 2・3・7・P10の4本において検出することができたが、他の柱穴では確認することができなかった。覆土はよく突き固められた状態であり、柱は立ち腐れたものと

判断された。遺物の出土は少ないが、P 7から刀子片が出土している。

所見 II地区における掘立柱建物跡群では異例な2間×4間の掘立柱建物跡であり、上谷遺跡でも例外的な遺構である。検出位置はb群の南西側に所在し、掘立柱建物跡群の外郭を形成する建物跡となっている。

B010

検出地区 K7-53-24g、K7-54-1・3・4g、K7-63-2g、K7-64-1gにて検出した。

遺構 2間×3間の掘立柱建物跡が3棟重複した遺構であり、一部の柱穴については兼用しているものも確認されている。以下、遺構ごとの計測値を報告することとする。

B010a 長軸4.78m×短軸3.95m、方位はN-58°-Eを示す。本遺構に属する柱穴は、P 16・6・7・17・9～12・21である。柱痕はP 7・17・22で検出されたが、他の柱穴では確認できなかった。

B010b 長軸5.10m×短軸3.46m、方位はN-33°-Wを示す。本遺構に属する柱穴は、P 1～3・23・24・17・9～12である。柱痕は、P 23・27で検出されたが、他の柱穴では確認できなかった。

B010c 長軸6.23m×短軸3.92m、方位はN-73°-Eを示す。本遺構に属する柱穴は、P 16・26・7・17～20・13～15である。柱痕は、P 14・18・20で検出されたが、他の柱穴では確認できなかった。

B010z P 8・P 25はB010a～cの掘立柱建物跡の柱穴配置から復元において、いずれにも属しない柱穴であった。覆土は各掘立柱建物跡での差はなく、深さも同程度のものである。

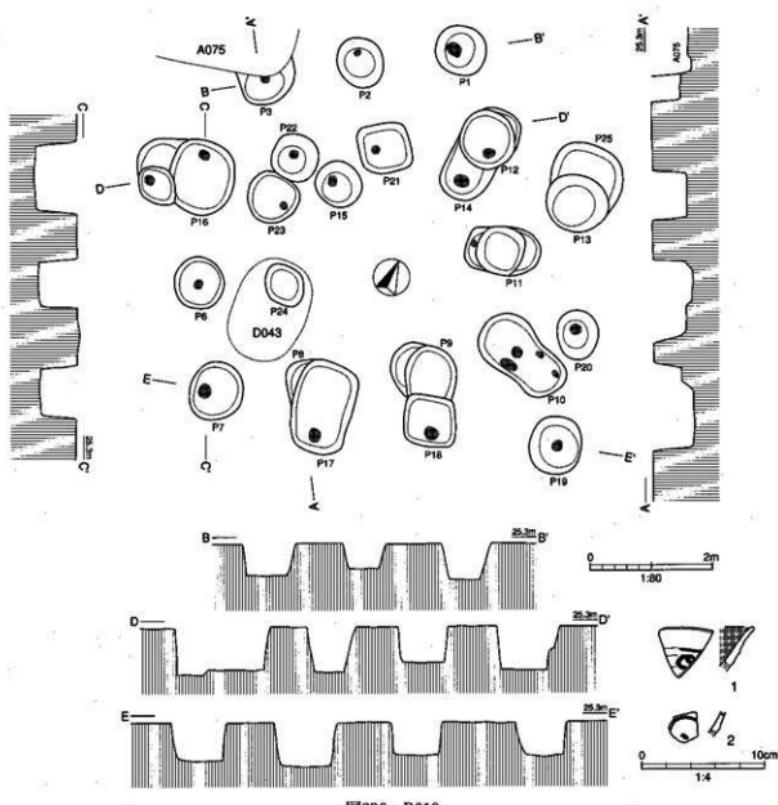


図236 B010

所見 重複による新旧関係は、覆土の切合からB010aが古く、B010b、B010cと新しくなっている。D043はP24との覆土の切り合から、B010cより新しい土坑と捉えられた。なお、方位等からみると、軸線のずれが大きく建替えとは思えず、それぞれ時間経過後の独立した掘立柱建物跡と考えられる。

表54 B010遺物観察表

(単位cm)

No	種器形	法量 成形・調整等の特徴	色焼 成	胎上	遺存	備考
1	土師器 壺	-×-×- ロクロ成形 内体部-密なヘラミガキ			口縁片	墨書 外体横位 〔四〕 内黒
2	土師器 壺	-×-×- ロクロ成形 外体部下端-ヘラケズリ			体部片	墨書 外体 〔○〕

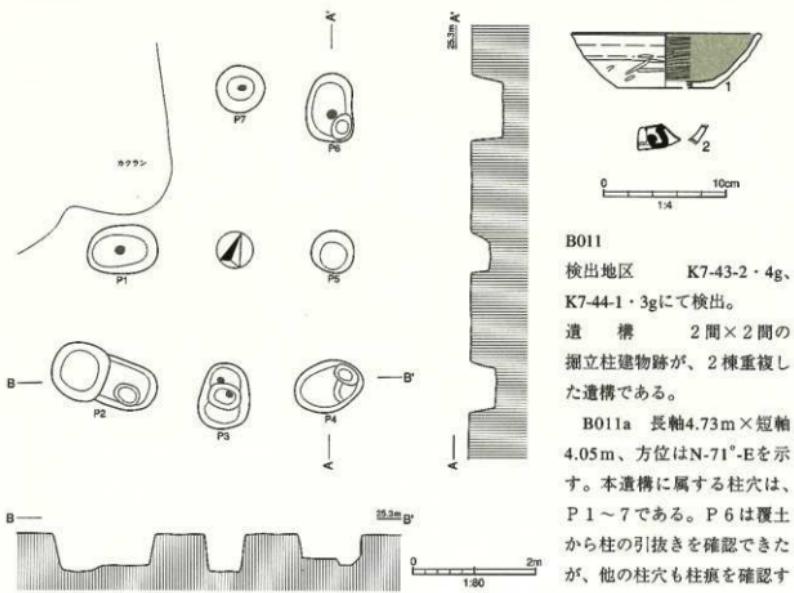


図237 B011

を一部認めた。深さは0.30~0.60mであり、柱のアタリはP 6・13にて確認された。

B011b 長軸4.39m×短軸3.51m、方位はN-70°-Eを示す。本遺構の柱穴は基本的にはB011aと同一であるが、P 2~4の坑底の内側に小ピットを確認できること等から、B011aより小規模な掘立柱建物跡が存在したと捉えたものである。また、P 3には柱のアタリが2カ所確認されており、内側のアタリからも存在を想定したものである。

所 見 P 2~4の平面形からは、柱の配置替えかとも考えられた遺構である。しかしP 3の柱でアタリが2カ所確認されたことや、P 2~4の坑底にいくつかのピットが存在すること等から、建替えと捉えることと別の遺構とした。覆土からは判断できなかったが、増築した感を与える遺構であるためB011bが古いものと判断したが、両遺構に係る時間的な経過はないものと考えられる。遺物は少ないが、「得」と墨書きされた土器器坏片が出土しており、堅穴住居跡との関連を捉えるうえで貴重な資料となろう。なお、北西隅の柱穴は搅乱のため失われていた。

表55 B011遺物観察表

(単位cm)

No	種別 器形	法 量 成 形 ・ 調 整 等 の 特 徴	色 焼 成	胎 土	遺存	備考
1	土器器 坏	(15.6)×(7.80)×4.60 ロクロ成形 外体部下半一回転ヘラケズリ 粗いヘラミガキ 内体部一密なヘラミ ガキ 底部一回転系切り、回転ヘラケズリ 粗いヘラミガキ	黒~ 暗褐色 黒硬	雲母	1/5	内墨
2	土器器 坏	-×-×- ロクロ成形 外体部下端-ヘラケズリ	-	-	体部片	墨書き 外体正位 「闇」

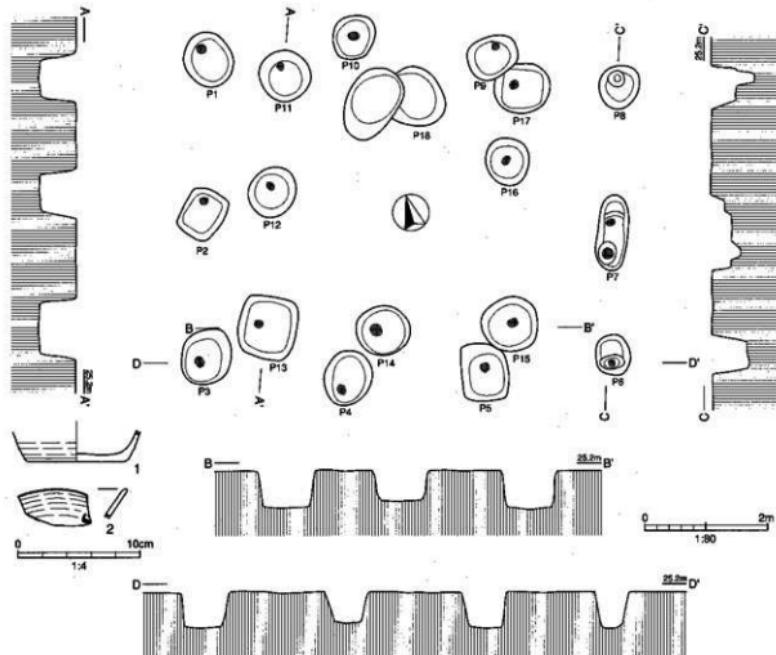


図238 B012

B012

検出地区 K7-42-2・4g, K7-43-2・3gにて検出した。

遺構 2間×2間、2間×3間の2棟の重複した掘立柱建物跡である。B012aは長軸6.66m×短軸5.04m、方位はN-73°-Wを示す。柱穴はP 1~10であり、2間×3間の遺構である。B012bは長軸4.11m×短軸3.98m、方位はN-74°-Wを示す。柱穴はP 11~19であり、2間×2間の遺構である。P 9~17の覆土には、多量の1~2mmの小蝶が含まれており、また、粘土が混在しているものであった。

所見 掘立柱建物跡の軸線である方位や柱列が重なるため、B012aからB012bへの建替えと判断した。調査では、柱穴の平面形は方形を意識している印象を受けた。また、掘り込みの深さは0.7~1.0mとなっており、21地区では最も深い柱穴となっている。

表56 B012遺物観察表

(単位cm)

No	種別 器形	法量 成形・調査等の特徴	色 焼成	調 成	胎 土	遺存	備考
1	土師器 壊	—×(8.00)×(2.60) 外体部下端一回転ハラケズリ 底部一面回転ハラケズリ、静止ハラケズリ	暗褐色 褐	云母 長石	底部		
2	土師器 壊	—×—×— ロクロ成形	—	—	口縁片	墨書 外体 「□」	

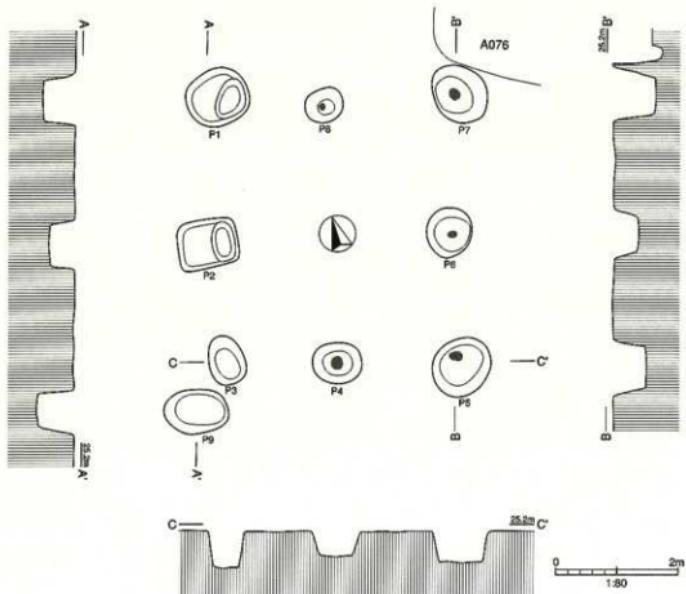


図239 B013

B013

検出地区 K7-52-2・4g, K7-53-1gにわたって検出した。

遺構 2間×2間の、単独の掘立柱建物跡である。長軸4.37m×短軸3.70m、方位はN-73°-Wを示す。P 4～7・9において柱痕が確認され、柱は立腐れであると捉えられた。また、覆土はよく突き固められた状態であった。柱穴の掘り込みの深さに統一がなく、0.4～0.7mの柱穴が多かった。柱のアタリは、P 4～8の5本で確認した。

所見 P 1～P 8が本遺構に伴う柱穴であり、P 9が掘立柱建物跡の柱の配置上、本遺構には属さないものとなっている。また、P 7とA076は当初、重複の可能性があると考えられたが、調査の結果では重複せず、竪穴住居跡と掘立柱建物跡との時間的な新旧関係は捉えられなかった。

B014

検出地区 K7-53-3・4g, K7-63-1・2・3・4gにわたって検出した。

遺構 2間×3間の掘立柱建物跡が2棟重複した遺構である。

B014aは、内側の掘立柱建物跡である。長軸4.55m×短軸3.40m、方位はN-81°-Eを示す。本遺構に属する柱穴は、P 1～10である。柱穴の深さは0.62～1.04mであり、P 9は1.04mとなり21地区では最も深い掘り込みの柱穴であった。柱痕はP 1・7の2本に確認でき、柱痕内には白色粘土が混入していた。また、柱痕の遺存から、柱は立腐れと判断した。柱のアタリはP 1～3、P 5～8の7本で確認された。

B014bは、外側の掘立柱建物跡である。長軸5.78m×短軸4.44m、方位はN-82°-Eを示す。本遺構に属する柱穴はP 11～20であり、柱穴の深さは0.51～0.72mと全体的に深かった。柱痕はP 11・17で確認し、柱痕内にはやはり白色粘土が含まれていた。また、柱痕の遺存から、柱は立ち腐れと判断した。全ての